

神奈川県21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書

Report on the Results of “Systematization of Nonwritten Cultural Materials
for the Study of Human Societies” Kanagawa University 21st Century COE Program

非文字資料研究の展開と成果

—— 研究事業総括報告書

Research Summary of “Systematization of Nonwritten
Cultural Materials for the Study of Human Societies”



神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
Report on the Results of “Systematization of Nonwritten Cultural Materials
for the Study of Human Societies” Kanagawa University 21st Century COE Program

非文字資料研究の展開と成果

—— 研究事業総括報告書 ——

Research Summary of “Systematization of Nonwritten
Cultural Materials for the Study of Human Societies”

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center

学長のマネジメント体制の強化

学長 中島三千男

2003年度に始まり2007年度に終了した神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果については、すでに、最終年度に6種類のデータベース、18冊の研究成果報告書という形で刊行されていますが、本総括報告書は、第1部でそれらの研究成果を要約・総括すると共に、第2部においては若手研究者の育成や国際交流などの事業総括を行い、さらに第3部として諸資料を収録しています。つまり、この報告書を読めば、神奈川大学21世紀COEプログラムの5年間の活動の全貌が把握できるものとなっています。

文部科学省のCOEプログラムの目的は、国際的競争力のある大学を作り上げるために、世界的な研究教育拠点を形成するというものであり、また、そのためにも学長のマネジメント体制の強化、学長のリーダーシップのもとでの教学改革の推進が期待されていました。この後者の点における本学の取り組みとしては、何よりも、2004年度に学術研究を専管する副学長を置き、その下に本学における研究活動を総合的に支援・推進する「総合学術推進委員会」を発足させたことが大きい。この委員会は7学部・8大学院・8研究所を横断する研究活動に関する審議機関であり、21世紀COEプログラムやハイテクリサーチセンター整備事業・学術フロンティア事業などの大型プロジェクトを管轄し、産官学の連携や研究成果の社会的還元、国際的な学術交流等をより一層強力に推進するセンター的機能を果たしています。事実、この委員会のもとで、昨年度には優れた外部の研究者や外部資金を積極的に導入して、本学の研究・教育活動を一層活性化させるために、「プロジェクト研究所」制度や「研究所客員教授」

制度が新たに導入されました。

また、この4月には本学の研究教育活動を一層活性化させ、本学の知名度を一層高めるために、各学部の教員定数の枠外で、理事長・学長のイニシアティブのもとで優秀な教員を採用できる、「特別招聘教員」制度も施行されました。

さて、本事業は新しく創設された「神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター」に受け継がれて行きます。本学は本年創立80周年を迎えるにあたり、20年後の100周年にむけての「将来構想」を発表、その中で「地域社会そして地球規模の課題を解決する、世界を惹きつけ、世界に発信する大学」を目指すことを宣言しましたが、この非文字資料研究センターを核とした新しい研究教育活動をその目標達成の先導役として、今後とも学長のイニシアティブのもと、積極的に支援していく所存です。

最後になりましたが、本学のCOEプログラムを推進された拠点リーダーの福田アジオ教授を始めとする研究担当者の皆様方、またCOE支援事務を担当された寺島剛真審議役・長谷川千穂氏、学長事務室の古閑安明課長を始めとする事務職員の皆様方、さらに担当副学長として、最後の1年間、拠点形成委員会の委員長をお勤めいただいた池上和夫教授、その他、本事業に関わっていただいた全ての皆様方に、深甚の謝意を表させていただきます。

序

拠点リーダー 福田アジオ

2003年7月に、かねて申請しておりました「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が21世紀COEプログラムに採択されたという通知があり、研究計画を構想し、申請書を作成してきた者はもちろんのこと、神奈川大学の多くの関係者がその朗報に接して喜ぶと同時に、それから開始しなければならぬ事業展開の重みに緊張したことを、つい先日のことのように憶えています。それから4年半がたちまちに過ぎ去りました。そして、ここに研究成果をまとめて世に問う時期が参りました。

私どものプログラムは、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」と題するように、文字では表現されない、記録されない非文字の事象を資料化して人類文化研究に役立つように提供しようという研究計画です。文字化されて残されているものや日々文字化されて表現されている事象は容易に把握できますが、非文字の事象は無限にあり、また非文字であることにより掘み所がありません。それを資料化する方法を開発し、それによって資料として定着させ、人類文化研究のために発信するということが基本的な目標でしたが、加えて様々な非文字資料を統一的に把握するという体系化をも目指していました。限られた5年間で、非文字資料すべてを取り上げ、体系化に迫ることはほとんど不可能であることが研究計画作成段階から分かっておりました。申請時の研究計画書に記載しましたように、私たちは長年の実績を基礎に、図像、身体技法、環境・景観の三つに絞って取り上げ、それぞれの資料化の方法を検討し、またその分析法を開発し、成果を広く世界に情報発信することにしました。図像、身体技法、環境・景観それぞれについての体系化を試み、それらを情報発信していく段階で統合し、体系化するこ

とを構想しました。そのために、統合と体系化、そして情報発信を課題とする研究グループを当初から設定しておりました。

私どものプログラムは、「学際・複合・新領域」の分野に申請して採択されたものです。非文字資料の体系化はこの分野に相応しい研究プログラムだと認定されたのだと思います。「学際・複合・新領域」分野で採択されたプログラムの多くは、自然科学に傾斜した課題が多く、社会・人文科学系の課題は余りありませんでした。その点でも期待されるところが大きかったと今も思っています。21世紀COEプログラム全体がそうでしたが、共同研究方式で多くの研究者を結集して、そこに研究成果をあげることが想定されていたと思います。殊に「学際・複合・新領域」では、文字通り様々な分野・領域・方法の研究者が集い、共同して新たな研究を展開することが大いに期待されたと思われれます。民俗学、文化人類学、歴史学を中心とした私どもの研究プログラムも、学際的な共同研究を目指しました。もともと人文系の研究者にとって、研究は個人で行うものであり、研究の過程、方法を共同にし、成果を共同であげることには馴染んでいませんでした。本プログラムに集った研究者も多くが同様でした。出発当初は共同研究方式に様々な不協和があり、円滑に進みませんでした。しかし、2年、3年と経過する中で研究を共同し、成果も共同で出すということに次第に慣れ、結果としてすでに刊行した20冊近い成果報告書が共同研究としての成果を如実に示しております。人文系のプログラムとして、これほどの共同研究成果を世に送ることができたことを誇りにしたいと思います。それに邁進された研究担当者の皆さんのご努力に深く感謝いたします。

21世紀COEプログラムは、大学院博士課程もしくは付置研究所が申請するものであり、私どものプログラムは日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料学研究科、大学院外国語学研究科中国言語文化専攻の三つが共同して申請したものです。20名の研究者が事業推進担当者として研究を担いましたが、幅広い内容を研究し成果をあげるために、学内外で実績を積んでいる研究者の支援を求め、共同研究員として参画していただき、事業推進担当者と一緒に研究を進めていただきました。また本プログラムが独自にCOE教員を採用し、本プログラムの推進に貢献していただきました。共同研究員やCOE教員の皆さんの力が成果をあげるに際して大変大きなものでありました。さらに必要に応じて、調査研究協力者に多くの研究者をお願いして、研究を支援していただきました。皆さん快く加わって、

研究を進めて下さいました。皆様の参加・協力があったはじめて目標を達成できたと、心から感謝申し上げます。

21世紀COEプログラムは大学をあげての取り組みとして期待され、それに対応する計画として申請されました。もちろん私どものプログラムも神奈川大学学長からの申請でありました。プログラム計画の作成段階から、本プログラムに理解を示され、種々ご配慮くださった申請時の山火正則学長、それを引き継いだ中島三千男学長に篤くお礼を申し上げます。また5年間にわたり事務を円滑に進めてくださった学長室の皆さん、特にCOE支援事務室の皆さんに、大変なご苦勞をおかけしたことをお詫びしつつ、改めてお礼を申し上げます。また、さまざまな機会に温かい声援を送って下さった神奈川大学の教職員の皆さんにも感謝申し上げます。

非文字資料研究の展開と成果

——研究事業総括報告書——

目次

序 — 学長のマネジメント体制の強化	中島三千男	i
序	福田アジオ	ii
凡例		vii

第1部 研究総括

1 全体構想と研究成果の概要	3
I 研究の目標と課題	3
II 研究組織と活動計画	3
III 研究成果	5
IV 非文字資料研究センター	6
2 各班の研究事業とその成果	7
I 第1班 図像資料の体系化と情報発信	7
II 第2班 身体技法および感性の資料化と体系化	15
III 第3班 環境と景観の資料化と体系化	20
IV 第4班 地域統合情報発信	25
V 第5班 実験展示	27
VI 第6班 理論総括研究	30

第2部 事業総括

1 若手研究者の育成	33
I COE研究員（PD・RA）	33
II 若手研究者海外派遣事業	33
III 各拠点充実事業	36

2	国際交流事業	39
	Ⅰ 海外提携研究機関との研究交流	39
	Ⅱ 若手研究者招聘事業	40
	Ⅲ 国際シンポジウム	44
3	情報発信	45
	Ⅰ 印刷刊行物	45
	Ⅱ ホームページ	45
	Ⅲ データベース	46

第3部 資料

1	年表	51
2	申請書・中間評価・外部評価	55
	Ⅰ 申請書・採択通知書	55
	Ⅱ 中間評価	68
	Ⅲ フォローアップ（書面調査）	86
	Ⅳ 外部評価	93
3	研究参画者	119
	Ⅰ 研究参画者異動一覧	119
	Ⅱ 出張記録	122
4	研究組織	137
	Ⅰ 拠点形成委員会	137
	Ⅱ 研究推進会議	137
	Ⅲ 各種委員会委員	138
	Ⅳ 拠点形成委員会開催記録	139
	Ⅴ 研究推進会議	141
	Ⅵ 全体会議	144
	Ⅶ COE広報委員会	146
	Ⅷ COEホームページ委員会	146

5	研究集会	149
	I 国際シンポジウム	149
	II ワークショップ・公開研究会	155
	III 展示	158
	IV 全体研究会	159
	V 各班・課題研究会	161
6	刊行物	171
	I 研究成果報告書	171
	II 年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化	189
	III 調査研究資料	193
	IV シンポジウム報告	196
	V ニュースレター『非文字資料研究』	202
7	研究成果	213
8	予算	259
	I 21世紀COEプログラム補助金一覧	259
	II 大学支援金一覧	259
	III 各年度執行状況	260
	IV 設備・備品	265
	V 貴重資料リスト	266
9	支援組織	267
	I 研究施設等	267
	II COE支援事務業務	269
	III COE支援事務スタッフ	270
10	規程・規則	271
	I 規程	271
	II 研究推進会議決定事項・申し合わせ	277
	III 提携機関交換覚書	279
11	新聞掲載記事	283
	索引(事項・人名)	

凡例

1 本書は2003年度に採択され、2007年度に終了する神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果報告書の最終巻にあたる。

2 本書は、本プログラムの5年間の展開を跡づけ、成果を整理要約して、プログラムの5年間にわたる研究事業を総括したものである。

3 本書は、第1部研究総括、第2部事業総括、第3部資料の3編で構成した。

4 第1部研究総括は、本プログラムの中核部分である5年間の研究活動を、全体総括と各班・課題に分けて、その展開過程と研究成果を要約した。

5 第2部事業総括では本プログラムの研究事業の主要な柱である若手研究者育成、国際交流、情報発信について、それぞれの成果を要約して示した。

6 第3部資料は、この5年間の本プログラムの事業展開に関わるデータ、各種資料を収録した。第1部・第2部の記述の裏付けとなる各種資料がここに記載収録されている。

7 本書は、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議の責任で編集したものである。第1部、第2部の内容については各担当者、各班・各課題代表者等から提出された報告原稿をもとに、推進会議で調整し、加筆補訂を大幅に行った。そのため、第1次原稿の執筆者名を記載しなかった。

8 第1部、第2部の記載内容についてはできるだけ客観的に記載し、その記録性を高めるように努力した。

9 第3部のうち、5年間の間に作成された各種文書は、作成当時のまま収録した。また文部科学省、日本学術振興会からの各種通知書も、記録としての

性格上、できるだけそのまま収録することにした。

10 第3部に収録した年表、その他一覧表はCOE支援事務室で作成し、研究推進会議が編集した。

11 本文中の地名表記は、第3部は原則として資料作成時のままとしたが、第1部・第2部は現行の市町村名に統一する努力をした。

12 本文中に登場する、本プログラム関係者以外の個人については、個人情報保護の観点から、所属、住所、電話番号などの記載を、資料中においても網掛けその他の方法で抹消したことがある。また氏名についても記載を省略したことがある。

13 本文中の年次の記載は西暦を基本とした。

14 本書の編集時には、本プログラムの各事業は未だ完全には終了しておらず、記載内容と若干の違いが生じる可能性がある。

15 巻末に索引を付した。索引は事項索引と人名索引とし、それぞれ50音順に配列した。いずれも第1部、第2部、第3部に記載された事項と人名を対象に作成した。但し、写真、図などの図版のなかに記載されたもの、および図版キャプションに記載されたものは除外した。

第1部 研究総括

1 全体構想と研究成果の概要

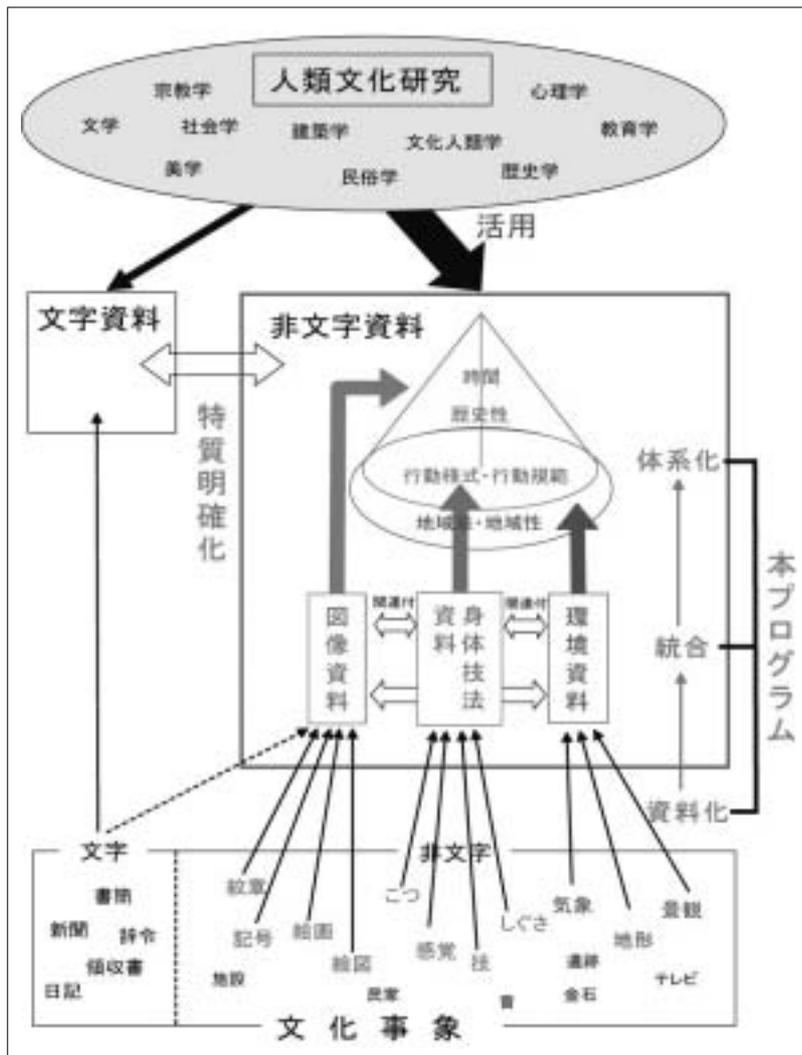
I 研究の目標と課題

本拠点形成計画は、神奈川大学付置の日本常民文化研究所の70年余にわたる調査研究の蓄積と新たな構想の下に1993年設置された大学院歴史民俗資料学研究科の若手研究者養成の実績を基礎に、加えて東アジア研究を進めている外国語学研究科中国言語文化専攻の研究成果を組み込み、文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで

人類文化研究の新たな地平を切り開き、世界的に貢献することを課題とする。あわせて非文字資料を解析する若手研究者の育成はもちろんのこと、非文字資料に専ら依拠する博物館専門職員（学芸員）等の高度専門教育の推進を図ることを目的としている。

文字に表現されない人間活動は、文字に記録された世界よりもはるかに広く大きい。その全体を把握し、体系化することは限られた5年間では不可能なことである。研究構想の策定にあたっては、このC

O Eの5年間で達成できる内容に目標を絞った。すなわち、人間諸活動の表現の中から、①図像、②身体技法、③環境と景観の三つを取り上げ、それぞれの資料化の方法とその解析方法を開発すると共に、資料群をデータとして人類文化を研究する諸学に広く提供する。さらに、それら資料の相互関係を確定し、文化情報発信の新しい技術を開発する。その成果を基礎に、世界的な非文字資料研究センターとして本拠点が永く学術的貢献を果たし、研究と教育を融合し国際的に開かれた大学を追究する神奈川大学の基本方針を具体化することを期した。



研究構想図

II 研究組織と活動計画

以上の目標を達成するために研究組織を4班編成にし、研究に取り組み、最終段階でそれらの成果を集約し、研究成果報告書を刊行することにした。そのため、事業推進担当者に加えて、

学内外の専門的な研究者を共同研究員として委嘱し、また独自の構想でCOE教員（特任教授、非常勤講師）を採用し、合わせて40名に上る研究者を結集した。研究は、大学共同利用機関の共同研究方式を採用した。各班・各課題ごとに研究会を開催し、また全体研究会を開催し、研究の進展を共通のものにする努力を行った。

(1) 図像資料の体系化（第1班）

第1に、日本常民文化研究所の先輩たちが刊行した、世界に類をみない『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を基礎に、本文の英訳及び図のキャプションにフランス語・中国語・韓国語訳を付して、世界的に利用可能なマルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』を編纂・刊行する。

第2に、新たに日本近世・近代生活絵引を編纂する。そのための資料収集と解析（名所図会・農書等の挿絵、風俗画報、絵はがき、絵日記、旅日記、人類学者・民俗学者のスケッチ等多様な図像資料の選択と資料化）を進め、最終年度には『日本近世・近代生活絵引』の第1期（5巻）刊行を開始する。

第3に、日本で考え出された絵引という編纂方式を日本以外の地域で試みる。その手始めとして東アジア生活絵引編纂を構想し、そのための資料収集とそのデータベース化を行うと共に、絵引の試案本を編纂・刊行する。

(2) 身体技法及び感性の資料化（第2班）

第1に、身体技法の調査・分析法の開発と身体技法の比較研究を行う。日本・東アジア・ヨーロッパ・アフリカでの現地調査を実施し、例えばオール・櫓・櫂の漕ぎ方に関する身体技法等、具体的な動作を設定して、記録・解析し、比較する。

第2に、感性把握の方法論的研究を行う。実験的調査を日本及び世界各地で実施する。

第3に、道具と人間の動作の関係について分析する。日本及び東アジア各地で、農具を中心に悉皆調査を行い、それら用具と身体動作との関連を把握する。その過程で日本で形成された民具という概念を海外の道具も視野に入れて検討する。

(3) 環境と景観の資料化と体系化（第3班）

第1に、映像資料による景観の時系列的研究を行

う。具体的には、日本常民文化研究所が所蔵する約70年以前に濫澤敬三等によって撮影された映像資料の整備とそれを基にした日本・韓国・台湾の現地調査を実施し、景観の変化を確認する。

第2に、特定地域を定点として設定し、環境認識の伝承とその変遷を長期反復調査によって把握し、分析する。基本的には、猟師・漁師・農民からの聞き書きによる現地調査を実施する。

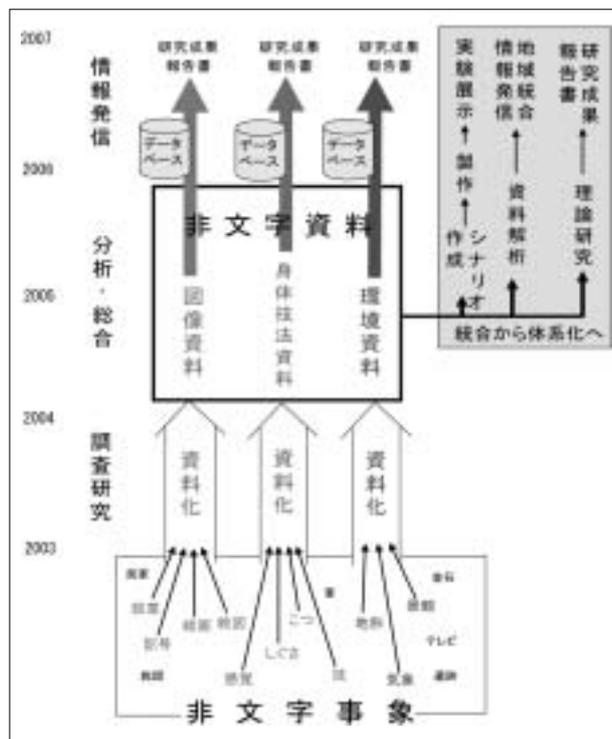
第3は、環境に刻印された人間活動や自然災害の痕跡等を解読する方法の開発とそれに基づくフィールドワークによる資料収集とそのデータ化を行う。

(4) 文化情報発信の新しい技術の開発（第4班）

1、2、3班の研究プロジェクトと共同し、非文字資料を文化情報として発信する方法を開発する。

第1に、非文字資料収集・整理・保存システムの構築のための調査・実験及びその具体化を研究する。そして、非文字資料の情報発信技法を開発すると共に、非文字資料のデジタル化の方法を開発する。

第2に、非文字資料を統合して発信する方法として展示を実験的に試みる。あわせて、博物館・資料館に勤務する学芸員・アーキビスト等高度専門職学芸員養成方法の検討を行い、その結果を新システムとして試行する。



研究展開構想図

以上の構想で研究を進めたが、その成果をとりまとめることが射程に入る4年度に、4班の活動をより明確にするために、4班を次のように再編成し、参画する研究者についても全体的に組み替えを行った。

(5) 地域統合情報発信 (第4班)

図像、身体技法、環境・景観を福島県只見町という一つの地域で統合して、その成果をインターネット博物館としてウェブ上で公開する。

(6) 実験展示 (第5班)

図像、身体技法、環境・景観を統合する方法として博物館展示の手法を採用し、新たな試みとして展示を実施する。あわせて、非文字資料を扱う高度専門職学芸員養成の方策について検討し、大学院における博物館学芸員養成についての提言書をまとめる。

(7) 理論総括 (第6班)

非文字の事象を資料化し、それを分析し、体系化する方法に関して理論的諸問題を検討し、個別具体的な研究を総合して全体像を構築する。

このような再編成に加えて、1班から3班までも、班内の各課題の自立性を明確にして、研究成果をとりまとめるようにした。その結果、各班・各課題ごとに成果のとりまとめが行われ、それぞれが研究成果報告書として2007年度末までに印刷・刊行することができた。

Ⅲ 研究成果

共同研究方式によって5年間にわたって研究を展開した。研究過程ではフィールドワークによる調査研究を基礎にし、課題ごとの研究会を頻繁に開催して、共同して研究を推進し、全体研究会で研究の進捗状況について把握し、また互いに理解し、その節目には国際シンポジウムを開催して、研究の進捗状況を報告し、内外の研究者からの批判を仰ぎ、また進展方向について提言を得た。それらは順次ニューズレター、年報などの印刷物として刊行して蓄積したが、最終年度には18冊に及ぶ研究成果報告書としてとりまとめた。また獲得したデータを基礎にデ

ータベースを構築してウェブ上で公開した。

図像、身体技法、環境・景観のそれぞれについて個別の成果をあげただけでなく、当初目標であった、非文字資料を統合し、体系化して発信することを推進した。3つの非文字資料を福島県只見町という特定地域で統合し体系化して発信する地域統合情報発信、また博物館展示という方法によって非文字資料を統合して示す実験展示、そして非文字資料の体系化についての理論総括など、3つの課題を展開した。それらの成果をウェブ上や展示として発信すると共に、その記録を研究成果報告書という印刷物として刊行した。

今回の研究において、図像、身体技法、環境・景観という個別非文字事象については、それぞれの事象の特質に応じて、その資料化の新たな方法を試み、一定の成果をあげることができた。図像についての絵引編纂の試みは、中世の絵巻物にとどまらず、日本近世の図像についても絵引編纂が可能であり、さらには図像の制作・残存において事情の異なる東アジア諸地域においても絵引という編纂方式が可能であり、マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂と共に、図像の資料化、体系化の方法として絵引が有力な方法であることを明らかにした。

身体技法については、資料化がもっとも困難な事象であり、世界各地での調査を実施し、さまざまな試みをした。特に、モーションキャプチャによる記録作成と資料化は今後の研究方法に示唆するところ大であった。また道具・民具が歴史研究の仮説定立に大きく貢献できる可能性も示すことができた。

環境・景観については、現在の地表面に示された景観を過去に撮影された写真・映画などと対比させることで、時間的変化を把握する方法を獲得し、具体的な事例研究で示すことができた。災害、植民地支配などが地表面に残した痕跡を調査し、把握する方法を開拓し、その具体的な研究を日本・東アジア・南太平洋の諸地域で展開した。特に、地震災害についての把握と、そのデータベース化は大きな成果といえよう。

さらに、これら図像、身体技法、環境・景観を統合し、体系化する試みを行い、本プログラムの課題

に迫った。地域の生活は非文字の事象を分断しておらず、相互に関連していることは論を俟たないが、その関係を特定地域で具体的に把握し、ウェブ上で発信するインターネット博物館という形式で示すことができた。また展示が、研究成果を統合して、新たな情報として発信する方法として有効であることを実験展示によって示すことができた。関連して、非文字資料に取り組む博物館学芸員の高度化について検討し、博物館学専攻大学院の設置および歴史・民俗系大学院における博物館関連教育について提言をまとめることができた。

非文字資料を、文字資料と対比しつつ、その特質を明らかにし、個別分野の研究を統合する作業を理論総括研究として行った。非文字の事象についての哲学的思索を重ねると共に、その特徴を描き出すことを試み、大きな展望を得た。

5年間に及ぶ研究事業の中で、若手研究者の育成を重要課題として位置づけ、さまざまな努力を行ってきた。COE研究員制度（PD・RA）によって、若手研究者に研究の機会を設け、また種々支援を行った。特に世界的に活躍できる研究者に育てるため、海外の研究機関へ派遣する制度を設け実行した。また基礎的な学力を高めるためにカリキュラムの改定も行い、外国語の習熟を可能にした。さらに、海外の8研究機関とも提携関係の覚書を交わし、研究者、特に若手研究者の相互受け入れを実現した。これらを通して、若手研究者は世界的に活躍できる基礎条件を獲得できたものと判断している。

IV 非文字資料研究センター

5年間の成果は、人類文化研究を進める諸学に大きく貢献することは間違いないが、さらに研究を深め、また形成した拠点が世界的な研究に貢献するために、非文字資料研究センターを設立して活動することを当初から表明してきた。そのため、最終年度には21世紀COEプログラム終了後の継承発展組織について検討し、大学当局の理解も得て、4月から非文字資料研究センターを設立することとなった。非文字資料研究センターは、非文字資料の収



研究成果報告書

集・整理・保存・発信の方法を体系的に開発することと、世界各地の非文字資料研究者や関連する研究機関とのネットワークを形成して、非文字資料研究の情報収集と発信の世界的拠点となることを中心課題とする。

2 各班の研究事業とその成果

I 第1班 図像資料の体系化と情報発信

研究経過

1班は、財団法人日本常民文化研究所が編纂した世界に誇るべき『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を前提に、図像を活用し、図像を窓口にして文化を把握するという、世界的に類例のない絵引という編纂方式を、普遍的な方法として提示することを構想して発足した。旧来の言葉を窓口にして事物・事象を知る字引に対して、図像を窓口にして事物・事象を知る方法が絵引である。『絵巻物による日本常民生活絵引』を引き継ぎ、以下の3つの課題を掲げて、研究活動を開始した。すなわち、課題①『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳を中心としマルチ言語版の編纂と出版、課題②日本近世・近代生活絵引の編纂とその一部の刊行開始、課題③東アジア生活絵引の編纂作業である。

なお、日本常民文化研究所が編纂したのは『絵巻物による日本常民生活絵引』とあるように「常民生活絵引」であったが、私どもの21世紀COEプログラムは「常民生活絵引」ではなく、単なる「生活絵引」とした。常民は柳田国男が用い、民俗学の基本的な概念になったが、常民にこめられた意味は基本的に一国民俗学の枠組みであった。世界的な研究を推進するには不適切な言葉であると判断し、本プログラムでは常民を採用せず、単に生活とした。

1班の活動は終始班としての活動を維持してきた。班員が課題に分属する方式をとらず、いずれの課題にも関わる方式を採用した。班としての研究会を頻繁に開催し、そこで各課題の問題や成果を報告・検討してきた。その結果を具体化する4年度か

らは、各課題担当者を決め、それぞれ分かれて研究作業を進めたが、完全に分離するのではなく、多くの班員が複数の課題に関わることで、班としての一体性の維持に努めると共に、引き続き班研究会を開催した。

1班としては公開ワークショップや講師を招いての公開研究会を開催して、すでに研究実績をあげている研究者からさまざまな刺激を受け、示唆を得る機会を設けると共に、自分たちが行っている研究の内容や進捗状況を広く披露し、批判を得る機会を作った。

各人は自己の研究課題を班の課題との関連で設定し、その具体的な研究のために日本内外に調査に赴いた。また、国内の博物館における図像資料の企画展示に際し、展示資料の確認調査を班として行った。これらの調査も個人で個別に行うのではなく、班として実施し、また課題を超えて実施すると共に、課題達成のために明確な目標を設定して行った。

理科系の共同研究は、実験装置・分析装置を共同利用して、研究成果も共同のものとして生み出され、学術雑誌にその成果が発表される場合も、参画した研究者の連名で行われるのが一般的であるが、人文系は個人的な研究活動として展開し、その成果も個人の名前で発表されることが多い。1班では、絵引編纂という共同課題を追究し、その成果も個人に還元するのではなく、共同研究としての成果としてまとまった絵引を完成させることに努力を傾注した。作業としては分担はするが、その内容を共同で検討し、共同の研究成果として絵引を編纂し、それを刊行することを目指した。

研究成果

1班としての成果は、先ず各課題ごとに刊行された絵引である。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』2巻4冊、『日本近世生活絵引』3冊、『東アジア生活絵引』2冊と、全部で9冊に及ぶ。先行して研究を進めたマルチ言語版の編纂過程で得た知見を、東アジア生活絵引に活用し、世界的に利用可能な絵引を目指して研究を行った。

COE研究員(PD・RA)の支援を得て、図像資料に関する文献の収集とその目録化を進め、『図像文献書誌情報目録』および『図像研究文献目録』を刊行した。前者は、近世・近代に描かれた図像が、近代の出版物の中に再録されたり復刻されたものについての書誌情報であり、今までにないデータベースである。

さらに、生活絵引データベースの構築を進め、その一部をホームページ上で公開した。公開できたのは、『日本近世生活絵引』のうち東海道編の副産物としての『東海道名所図会』絵引データベース、『東アジア生活絵引』のうち朝鮮風俗画編の副産物

としての『朝鮮風俗画』絵引データベースである。これらは、従来の文字による検索に加えて、図像からの検索を可能にする「絵引検索」を設定したところに特色がある。

課題1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂

研究経過

世界的に見て類例のないユニークな、過去に描かれた図像から情報を引き出し、発信する絵引という方式を日本常民文化研究所の先輩達が考案し、具体化した。それが『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻である。刊行されて半世紀あまりが経過した現在、『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本史研究上の不可欠な工具書として普及し、研究室や研究者の座右に置かれ、活用されている。しかし、日本語による編纂物であるため、日本以外には余り知られてこなかった。日本研究のためにも、また図像資料の体系化のためにも、この『絵巻物による日本常民生活絵引』を日本以外の地域や文化へ発信することを構想して、この課題は開始された。

本COE期間中には、『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻のうち、第1巻と第2巻を対象に、描かれた事物に付された名称(キャプション)を英語、中国語、韓国語に訳し、さらに絵引に付された絵から読み取った解説文を英語訳して、世界的に利用可能な図像資料にすると共に、それを通して絵引という世界的に類のない図像活用方式を提示して、絵引を世界的な共通方式にすることを目指した。

生活事象を表現する言葉を異なる文化に訳して示すことは多くの困難が伴うが、特に特定文化の過去の事象を多言語で示すことは簡単ではないことが検討過程で明らかになり、それを克服するための研究に時間を多く割くことになった。そして、本プログラムの大きな目標の一つが、若手研究者の育成にあることに鑑み、異文化の言語に翻訳する基礎作業には、各言語を母国語とする博士課程在学中もしくは修了の日本社会・文化を専攻する留学生に依頼して、グループを組織して進めた。翻訳に参加したのは神奈川大学大学院の学生のみでなく、東京大学大



班研究会



公開研究会

学院その他の多くの留学生である。この若手研究者である留学生諸氏の尽力によって訳出された各言語の内容を、班員が詳細に検討し、適切な語彙を確定した。この間の研究会はほぼ毎週、夜遅くまで行われた。

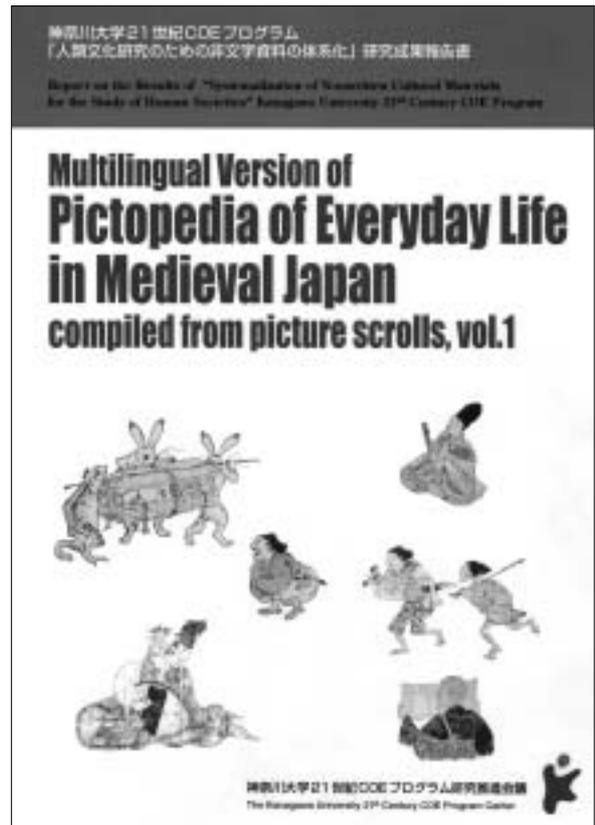
この翻訳・校閲の過程で、『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の問題点も明らかになってきた。当時の研究水準に規定されて、必ずしも適切な語彙が選択されていないことが判明した。そのため、『絵巻物による日本常民生活絵引』そのものの改訂も考えられたが、今回はあくまでも原著を前提に編纂することに重点を置き、間違いについては最小限の訂正に止めた。また、和歌や長文の引用文は、他言語に訳出することが困難であり、要約して訳したり、一部省略したりすることで、異文化からの理解を容易にするよう工夫した。

『絵巻物による日本常民生活絵引』という書名を英語に訳す際に問題になったのは絵引であった。欧米には絵引という編纂方式がないのであるから、当然のことながら絵引に相当する用語も存在しない。類似の表現を検討したが、結局、絵引の独自性・独創性を表現するために新しい用語として Pictopedia を作りだして用いた。図像から広く情報を引き出し、発信するという意味を込めた用語であり、絵引の編纂方式の普及と共に Pictopedia も定着していくものと予想している。

研究成果

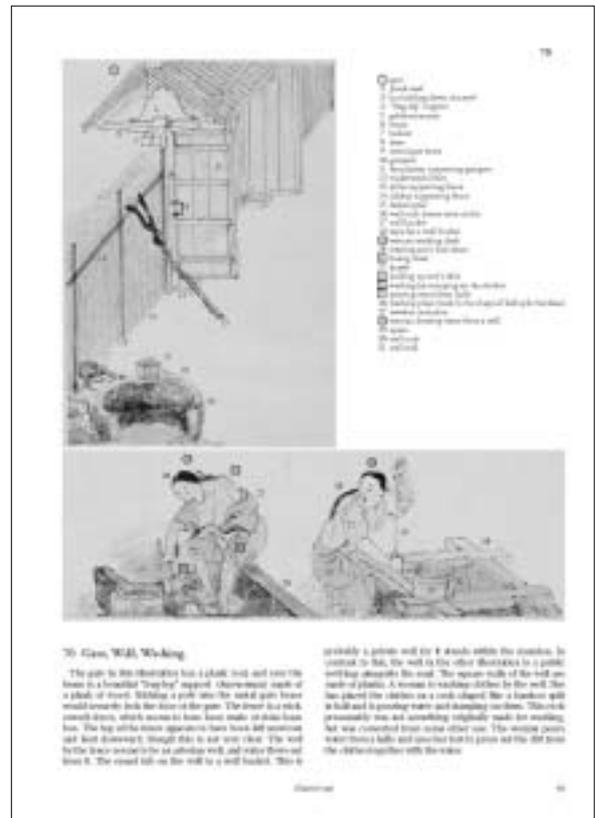
『絵巻物による日本常民生活絵引』は全5巻の刊行物であるが、今回の21世紀COEプログラムの5年間では、そのうちの第1巻と第2巻をマルチ言語版として編纂し、刊行することにした。それぞれ、本文編と語彙編の2分冊で編成した。本文編は、『絵巻物による日本常民生活絵引』の図像、キャプション、読み取り解説を英文によって表記するもので、英文版『絵巻物による日本常民生活絵引』としての性格を有する。英語を解する人々にとっては、この本文編のみで日本文化を研究する際の工具書となるし、また日本中世史を図像から理解する案内書となる。しかし、本文編に加えて語彙編を編纂した。

こちらは英語、日本語、中国語、韓国語をキャプション番号に対応させて比較対照できるようにしたも



研究成果報告書

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 表紙



研究成果報告書

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 本文

のである。日本の事象を各言語でどのように表現するのかを検討する格好の資料集であり、また各言語から『絵巻物による日本常民生活絵引』を読み、利用できるようにしたものである。

当初はフランス語も予定し、作成作業に入ったが、十分に研究者を組織することができず、この5年間の研究計画からは除外し、他日を期すことにした。また、キャプションとして英語表記が困難な語句も少なくなかった。それらについては、やむを得ず日本語の表記をローマ字で示した。日本語のままでは日本語を解さない多くの人々に多大の不便をかけることになる。そこでそれら日本語のローマ字表記で残した語句について、簡単な説明をする辞書を準備し、語彙編に掲載する予定であったが、準備が整わず、次の機会に譲った。

3回にわたる本プログラムの国際シンポジウムにおいて、海外から参加した研究者からは、このマルチ言語版絵引編纂という試みは高く評価され、賞賛された。この編纂によって、絵引という編纂方式が世界に提示できたと評価できよう。コロンブスの卵で、これをモデルにして、世界各地でそれぞれの図像についての絵引の編纂が行われるものと予想される。

課題2 日本近世・近代生活絵引の編纂

研究経過

『絵巻物による日本常民生活絵引』の成果を前提に、かつて日本常民文化研究所が構想しつつも実現できなかった、日本近世・近代の生活絵引の編纂を課題にした。当初は近世生活絵引と近代生活絵引を並行して編纂を進める予定にしていたが、実際の編纂計画を策定する中で人員と時間の制約で達成が困難であると予想されたので、今回の21世紀COEプログラムの5年間では日本近世生活絵引の編纂に集中し、日本近代生活絵引の編纂は他日を期すことにした。

近世生活絵引については、どのような図像を対象にし、どのような構成にするか検討した結果、地域別にそれぞれの地方の特色ある図像による絵引編纂を進めることにした。COE期間中には、北海道・

蝦夷地編、日本本土編、琉球編という大枠での編纂を計画した。北海道・蝦夷地編については前半に継続的に図像資料の所在調査を進め、図像も収集し、その中から絵引編纂に適切な図像を選択して、絵引編纂を進めた。中心となったのは、菅江真澄の描いた図像であり、また各種の風俗絵である。他方、琉球編については、図像資料所在調査を進め、その所在情報をほぼ入手したが、並行しての調査とそれによる編纂は困難と判断し、北海道・蝦夷地編の編纂の終了後に行うことにした。日本本土については膨大な図像資料が存在し、それをどのように絵引にまとめるかは大きな問題であり、検討を重ねた結果、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する図像資料を対象にすることにしたが、検討の結果、同じ種類の図像で、より内容が豊かな表現描写がある『農業図絵』（『日本農書全集』第26巻）を用いて北陸編の編纂を行うこと、また21世紀COEプログラムが入手した『東海道名所図会』による絵引編纂を行うことにした。『東海道名所図会』による絵引編纂は、他の図像資料が図像そのものとして独立しているのに対し、挿絵であり、描き方に個性が乏しい。しかし、描く対象が京都から江戸までの広域であり、地域差も見られることに注目した。

日本近世生活絵引は、以上のように、北海道編、北陸編、東海道編の3冊の絵引編纂を進めた。『絵巻物による日本常民生活絵引』に倣い、対象作品から生活文化を描いている部分を適格に切り取り、そこに描かれている事物、また人物の行為をとりだして番号を付け、その事物や行為を示す言葉をキャプションとして表示した。近世に描かれた図像を用いて、近世の生活絵引を編纂するのであるから、表示する語彙も近世に用いられたものをできるだけ確認しつつ掲げるようにしたが、これが予想外に困難な作業であり、実際には近世にその地で何と呼んでいたか分からない場合が多く、一般的な現代表現を採用せざるを得なかったキャプションも多い。またアイヌの人々の生活文化を日本語で表現することも非常に困難な問題であった。

これら試行錯誤を通しての検討において共同研究の真価が発揮された。一つの事物に関するキャプシ

ョンにどの語を与えるかについて激論を交わすこと
 もしばしばであった。共同作業を通して一つの結論、
 一つの答えを引き出すという点において、人文系の
 共同研究のあり方を示したと言える。この間、講師
 を招いての各種研究会を開催し、現地調査を実施し
 た。またそれぞれの資料についてすでに研究を重ね、
 蓄積のある多くの研究者の教示を得た。

研究成果

共同研究方式による編纂書として、『日本近世生
 活絵引』北海道編、北陸編、東海道編の3冊を刊行
 することができた。それぞれ絵引としては試案本と
 もいふべきものであり、十分に完成したものではな
 い。しかも、それぞれの研究状況を反映して、統一
 した形式の絵引にはなっていない。むしろ絵引の方
 式としてどのような構成・組み立てが相応しいかを
 検討するための材料になるように、それぞれ異なる
 形式の絵引とした。北海道編は、事項に対するキャ
 プションは必ずしも多くないが、詳細な読み取り解
 説を付け、現代の研究水準を示した。東海道編は、
 『絵巻物による日本常民生活絵引』の方式を踏襲し

て、選択した図について事項キャプション、読み取
 り解説を付けた。そして、編纂過程で得た知見を解



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』北陸編 表紙



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』北海道編 本文



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』東海道編 本文

題と考察として収録した。北陸編は、農書としての図像部分は簡略にし、金沢城下の生活を重点的に取り上げ、絵引化した。

印刷・刊行した3冊の絵引に加えて、副産物としての絵引データベースを作成して公開した。データベースは、3冊総てではなく、『東海道名所図会』についての絵引データベースのみを今回は公開した。従来のデータベースは文字から検索して、目的のデータに達することを基本にしてきた。今回のデータベースでも、文字を入力して検索する方式に多くの利用者がなれていることもあって、これを字引検索という名称を与えて設定したが、加えて絵引データベースの真価を発揮するための図像から検索する方式を模索し、データベースの検索窓口として絵引検索を設定した。

課題3 東アジア生活絵引の編纂

研究経過

日本で考え出された絵引という情報整理と発信の方式が、日本以外の社会、文化においても可能かどうかを検討するために、東アジアの2つの文化について絵引編纂を行うことを課題に設定した。一つは中国であり、もう一つは朝鮮半島である。

日本では中世でも図像が豊富で、絵引編纂を可能にするほどの量が残されていたし、まして近世以降になると日常生活の中に図像が豊富に入り、人々は図像に日常的に接し、また時には写生や模式として自ら図像を作成し、情報伝達や記録として残すことが行われてきた。日本においては、絵引編纂の前提が、各時代にすでに作り上げられていた。

それに対して、東アジアの諸地域では、図像と日常生活の間は日本ほどに近く、親しみのあるものではなかったことが分かってきた。確かに絵画が多く制作され、家の中に飾られることも少なくなかったが、山水画や花鳥画に示されているように、そこに描かれた内容は実際の景色や人々の生活ではなく、理念化された風景であり、人間であった。そのため、絵引編纂の対象となるような写実的に生活場面を描いた図像を探し出すことに多くの時間を費やした。

種々検討した結果、中国については18世紀の蘇

州を描いた12メートルに及ぶ画卷「姑蘇繁華図」に注目し、「姑蘇繁華図」に基づく生活絵引編纂を行い、『東アジア生活絵引』中国江南編として完成させることにした。朝鮮半島については、やはり18世紀を中心に多く描かれた風俗画の中で生活を描いたものを選択して絵引編纂を行い、『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編とすることにした。

絵引編纂を行うためには、印刷・刊行された図録類のみに頼っていたのでは、その詳細を把握することはできない。実際に作品を熟覧して、描写を子細に観察し、特徴を把握することが必要である。5年間の共同研究の過程で、中国および韓国を訪れ、現地において所蔵機関の厚意ある対応で、各作品の熟覧をした。また中国の「姑蘇繁華図」は江蘇省蘇州を描く絵画であるとされることから、写実的であればあるほど、現地調査をし、現地比定することが必要である。そのために数次に及び現地調査を行った。そして、中国および韓国の研究者との交流や研究会も催し、それらの絵画についての中国および韓国の研究蓄積から学んだ。

中国江南編については、「姑蘇繁華図」から50場面を切り取り、それについて事物と行為に番号を付け、キャプションを与え、また場面全体の読み取りを行った。朝鮮風俗画編の場合は、朝鮮時代の風俗画の中から生活を比較的具体的に描いている6作品を選び、それらの中から生活場면을示す50余りを選択して、絵引編纂の対象とした。絵引編纂を開始してみると、多くの問題点が浮上して、編纂は困難を極めた。

最も大きな問題は、中国および朝鮮半島の生活を日本語で把握し表記することの困難性であった。事物を知っても、それを日本で誤解されないように日本語で表記することは、単なる語学辞典で訳を取りだして当てはめることではすまないことが明らかになり、一つ一つの語の適切なキャプション付けに多くの時間を割くことになった。最後までその検討と修正は続いた。

次には、日本には存在しなかったり、類似のものもなかったりする事物も、同じ東アジアでも生活面では少なくないことが明らかになってきた。キャプ

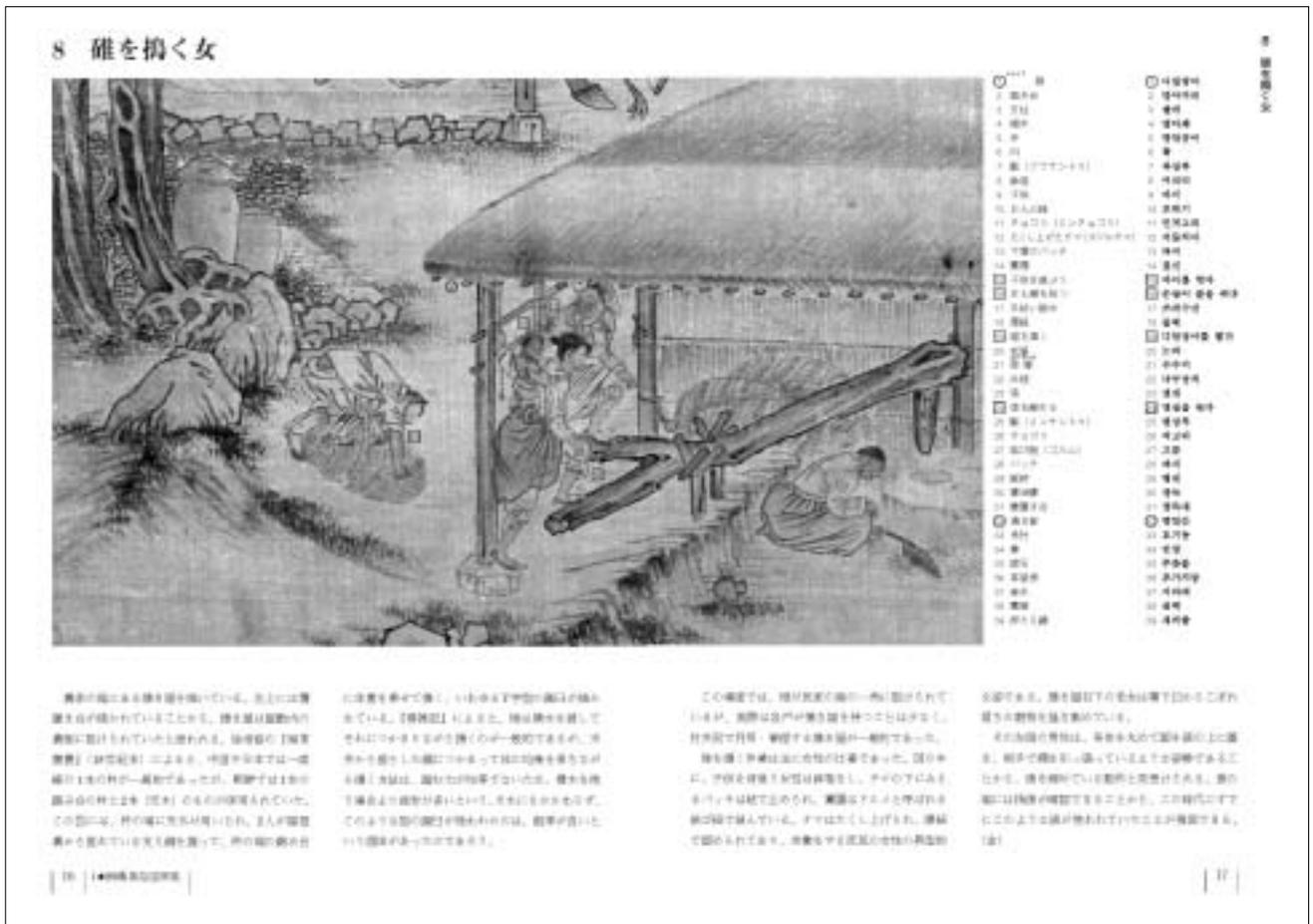
ジョン付けがこの点でも難しいことが判明した。この点を少しでも克服するために、朝鮮風俗画編では、一つはキャプションを日本語表記と韓国語（ハングル）表記の2本立てにすることで理解しやすくし、さらに巻末の索引も日本語と韓国語の二種類を作成し、日本語索引には日本語では理解が難しい難解重要単語に簡単な解説文を付けることを試みた。これらの試みは今後の韓国文化理解にも大いに参考になるものと自負している。そして、この過程を共同研究として進め、一つの作品に結実させたことは、人文系の共同研究のあり方をも示したものと考えている。

研究成果

研究成果は『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編の2冊として印刷・刊行した。いずれもカラーの絵画作品であるので、その特長を生かして、絵引もカラー印刷にした。中国江南編は、日本語表記に加えて、必要に応じて中国語を併記し、誤解が生じないように工夫したが、全体としては現代日本



研究成果報告書
『東アジア生活絵引』中国江南編 表紙



研究成果報告書
『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編 本文

語によるキャプションとなった。朝鮮風俗画編は日本語キャプションだけでなく、総ての語彙に韓国語(ハングル)でのキャプションを付けた。このことによって、日本語を解さない韓国・朝鮮の人々の利用も可能にし、同時に日本語と韓国語との対応関係を図像に媒介させることによって明確に示すことができた。この試みは今後の比較文化研究に大いに貢献するものと思われる。

この2冊の絵引によって、日本で作り出された絵引という編纂方式が、他の社会、他の文化でも可能であり、また必要であるということを示すことができた。図像の作成量は少なく、また残存量も少ない社会においては、絵引編纂の対象にできる図像資料は限られているが、適切に選択すれば、内容豊かな絵引編纂が可能であることを示し得た。

さらにデータベースの作成にも取り組んだ。今回公開の準備をしたのは、朝鮮風俗画についての絵引データベースである。これは絵を窓口にして検索できるように組み立て、しかも日本語のみでなく、韓国語や英語による検索もできるように工夫をしている。

1 班

福田アジオ(事業推進担当者、班代表、課題2・課題3)
菊池勇夫(共同研究員、課題2)
君康道(共同研究員、課題1)
金貞我(共同研究員<2003年度>・COE教員<2004~2007年度>、課題1・課題3)
小馬徹(事業推進担当者<2003~2004年度>)
佐々木睦(共同研究員、課題3)
鈴木陽一(事業推進担当者、課題1・課題3 課題代表)
田島佳也(事業推進担当者、課題2 課題代表)
中村ひろ子(COE教員<2004~2007年度>、課題2)
西和夫(事業推進担当者、課題2)
ジョン・ボチャリ(事業推進担当者、課題1)
前田禎彦(共同研究員<2005年度>・事業推進担当者<2006~2007年度>、課題1 課題代表)
井谷善恵(調査研究協力者<2006年度>、課題1)
泉雅博(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)

林淑姫(調査研究協力者<2005年度>)
韓東洙(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
金泰順(調査研究協力者<2005年度>)
アラン・クリスティ(調査研究協力者<2005年度、2006年度>、課題1)
巖明(調査研究協力者<2007年度>、課題3)
ティモシー・コールマン(調査研究協力者<2004年度、2005年度、2006年度>、課題1)
蔡文高(調査研究協力者<2007年度>、課題1)
尚峰(調査研究協力者<2006年度>、課題3)
サイモン・ジョン(調査研究協力者<2004年度、2005年度>)
鈴木彰(調査研究協力者<2005年度、2006年度、2007年度>、課題1)
鄭淳英(調査研究協力者<2007年度>、課題3)
富澤達三(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)
中井真木(調査研究協力者<2005年度、2006年度>、課題1)
中野泰(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
林海涛(調査研究協力者<2003年度>)
ラクエル・ヒル(調査研究協力者<2003年度>)
ルシ・サウス・マクレリー(調査研究協力者<2006年>、課題1)
ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ(調査研究協力者<2005年度>)
山本志乃(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)
尹賢鎮(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
フレデリック・ルシーニュ(調査研究協力者<2005年度>)
王京(COE研究員(PD)<2006~2007年度>、課題3)
佐々木弘美(COE研究員(RA)<2007年度>、課題2)
彭偉文(COE研究員(RA)<2006~2007年度>、課題3)

Ⅱ 第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

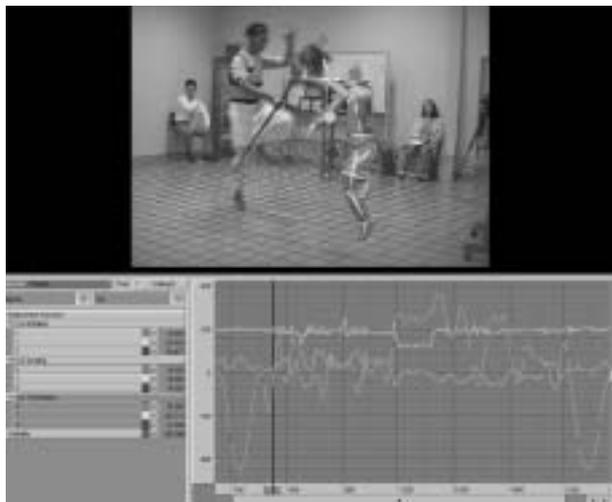
身体技法、つまり文化によって条件づけられた身体の使い方の比較研究については、人類史的立場から総合的に取り組み、その位置づけをより明確にするために、フランス、アフリカ、メキシコ、モンゴルなどを選び、調査を行った。一方、芸能研究のフィールドワークとしての取り組みは、中国、日本をフィールドとして、角度変化のデータを直接取得できる磁気式モーションキャプチャを用いて東アジアの民俗芸能と伝統芸能の定量比較を行った。その結果として、多くの新しい知見を獲得し、それらを随



班研究会



2004年9月内蒙古調査風景



調査風景 モーションキャプチャ収録

時日本内外の学界に報告し、また研究成果報告書に盛り込みとりまとめた。

用具と人間の動作の関係については、身体技法研究を通して何が見えてくるのかという視点から、東北地方・中部地方の木摺臼の形態比較に取り組んだ。木摺臼の形態の違いから作業姿勢が復原でき、作業姿勢は使い手の身体技法に規定されることから、日本列島に暮らしてきた人々の身体技法の違いを復原し、そこから古墳時代日本列島の民族分布をさぐるという構想をもった。調査研究の過程で、その仮説がほぼ論証できる展望を得た。その成果を研究成果報告書にとりまとめた。

これらの調査研究を通して、資料化の方法が従来明確になっていなかった身体技法および感性について、またそれらと密接に関係する用具についての資料化の方法を提示すると共に、それらの分析方法を開発し、一定の仮説を提示することができた。

課題1 身体技法の比較研究

研究経過

身体技法および感性は人類文化にとって普遍的であると同時に、それぞれの文化において独特のあり方を示している。しかも身体技法も感性も文字によって記録することが困難な事象であり、今までも文字資料として記録されることはほとんどなかった。人々が日常生活において表現する立ち居振る舞い、喜怒哀楽の表現を客観的に記録する方法を開発し、それによって資料化されたものを比較検討すること

を大きな課題としたのが課題1である。課題を追う方向として、人類史的な枠組みの中で身体技法を把握することと、舞踊を中心とした芸能に表現される身体技法の記録法の開発とその結果の分析に重点を置いて研究を展開した。

人類史的立場からの総合的な取り組みとしては、課題代表者が日本、フランス、西アフリカの比較研究を通して「三角測量による文化比較」(2004)などを発表し、2005年の第1回国際シンポジウムでは基調講演「非文字資料から見る人類文化」を行い、その仮説的方法に基づいて調査を行い、その結果を分析し、身体技法の普遍性と地域性の析出に努力した。具体的には、2004年8月にメキシコ調査、2004年9月に中国内モンゴル調査、2005年7月にモンゴル調査を実施した。さらに、感性に関しては2005年12月、フランスで調査を行い、嗅覚についての考察を深めた。

芸能研究のフィールドワーク分野においては、「身体技法と感性の接点に位置する芸能の身体表現のデータ化と定量比較」と題して、モーションキャプチャによる芸能の定量比較に取り組んだ。「型」によって身体表現が定型化・様式化される伝統芸能では、上演の場として舞台を意識するが、他方、民俗芸能は、祭儀の場を上演の場とし、神と人が一体となり、人々の希求する祓い清めや招福を意図した跳躍や、旋回の舞踊が繰り返される。この対照的な2つの芸能を比較するため、伝統芸能では能楽の観世流シテ方、民俗芸能では、奥三河の花祭り、中国江西省南豊県石郵村の儺舞の演者の実演によるデータを収録した。

研究成果

「非文字資料を検討する前提としての感性の諸領域についての考察」および「非文字資料としての身体技法の諸相についての考察」の2点を中心に考察を深め、以下の成果を得た。前者については、直立二足歩行の進化の過程で発達させ、退化させてきた諸感覚を、ヒトの文化全体、および、二重分節性をもった音声言語と、視覚二次元表象としての文字の特性との関連で考察した。後者については、運搬の

身体技法、作業姿勢における身体技法、舞踊における身体技法を、多文化間の比較によって検討した。主に対象とした文化は、日本、中国、モンゴル、フランスを始めとするヨーロッパ、ブルキナファソを始めとする西アフリカ、メキシコ、ブラジルなどである。

芸能のフィールドワークでは、身体表現が伝達しようとする心情や事柄と動作の間に普遍的に共通するものがあるかどうかを見出すため、モーションキャプチャを用いて、舞踊動作データを14個の関節をもつ人体モデルの形式に当てはめた映像の解析を進めた。得られた結果の統計学的処理を行い、動作特徴の抽出を試みた。またマジカルなステップとして花祭りの反閨のステップの分析を行い、モーションキャプチャデータの全方向から観察できる利点を活用した。キャラクターが動く映像を正面からの固定画面で出力した映像データに仕上げ、DVDにして付した。



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』表紙

課題2 用具と人間の動作の関係の分析

研究経過

20数年の民具調査の中で、木摺臼の地方による作業姿勢の違いから古代日本列島の民族分布が復原できるのではないかという見通しをたてていた。作業姿勢は使い手の身体技法に規定されることから木摺臼の全国調査に取り組みことにし、「身体技法の違いに基づく古代日本列島の民族分布の復原」を第1のテーマとした。資料のありそうなところだけを狙ったつまみ食い調査は、効率が良く都合の良い結果が得られるが、所詮は見込み捜査にすぎず、客観的・科学的な成果を得るには各県内の資料館をくまなく回る面的調査が条件となる。この方法では木摺臼はなかったが在来犁は良い資料があったというケースが起こりうる。そこで在来犁調査を並行して行うこととし、「非文字資料の体系化」を非文字資料の可能性の追究と方法論を確立・具体化し、在来犁から地域ごとの古代史を復原するという「民具からの歴史学」を目指した「民具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較調査」を第2のテーマとした。

限られた費用・時間で全国をカバーするため、西日本については蓄積された調査データが使えるので東日本に調査を集中することとし、東北地方と中部地方に重点を置くこととした。2003年度は青森・岩手・宮城県を中心に延べ39日で90ヵ所、2004年度は秋田・山形・福島県を中心に延べ49日126ヵ所、2005年度は中部地方を中心に延べ54日171ヵ所、2006年度は中部地方の追加調査で延べ16日27ヵ所を調査した。木摺臼の作業姿勢では東北地方は南から北へ座位から立位への変化がつかめ、在来犁では研究史上空白だった中部地方で、犁型から6～7世紀を復原できる成果を得た。ただ1人で多くの資料を抱え込んだため整理に手間取っている現状である。



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文

研究成果

1. 身体技法の違いに基づく古代日本列島の民族分布の復原

2003～2004年度の東北地方調査からは、木摺臼の分布は東西軸と南北軸で顕著な違いを見せるという興味深い事実が浮かび上がった。まず東西軸であるが、太平洋側の岩手・宮城・福島県では木摺臼の残存が顕著なのに対して、日本海側の秋田・山形県では土摺臼への移行が進行していて木摺臼があまり見られないという傾向が指摘できる。これは夏高温で冷害の心配の少ない日本海側は近世に米どころ化が進んでおり、効率の良い土摺臼への置き換えが進行したのであろう。また南北軸に関しては、南部の福島県は畿内から続く座位の縄引き方式、岩手県南部や山形県では、縄掛け穴に棒をつっこんでクランクとした押し引き棒方式があり、これは腰掛け操作である。岩手県中部は2本把手型、北部から青森県は4本把手型でいずれも立位操作となり、とくに4本把手型は大型化する。座位を嫌い腰掛け操作や立位に作り変えるのは、座位を苦手とする使い手の身体技法に規定されたものと考えられ、地理的位置からしても縄文系住民によるものと推測される。この点に関しては、外来の弥生人が日本列島に持ち込んだ鍬は、鍬平の板に柄を柄組みするのが一般的なのに対して、東北地方では幹から枝分かれする部位を使って鍬平と柄を一木造りで削り出す鍬が広く見られ、一木造りは森の民縄文人に顕著な技術であることからして、木摺臼の立位移行は縄文人の身体技法に基づくものという仮説はひとまず検証できたものと評価している。

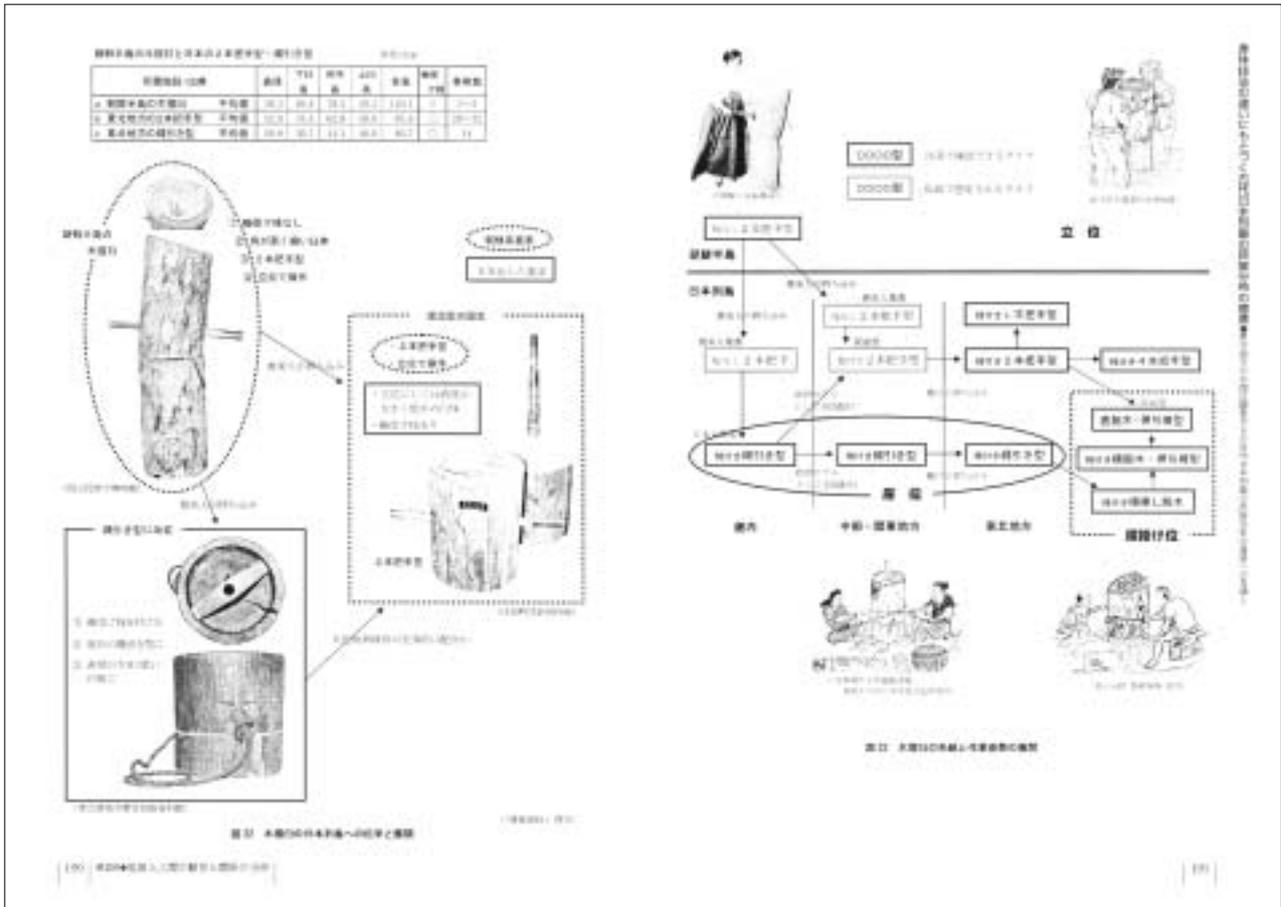
2. 民具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較調査

中部地方は広く東北地方のように全域調査はかなわなかったが、富山県・山梨県はほぼ全域、長野県は一部、石川県・静岡県・三重県はごく一部を調査した。長野・富山・石川県では板へらをもった直轄長床犁が在来犁の基本形をなし、これは朝鮮系犁の上に大化改新政府が普及を図った政府モデル犁の波を被ったものと考えられ、6世紀に朝鮮系渡来人集落が分布していた痕跡と考えられる。富山県の原放

寺の犁は三角枠の朝鮮系の強い混血型で、朝鮮系渡来人の直系の子孫に伝承されてきた可能性が高い。静岡県も直轄長床犁という混血型で、6世紀渡来人に由来すると考えられる。

これに対して山梨県は非混血型の三角枠無床犁で、大化改新政府の長床犁導入・普及政策施行後の伝来と考えられ、巨摩郡という地名を勘案すれば高句麗難民の持ち込みと推定される。これは妻が馬代わりに引いて夫が押しながら操作するという夫婦犁や、男2人で犁轅と犁柄を持って鍬のように使う人力犁というバラエティーをもっており、難民入植時の困難な状況の中の工夫が定型農具として固定したという可能性が高く、「民具からの歴史学」の可能性の高さは立証できた。

混血型や非混血型など犁型から6世紀や7世紀と時代を読み分ける方法は西日本の調査から帰納的に導いたものだが、その妥当性が中部地方の犁からも検証できたことになる。



研究成果報告書
 『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文

2班

川田順造（事業推進担当者、班代表＜2003～2005年度＞・共同研究員＜2006～2007年度＞、課題1）
 廣田律子（事業推進担当者、班代表＜2006～2007年度＞、課題1）
 芦澤玖美（共同研究員、＜2003～2005年度＞）
 梅野光興（共同研究員＜2003年度＞）
 落合一泰（共同研究員＜2003～2005年度＞）
 夏宇継（共同研究員＜2004～2007年度＞、課題1）
 楠本彩乃（共同研究員＜2004年度＞）
 河野通明（事業推進担当者、課題2 課題代表）
 長瀬一男（共同研究員＜2003年度、2005年度＞）

彭国躍（共同研究員＜2004年度＞）
 山口建治（事業推進担当者、課題1）
 岡本浩一（調査研究協力者＜2005年度、2006年度、2007年度＞、課題1）
 海賀孝明（調査研究協力者＜2004年度、2005年度、2007年度＞、課題1）
 金鋒（調査研究協力者＜2004年度＞）
 関根祥人（調査研究協力者＜2005年度＞）
 長瀬一男（調査研究協力者＜2004年度＞）
 國弘暁子（COE研究員（PD）＜2006～2007年度＞、課題1）

Ⅲ 第3班 環境と景観の資料化と体系化

第3班は当初「景観の時系列的研究」、「環境認識とその変遷の研究」、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」の3グループがそれぞれの課題を掲げ、研究調査を開始した。前半の3年間においては、3グループはそれぞれ有機的な関係を構築するための研究を行ったが、2006年度には班全体の再編成がなされ、他の班からも新しくメンバーを迎えて進める調査・研究体制が出来上がった。その体制の下ではグループ固有の研究課題の追究が優先されることとなり、相互の関連性を追究する面は後退したが、課題内部においては、それぞれ独自の研究成果をあげることができた。

2004年度に刊行した『環境と景観の資料化と体系化にむけて』において環境と景観に関する民俗学、地理学、歴史学の異なる分野からのアプローチが行われ、相互に共通認識を求める前提的作業を開始した。各領域をさらに深めるため、グループの再編成が行われ、課題1「景観の時系列的研究」、課題2「環境認識とその変遷の研究」、課題3「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」に分かれ、それぞれの課題に応じた研究調査を展開した。

課題1においては日本常民文化研究所が所蔵する「澁澤写真」の撮影場所の特定を中心とする調査分析を、日本各地および韓国を対象に調査を行い、分析を進めた。

課題2においては西日本と東日本の特定地域を調査対象に定めたが、対象地が災害に見舞われるなどの事態が生じたため、調査が中断され、当初の計画が実行されなかった。後半2年間には中世鎌倉の発掘調査の考古学的成果から環境認識の変遷に関する考察を深めた。

課題3においては「海外神社」跡地、租界研究、関東大震災の絵葉書を研究素材とする3組に分かれ、それぞれの調査分析を行った。

これらの研究経過から判明してきたことは、人類文化としての非文字資料は、文字資料に対立的に存在するものではなく、文化総体の中で補完関係にあ



班研究会

ることであった。それは研究成果において実証され、再確認された。また、多くの写真類が物語る現実はずでに失われた景観であるため、分析の妥当性を広く世に問うために、それぞれのグループが追究する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。

課題1 景観の時系列的研究

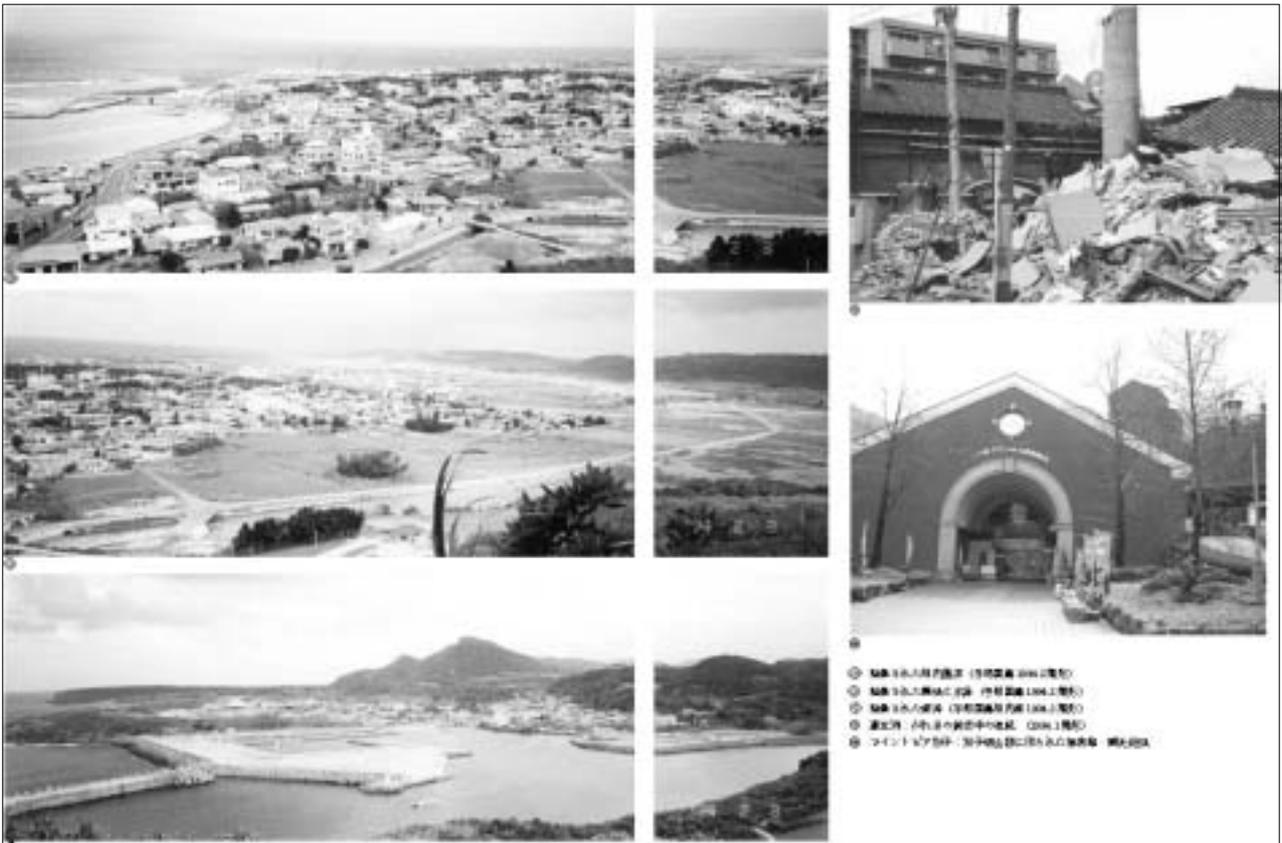
研究経過

課題1の景観の時系列的研究は、その作業の軸を日本常民文化研究所所蔵の「澁澤写真」の追跡調査、およびその一般公開にむけての準備作業においた。

最初の3年間は今からほぼ70年前に撮影された「澁澤写真」の撮影場所の特定、またその作業に関わるさまざまな聞き取りが中心となった。聞き取り作業は撮影時の証言を現地で求めることのほか、民俗学史の諸資料に基づき、撮影者を特定し、本人もしくはその遺族から聞き書きをし、また各種資料の提供を受けることで、当時の状況を少しでも洗い出



澁澤写真 牛耕（喜界島にては全く珍しい、殆んど馬耕である）
昭11. 4 於阿伝【目録番号：ア-5-4】



調査研究資料1
『環境と景観の資料化と体系化にむけて』口絵



研究成果報告書
『「景観」と「環境」についての覚書』本文

すことを目的とした。日本常民文化研究所の「澁澤写真」は紙焼き写真として残されており、ネガフィルムがない。その撮影者が不明な状態であるものが多く、その所有権には不確定な要素があるので、公開にさきがけて可能な限り写真の「由緒」を調べることとなった。

参画したメンバーは、素材となる「澁澤写真」を前にして、その撮影された時点や場所を特定するための着目点を出し合い、議論し、それを持参しての現地比定を行い、撮影以降現在までの長期的な景観変化を把握した。その主要な踏査地をあげると、2003年度に鹿児島県、広島県、東京都（新島）、2004年度に鹿児島県、2006年度には香川県及び鹿児島県、そして海外では2005年度に韓国の江原道、慶尚北道などで現地調査を行った。最後の2年間の主要な作業は、調査に基づく資料整理と各研究者による理論考察のとりまとめを行い、さらに現時点で公開可能な写真についての資料集の編集刊行に力点を置いた。その結果、当初刊行を予定していた2冊の「澁澤写真」の写真資料集のうち、鹿児島県大島郡喜界町の写真集1冊を刊行することができた。

研究成果

喜界島における「澁澤写真」の撮影場所の特定は、聞き取りなどにより一定の成果が得られた。写真を資料として正面に据え、300点の写真から例えば「浜」という場、あるいは人々の生活に密着した農耕馬としての「馬」に限定して探求することで、景観の時系列変化の内実を構成する要因とは写真として対象化されたものに限らず、それらを包む外在的要因、すなわち当時喜界島に押し寄せていた社会的変化の表出であることを把握することができた。

調査研究の過程で得た知見については、参画者が個別に論考を執筆して、『年報』の各号に発表した。また、課題の中間報告として『環境と景観の資料化と体系化にむけて』および『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—』を刊行した。また最終的な研究成果は『「景観」と「環境」についての覚書』としてとりまとめた。

課題2 環境認識とその変遷の研究

研究経過

課題2「環境認識とその変遷の研究」は、当初東日本と西日本の山間のむらの環境認識の変遷についての調査を計画した。

そのために調査研究対象地として、西日本では高知県長岡郡大豊町立川上名仁尾ヶ内、東日本では長野県上水内郡信濃町赤沢の山のむらで、いずれも焼畑や狩猟がかつて大きな比重を占めていたという共通性を持つ地域を選んだ。生活変化の激しかった高度経済成長期前後の50年ほどの生活の移りかわりを機軸にして、口頭伝承を中心に、現在を基点として両村落を比較する形で調査を行い、その結果を報告書にまとめる構想で研究に取り掛かった。

ところが、始まって2年目の秋、西日本の調査対象地とした仁尾ヶ内は台風で襲われ、砂防ダムが全壊し、むらは大きな被害を受けた。このため、調査を一時中断せざるを得なかった。結局、むらが多少なりともその被害から立直るのに2年の時を要した。さらに東日本の場合は調査者側の諸般の事情により、調査の中断を余儀なくされた。そのため、不十分ながらも実際に調査を終えることができたのは



調査地航空写真（鎌倉）



調査地航空写真（岡山平野）

西日本の高知県のむらのみとなった。研究成果のとりまとめもそこに重点を置いた。

後半2年間の作業として新たな課題と調査対象を設定した。中世の鎌倉の環境を現在の生活世界とも関連させて多角的に研究することを構想し、中世鎌倉を専門とする考古学者との共同作業を行った。ただし、この作業も考古学研究者の参加がやむを得ない事情で1年に限られたため、必ずしも十分な成果を結実させることができなかった。

最終年度にいたり、これまでの調査研究で収集した資料や研究成果を基に、今後の研究の進展を図るための整理と検討を行った。

研究成果

「環境認識」とは研究担当者自身の言葉で言い換えれば、人が生活するために環境にどう働きかけ環境を把握してきたかという民俗学の蓄積が活用できる場であると捉え、海人の日常に密着して調査した事例と焼畑村の生活暦からの事例で検証した。しかしながら、環境へ働きかける主体の側への視座を同時にあわせ持つものでなければ環境の変容だけを捉

えても主体すなわち人間を含む総体としての環境を把握したことはない。この点は今後の課題としておきたい。

課題3 環境に刻印された人間活動 および災害の痕跡解読

研究経過

課題3においては、戦争、占領、災害などで消滅した景観を写真を多用することで復原し、その変容の意味を問うことを共通の課題とした。研究課題として掲げる景観のみならず、研究素材として用いた写真類それ自体も「非文字」として位置づけられるべきものである。これら素材として用いた写真類が作成された時代は、撮影する主体と対象との間に政治的・社会的緊張関係を孕む1920年～1930年であった。したがって、写真に込められた意図や意思をその背景を踏まえて読み解くことがまず必要とされた。

課題は大きく三つの研究テーマを設定し、それぞれが共同研究を展開した。その三つのテーマは、「海外神社」跡地研究、租界研究および災害痕跡研究である。前二者は、共に現地調査を進め、現地において聞き取りなどを行い、戦争による侵略、原風景としての景観の占領後の変容とその要因を分析した。災害痕跡研究は主に関東大震災の写真絵葉書類を収集し、地図に落とすことを通して、それらが特定の対象に集中すること、さらにはこれら写真絵葉書類が関東大震災に関する人々の震災像をひとつの形に収斂させていくことを検証した。

また、それぞれのグループが追究する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。

〔「海外神社」研究〕 「海外神社」跡地調査を2003年度旧樺太南西部（12社）、2004年度旧南洋群島（20社）、2005年度旧朝鮮（18社）、2006年度旧満州満鉄附属地（10社）で行った。データベース構築のために、「海外神社」の写真、地図、絵葉書などを収集し、また、実地調査した跡地については実測図を作成して、「『海外神社』跡地に関するデータベース」の作成を行った。

〔租界研究〕 主として中国における旧日本租界

に関する現地調査を漢口、上海、天津、青島などで行い、台湾の国史館、中央研究院、上海市档案馆などで資料の収集を行ってきた。それらの活動の成果を発表すべく、2007年には「中国における日本租界研究」、「中国進出の日本企業とその建築—戦前の紡績業を事例として」の2回ワークショップを開いた。また、戦前中国の日本租界関連データベースの作成を行った。さらに、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に建造された倭城の性格について、「朝鮮蔚山合戦之図」等の分析を行った。

〔災害痕跡研究〕 幕末から関東大震災まで70年間ほどの期間の災害に関わる絵図、写真を収集し、災害メディアとしての歴史的特徴についての分析を行い、成果論文を発表した。また、収集資料に基づく2件のデータベースを作成した。2005年度には近世・近代移行期のメディアに関する専門家によるシンポジウムを開催、2006年は「歴史災害と都市」についての立命館大学とのジョイントワークショップを開催、報告書を作成した。2007年『「名所江戸百景」と江戸地震」データベースをホームページに掲載、2008年「関東大震災・地図と写真のデータベース」を作成した。

研究成果

〔「海外神社」研究〕 戦前、アジア・太平洋地域に建てられた約1600社の「海外神社」の内、105社の跡地を調査したが、そこから得られた結論の第1は、「海外神社」跡地の景観の変容は①「改変」、②「放置」、③「再建」、④「復活」の4つの類型に分けられるということである。

第2に、このように異なる景観変容をもたらした要因として、以下の5点を析出した。①は戦後における日本と「海外神社」が建てられた当該国家・地域との関係を含む政治的要因である。②は日本及び当該国家・地域における社会的変動である。③は当該国家・地域における経済的発展の度合いである。④は当該国家・地域における文化伝統の問題。そして⑤は当該国家・地域における政治的・宗教的な支配勢力交代の「刻印」という問題である。さらにも、以上の上で、以上の5つの要因はそれぞれ相互に絡み合

い、また増幅、あるいは消去し合いながら、「海外神社」跡地の多様な景観を形作っていることを明らかにした。

【租界研究】 戦前に中国の数都市に置かれた日本租界の現況、特に街路、工場やそれに付設した日本人社宅、中国人労働者住宅の現状について、現地調査を行い、現地に住む中国人への聞き取りを含む調査を行い、加えて建設当時の写真や図面、文字資料を収集分析することで、日本人が住んでいた当時の実態やその後現在に至るまでの変化を跡付けた。総じて、日本人が住んでいた当時の空間は現地から孤立したものだったが、日本人が去った後には、街路や建物をそのまま利用しつつ現地に溶け込む空間へと変化していったことを明らかにした。

また、朝鮮における倭城が、古来現地にあった邑城とは性格を異にして、侵略拠点の役割を担うものであったことを、合戦図や屏風絵を分析し文字資料で補強することで明らかにした。

【災害痕跡研究】 幕末から明治中期に至る錦絵、石版画、銅版画、写真とめまぐるしく進展するメディアの技術的發展と社会的受容を跡付ける前半の研究成果と、後半の関東大震災の絵葉書を中心とする研究成果を通じて、メディアの近代化、大衆化の過程をほぼフォローすることができた。近世から近代への転換期のメディア変遷史として位置づけが可能なこれらの時期の特徴は、従来から大衆に親しまれてきた錦絵類と西洋からの技術の導入によって切り開かれたメディアの新領域が相拮抗する状況から新メディアが徐々に大衆化する過程でもある。さらに、災害メディアとしての特徴をあげるならば、貧富の差なく襲う災害では一時的に従来の階層性が消去される瞬間を現出させる。そのため、社会的利害を超えた感覚が蘇生、自他の被害に敏感に反応する状況が生み出され、社会的関心が媒体としての特定のメディアとその情報内容に過度に集中する傾向が強くなることを明らかにした。

3班

香月洋一郎（事業推進担当者、班代表、課題1 課題代表・課題2 課題代表）

大里浩秋（事業推進担当者〈2006～2007年度〉、課題3）

河野真知郎（調査研究協力者〈2005年度〉・共同研究員〈2006年度〉、課題2）

北原糸子（事業推進担当者、課題3 課題代表）

金子隆一（共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

鈴木廣之（共同研究員〈2005年度〉）

須山聡（共同研究員〈2003年度、2005年度〉）

孫安石（事業推進担当者〈2006～2007年度〉、課題3）

田口洋美（共同研究員〈2004年度〉、課題2）

津田良樹（調査研究協力者〈2005年度〉・共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

鄭美愛（共同研究員、課題1）

富井正憲（共同研究員、課題1・課題3）

中島三千男（事業推進担当者〈2003～2006年度〉、課題3）

八久保厚志（共同研究員、課題1・課題2）

浜田弘明（共同研究員〈2004～2007年度〉、課題1）

原信田實（共同研究員〈2003年度〉・調査研究協力者〈2005年度〉）

増野恵子（共同研究員〈2004年度〉・調査研究協力者〈2005年度〉）

三鬼清一郎（事業推進担当者〈2003～2005年度〉・共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

上田純広（調査研究協力者〈2007年度〉、課題3）

貴志俊彦（調査研究協力者〈2005年度〉）

高坂嘉孝（調査研究協力者〈2007年度〉、課題1）

西田幸夫（調査研究協力者〈2007年度〉、課題3）

平山康典（調査研究協力者〈2006年度〉、課題3）

藤永豪（調査研究協力者〈2006年度〉、課題1）

堀内寛晃（調査研究協力者〈2006年度、2007年度〉、課題3）

諸井孝文（調査研究協力者〈2006年度〉、課題3）

李善愛（調査研究協力者〈2004年度、2007年度〉、課題1）

土田拓（COE研究員（RA）〈2006～2007年度〉、課題1・課題2）

本田佳奈（COE研究員（PD）〈2006年度〉、課題1）

劉湯水（COE研究員（RA）〈2007年度〉、課題3）

IV 第4班 地域統合情報発信

研究経過

第4班・地域統合情報発信班は、当初「文化情報発信の新しい技術の開発」を主題に、1～3班による非文字資料の体系化作業と共同しながら、①地域文化情報として統合的に発信するシステム、そして②その新技法に習熟した専門学芸員（シニア・キュレーター）養成方法の開発を目指し出発した。②は3年後、実験展示班として独立編成になり、本COEの成果を発信する方法としての実験展示を研究実施する活動とその人材養成策としての大学院における高度専門職養成の検討も含め、研究を展開することとなった。

①非文字資料の資料化、データ化、体系化の手順を踏まえての公開をソフト、ハードの両面から扱う対象地域として、国内では、福島県只見町において民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作・民具写真・実測図、民俗誌の裏付け、文書資料との整合へと進み、環境景観の変遷・比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性解明また地域振興のための情報発信の場としての博物館のあり方を提示した。

国外では、中国雲南省麗江にある東巴文化博物館・東巴文化研究所との協力関係の下に納西族の東巴儀礼・東巴文字・東巴經典の関係性を、身体技法（東巴儀礼）、画像化（象形文字）、文字化（東巴經典）、口承化（神話・年中行事）の諸相から把らえることを考え、初年度は、麗江、只見町において予備調査を行った。その結果、地域統合情報発信の場を只見町に決定した。只見町の選定理由は、地域住民の協力はもとより15年間に及ぶ町史編纂事業が終了し、各種文書類、民具、写真をはじめとした映像資料から地質、動植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその関係性・体系性が16巻の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通すことができ、これらさまざまな地域情報をクロスさせることにより只見町という山村地域の構造的な浮かび上がらせる可能性

が高いと考えられたからである。

3年度以降は、実験展示班の独立もあり、地域統合情報発信班では、只見町の地域統合情報をインターネット・エコミュージアムというシステムで発信する方法論に焦点を絞った。先述したように当初計画では、他班の研究成果、ノウハウに基づき、一地域である只見町の図像、民具、身体技法、景観のそれぞれの資料を統合的に重ね合わせて何が描けるかが班に求められた役割であった。例えば、田植えて実際に使われる民具を近世農書の記載・絵図と対照し、また民俗芸能である早乙女踊の田植えの所作と実際の田植え作業姿勢の異同をモーションキャプチャの解析で比較する、電源開発や構造改善事業による農地環境の変化が、農法・農具にどのような影響を与えたのかなどいくつかの研究指標をたてたが、他班の成果と関係させて地域情報を統合的に関係付け発信するには至らなかった。そこで、只見町の住民自らが整理した約8000点の民具カードのデータベース化を中心に据え、民具に込められた地域情報を最も有効に公開する方法としてインターネット・エコミュージアムというシステムを構想し、その開発を行った。すべての民具を扱うわけにはいかず、画像では屋根葺き職人関係の民具を事例とし、そこに登場する民具の検索からその民具に関係する世界が広がり、地域性の一端がわかるようにした。この間班員は、只見町の折々の生産活動、年中行事の調査をはじめ、古老からの聞き書き等のフィールド調査、民具撮影、民具記録カードのデータベース化、諸資料の映像コンテンツ化などの室内作業に取り組んだ。

この試みは当初の目的からは遥かに遠いが、構想だけは示せたものと考え、また、地域研究と情報工学、文系理系の学問の結合はもとより、大学と地域社会との連携、科学的知識と生活の知恵の総合化という新たな知のイノベーションに結びつく契機となるものと考えている。

研究成果

2006年度にシンポジウム「民具は世界を結ぶ」を福島県只見町において開催した。また、2007年

度には、第3回国際シンポジウムにおいて、「インターネット・エコミュージアムの可能性—地域研究と情報学の連携—」を報告した。研究成果報告書として、『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』を刊行した。第4班の目標は地域統合情報発信であり、具体的には福島県只見町において非文字資料を統合し、発信するものであり、インターネット上でエコミュージアムを開館するものである。そのエコミュージアムは完成したというには不十分ではあるが、特定地域において各種資料を総合し、統合して発信することができた。



シンポジウム「民具は世界を結ぶ」



神奈川大学COE 只見町インターネット・エコミュージアム

4班（～2005年度）

佐野賢治（事業推進担当者、班代表）
 中村政則（事業推進担当者）
 橘川俊忠（事業推進担当者）
 小馬徹（事業推進担当者＜2005年度＞）
 田上繁（事業推進担当）
 齊藤隆弘（事業推進担当）
 宇佐見義之（共同研究員）
 金子隆一（共同研究員）
 木下宏揚（共同研究員）
 的場昭弘（共同研究員）
 丸山宏（共同研究員）
 能登正人（共同研究員＜2004～2005年度＞）
 大里浩秋（共同研究員＜2003～2004年度＞・事業推進担当者＜2005年度＞）
 孫安石（事業推進担当者）
 青木俊也（COE教員＜2004～2007年度＞）
 ウィリアム・リンゼイ（調査研究協力者＜2004年度、2005年度＞）

木下慶子（調査研究協力者＜2005年度＞）
 小松大介（調査研究協力者＜2005年度＞）

4班（2006年度～）

佐野賢治（事業推進担当者、班代表）
 中村政則（事業推進担当者＜2006年度＞・共同研究員＜2007年度＞）
 橘川俊忠（事業推進担当者）
 木下宏揚（共同研究員）
 能登正人（共同研究員）
 佐々木長生（共同研究員）
 田島佳也（事業推進担当者）
 廣田律子（事業推進担当者）
 八久保厚志（共同研究員）
 長瀬一男（共同研究員）
 平井誠（共同研究員）
 海賀孝明（調査研究協力者）
 小松大介（調査研究協力者＜2007年度＞）
 新国勇（調査研究協力者＜2007年度＞）
 フレデリック・ルシーニュ（調査研究協力者＜2007年度＞）
 小野地健（COE研究員（PD）＜2007年度＞）

V 第5班 実験展示

研究経過

[1. 展示]

本COE発足時から重要な柱として設定されていたのが、研究成果を展示という方法で発信することであった。本プログラムの研究は、膨大な非文字資料の中から図像、身体技法、環境・景観の三つを選択し、それらの事象の資料化、分析、情報発信を行うものであるから、一般的な研究成果ではなく、限定され明確になった研究成果である。三つの事象の中から身体技法を中心に据え、3者を統合することを構想して、展示計画が練られた。4年度から具体的な展示計画に取り組むべく、それまでの情報発信班から独立して一つの班を形成し、課題に取り組んできた。そして、非文字資料研究の成果発信としては従来試みられることの少なかった展示という手法を選択したことの意味を問いながら、研究会を重ね展示構想の策定を進めた。

身体技法という具体的なテーマを設定した上で、この展示が研究者という枠を超えた人々に、非文字資料の存在とそれが切り拓く可能性について論議を深め、それらを直接発信する装置の有効性を検討した。各自それぞれ企画案を提示・検討し、テーマを身体技法の中でも最も基本的な「歩く」に絞り、「あるく—身体の記憶—」の展示構想を固めた。

この展示は、観覧者がそれぞれの身体の記憶を意識化する場として用意した。展示資料は図像資料を中心とすることで、「非文字資料を用いた展示」という新たな挑戦を試みた。

また、展示に本学の学生をはじめ市民や研究者など外部の多様な人々の参加を得ることができた。さらには観覧者の展示評価を展示にフィードバックするという仕組みを通して、観覧者の展示への参画の筋道を設けた。この展示では文字情報をできる限り排し、参加型展示、触る展示といった展示手法を試みることにした。

[2. 高度専門職学芸員の養成]

高度専門職学芸員養成策を検討することは、本プログラムの当初計画にも位置づけられ、5年間の研

究を経て、具体的な大学院博物館学芸員課程の開設を構想していたが、制度的改変を伴うことであり、実施は困難が見込まれたので、提言をとりまとめて参考に供することとした。

最初の3年間は第4班の一部として共同研究を展開した。その段階では、学芸員養成課程のあり方を中心に、フランス・オーストリア・ドイツ・アメリカの博物館を調査し、地域と大学博物館の連携の必要性などの課題を得た。そして、4年度目から独立して、研究成果を展示という方法で統合する実験展示班の活動の一つの柱となった。そこでは、大学院における高度専門職学芸員の養成について検討し、当初計画を達成すべく努力した。

まず学芸員養成の現状を把握するために、このカリキュラムをもつ大学院への調査を行い、文部科学省、学術会議、博物館学会、さらには日本博物館協会などで蓄積されている学芸員養成に関わる情報を収集し、その動向について分析を進めた。

近年学芸員の高度化、専門化の必要性についての指摘はあるものの、専門性そのものの論議の深まりがみられない。それは、関連領域の問題が広く介在し、一つの結論に達することが困難なことを示している。そこで博物館学の研究者、学芸員の養成に関わる教員、現場の学芸員といったそれぞれの視点からの論議を交わすために、「学芸員の専門性をめぐって」と題する公開研究会を開催し論議を深めた。

研究成果

[1. 展示]

実験展示「あるく—身体の記憶—」を2007年11月1日から30日までの1か月間、学内の常民参考室において実施した。展示には、横浜市内、神奈川区内といった地域の人々や本学の学生など、研究者の枠を超えたさまざまな人々が観覧者として足を運んだ。展示を見る人々との交信のありようが一つの研究成果ともなりえた。

この展示で発信したのは、図像資料を通してたどり着いた「かつての私たちの歩き方」に「世代を超えて私たちの身体に伝えられたもの」がみえるかどうかの問いかけであった。新しい試みは、観覧者が

さまざまな歩き方の実演を含んだ映像プログラムに沿って実際に歩くことにより、自らの身体を使って発信者からの問いかけを検証するものであった。それと同時に第三者による展示評価によって、新しい試みの成果を検証した。このような方法により、展示への同意や異議を踏まえて、展示を見直し再発信することを行った。この点は刊行物などによる一方向からの発信とは異なり、展示が相互確認の場となりえたのである。

それはまた、この展示が「歩く」研究の実験、検証の場となりえたことを示しており、そこに「身体技法」、さらには「非文字資料」研究の方法の問い直しを含め、今後への新たな視点をもたらすことへの可能性を確認した。

展示の記録保存を『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』の刊行と映像による記録（DVD）により進めた。研究成果の発信である以上、展示終了後も検証を可能にしておくことは欠かせないが、展示は発信装置としてだけでなく、展示そのものがつくる過程も含め研究成果として蓄積され発信されるべきとの提言を込めた。

〔2. 高度専門職学芸員の養成〕

提言を記した報告書として『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言』をとりまとめた。そこで以下の提言を行った。

第一の提案は現行の歴史・民俗系の研究科を例に、高度専門職学芸員養成を図るためにはどのようなプログラムを新たに追加すべきかという点である。現在修士課程修了の学芸員が増えつつあるにも拘わらず、大学院においては歴史学、民俗学などの研究領域の専門性を高めるのみで学芸員の専門性を高めるためのプログラムが用意されていない。この現状を踏まえ、実現性の高い具体的なカリキュラムを提示した。

第二は博物館学大学院新設の提案である。高度専門職学芸員養成には必要なカリキュラムを担う研究者の育成が不可欠であり、いまだ博物館学研究科を設置するところのない現状への問題提起を行った。そして、博物館学の専門研究者を養成すると共に、博物館の学問体系を完成させ、深める研究機関とし

ての大学院博物館学研究科の必要性とその具体像を提示した。今回は具体的なカリキュラムの提示はしていないが、いずれ検討すべきことが予測される課題である。

現在、文部科学省では上級学芸員といった新たな高度専門職としての資格の制度化を検討中であり、いずれそれへの対応を含めたカリキュラムの再検討を要するが、現状に即した提言の素材となるよう、大学院における現状についての報告と学芸員の専門性を問うた研究会の記録を取めた。



班研究会



展示準備風景

5班 (2006年度～)

中村ひろ子 (COE 教員、班代表)

福田アジオ (事業推進担当者)

河野通明 (事業推進担当者)

刈田均 (共同研究員)

榎美香 (共同研究員)

青木俊也 (COE 教員)

浜田弘明 (COE 教員)

田上繁 (事業推進担当者)

丸山泰明 (COE 研究員 (PD) <2006年度>)



研究成果報告書

『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』

『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言』



実験展示「あるく—身体の記憶」外看板

VI 第6班 理論総括研究

研究経過

理論総括研究班の課題は、非文字資料とは何かを考察し、非文字資料研究の方法を整序し、非文字資料の体系化への筋道をつけ、さらにそれが人類文化の研究にとってどういう意味があるかを明らかにすることにある。非文字資料のように、これまで自覚的かつ意識的に取り上げられることが少なかった資料を対象とする研究の場合、なによりも個々の非文字資料に即した個別的研究の蓄積を前提にはじめてそのような課題への取り組みが可能になる。もちろん、少ないとはいえ、これまでなされてきた研究の成果を検討することや抽象的レベルでの考察も必要であろう。理論総括研究班は、本プログラムにおいて推進されてきた個々の非文字資料の研究状況を検討しつつ、そうした作業も行ってきた。

しかし、理論総括研究班としては、あくまで自分の経験、研究成果に依拠しつつ、その一般化を中心的課題として自らに課してきた。したがって、本班は、各班、各課題の動向に注目し、適宜各班・課題からの報告を受け、それを素材として考察を進めるという方向を選択した。また、各個別研究班・課題が、自らの経験を理論的に整序し、問題提起することを薦めてきた。

実際には、各年度の全体研究会における各班からの報告を受け、全体的研究状況の把握に努め、国際シンポジウムなどへも積極的に参加し、理論的に考察を加えるべき素材を収集してきた。さらに、4年目からは、個別テーマの研究の進捗を前提として、各班の代表者による報告を中心とした研究会を開催し、個別資料の研究から生じた問題点を整理し、「非文字資料の体系化」という困難な理論的課題に取り組んできた。

研究成果

本班の研究成果は、すでに国際シンポジウムあるいは全体研究会の報告・コメントなどの形で発表してきたが、最終的には、研究成果報告書『非文字資料研究の理論的諸問題』としてまとめた。

本論集に収載した三つの論文は、少数とはいえ、そうした活動の成果である。まず、非文字資料の認識論的基礎を哲学史あるいは認識論史的観点から論じ、非文字資料の研究成果が人類の知的財産として認知されるために不可欠の課題に挑んだ論文、つぎにそれへの批判の形をとって自らの研究の経験を普遍化し、非文字資料研究の具体的進展に資するために執筆された論文、さらに、本プログラムの全体状況を鳥瞰しながら、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトルに掲げられた課題への理論的諸問題を整理し、さらなる理論形成へ展望を開く試論が展開された。

「ミネルバの梟は夕暮れに飛び立つ」ということわざがあるように、体系的理論の形成は、その領域の研究がある程度完成に近づいたときにのみ達成される課題であるとするれば、非文字資料の本格的な体系的研究は、本プログラムにおいてはじめて取り組まれた課題であり、完成に近づいたとは到底いえないが、今後の課題や方向性を提示することができた。

6班 (2006年度～)

的場昭弘 (事業推進担当者)

福田アジオ (事業推進担当者)

香月洋一郎 (事業推進担当者)

橘川俊忠 (事業推進担当者)

鈴木陽一 (事業推進担当者)

小馬徹 (事業推進担当者<2006年度>)

齋藤隆弘 (事業推進担当者)

能登正人 (共同研究員)

フレデリック・ルシーニュ (COE研究員 (RA) <2006年度>)

第 2 部 事業総括

1 若手研究者の育成

21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、PD・RA制度や派遣・訪問研究員制度の導入、各拠点充実事業の推進など、研究と教育の一体化による世界水準の研究者の育成を図った。

I COE研究員 (PD・RA)

COE研究員(PD)制度は、学内外の35歳未満の博士学位取得者(単位取得満期退学者を含む)を公募により採用し、日本学術振興会特別研究員と同程度の給与を支給し、研究に専念できる条件を整えるものである。PDに対しては、その専門に応じて本プログラムの研究課題の一部を担当させ、自立した研究者としての資質の向上を図った。PDは、本プログラム推進期間中の5年間で、実数9名、延べ16名を採用した。そのうち、1名が国立大学専任講師に採用され、1名が博士の学位を取得した。さらに、本学の非常勤講師として1名が採用された。

一方、COE研究員(RA)については、学内の博士後期課程院生を在籍のままCOE研究員として採用し、事業推進担当者の指導を受けつつ調査研究に従事させ、実際の資料収集とその解析について専門的スキルを修得させると同時に、高度な研究能力を身につけさせた。RAは、5年間の事業推進中、実数12名、延べ22名を採用した。特に、RAに対しては、事業推進担当者の指導の下、研究課題に関する学力を向上させると共に、学位論文作成に向けての指導を行った。その結果、3名が博士の学位を取得した。

また、本プログラム採択後の教育環境の下で、歴史民俗資料学研究科で14名の院生が新たに課程博

士の学位を取得した。そのうち11名が民俗民具研究分野の課程博士であり、これは本プログラムによる人材育成の成果があらわれたものといえよう。PD・RAの論文・調査報告などの成果は、レフェリー制度をとる『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』や紀要『歴史民俗資料学研究』に主に掲載され公開された。PD1名の学位論文が著書として出版社から公刊されている。さらに、PD・RAの若手研究者の最終研究成果として、2008年3月に『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』と題する論文集がまとめられ、発刊された。

このように、本プログラムの特徴的なPD・RA制度により、若手研究者の育成に関しては大きな成果があったと評価されよう。しかし、後継組織「非文字資料研究センター」において、この制度を継承するならば、プログラムに適合する研究の専門性や、研究費の支給額、現行の1年間という採用期間の見直しなど、今後、改善しなければならない問題が伏在することも判明した。

II 若手研究者海外派遣事業

PD・RAを中心に若手研究者については、世界各地の研究者との交流を重視し、一流の研究者に直接指導を受けさせるために、東アジアおよび欧米の海外提携研究機関へ2週間程度派遣した。

本プログラム事業推進中の5年間で派遣した海外提携研究機関は4か国8研究機関を数える。それらの機関を列記すれば、華東師範大学・北京師範大学・浙江工商大学・中山大学・香港大学(以上中国)、延世大学(韓国)、ブリティッシュコロンビア

大学（カナダ）、サンパウロ大学（ブラジル）である。

それらの海外提携研究機関へ派遣されたPD・RAをはじめとする研究員の内訳は、華東師範大学3名、北京師範大学2名、浙江大学1名、中山大学2名、延世大学1名、ブリティッシュコロンビア大学2名、サンパウロ大学2名となる。

派遣期間は2週間程度と決して長くはないが、帰

国後、海外で収集した研究資料や修得した知識を自己の研究に役立てることにより、各自の研究は飛躍的に進展した。ただ、今後、後継組織「非文字資料研究センター」において、この派遣研究員制度を継続、充実させるためには、滞在期間の大幅な延長や、派遣中の単位互換性などの問題が大きな課題として残されていることを指摘しなければならないであろう。

2004年度～2007年度 海外提携研究機関派遣研究員一覧

2004年度

氏名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題
藤永 豪	北京師範大学 民俗学与文化人類学研究所	2004年11月19日～ 2004年12月1日	北京市郊外における農村の 景観変化に関する調査・研究

2005年度

王 京	北京師範大学 民俗学与文化人類学研究所	2005年7月6日～ 2005年7月19日	1930～1940年代の 日本民俗学と中国
彭 偉文	華東師範大学 中国民俗保護開発研究センター	2005年9月17日～ 2005年9月30日	上海およびその周辺における さまざまな霊獣舞の研究
宮本 大輔	浙江大学 日本文化研究所	2005年11月1日～ 2005年11月14日	浙江人の言語評価 —大学生を中心に—
櫻村 賢二	延世大学校 中央博物館	2005年12月1日～ 2005年12月14日	オートバイ宅配便からみる 韓国社会について
大西 万知子	サンパウロ大学 日本文化研究所	2005年12月2日～ 2005年12月18日	アジア・ヨーロッパ・ ラテンアメリカの情報発信 (展示)の発達比較

2006年度

王 京	華東師範大学 中国民俗保護開発研究センター	2006年7月2日～ 2006年7月15日	戦前期の上海と民俗学
本田 佳奈	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2006年10月1日～ 2006年10月15日	ブリティッシュコロンビア における日系移民家庭への 聞き取り調査と資料収集
國弘 暁子	サンパウロ大学 日本文化研究所	2006年10月30日～ 2006年11月15日	ブラジルのトラベスティ に関する人類学的調査研究
彭 偉文	中山大學 中国非物質文化遺産研究センター	2006年11月1日～ 2006年11月14日	日本の獅子舞を中心に 東アジアにおける霊獣の舞研究

2007年度

氏名	派遣先提携研究機関名	派遣期間	研究課題
坂井 美香	華東師範大学 中国民俗保護開発研究センター	2007年8月13日～ 2007年8月26日	電気映像を用いない 情報伝達の方法と効用および 語り芸について
國弘 暁子	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2007年10月1日～ 2007年10月15日	インド、グジャラート州から カナダへの人の移動と、移住者 の生活空間に関する調査研究
王 京	中山大學 中国非物質文化遺産研究センター	2007年11月5日～ 2007年11月18日	戦前広州における民俗学活動

Ⅲ 各拠点充実事業

拠点の中核である歴史民俗資料学研究科は、歴史学、民俗学の分野で新しい知見を開きうる研究能力を持つと同時に、文書資料・民俗資料、なかんずく非文字資料の扱いにも習熟した人材の育成に努めてきた。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、膨大で多様な非文字資料の中から、図像、身体技法、環境・景観を選んで研究の対象としたが、こうした非文字資料を取り扱ってきたのは、主に博物館などの学芸員である。そのため、本プログラムの研究課題にも、当初から、これまで経験に頼って調査研究に従事してきた学芸員に対して、非文字資料に関する理論や方法を体系的に学ぶ学芸員の育成を謳ってきた。

そうした課題に取り組むため、歴史民俗資料学研究科では、本COEプログラムに関連して、2004年度より大幅なカリキュラムの改定を行った。それまでの文献史料学と民俗民具資料学の2科目群に加えて、新たに博物館資料学を開設すると共に、ネイティブスピーカーによる講義（英語、中国語、日本語〈外国人留学生対象〉）及び実習科目（博物館実習、民俗民具調査実習等）の整備、向上を図り、将来を見据えた世界に通用する若手研究者の育成に努めた。

新設の博物館資料学関係の講義科目は、本COEプログラムで採用したCOE教員（特任教授）1名が博物館資料学特論を、また、COE教員（非常勤講師）3名が博物館情報資料学特論、博物館展示資

料学特論、博物館図像資料学特論をそれぞれ担当した。

そのほか、若手研究者育成事業の一環として、年間一定額の予算を各研究科に出して教育研究の向上を支援した。歴史民俗資料学研究科では、2004年度に修士論文集『対話する歴史と民俗—歴史民俗資料学のエチュード—』を刊行した。

また、2005年度からは、「歴史民俗資料学叢書」と銘打って、学位取得者の博士論文を毎年1冊ずつ著書として公刊することになった。2005年度には、歴史民俗資料学叢書1『室町幕府足利義教「御前沙汰」の研究』（鈴木江津子著）、2006年度には、同叢書2『財界人の戦争認識—村田省蔵の大東亜戦争—』（半澤健市著）、2007年度には、同叢書3『1930、40年代の日本民俗学と中国』（王京著）をそれぞれ刊行した。

この間、拠点である歴史民俗資料学研究科と中国言語文化専攻の課程博士修了者の進路状況では、歴史民俗資料学研究科修了者2名が私立大学の助教授、公立短期大学の専任講師として採用され、中国言語文化専攻の修了者1名も本学の専任講師として教育研究にあたっている。

なお、本プログラムの拠点として、PD・RAの採用者と非採用者との間に研究条件で多少の格差が生まれる結果となったことは、今後の反省点としなければならない。



歴史民俗資料学研究科 講義風景



歴史民俗資料学研究科 刊行物

2 国際交流事業

本プログラムでは、非文字資料に関わる学術情報の交換と若手研究者の派遣・招聘を目的として、海外の研究機関との交流・提携事業を進めた。さらに、プログラムの研究事業を世界水準のものにするため、国際シンポジウムを開催して共同研究の成果を国内外の研究者に問いかけた。

I 海外提携研究機関との研究交流

本プログラム事業推進中、海外研究機関との学術交流や若手研究者の交流は、研究者間の研究発表、派遣研究員・訪問研究員の交流、国際シンポジウムへの代表者招待などといった形で行われた。その海外提携研究機関は、4か国8機関であり、それらの機関の内容を機関別に紹介する。

(1) 華東師範大学 (中国)

上海市にある総合大学であり、1951年に上海市内のいくつかの大学が合併して創立された。多くの学部を擁しているが、そのなかで近年発展がめざましいのが対外漢語学院である。そのなかに設置されている大学院は、博士課程まであり、幅広く中国文化の研究を進めており、中国各地から進学してくる。特に、民俗学界に影響のある中国民俗保護開発研究センターは、多くの民俗学研究者を養成している。

研究センターは世界各地での学術活動、学術協力を進めているが、日本研究者との交流も盛んに行われている。神奈川大学21世紀COEプログラムが提携したのはこの研究所である。

(2) 北京師範大学 (中国)

北京市にある総合大学である。特に、中文系は中

心的な存在であり、中国民俗学の開拓者鐘敬文教授や書家で日本でも有名な啓功教授など多くの優れた教授を擁し、活発に学術研究を展開してきた。

2002年以降、民俗学はいくつかの専門研究組織に分かれて活動を展開しているが、神奈川大学21世紀COEプログラムが提携したのは、民俗学与文化人類学研究所である。民俗学を中心としたフィールドワークを行い、大きな成果をあげており、研究メンバーの近年の成果としては詳細な民俗誌である『中国民俗文化誌』の北京編を地区毎にまとめて刊行している。

(3) 浙江工商大学 (中国)

1911年、杭州中等商業学堂として設立され、1980年には大学に昇格し浙江商学院となった。さらに2004年に浙江工商大学と改名し、経営経済を中心とする総合大学になった。本学COEと研究交流を行っているのは、日本文化研究所である。

もともと同研究所は浙江大学に付置されていたが、工商大学が総合大学になったのを機に、研究所とそれに属するほとんどのメンバーが移籍し、中国江南地域の日本研究の中心として現在に至っている。近年は、日本古典文化から現代のポップカルチャーに及ぶ、ユニークな研究者が育ってきている。

(4) 中山大学 (中国)

広東省広州市にある歴史のある総合大学である。1924年に孫文によって創立された。中文系は重要な位置を占める学部であり、古い歴史を持つが、近年は中文系を基礎に設置された中国非物質文化遺産研究センターの活動が注目されている。

これは、日本の21世紀COEプログラムに相当

する中国政府教育部人文社会科学重点研究基地であり、国からの補助金によって大規模な調査研究を展開している。研究活動の柱は、伝統戯曲の調査、口頭文芸と民俗の調査研究、それに非物質文化遺産保護対策の三つである。本プログラムとの提携は2005年からであるが、相互訪問は頻繁に行われ、中山大学開催のシンポジウムにも参加している。

(5) 香港大学 (中国)

香港大学は、1877年に創立された香港医科大学を前身とする香港でもっとも歴史の古い大学である。現在は、医学部、工学部のほか、文学部、教育学部、人文学部、社会学部など文化系の学部を有する香港を代表する大学である。

なかでも、香港大学のアジア研究 (Centre of Asian Studies, 亜洲研究中心) と日本研究 (Faculty Arts, Japanese Studies) の研究が高いことに定評があり、神奈川大学21世紀COEプログラムとは、COE研究拠点の一つである大学院中国言語文化専攻の紹介でこれらの学部や研究機関と提携関係を結び、活発な研究者の交流とシンポジウムへの参加などを実現している。

(6) 延世大学校 (韓国)

延世大学校は朝鮮時代末期の1885年に設立されたセブランス医学専門学校を前身とするが、1970年代以降は文化系に関連する支援を大幅に拡大している。同大学付設の中央博物館は1928年に開館し、韓国の大学付設の博物館の嚆矢といわれ、特に、韓国の伝統文化に関連する文化資源の収集と研究には定評がある。

また、近年は韓国の儒教と朝鮮時代の古典研究をリードする「国学研究院」の活動が注目を集めている。神奈川大学21世紀COEプログラムは、延世大学校の中央博物館と「国学研究院」、そして、人文学部と活発な情報交換と人的交流を行っている。

(7) ブリティッシュコロンビア大学 (カナダ)

カナダ太平洋岸の中心都市バンクーバーにある総合大学である。1961年に設立されたアジア研究学

部はカナダのみならず、北アメリカにおけるアジア研究をリードする存在である。

また、この学部の研究を支えるアジア研究所は1978年に設立され、現在は日本研究センター、中国研究センター、韓国研究センターなど5つのセンターを持ち、日本はもちろんのこと、アジア各地域での歴史、文学、社会、言語を専攻する研究者を擁している。特に、日本については、日本古典文学と日本文化に関する研究者が揃っており、北米における日本文化研究の中心的存在となるべき条件が整っている。

(8) サンパウロ大学 (ブラジル)

サンパウロ大学日本文化研究所は、広大なサンパウロ大学の構内の一角にある。同大学には文化人類学のレヴィストロースも席を置いたことがあり、人類文化の研究には長い伝統を持ち、民俗博物館もある。

研究所は、鈴木梯一、前川隆らブラジルにおける日本学の草創期の研究者によって創立された。現在、所長以下教授、助教授7名と職員数名で構成され、サンパウロ州のみならず、ブラジルにおける日本文化研究のセンターとなっている。従来、日本語、日本文学の研究が中心であったが、近年、文化人類学のスタッフを加え、日本文化全体に研究対象を広げつつある。

II 若手研究者招聘事業

PD・RAの海外提携研究機関への派遣については既述した通りであるが、海外提携研究機関の若手研究者を招いて共同研究を推進する訪問研究員制度についても、期待以上の経過が得られた。21世紀COEプログラムにおける非文字資料の研究成果は輸出可能なモデルであり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する有効な方法であった。

大学院歴史民俗資料学研究科では、すでにフランス・中国・韓国・コンゴ・オーストラリアなどからの後期課程留学生、さらに日本常民文化研究所では

アメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れ、国際的な交流と研究上の協力関係に大きな成果をあげているが、訪問研究員の受け入れはそれを一層発展させることになった。本プログラム推進期間中、中国17名、韓国1名、ブラジル4名、カナダ2名など合計24名の若手研究者を受け入れた。

招聘は2週間程度と短期であるが、それによって、派遣研究員と同様、将来、国際的に活躍できるような研究者に育てていくための基礎が作られることを期待している。24名の訪問研究員は、いずれも日本の非文字資料研究を課題とする若手研究者たちであり、日本で収集した資料や文献を基礎に博士論文を完成させた者もいる。



訪問研究員との交流会

2004年度～2007年度 海外提携研究機関からの訪問研究員一覧

2004年度

氏名	所属研究機関等	受け入れ期間	指導教員 (チューター)	研究課題
JIANG JING 江 静	浙江大学日本文化研究所 専任講師 浙江大学人文学院 中国古代史専攻院生	2004年11月29日～ 2004年12月12日	三鬼清一郎 (網野暁)	日中交流史
HAN TONGCHUN 韓 同春	北京師範大学民俗学与 文化人類学研究所 北京師範大学大学院 民俗学専攻院生	2004年12月1日～ 2004年12月14日	福田アジオ (彭偉文)	民俗学
YOON HYUNJIN 尹 賢鎮	延世大学校 中央博物館学芸員 高麗大学校ビジュアル カルチャー専攻院生	2004年12月6日～ 2004年12月19日	中島三千男 (金花子)	韓国近現代美術史
MAO QIAOHUI 毛 巧暉	華東師範大学中国民俗 保護開発研究センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻院生 山西師範大学助手	2004年12月12日～ 2004年12月25日	佐野 賢治 (ムカイダイス)	女性民俗
CHAMAS FERNANDO CARLOS	サンパウロ大学 日本文化研究所 サンパウロ大学 日本文化専攻院生	2005年1月28日～ 2005年2月11日	橘川俊忠 (永井美穂)	日本文化

2005年度

YUE YONGYI 岳 永逸	北京師範大学民俗学与 文化人類学研究所教員	2005年7月15日～ 2005年7月28日	山口建治 (宮本大輔)	都市民俗学 民間信仰
YIN XIAOFEI 尹 笑非	華東師範大学中国民俗 保護開発センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻院生	2005年9月17日～ 2005年9月30日	廣田律子 (川島純枝)	民俗学
WANG XIN 王 欣	浙江大学客員研究員 浙江工商大学教員(助手)	2005年11月8日～ 2005年11月21日	中村政則 (丸山泰明)	教科書における 中国関係の挿絵
KAUPATEZ DIOGO	サンパウロ大学 日本文化研究所 サンパウロ大学 日本文化専攻院生	2005年11月13日～ 2005年11月29日	田上 繁 (土田拓)	北斎・北斎漫画・ 浮世絵
CHAN WINGYAN 陳 穎恩	香港大学日本文化研究学系 香港大学大学院 現代日本経済史専攻院生	2005年12月5日～ 2005年12月18日	田島佳也 (藤永豪)	日本の都市計画、 経済環境、 市民生活
SONG JUNHUA 宋 俊華	中山大学 中国非物質文化遺産 研究センター助教授	2006年2月22日～ 2006年3月7日	鈴木陽一 (王京)	非物質文化遺産

2006年度

DAI LAN 戴 嵐	華東師範大学 中国民俗保護開発 研究センター 華東師範大学大学院 民俗学専攻博士生	2006年7月6日～ 2006年7月19日	中村ひろ子 (彭偉文)	日本の童話に 登場する少女 の挿絵
CAO RONG 曹 栄	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学 研究所博士生	2006年9月2日～ 2006年9月15日	佐野 賢治 (劉 湯水)	鎖国政策下の 日本天主教或い は基督教信仰
WONG CHIHANG 王 志恒	香港大学 日本ドラマ専攻修士生・ RA 研究員	2006年10月7日～ 2006年10月20日	孫安石 (武吉彩華・ 康正梅)	日本のTVドラマ の制作と視聴者 動向
LIU XIAOCHUN 劉 曉春	中山大學 中国非物質文化遺産 研究センター助教授	2006年10月2日～ 2006年10月15日	香月洋一郎 (宮本大輔・ 彭偉文)	人類文化研究非文 字資料体系化及び 民俗学相關研究・ 資料調査学術研究
WA YUHUA 吳 毓華	浙江工商大学 日本語文化学院教員 (助手)	2006年10月1日～ 2006年10月14日	鈴木陽一 (丸山泰明)	『清末民初報刊図 画集成』におけ る日本像
KARASAWA DANIELA 唐沢 ダニエラ	サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・ 日本文化修士課程	2006年12月2日～ 2006年12月18日	的場昭弘 (國弘暁子)	ブラジルにおける 日本マンガのロー カル化プロセスに 関する研究
BENESCH OLEG	ブリティッシュ コロンビア大学 アジア研究専攻博士課程	2006年11月21日～ 2006年12月4日	橘川俊忠 (丸山泰明・ 本田佳奈)	1895年～1945年 におけるの武士道 精神の発達につい て

2007年度

NISHIMURA MASHIBA 西村 真志葉	北京師範大学 ポストドクター	2007年7月25日～ 2007年8月7日	中村ひろ子 (土田拓)	公私研究機関にお ける非文字文化再 構成の実践につい ての調査研究
YI XIAOLONG 衣 曉龍	華東師範大学 中国民俗保護 開発センター博士生	2007年7月26日～ 2007年8月8日	田上 繁 (彭偉文)	浮世絵の中の 日本らしさ
JIANG MINGZHI 蔣 明智	中山大學 中国非物質文化遺産 研究センター副教授	2007年10月1日～ 2007年10月14日	山口 建治 (王京)	中日龍母伝説と 信仰の比較研究
GLAUJOR CARLOS	サンパウロ大学大学院 日本語・日本文学・ 日本文化修士課程	2007年10月1日～ 2007年10月17日	孫安石 (ムンシ・ ロジェ・ ヴァンジラ)	民族性—沖縄から ブラジルに渡った 人と文化
XU HAIHUA 許 海華	浙江工商大学 日本語文化学院教員	2007年10月10日～ 2007年10月23日	河野通明 (小野地健)	画像資料に見ら れる明代中国人 の日本認識
PETRUCCI MARIA GRAZIA	ブリティッシュコロンビア 大学 大学院博士課程	2007年10月28日～ 2007年11月11日	田島佳也 (佐々木弘美)	日本の海賊とポル トガル商人の経済 的・宗教的關係に ついて

Ⅲ 国際シンポジウム

プログラムの研究事業を世界的水準のものにするため、国際シンポジウムを開催して共同研究の成果を国内外の研究者に問いかけた。

プログラム事業3年目となる2005年度には、第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」を開催した。人間諸活動とその結果生み出されるものは、文字に記録されたものにとどまらず、音声・図像・写真・映像の形で記録され、道具・建築物のように造形化され、匂い・味覚など人間の感性や身振りは身体に刻まれ、自然と人間の交渉史は土地景観として表れる。そこで、非文字資料のうち写真・版画・身体技法・民具に焦点をあて、「非文字資料とはなにか」という命題を深化させると共に、それらの非文字資料を体系化する方法を模索することをテーマに掲げた。特に、国内外で非文字資料に関わるさまざまな分野で先駆的な研究を行っている研究者を招いて報告していただき、今後、本プログラム研究を進めていく上での指針とした。

翌2006年度に開催した第2回国際シンポジウム「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」では、過去3年間の調査研究を基礎に、その共同研究の成果を世に問うことを課題とした。シンポジウムは、4つのセッションに分け、非文字資料をめぐる方法論について問題提起を行い、それを受けて、それぞれ図像、民具、景観に焦点をあて、そこから読み取れるものが何か明らかにし、それらの報告や討論を踏まえて、非文字資料を統合・体系化する方法を模索した。

最終年度の2007年度には、第3回国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」を開催した。このシンポジウムでは、これまで取り組んできた非文字資料のなかから、特に地域研究と身体技法に関わる成果を、新たに開発したシステムにより情報発信することを試みた。1日目の報告内容は、地域という「場」に人類活動の記憶を見出すための情報発信であり、2日目の報告内容は、身体技法という人間の「からだ」に刻印された

人類文化の記憶を読み取るための情報発信である。

なお、最終となるこのシンポジウムでは、報告終了後、総合討論の時間を設けて、本プログラムの総括を行った。

3回開催した国際シンポジウムのすべてに、海外提携研究機関の代表者を招待し、学術的ならびに人的な国際的交流関係を深めた。また、どの国際シンポジウムにおいても、本プログラムの研究内容について、国内外の研究者から貴重な批判と提言をいただき、大きな成果をあげることができた。



第1回 国際シンポジウム ポスター



第3回 国際シンポジウム 総合討論

3 情報発信

本プログラムでは、6班・8課題から構成される研究プロジェクトの研究成果を世に問うため、印刷刊行物、データベースの形で公刊ないしはインターネット上で発信した。また、ホームページを開設して事業の経過や成果を逐次紹介した。

I 印刷刊行物

本プログラムの調査研究の進捗状況やその成果は、ニューズレター『非文字資料研究』や『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』をはじめとする各種刊行物によって公表している。

年4回刊行のニューズレターは、共同研究の進捗状況のほか、研究エッセイや、調査報告を盛り込んでおり、最終的には19号まで発行された。また、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』は、1年間の研究成果を公表する媒体として毎年1冊刊行した。論文、研究ノート、調査報告を掲載したもので、全4巻が刊行された。さらに、研究班の調査研究資料として、資料集4冊を随時公刊した。

そのほか、シンポジウム、公開研究会などの記録を報告書の形で刊行している。3回開催した国際シンポジウムの記録は、第1回の『非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録—』（2006年6月刊行）と、第2回の『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』（2007年3月刊行）までが刊行された。加えて、第1回国際シンポジウムのプレシンポジウム（2006年3月刊行）、第1班の公開研究会（2006年6月刊行）、立命館大学のCOEプログラムとの共催で実施したワークショップ（2007年2月刊行）などの記録を報告書にまとめて発行した。

5年目の2007年度には、研究成果報告書として本プログラムの各班・各課題の研究成果をまとめて刊行した。その第一陣が2007年3月に刊行したマルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻である。そのあと、同書を含め、2008年3月までに、同本文編及び語彙編各2冊、『日本近世・近代生活絵引』北海道編、北陸編、東海道編の3冊、『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編2冊、さらに各班の課題の成果報告書『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』、『「景観」と「環境」についての覚書』、『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』、『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』、『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言—』、『実験展示「あるく—身体の記憶」をつくる』、『非文字資料研究の理論的諸問題』の8冊、また、論文集として『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』、『非文字資料の可能性—若手研究者研究成果論文集—』の2冊、さらに、調査研究資料として『「澁澤写真」に見る1935—1936年の喜界島』1冊、そのほか研究成果の全体をまとめるものとして『非文字資料研究の展開と成果』1冊の合計19冊を編集、刊行した。

II ホームページ

本プログラムの研究成果については、刊行物で公表するとともに、現在開設中のホームページ (<http://www.himoji.jp>) にも順次掲載して広く公開している。

5年間の事業推進期間中、3度のリニューアルを行い、最新のホームページでは、最終成果である刊

行物19冊、およびデータベース8件を新たに加えるなど全面的な更新を行った。新ホームページの大項目は、「プログラム概要」、「研究班・課題の成果」、「研究者・研究成果」、「データベース」、「刊行物」、「全体研究活動報告」、「事業推進組織」、「若手研究

者の育成」、「海外研究機関との連携」、それに「リンク集」、「サイトマップ」から構成される。

特に、「研究班・課題の成果」を情報発信することに力点を置き、5年間にわたる各班・各課題ごとの共同研究の経過と成果を詳しくまとめている。つまり、第1班「図像資料の体系化と情報発信」の課題1「マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂」、課題2「『日本近世・近代生活絵引』の編纂」、課題3「『東アジア生活絵引』の編纂」、第2班「身体技法および感性の資料化と体系化」の課題1「身体技法の比較研究」、課題2「用具と人間の動作の関係の分析」、第3班「環境と景観の資料化と体系化」の課題1「景観の時系列的な研究」、課題2「環境認識とその変遷の研究」、課題3「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」、第4班「地域統合情報発信」、第5班「実験展示」、第6班「理論総括研究」という全部で6班・8課題について総括を行った。なお、第5班「実験展示」に関しては、課題として分けてはいないが、「実験展示」と「高度専門職学芸員の養成」の2つのテーマについて、その経過と成果を別々に記述している。

大きな成果をあげて2008年3月31日に終了した本プログラムの研究拠点は、同年4月1日から、本プログラムの拠点の一つである日本常民文化研究所に「非文字資料研究センター」として付置され、継続されることになる。これらの研究成果のホームページによる公開は、引き続きこれまで通り行われる。また、ホームページで公開されない資料については、後継組織の「非文字資料研究センター」に移管され、学術利用に供される。



21世紀COEプログラム ホームページ

Ⅲ データベース

本プログラムにおいては、各班・各課題の研究成果の情報発信を最重要課題の一つと位置づけ、刊行物と共にデータベースによっても発信することとした。事業推進中、データベースは、最終成果の8件を加え、全部で10件のデータベースを作成し、ホームページ上で公開している。対象とするデータにより、発信のスタイルはデータに相応しい形をとる



「海外神社」跡地に関するデータベース

が、大きく分類すると次のようになる。

まず、本プログラムで重点課題と位置づけた研究成果である「生活絵引」、すなわち、描かれた生活の細部に関する情報辞典ともいべき性格をもつものとして、「朝鮮風俗画絵引データベース」、および『『東海道名所図会』絵引データベース』の2件がある。また、福島県只見町の現在版生活絵引ともいべき『神奈川大学COE 只見町インターネット・エコミュージアム』、さらには、日本侵略時代の海

外の過去と現在を対照させつつ、写真調査資料をデータ化した『『海外神社』跡地に関するデータベース』、『租界とアジアデータベース』の2件、関東大震災の写真絵葉書から震災像を捉える試みの『関東大震災・地図と写真のデータベース』、それにオーソドックスで基本的な検索機能を生かした文献書誌データの検索を目的とした『図像文献書誌情報データベース』および『図像研究文献目録データベース』の8件がある。



『東海道名所図会』絵引データベース

第 3 部 資 料

1 年表

2002年度(平成14年度)

2002年	
10月23日	歴史民俗資料学研究科では21世紀COEプログラムを申請することとして、平成15年度「21世紀COEプログラム」検討委員会委員に福田アジオ研究科委員長のほか、橘川俊忠教授、中島三千男教授の2名を選出
12月25日	歴史民俗資料学研究科委員会において平成15年度「21世紀COEプログラム」の申請原案が承認される
2003年	
1月29日	平成15年度「21世紀COEプログラム」検討委員会委員に香月洋一郎教授、佐野賢治教授、田上繁教授の3名を加え、6名からなる検討委員会において最終申請案を取りまとめることとなった
1月29日	平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の公募について(通知)14文科第714号
2月19日	歴史民俗資料学研究科委員会において平成15年度「21世紀COEプログラム」の申請案が承認される
3月6日	第9回神奈川大学大学院委員会において平成15年度「21世紀COEプログラム」の申請案が承認される
3月7日	平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の申請 神大横発670号

2003年度(平成15年度)

2003年	
5月23日	平成15年度「21世紀COEプログラム」ヒアリング実施の案内(21世紀COEプログラム委員会委員長名)
5月28日	平成15年度「21世紀COEプログラム」ヒアリング実施拠点の拠点形成概要提出(21世紀COEプログラム委員会宛)
6月3日	「21世紀COEプログラム」ヒアリング実施(於 東京ダイヤモンドホテル)出席者 学長 山火正則、拠点リーダー 福田アジオ、サブリーダー 川田順造、事業推進担当者 橘川俊忠
7月17日	「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が平成15年度「21世紀COEプログラム」委員会において採択される
7月18日	拠点リーダーより学長宛に拠点形成にかかわる施設・人員の確保についての願い及び関係者の負担の軽減についての願いが提出される
7月28日	第1回COE全体会議開催
7月29日	日本学術振興会特別研究員(平成15年度「21世紀COEプログラム」採択拠点分)の推薦について(依頼)学振養第10号
8月11日	平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について(回答) 神大横発346号
8月11日	平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る拠点形成計画調書(修正変更版)の提出について(回答) 神大横発第347号
8月18日	第1回研究推進会議開催
8月20日	日本学術振興会特別研究員(平成15年度「21世紀COEプログラム」採択拠点分)の候補に高野宏康(歴史民俗資料学研究科博士後期課程)を推薦
9月1日	第2回COE全体会議開催
9月3日	平成15年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付決定について(通知)15文科高第365号 平成15年度補助金交付決定額61,000千円
9月8日	COE研究員(PD・RA)募集開始
9月19日	平成15年度日本学術振興会特別研究員(21COE)採用内定(高野宏康)について(通知) 学振養第189号
10月22日	平成15年度日本学術振興会特別研究員(21COE)採用(高野宏康)について(通知) 学振養第235号
10月24日	平成15年「21世紀COEプログラム」拠点形成計画調書(修正変更版)の提出について(21世紀COEプログラム委員会委員長名) 学振事第10号
10月31日	平成15年度採択分:「21世紀COEプログラム採択拠点の事業概要」について事務連絡(文部科学省高等教育局)
11月20日	平成15年度採択分:「21世紀COEプログラム採択拠点の事業概要」提出
2004年	
2月21日	外部評価実施:八重樫純樹委員(静岡大学情報学部教授)、常光徹委員(国立歴史民俗博物館助教授)
2月25日	平成16年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付内定について 16文科高第796号 平成16年度補助金交付内定額75,000千円

3月12日	平成16年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について(回答) 神大横発第716号
-------	---

2004年度(平成16年度)

2004年	
4月 1日	COE教員として特任教授1名、非常勤講師2名を委嘱する
4月 1日	平成16年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付決定について(通知) 16文科高第32号 平成16年度補助金交付決定額75,000千円
4月23日	平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の実績報告書提出
9月 3日	①香港大学日本文化研究学系と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結 ②浙江大学日本文化研究所と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結 ※提携期間:平成16年9月3日～平成18年3月31日
9月14日	北京師範大学民俗学与文化人類学研究所と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
9月20日	華東師範大学中国民俗保護開発研究センターと「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
9月23日	サンパウロ大学日本文化研究所と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
9月24日	延世大学校中央博物館と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
10月 8日	ブリティッシュコロンビア大学アジア学科と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
12月10日	「21世紀COEプログラム」平成15年度採択の研究教育拠点の中間評価の実施について(通知) 16文科高第657号
2005年	
1月25日	21世紀COEプログラム(平成15年度採択)中間評価関係書類の提出について
2月14日	外部評価実施:黒田日出男委員(立正大学文学部教授)、八重樫純樹委員(静岡大学情報学部教授)、常光徹委員(国立歴史民俗博物館助教授)
2月25日	平成17年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付内定について(通知) 16文科高第914号平成17年度補助金交付内定額95,000千円
3月11日	平成17年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について 神大横発646号
3月15日	「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)研究教育拠点に係る「中間評価ヒアリングの実施」及び「各関係調書等の提出について(通知) 21世紀COEプログラム委員会

2005年度(平成17年度)

2005年	
4月 1日	平成17年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付決定について(通知) 17文科高第21号平成17年度補助金交付決定額95,000千円
4月21日	中間評価ヒアリング各種調書等の事前提出資料の提出について(日本学術振興会への提出)
4月25日	平成16年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の実績報告書提出
5月10日	中間評価ヒアリング実施(於 日本学術振興会) 出席者 拠点リーダー 福田アジオ、サブリーダー 川田順造、事業推進担当者 中島三千男、事業推進担当者 橘川俊忠
6月 9日	21世紀COEプログラム(平成15年度採択拠点)中間評価における現地調査の実施日時について(事務連絡) 日本学術振興会
7月26日	21世紀COEプログラム(平成15年度採択拠点)中間評価における現地調査(於 神奈川大学)
8月 7日	中山大學中国非物質文化遺産研究中心と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結
10月 6日	「21世紀COEプログラム」平成15年度採択拠点の中間評価結果の公表について(21世紀COEプログラム委員会)

10月12日	「21世紀COEプログラム」平成15年度採択拠点の中間評価結果について 学振事第89号
11月18日 ～30日	『名所江戸百景』企画展示
11月20日	国際シンポジウム プレシンポジウム 「版画と写真—19世紀後半出来事とイメージの創出—」開催
11月26日 ～27日	第1回国際シンポジウム 「非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録」開催
12月 8日	日本学術振興会特別研究員(21世紀COEプログラム採択拠点分)の補充採用について(通知)
12月16日	「21世紀COEプログラム」に関するアンケートについて(お願い) 文部科学省高等教育局大学振興課
12月22日	「21世紀COEプログラム」に関するアンケート(依頼)21世紀COEプログラム委員会
2006年	
1月13日	「21世紀COEプログラム」に関するアンケートについて(回答) 文部科学省高等教育局大学振興課宛 神大横発500号
1月23日	「21世紀COEプログラム」に関するアンケートについて(回答) 日本学術振興会宛
1月30日	日本学術振興会特別研究員に宮本大輔(外国語研究科中国言語文化専攻博士後期課程)を推薦
2月13日	外部評価実施:黒田日出男委員(立正大学文学部教授)、鈴木正崇委員(慶應義塾大学文学部教授)
2月17日	外部評価実施:八重樫純樹委員(静岡大学情報学部教授)
3月 3日	平成18年度「21世紀COEプログラム」(研究拠点形成費等補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付内定について(通知) 17文科高第796号 平成17年度補助金交付内定額95,150千円(うち直接経費86,500千円、うち間接経費8,650千円)
3月 7日	平成18年度日本学術振興会特別研究員(21COE)採用内定(宮本大輔)について(通知) 学振養第274号
3月17日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について 神大横発第624号
3月17日	「21世紀COEプログラム」(平成15年度)中間評価結果に基づく調書の提出について 日本学術振興会宛
3月28日	浙江工商大学日本文化研究所と「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流についての覚書締結

2006年度(平成18年度)

2006年	
4月 1日	COE教員として非常勤講師1名を追加委嘱する
4月 3日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付決定について(通知) 18文科高第27号 平成18年度補助金交付決定額95,150千円(うち直接経費86,500千円、うち間接経費8,650千円)
4月25日	平成17年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の実績報告書提出
4月27日	平成18年度日本学術振興会特別研究員(21COE)採用(宮本大輔)について(通知) 学振養第17号
6月 5日	「21世紀COEプログラム」(中間評価後修正変更版)についてのコメント 学振事第36号の1
8月26日 ～27日	立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム ジョイントワークショップ 「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」開催
10月 2日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の追加配分について(文部科学省高等教育局大学振興課 事務連絡)
10月13日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る「21世紀COEプログラム追加配分」要望額等の申請書類の提出について
10月28日 ～29日	第2回国際シンポジウム 「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」開催
11月17日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について 神大横発第480号
11月17日	平成18年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)に係る交付決定変更通知書18文科高第482号 補助金の交付変更決定額97,834千円(今回増額分2,684千円)
2007年	
1月29日	21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点に対するフォローアップ(書面調査)の実施について(通知) 学振事第125号
2月 8日	21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点に対するフォローアップ(書面調査)の回答書提出 日本学術振興会宛
2月13日	外部評価実施:保立道久委員(東京大学史料編纂所教授)、鈴木正崇委員(慶應義塾大学文学部教授)、水嶋英治委員(常盤大学コミュニティ振興学部教授)

2月16日	平成19年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費等補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)の交付内定について(通知) 18文科高第622号 平成19年度補助金交付内定額95,700千円(うち直接経費87,000千円、うち間接経費8,700千円)
3月7日	平成19年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)に係る交付申請書等の提出について 神大横発第638号

2007年度(平成19年度)

2007年	
4月2日	平成18年度研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費・平成15年度採択分)に係る交付決定変更通知書19文科高第37号 補助金の交付決定額 95,700千円
4月25日	平成18年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)の実績報告書提出
5月1日	「神奈川大学21世紀COEプログラムと只見町の学術交流に関する覚書」締結
5月15日	21世紀COEプログラム(平成15年度採択拠点)フォローアップ(書面調査)回答書に対するコメントについて(回答) 学振事第14号
11月1日 ～30日	実験展示「あるくー身体の記憶ー」開催
2008年	
1月26日	若手研究者ワークショップ「手段としての『非文字』ー資料と方法のあいだー」開催
2月23日 ～24日	第3回国際シンポジウム「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」開催
2月25日 ～26日	外部評価実施:保立道久委員(東京大学史料編纂所教授)、井上順孝委員(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所教授)、水嶋英治委員(常磐大学コミュニティ振興学部教授)
3月5日	「21世紀COEプログラム」平成15年度採択の研究拠点事後評価の実施について(通知)19文科高第785号

2 申請書・中間評価・外部評価

I 申請書・採択通知書

申請書

様式 1

平成 15 年度

21 世紀 COE プログラム 将来構想等調査

機関番号

3 2 7 0 2

1. 申請者 (学長)	(大学名) 神奈川大学 (ふりがな<ローマ字>) Yamabi, Masanori (氏名) 山火 正則
2. 大学の将来構想 (① これまで大学が取り組んできた研究教育計画に触れながら、今回の申請拠点に関連する計画を中心に、大学全体の将来構想を具体的に記入してください。)	
<p>神奈川大学は、1928 年に「質実剛健・積極進取」を建学の精神として横浜学院として創立された。1949 年に新制大学として再出発し、現在、横浜・平塚の両キャンパスに 6 学部、7 大学院研究科を設置している。1991 年には、この建学の精神を具現化する教学の基本理念を、「新しい国際化と情報化の時代において、語るべきテーマを持ち、語りうる自己表現能力をそなえ、各学部・学科で履修する専門的学芸によって自分自身の現在と未来を築きつつ、ひろく人類と国際社会の発展に貢献することのできる創造的な人間を育成する」と定め、1999 年には、21 世紀を見据え総合大学としてさらなる発展をとげるために、教学の基本理念を、【1. 教育と研究の融合】【2. 基礎的学力の充実と専門的学力・技能の養成】【3. 積極的、創造的思考力の涵養とコミュニケーション力の養成】【4. 自立した良識ある市民としての自覚と実践力の確立】を教育目標とすることによって具体化してきた。</p> <p>現在、我が国の高等教育は、いわゆる「ユニバーサル化」の波にさらされ、学部（学士課程）教育と高等学校との接続や導入教育が新たな課題となっている。また競争的環境のもとでの個性ある大学の発展とともに、高度専門職業人の育成機関および国際的競争力のある研究拠点としての大学院の充実が求められている。本学においては、このような社会的動向を背景としながら、本学の教育目標である【教育と研究の融合】を基本として、学部（学士課程）教育については「高等学校から大学教育への転換」を促すカリキュラムの検討、教育方法の改革、神奈川県下高等学校との高大連携プログラムを推進している。大学院については、学部学生の 20～30%の進学を見越した入学定員の確保を行い、【専門的学力・技能の養成】機関としての拡充を図るとともに、法化社会の到来を見越した法科大学院の設置、昼夜開講制大学院における社会人教育を推進し、高度専門化社会における専門的職業人の育成を目指している。</p> <p>また本学の研究については、自然科学系においては、ハイテク・リサーチ・センター、学術フロンティアを拠点とした研究資源の集中化・高度化を図り、人文科学系・社会科学系においては、アジアに焦点を当てた総合的な共同研究（「アジアにおける人権と平和」「環東シナ海伝承文化の総合的研究」）を推進するとともに、附置研究所と中国・韓国の国際交流協定校との共同研究においても成果をあげてきた。</p> <p>とりわけ、故渋沢敬三が創設したアチック・ミュージアムを前身とし、1981 年に本学に招致された日本常民文化研究所は、我が国における民俗研究・民具・漁業史・職人史・技術史・地域研究・保存科学の最先端研究拠点として、注目すべき研究成果をあげている。また日本常民文化研究所を設置母体として 1993 年に設置された大学院歴史民俗資料学研究科は、各時代にわたる文献史学や民俗学・民具学・比較民俗学・文化人類学・建築史学・考古学など、従来は個別に研究されてきた学問分野の緊密な協力の上に立って、各分野の成果を総合する視点から日本社会を究明し、歴史的存在としての日本人ならびに日本社会の特質を捉えなおす総合的な資料学の確立を目指している。研究所及び研究科の研究成果は、『歴史と民俗』（平凡社）『民具マンスリー』『日本常民文化叢書』等にまとめられているとおりであり、日本研究の総合大学院と称するに足るだけの成果を挙げた。また、後継者育成や研究成果の社会的還元においても、全学部生を対象とする学芸員の育成、昼夜開講による社会人教育にとどまらず、地域調査や各種講座等を通じて国民的視野での学問的底辺の拡大に貢献してきた。</p> <p>このたび、21 世紀 COE プログラム拠点として申請する「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、日本常民文化研究所および歴史民俗資料学研究科を基盤として、人類文化の表現形態である<非文字資料>に着目し、その体系的収集・整理・提示に係る方法論の確立、学際的研究をととした新たな研究領域の開拓を目指すものである。古文書・民俗・民具等の資・史料の調査・整理・保存・研究において日本常民文化研究所・歴史民俗資料学研究科が蓄積してきた業績は、学界や社会の要請に応えるに十分であるが、本研究所・研究科が掲げる研究構想は、もとより一大学一研究科によって実現され得るような課題ではなく、全般的な学問の枠組を問い直し、新たな学問分野・方法論を開拓するという、予てよりの学術的使命に応えるものである。また本プログラムには、学内の中国学・経済史学・地理学・建築学・情報学等の多様な領域の研究者の参加を求めるとしてあり、拠点形成を軸として本学が志向してきた研究プロジェクトの共同化・高度化を実現するとともに、若手研究者・大学院生の参画によって多分野にわたる後継者の養成が行われることが期待される。</p>	

(② 世界的な研究教育拠点の形成に際し、どのような点(例えば「個性輝く大学」としての特色の明確化等)に留意し、国際的競争力のある世界最高水準の大学づくりを目指しているか、について記入してください。)

21 世紀初頭の社会的状況は、高度通信社会の到来によって国際的な相互依存関係が強まり、地球環境問題・エネルギー問題・人口問題など地球規模での協調・共生が求められている。このような社会的状況を背景として、知的活動によって社会の発展を支えるべき役割を担う高等教育機関は、政治・経済面はもとより、地球環境問題などの人類的課題への貢献、人間と自然の共存を目指した新たな豊かさを実感できる価値観の創造などの課題に直面している。そのため、大学においては、このような社会の変化、国際的な通用性・共通性の確保に留意しつつ、研究と教育を総合的に推進し、優れた人材を養成する使命があり、研究活動の活性化、それを通じた研究者養成、研究成果をふまえて行われる大学教育が、相互に密接な関連のもとに達成されなければならない。また、大学における研究は、基礎研究から実用志向の研究まで幅広い分野を包含しているが、効率性を追求するあまり大量生産・大量消費・大量廃棄をもたらした 20 世紀型科学技術の負の側面が顕在化しており、今後、自然との持続的な調和を目指す 21 世紀型科学技術とともに、人文・社会科学・自然科学にまたがる成果を結集した幅広い学問の融合が必要となっている。言い換えれば、諸学問の寄せ集めではなく、従来の学問体系にこだわらずに研究領域を対象化し、人間と自然の関係、民族や歴史・文化の多様なあり方に焦点をあてた新たな学問の創造が求められており、そこでは特に人文・社会科学の英知を結集した取り組みが必要とされている。

本 21 世紀 COE プログラム拠点「人類文化研究のための非文字資料の体系化」においては、図像・音声・身体動作・景観に刻印されてきた諸事象等の非文字資料を対象として、人類文化の総体を捉えるための方法論の開発、体系的に収集・整理された資料群の提供、資料に対する適切・鋭敏な感覚を有する専門家の育成が目指されている。人間諸活動を分析対象とする人文・社会諸科学は、従来、文字資料を対象として研究を蓄積してきたが、地球規模での協調・共生、人間と自然の関係、民族や歴史・文化の多様なあり方に焦点をあてた新たな学問の創造が求められている現在、これまでの研究では取上げられることの少なかった非文字資料の体系化は、社会と文化の奥行きを深く理解することを可能にすると同時に、抽象的に語られがちであった異文化理解に具体的な内容を与え、より根底的な国際理解を促進するための基礎的方法を提供するであろう。

しかしながら、非文字資料の研究方法論・資料組織論は、世界的に見ても未だ確立されているとは言い難いのが現状である。本プログラムは、本学日本常民文化研究所・歴史民俗資料学研究科の長年にわたる社会・人文諸科学の学際的研究・調査活動、非文字資料の研究業績、文献史料と民俗民具資料を体系的に扱える人材育成の実績をさらに発展させ、また付属の展示施設である常民参考室、バーチャル地球史博物館の最新技術の結合によって、新たな研究の可能性を実現しようとするものであり、その意味において、本プログラムが当該分野について世界的な研究教育拠点を形成し得ると考えられる特色としては、次の点が挙げられる。

- (1) 普遍的な研究方法論の確立：人類の労働・生活によって刻印された非文字資料の研究方法論を、身体・道具・技術・自然・環境の相互作用といった観点から、人類普遍的な体系性・分析方法をもつものとして確立することにより、根底的な異文化理解、比較文化の基礎を提供する。
- (2) 新たな学問分野の創出：非文字資料の体系化により、資料学に新たな意味を与えるにとどまらず、文化財科学、環境科学、建築史、災害史、情報学の諸分野において、新たな研究視点と研究領域を開拓する。
- (3) 人類遺産の蓄積と文化情報の発信：非文字資料の体系的な記録・収集、データベース化・検索システムの開発により、痕跡の残りにくい人類遺産を新たな意味づけを伴った学術資料として蓄積するとともに、各種媒体による公開を行う。
- (4) 国際的な研究ネットワークの形成：基礎方法論において普遍性を有する非文字資料の研究調査活動は、国際的な研究者の交流を活性化させ、プロジェクトの進行とともに国際的・学際的な研究ネットワーク構築の可能性を有する。
- (5) 若手研究者の養成・高度専門教育の実施：大学院生の COE 研究員への採用、学位取得の推進、研究所特別研究員の研究への参加、外国人研究員の受入れ、大学院学芸員課程の設置、長期研修制度による再教育を計画し、本プログラムをとおして、若手研究者の養成・高度専門教育を実施する。

本学は、6 学部・7 大学院研究科を擁する中堅総合大学として、人文・社会科学、自然科学・工学の各分野において研究と教育の総合的推進を図ってきたが、上記「21 世紀 COE プログラム」の申請は、人類諸活動のあり方を示す非文字資料の研究領域の開拓において極めて大きな意義を有するものであり、今後、関連分野の研究ネットワークを構築するとともに、情報科学との結合を図り、この分野の世界水準の研究教育を推進することにより、国際的水準の実績を有する資料学研究教育拠点（歴史民俗資料学研究科・日本常民文化研究所）のさらなる発展が期待される。

3. 学長を中心としたマネジメント体制

(世界的な研究教育拠点の形成を目指し、学長を中心としたマネジメント体制の下、どのように拠点形成を実現(支援)するのか(例:学内予算措置、研究教育組織の改編、施設・スペースの整備、研究者及び研究支援者の措置等)、また、学長を中心としたマネジメント体制が具体的にどのような役割を發揮していくかについて記入してください。)

本学における研究は、各学部にも所属する教員個人を主体とした研究活動、附置研究所および他大学等研究者との連携による共同研究に大別され、これらの研究成果を通じた大学院における専門教育・若手研究者の育成が図られている。

(1) 予算措置

本学における研究資金は、学部・大学院・研究所の恒常的な基礎的教育・研究予算、各種研究助成制度、および科学研究費補助金等外部の競争的研究資金といったデュアルサポートシステムによって支えられている。その主要なものは次のとおりである。

A 学内研究資金・制度

- ①個人研究費 ②学部・大学院予算 ③研究所予算 ④共同研究奨励制度
⑤学術褒賞制度 ⑥在外研究員制度 ⑦国内研究員制度 ⑧サバティカル制度

B 学外研究資金・制度

- ①文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金 ②私立学校教育研究装置等施設設備費補助
③私立大学等研究設備費等補助金 ④学術研究振興資金 ⑤受託研究 ⑥指定寄付研究 ⑦産官学連携事業

学内予算措置については、学部・大学院・研究所の経常予算(上記A②③)に加え、新たに2003年度より、教育・研究重点予算を学長のもとで編成する方針が確立され、歴史民俗資料学研究所・日本常民文化研究所からも「大学院教育のデジタル化推進事業」「地域研究成果の社会的還元事業」「大型資料購入費」等の予算申請がなされた。21世紀COEプログラムに係る直接経費についても、学長主管の教育・研究重点予算において対応がなされる。

(2) 研究教育組織

本学の研究教育組織は、学長のもとに、学部(評議会—学部長会—学部教授会)・大学院(大学院委員会—大学院研究科委員会)に対応した審議機関が設置されている。学内審査を要する研究支援諸制度については、関連諸規程に基づく順位付けと学長主催の学部長会を中心とした審査委員会によって決定される仕組みとなっている。この度の21世紀COEプログラムについては、大学院・研究所を拠点とすることから、学部長・大学院研究科委員長・研究所長の合同会議における申請趣旨の周知と各組織における検討を経て、最終的には学長主催の大学院委員会において申請を決定した。しかしながら、研究分野の高度化・細分化が進む一方、地球規模の諸課題に対応するためには、学際的な総合化、外部機関・研究者との協同研究の推進、研究資金の積極的導入を図る必要がある。そのために、学長のもとに研究支援組織を再編し、研究支援スタッフの整備・充実、学内外の学術情報の効果的利用を推し進めるための図書館等の情報化の推進といった諸課題があり、現在、教学改革委員会のもとで、「総合学生支援センター」「総合メディアセンター」「研究支援センター」構想の検討が、2004年度からの組織整備に向けて総合的に行われている。本組織発足後、21世紀COEプログラムは、研究支援センターのもとで委員会として位置づけられるであろう。

(3) 施設・スペースの整備

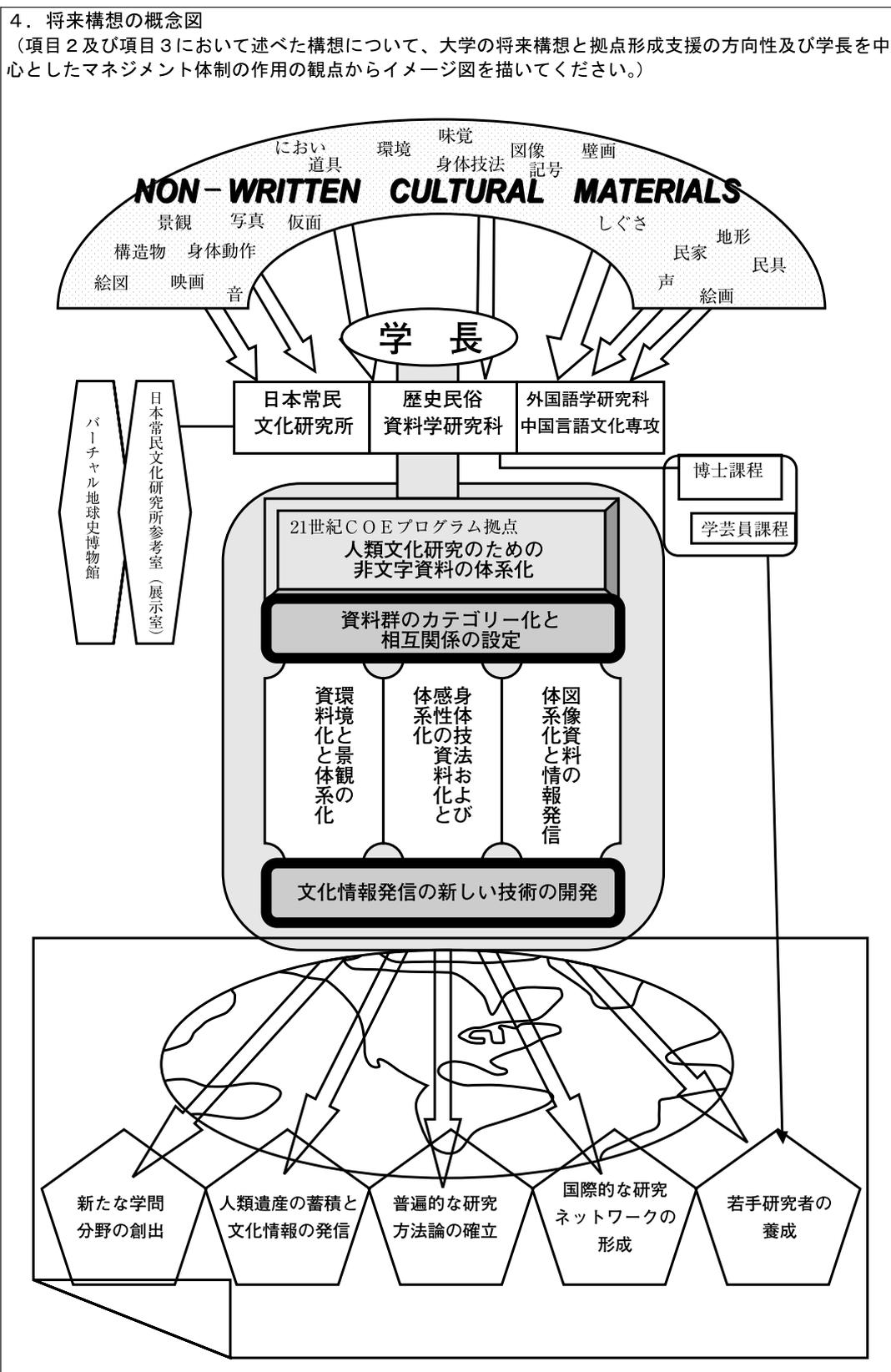
本プログラムの拠点形成に係る専用の施設・設備としては、現在、9号館に日本常民文化研究所(所長室、会議室、事務室、書庫)、歴史民俗資料学研究所(教員・院生研究室、共同研究室、実験・実習室、図書室)、3号館に研究所附属施設(展示室、古文書修復室)が設置されている。現行設備は、研究所所蔵資料、大学院入学定員にほぼ見合ったものであるが、今後の各種受入れ資料の増大、外部研究者の招聘を考慮した施設の拡充、学芸員課程演習室の整備を行う予定である。また、非文字資料のデータベース化に係る機器・施設の整備、日本常民文化研究所展示室の博物館相当施設への拡充を計画する。

(4) 研究者及び研究支援者の措置

本プログラムの研究推進担当者は、歴史民俗資料学研究所(専任)10名、(非常勤)2名、日本常民文化研究所4名、外国語学研究所中国言語文化専攻3名の合計19名で構成する。このほかに研究支援者として、大学院生のCOE研究員への採用、課程修了者・学位取得者の研究所特別研究員への採用を行い、外国人研究員の受入れも予定している。客員研究員として受入れた学芸員などの実務従事者についても現地調査に参加させる。また、本プログラムを支援する組織としては、日本常民文化研究所の専任職員3名が担当するほか、必要に応じて、非文字資料データベース化の支援スタッフ、研究講演会・シンポジウム事務局をアルバイト・委託社員等の形で組織化する予定である。

以上の「予算措置」「研究教育組織」「施設・スペースの整備」「研究者及び研究支援者の措置」は、学長室のもとで当該研究拠点との協議を行いながら起案し、大学院委員会等の学長主催の関連諸会議において決定することとなる。

様式 1



機関名	神奈川県	機関番号	32702	整理番号	J-1	
1. 申請分野 (該当するものに○印)	F<医学系> G<数学、物理学、地球科学> H<機械、土木、建築、その他工学> I<社会科学> J<学際、複合、新領域>					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	人類文化研究のための非文字資料の体系化 Systematization of Unwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies					
研究分野及びキーワード	<研究分野:情報>(社会情報システム) (歴史情報システム) (社会の防災力) (身体運動文化論) (地域間比較研究)					
3. 専攻等名	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻、日本常民文化研究所、外国語学研究科中国言語文化専攻					
4. 事業推進担当者	計 20 名					
ふりがなくローマ字 氏名(年齢)	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学位	役割分担(初年度の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー)						
FUKUTA AJIO 福田 アジオ (62)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	民俗学 文学修士	総括及び『日本常民生活絵引』のマルチ言語版制作基準の策定			
KAWADA JUNZO 川田 順造 (68)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	文化人類学 民族学博士	身体技法の比較研究法の開発			
NAKAMURA MASANORI 中村 政則 (67)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	現代史 経済学博士	欧米における日本研究への資料提供 方法の検討			
MIKI SEIICHIROU 三鬼 清一郎 (67)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	日本近世史 文学修士	日本の資料伝存形態の調査研究			
NISHI KAZUO 西 和夫 (64)	日本常民文化研究所・教授	日本建築史 工学博士	日本近世・近代図像資料の収集と解析			
KONO MICHIAKI 河野 通明 (64)	日本常民文化研究所・教授	農業技術史 博士(文学)	日本における民具調査とその分析			
KOMMA TORU 小馬 徹 (54)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	社会人類学 博士(社会人類学)	図像資料解析方法の研究			
KATSUKI YOICHIROU 香月 洋一郎 (54)	日本常民文化研究所・教授	民俗学	環境認識とその変遷の調査研究			
SUZUKI YOICHI 鈴木 陽一 (52)	外国語学研究科中国言語文化専攻・教授	中国文化論 文学修士	中国の図像資料の収集と解析			
SANO KENJI 佐野 賢治 (52)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	民俗学 博士(文学)	非文字資料の情報発信法の研究			
KITSUKAWA TOSHITADA 橘川 俊史 (57)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	政治学	渋沢映像資料の解析			
NAKAJIMA MICHIO 中島 三千男 (58)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	日本近代史 文学修士	環境に刻印された歴史の解析			
TAGAMI SHIGERU 田上 繁 (55)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	日本経済史 経済学修士	資料館・博物館における非文字資料の収集・保存方法の開発			
HIROTA RITSUKO 廣田 律子 (45)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・教授	中国民俗学 文学修士	芸能における身体技法の把握と比較法の開発			
TAJIMA YOSHIYA 田島 佳也 (55)	日本常民文化研究所・教授	日本経済史 経済学修士	アイヌ・沖縄の図像資料の収集と解析			
YAMAGUCHI KENJI 山口 健治 (56)	外国語学研究科中国言語文化専攻・教授	中国民間文学 文学修士	中国祭祀演劇における身体技法の調査			
SON AN SUN 孫 安石 (37)	外国語学研究科中国言語文化専攻・助教授	東アジア交流史 博士(学術)	中国・韓国の資料保存機関の調査			
JOHN BOCCELLARI ジョン・ボッチャリ (53)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・非常勤講師 (東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻・教授)	比較文化論 文学修士	『日本常民生活絵引』の欧文訳の基準策定および絵引による日欧文化比較			
KITAHARA ITOKO 北原 糸子 (63)	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻・非常勤講師	災害情報論 博士(文学)	災害情報資料の開発研究			
SAITOU TAKAHIRO 齋藤 隆弘 (49)	工学研究科電気電子情報工学専攻・教授	情報環境工学 工学博士	情報発信のための図像処理法の開発			
5. 申請経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる						
年度(平成)	15	16	17	18	19	合計
申請金額(千円)	61,000	125,110	157,000	162,000	89,000	594,110

6. 拠点形成の目的、必要性・重要性

① 本拠点がカバーする学問分野を、具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

社会・人文諸科学の分析対象はいうまでもなく人類文化の総体であるが、従来、実際の分析対象は、文字・文章で表現された資料に限定されてきたきらいがある。しかし、人間諸活動の表現形態は、文字・文章にとどまらず図像・身体動作・環境に刻み込まれた出来事の諸結果など多様な形態をとっている。本拠点においては、これらの非文字資料を研究対象として体系的に収集・整理し、情報として発信する方法を確立することを目指す。

この研究の課題は、主に文化人類学・民俗学・歴史学等の分野から提起されたものであり、その研究成果は、それらの学問分野に比較文化を含む新たな研究展開のための基礎情報を提供することになることは言うまでもない。同時に、本拠点の研究に当たっては、資料の解析において文化財科学・情報学・環境学等との学際的協同が不可欠であり、また、その成果はそれぞれの分野の研究に新たな領域を開く可能性がある。たとえば、身体動作や音といった形に残りにくい資料を記録し体系化することによって新しい文化財のカテゴリーを追加することになり、環境認識の資料化は、環境と人間との関係を歴史的な基礎において明らかにすることによって、今日の問題を再検討する新しい視点を提供し得る。図像・音声の資料化によって情報伝達の原初形態および歴史的諸様態を明らかにし、あるべき情報伝達を考察する出発点を握ることができる。また、図像・環境には建築史に有用な資料が見いだされると同時に、災害に関する歴史情報も多く含まれており、災害史にとって貴重なデータとなる。

さらに、本拠点の目指す、文化情報発信の新技术の開発は、教育工学と情報学を結合させることによって可能になると同時に、両研究分野に非文字資料に関する情報発信という新しい問題を提起することになるであろう。

②-1 将来構想等(調書)との関係を踏まえ、本拠点の特色を述べるとともに、どのような世界最高水準の研究教育拠点を形成するのかがわかるように焦点を絞り、その目的、必要性について具体的かつ明確に記入してください。

本拠点形成の基礎の一つである日本常民文化研究所は、1921年洪沢敬三によって創設されて以来、経済学・社会学・歴史学・民俗学等社会・人文諸科学の学際的研究・調査活動を積極的に推進してきたばかりではなく、絵画・民具等の非文字資料の研究にも先駆的な役割を果たしてきた。たとえば『絵巻物による日本常民生活絵引』のように中世の絵巻物から普通の生活の一場面や生活用具の図柄を抜き取り索引として使えるように編纂した世界に類例のない業績を残している。1982年本学に招致されて以後もその活動は発展的に継承されている。また、同研究所を基礎にして設置された歴史民俗資料学研究科は、資料学を専門とする全国唯一の研究科として研究の基礎となる資料を扱い得る国内外の人材の育成に努めてきた。さらに、本学には展示施設として常民参考室、CGを駆使したバーチャル地球史博物館が設置されており、本拠点形成において重要な役割を担うこととなっている。

こうした長年の実績と最新技術との結合の可能性は他に類例を見ない特色であるが、本拠点では、さらにその実績を発展させ、新しい可能性を実現し、非文字資料を中心として人類文化の総体を捉えるための体系的な開発及び資料の学界への提供、資料に対する鋭敏な感覚を有する専門家の育成を図る。このような事業は、長年の実績がなければ容易に取り組めない事業でもある。地球規模での文明史的転換点に立ち、あらゆる理論がその有効性を試されている現在、これまで取り上げられることの少なかった非文字資料に着目し、その体系化を通してその分析方法を確立することで、異文化間の相互理解の基礎を形成し、新たな理論展開の可能性を追求する。本拠点は、その意味で世界最高の研究教育拠点たり得ると確信している。

②-2 COEを目指すものが、いかにユニークであるか、もし他に優れたものがあれば、それとの比較を、具体的に記入してください。

本拠点のユニークさは、非文字資料を中核とした人間諸活動の総体に関わる資料群を調査・研究の対象にし、それら資料群の相互関係を体系的に捉えられる点にある。たしかに図像については美術館、民具等については博物館、文書・図書に関しては図書館・文書館など、それぞれ収集・整理・保存・公開する多様な機関が存在している。しかし、そうした機関はどんなに大規模で、よく整備され、優れた業績をあげていたとしても、多くの場合、それぞれが対象とする資料の扱いにのみ特化しており、資料群全体を対象とし、それらを人類文化の総体を明らかにするために情報化するような研究は行っていない。あるいは、図像は美術として、民具は物自体としてしか見られないように、資料を見る視角も特定されている。しかし、図像は貴重な生活記録としての性格を持ち、民具は身体動作と結びつけてはじめて生産・生活用具としての意味を明確にする。

身体動作や日常生活の中の音声など従来収集・分析されることのなかった事象に研究対象としての意味を見だし、環境を単に景色としてではなく災害や生産活動の記録として観察し、それらを図像・民具のようにすでに収集・分析されてきた資料と総合することによって新しい意味を与えることができるのは本拠点のみであるといっても過言ではないであろう。

②-3 本拠点が我が国のCOEとしてどのような重要性・発展性があるのか、具体的かつ明確に記入してください。

現在、世界的規模で異文化の相互理解が求められているが、なかでも我が国には、単に異なる文化の理解を深めるだけではなく、国際的に理解可能な形で自国文化を提示することが求められている。本拠点が目指す非文字資料の体系化が実現すれば、肉体を持ち、道具を使い、技術を進化させた人間と自然・環境との相互作用という最も根底的なレベルで自らの文化の理解を深めることができるばかりでなく、国際的理解の可能性を飛躍的に高めることができる。それは、非文字資料の体系化が方法的に普遍的性格を持つからである。また、方法の普遍性は、異なる文化との比較をより容易にし、相互理解の深化も可能にする。

さらに、身体技法・音・におい・景観・環境に刻まれた災害や人間活動の痕跡等の形に残りにくい資料群を体系的に記録・収集・整理することができれば、その資料群自体が貴重な人類の遺産となる。また、文書・絵画・彫刻・民具・建造物等形に残りやすく、従来から社会・人文諸科学の分析対象とされてきた資料についても、まったく別の角度から見ることによって、人間活動の多様なあり方を示す資料として新しい意味を見いだすことができる。こうした資料群の体系化は、方法的に普遍性を持つが故に、国境を越えた研究者の交流を可能にし、さらに活発化させるばかりではなく、日本発の問題提起として国際的な学界への貢献となるであろう。本拠点の研究調査活動および同じ方法に立つ国際的活動による資料の集積は、本プロジェクト終了以降にむしろ本格化し、学問領域を超えた真に学際的研究へと発展する大きな可能性を持つものと言つてよいであろう。そのことを確実にするために、形成された拠点を非文字資料研究センターとして維持発展させる。

③ 本プログラムで行う事業が終了した5年後に期待される研究・教育の成果について具体的かつ明確、簡潔に列挙してください。

- 1 『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の英訳を基本としたマルチ言語版の刊行。
- 2 日本近世・近代生活絵引の第1期(5巻)刊行開始。
- 3 東アジア生活絵引のためのデータベースの作成と公開。
- 4 身体技法の調査・分析法および感性把握の方法論に関する研究報告書の刊行及びその研究過程で身体技法・感性把握の能力を身につけた若手研究者の活躍。
- 5 身体技法の解析および展示用CGの作成と実験的展示の開催。
- 6 映像資料による時系列的比較結果を示す写真集の刊行。
- 7 環境認識に関するデータベースの作成・公開。
- 8 環境に刻印された人間活動・災害の痕跡に関するデータベースの作成と公開。
- 9 非文字資料の収集・整理・保存・公開システムの開発と公開。
- 10 高度専門職業人としての学芸員の養成システムの創設。
- 11 国際的共同研究のための海外研究機関・研究者のネットワークの完成。

④ 背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果とその学術的または社会的な意義・波及効果等についても記入してください。

非文字資料への着目は、我が国においては絵巻物を素材とした『絵巻物による日本常民生活絵引』を嚆矢として、近年文化人類学・民俗学の分野で見られるだけではなく、歴史学における図像とくに肖像画の利用や地震災害史における「鯨絵」の利用等の形でようやく広まりつつある。世界的には、1980年代以降活発になったアナール学派による社会史と呼ばれる歴史研究の分野で、非文字資料に注目した研究が活発に行われるようになってきた。その結果、文字・文章で表現される以外の資料とくに図像が資料として重要な位置を占め得ることが広く認知されるようになった。その後さらに、音・におい・動作・景観等へと分析の対象は拡大してきた。しかし、それらの資料を体系化し、活用するための方法・理論はいまだ確立されているとは言い難い。また、そうした資料そのものの収集・整理も系統的には行われていないのが現状である。

非文字資料の収集・整理が進めば、学際的研究・文化比較の深化等学術的意義を有することは言うまでもないが、その成果自体が人々の普通の生活の記録として文化遺産の重要な一部となることも指摘しておかなければならない。また、その成果の展示(CG技術の応用を含む)・刊行による公開によって人々に普通の生活の価値を再発見させ、自己認識を高めさせるという意味で大きな社会的意義を持つ。さらに、生活様式の急速な変化によって直近の過去すら知らない子供たちに父祖の生活の実態を知らせ、自分たちの生活の根元がどこにあるのかを知らしめるという教育上の効果も十分期待できる。

7-1. 研究拠点形成実施計画

(拠点形成にあたり、実施していく研究計画、方法を具体的に記入してください。記入した内容の実施状況は、中間評価及び事後評価の対象となります。)

研究拠点形成の実施に当たっては、以下のような4つの研究テーマを設定し、テーマごとに研究チームを編成し、事業推進担当者を中心に研究を展開する。

(i) 画像資料の体系化と情報発信

世界に類をみない『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の本文の英訳及び図のキャプションにフランス語・中国語・韓国語訳を付したマルチ言語版の刊行のための検討と比較研究。

日本近世・近代生活絵引編纂のための資料収集と解析(名所図会、農書の挿絵、絵日記、旅日記などの画像資料の選択とデジタル画像化、解析)。

東アジア生活絵引編纂のための資料収集(中国・台湾・韓国への現地調査を実施)とそのデータベース化。

(ii) 身体技法および感性の資料化と体系化

身体技法の調査・分析法の開発と身体技法の比較研究(日本・東アジア・ヨーロッパ・アフリカでの現地調査を実施し、解析し、比較する)。研究にはCGの技術を用いて新しい身体技法解析の方法を構築する。

感性把握の方法論的研究(フランスのアナール学派の検討を行い、それを踏まえて日本及びヨーロッパにおける実験的調査の実施)。

道具と人間の動作の関係についての分析(日本及び東アジア・ヨーロッパにおける民具と身体動作との関連を調査)。

(iii) 環境と景観の資料化と体系化

映像資料による景観の時系列的研究(日本常民文化研究所が所蔵する約70年以前に渋沢敬三によって撮影された映像資料の整備とそれを基にした日本・韓国・台湾の現地調査を実施)。

環境認識とその変遷の研究(日本の農山漁村での現地調査の実施)。

環境に刻印された人間活動や自然災害の痕跡等を解読する方法の開発とそれによるデータ化(日本及び中国、台湾、ロシアなどで現地調査)。

(iv) 文化情報発信の新しい技術の開発

i、ii、iiiの研究プロジェクトと共同し、非文字資料を文化情報として発信する方法を開発する。

非文字資料・文字資料の両者を含む資料全体の伝存形態の調査(日本・中国・韓国・ヨーロッパの現地調査の実施)。

非文字資料収集・整理・保存システムの構築のための調査、実験及びその具体化。

非文字資料の情報発信技法の開発。非文字資料のデジタル化。非文字資料の実験的展示の実行。

以上のような研究拠点実施計画を実現するに当たっては、事業推進担当者を中心に大学内の研究者、専門を同じくする他機関所属の若手研究者を組織し、共同研究を行い、また共同調査を実施する。推進担当者については、各年度の重点研究計画に基づいて、特定研究グループへの傾斜配置を行い、年次計画の進行にともない再配置する。それに対応して予算計上においても傾斜配分を行う。

また、日本で開発された非文字資料研究の方法を世界に発信するために、関係する海外研究者の参加を求める。すでに、韓国の延世大学、中国の北京師範大学、華東師範大学、浙江大學、香港大學、カナダのブリティッシュコロンビア大学、アメリカのハーバード大学、フランスのパリ第五大學、ドイツのハイデルベルグ大学らの研究者と具体的に協議に入っており、事業の開始とともにネットワークの形成を始めることができる。

COE研究員として採用した大学院在籍学生・PD研究者および研究所客員研究員に採用した学芸員などについてもできる限り現地調査に参加させ、経験を積ませると同時に、現地調査等で収集した資料の記録・整理の過程で新しい方法論の開発を行えるようにする。

拠点リーダー、サブリーダー2名及び研究遂行責任者3名で研究拠点形成推進会議を組織し、各チームの研究を適切に展開させるために、研究全体を調整し、事業推進担当者を指導する。また各年度ごとに資料学、情報学、博物館学などの研究者に依頼し、評価を受け、翌年度以降の実施計画を調整する。

なお、本研究は日本国内だけでなく、世界各地で現地調査を展開するが、調査にあたっては調査対象の地域や人々の人権を損なうことのないように、研究参加者に十分に注意を促し、また問題が生じたときは研究拠点形成推進会議が責任をもって対処し、その解決にあたる。

7-2. 年度別の具体的な研究拠点形成実施計画
(項目7-1において記入された内容の年度毎の取り組み計画)**平成15年度：**

『絵巻物による日本常民生活絵引』の外国語訳(本文の英語訳、キャプションの仏語・中文・韓国語訳)の基準を、試訳を行いつつ検討し、決定する。
日本近世・近代画像資料の所在情報収集を実施し、それにもとづき画像資料を収集して解析を進める。
東アジア画像資料の所在情報収集のため中国・韓国で調査を実施する。
身体技法・感性の資料化について予備的調査を実施(フランス、西アフリカ)。
日本における特定民具の調査を実施し、その使用方法を通しての身体技法との関連を把握する。
日本常民文化研究所所蔵・渋沢敬三撮影映像資料の解析を行い、景観のその後の経年変化を日本列島の島嶼部を主要対象として現地調査する。
環境認識把握のための実験的調査の実施(日本)。
環境に刻まれた人間活動の追跡調査を、第二次大戦前に日本の植民地であった地域で実施する。
災害情報の資料化のための調査方法を検討し、実験的に調査を行い、確定する。
非文字資料収集・整理・保存法の実態を日本各地及び中国、韓国で調査。
情報発信のための非文字資料のデータ処理技法の開発(画像資料)。

平成16年度：

『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻、第2巻の外国語訳とその内容検討のための共同研究会開催。
東日本を中心に近世・近代画像資料の調査。
中国・韓国の主要図書館所蔵画像資料の調査。
英国・フランスの身体技法の調査と分析。
沖縄における特定民具の調査。
日本常民文化研究所所蔵・渋沢敬三撮影映像資料の解析(山間部)。
環境に刻まれた人間活動の追跡調査を前年に引き続き実施。
地震・津波災害と環境に関する調査を東日本で実施。
日本及び東南アジアにおける資料整理保存法の調査。
情報発信のための非文字資料のデータ処理技法の開発(身体技法)。

平成17年度：

『絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻～第5巻の外国語訳と内容検討のための共同研究会開催。
西日本を中心に近世・近代画像資料の調査。
中国・韓国の大学図書館所蔵画像資料の調査。
アフリカ諸地域の身体技法の調査と分析。
韓国における特定民具の調査。
日本常民文化研究所所蔵・渋沢敬三撮影映像資料の解析(台湾・韓国)。
環境に刻まれた人間活動の追跡調査を前年に引き続き実施。
地震・津波災害と環境に関する調査を西日本で実施。
アメリカ合衆国における資料整理保存法の調査と分析。
情報発信のための非文字資料のデータ処理技法の開発(環境・景観)。

平成18年度：

『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の編集のための共同研究会開催と印刷刊行。
収集した近世・近代画像資料の分析と生活絵引編纂準備。
中国・韓国の地方博物館・資料館所蔵画像資料の調査。
国際シンポジウム『画像資料の可能性』の開催。
中国・韓国の身体技法の調査と分析。
中国における特定民具の調査。
日本常民文化研究所所蔵・渋沢敬三撮影映像資料の解析(前年からの継続)。
環境に刻まれた人間活動の追跡調査を前年に引き続き実施。
水害と環境に関する調査を大規模被害地域で調査。
ヨーロッパ各国における資料整理保存法の調査と分析。
情報発信のための非文字資料のデータ処理技法の総合的開発。

平成19年度：

『日本近世・近代生活絵引』第1期(5巻)の刊行開始。
東アジア画像資料データベース作成・公開。
国際シンポジウム『身体技法の比較と人類文化』開催。
「身体技法と感性の比較と人類文化」、「渋沢映像資料の現代的意義」、「非文字資料の文化情報化」を含む研究成果報告書『非文字資料の体系化』の編集、印刷刊行。
「環境認識」、「地表に刻まれた人間活動および災害痕跡」のデータベースの作成・公開。
実験展示『ホモ・マテリアルヒトと資料』の準備、開催。

8. 教育実施計画

(拠点形成の際に実施される教育関係の取り組み計画を将来的に見た研究人材等の創出の見込みをも視野に入れて、具体的に記入してください。)

拠点形成の過程において、研究と教育の一体化による世界水準の研究者の養成、及びその裾野としての幅広い専門的職業人の訓練、また世界各国の学生及び研究者の大幅な受け入れによる国際化を図る。中核となる歴史民俗資料学研究科の具体的な実施計画は以下の通りである。

① 博士後期課程在籍の学生への教育

本研究科は、非文字資料の体系的な調査及び研究に関しては日本で唯一の大学院博士後期課程を持つ研究科であり、今までも専門家の養成は大いに期待されていた。今回のCOEプログラムにおいては、彼らを単に日本の専門家としてではなく、将来世界的水準の研究を担う研究者に育てることを大きな目標としている。そのためには、学生を在籍のままCOE研究員(RA)として採用し、推進者の指導を受けつつ調査研究課題を分担し、高度な研究能力を開発するようにする。特に、世界各地の研究者との交流を重視し、一流の研究者に直接指導を受けさせるために、交流のある東アジア及び欧米の大学等研究機関に長期派遣する。この点については、すでに韓国の大学へは常時派遣してきており、その成果も確認している。なお、研究科としては、カリキュラムを改訂し、学生たちが世界的に活動できる外国語能力の向上を図るための授業科目の開設を計画し、また中国言語文化専攻との共通科目の開設を決している。

② 課程修了者・学位取得若手研究者への教育と研究支援

本研究科では、すでに本年度までに6名が課程博士の学位を取得し、また1名の中途退学者が論文博士となっているが、今後COEの研究に加わることで、世界的に通用するより優れた学位論文を提出して学位を取得する者が増加することが見込まれる。彼らの研究を支援するため、4年前から日本常民文化研究所において特別研究員の制度を設け、課程修了者及び学位取得者を特別研究員として採用している。特別研究員には研究上の種々の便宜を与えると共に、研究所及び歴史民俗資料学研究科の国内における調査研究に参加する機会を作り、自己の研究を深められるようにしてきた。拠点形成過程で彼らをCOE研究員(COEポスドク-研究員)として採用し、研究に専念させ、さらに彼らの海外派遣制度を設け、海外において調査研究できる機会を設けると共に、拠点形成の一翼を担わせることで、よりいっそうの資質向上を図る。また、東アジアおよび欧米の交流ある大学への派遣を制度化し、世界的水準の研究者に成長することを応援する。

③ 外国人留学生及び外国人研究員の受け入れ

本研究科ではすでにフランス・中国・韓国からの後期課程留学生、また日本常民文化研究所ではアメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れてきており、国際的な交流と研究上の協力関係に大きな成果をあげているが、拠点形成過程でさらに外国人若手研究者との共同研究を推進する。また事業推進担当者が派遣され、そこからの出身者を受け入れている経験を生かして、国際交流基金の支援で設置されている北京日本学研究中心をはじめ、世界各地の日本学研究の拠点との交流を深め、それらの機関からの研究者及び修了者を積極的に受け入れ、共同研究を展開する。そのことが拠点形成に大きく資するばかりでなく、在籍学生の研究にも大きな刺激となるものと予想している。日本で発達した非文字資料の資料化の技法とそれによる研究は世界に対してモデルとして輸出可能であり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する方法である。

④ 高度専門教育の実施

従来非文字資料を取り扱ってきた専門的職業は博物館・資料館などの学芸員であるが、日本の現状では学芸員は非文字資料に対処する理論も方法も体系的に学ぶことなく、経験のみに頼って調査研究に従事している。日本常民文化研究所では、博物館・資料館の学芸員などの専門職の資質向上に貢献するために毎年講座を開催し、各地の博物館・資料館の専門職員に対して講義と実技指導を行っているが、拠点形成過程でこれをさらに充実させ、長期の研修制度を設け、客員研究員として受け入れ、指導をする。また、大学院に学芸員課程を設置し、高度な水準の講義・実習科目を開講し、在籍学生に履修させ、また社会人を受け入れる。それらを通して、博物館・資料館の専門職員の研究能力の向上を図り、欧米のキュレーターやアーキビストと同等の能力と見識を有する研究者に育てる。

様式 2

9. 初年度及び次年度の各経費の明細		記載例：研究打ち合わせ旅費	〇〇千円
申請できる経費は、本事業計画の遂行に必要な経費です。		資料整理謝金	〇〇〇千円
21世紀COEプログラムの目的である拠点形成の実現のため、用途は限定されます。			
(「研究拠点形成費補助金(研究拠点形成費)取扱要領」参照)			
事 項	金額(千円)	備 考	
<平成15年度>			
設備備品費			
備品 (カラー複写機・デジタルカメラ撮影用品一式 ・光学カメラ・デジタルビデオカメラ)	6,527千円	非文字資料収集・記録・加工のための機材	
参考図書・資料文献代	10,695千円		
旅費			
国内旅費 (島嶼部を中心とした全国各地への調査)	5,763千円	長期反復調査を予定	
外国旅費 (中国・韓国等各地の調査)	9,142千円	長期反復調査を予定	
外国人招へい旅費	1,006千円	調査・共同研究会への招へい	
人件費			
研究支援者等の雇用 [COE研究員] (R A経費)	2,340千円		
研究支援者等の雇用 [COE研究員] (P D研究員)	6,768千円		
資料整理謝金	5,993千円		
事業推進費			
事務用品等消耗品費	2,089千円		
複写費	3,000千円	航空写真等資料用写真複写費を含む	
印刷製本費	3,100千円		
通信運搬費	777千円		
雑役務費	2,800千円	翻訳委託費	
委託費	1,000千円	ホームページの作成・管理	
(平成15年度) 合 計	61,000千円		
<平成16年度>			
設備備品費			
参考図書・資料文献代	6,000千円		
旅費			
国内旅費 (山間部を中心とした全国各地への調査)	20,120千円	長期反復調査を予定	
外国旅費 (中国・韓国・イギリス・フランス・台湾 ・タイ各地の調査)	23,350千円	予備調査及び長期反復調査を予定	
外国人招へい旅費	3,540千円	調査・共同研究会への招聘	
人件費			
資料整理謝金	5,050千円		
専門的知識の提供に関する謝金	13,000千円		
研究支援者等の雇用 (COE研究員賃金)	14,000千円		
事業推進費			
事務用品等消耗品費	3,000千円		
複写費	4,000千円	航空写真等資料用写真複写費を含む	
印刷製本費	1,300千円		
通信運搬費	950千円		
雑役務費	30,800千円	翻訳委託費	
(平成16年度) 合 計	125,110千円		

様式 2

10. この拠点形成計画に関連して従来受けた研究費 (事業推進担当者(拠点リーダーを含む)及び拠点となる専攻等が1998年から2002年に交付を受けた研究費(科学研究費補助金、その他の省庁・研究助成法人・民間企業等からの研究費を含む。)のうち主なものを記入してください。)				
研究費の名称	期 間	研 究 課 題 等	交付を受けた者 (研究者名又は組織名)	研究経費(総額、千円)
科学研究費	1998	環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究	福田アジオ	5,300千円
福武学術文化振興財団研究助成	1998	中国地方の在来犁と牽引法の分布調査	河野 通明	900千円
科学研究費	1998~1999	慶長度女御御殿遺構の建築と障壁画による復元的研究	西 和夫	2,000千円
科学研究費	1998~2001	山城国大山崎荘の総合的研究	中島三千男	10,800千円
科学研究費	1999~2000	中国江南村落の民俗誌的研究	福田アジオ	11,100千円
科学研究費	2001~2002	朝鮮華僑史研究のための基礎的資料調査	孫 安 石	2,300千円
独立行政法人水産総合研究センター	2001~2002	センター保管古文書の整理、目録作成	日本常民文化研究所	3,500千円
科学研究費	2001~2002	織豊期発給文書の史料学的研究	三鬼清一郎	2,100千円
科学研究費	2001	職人巻物の民俗学的研究	佐野 賢治	2,200千円
科学研究費	2002	中国江南沿海村落の民俗誌的研究	福田アジオ	3,900千円
科学研究費	2002	アフリカ音文化における伝統の形成と変容	川田 順造	1,520千円
日本私立学校振興・共済事業団学術振興資金	2002	山城国大山崎荘の総合的研究	日本常民文化研究所	2,000千円
科学研究費(研究成果公開促進費)	2002	日本常民文化研究所デジタル資料群データベース	日本常民文化研究所	8,700千円

11. 関連分野研究者 (当該研究分野に精通し、かつ、当該研究内容を的確に理解・評価できると思われる研究者を3名記入してください。)				
(氏 名)	(所属機関・部局・職)	(現在の専門)	(電話番号<勤務先・自宅>)	
○松園万亀雄	国立民族学博物館・館長 (平成15年4月就任予定)	文化人類学	電話<勤務先> 06-6876-2151	
○八重樫純樹	静岡大学・情報学部・教授	応用情報学	電話<勤務先> 053-478-1555	
○尾本 恵市	国際日本文化研究センター・名誉教授	自然人類学		

採択通知書

審査結果表

神奈川大学長 殿

21世紀COEプログラム委員会
委員長 江崎玲於奈

21世紀COEプログラム委員会（学際、複合、新領域）審査・評価部会における審査の結果、貴大学から申請のあった下記プログラムが、採択されました。

拠点のプログラム名称	人類文化研究のための非文字資料の体系化	整理番号	J-1
中核となる専攻等名	歴史民俗資料学専攻		
事業推進担当者	(リーダー) 福田 アジオ 外18名		
(拠点形成の概要)			
<p>本拠点形成計画は、日本常民文化研究所の70年にわたる調査研究の蓄積と新たな構想の下に設置された歴史民俗資料学専攻の研究者養成の実績を基礎に、文字に表現されない人間活動の資料化とその体系化を行うことで人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的とする。併せて非文字資料を解析する若手研究者の育成はもちろんのこと、非文字資料に専ら依拠する博物館専門職員（学芸員）等の高度専門教育の推進を図る。人間活動の表現を①画像、②身体技法と感性、③環境と景観の三つに大きく分け、それぞれの資料化の方法と解析方法を研究し実践すると共に、各資料群のデータを広く世界に提供する。さらに、資料の相互関係を確立し、文化情報発信の新技术を開発し実験を行う。その成果を基礎に、世界的な非文字資料研究センターとして本拠点が永く学術的貢献を果たし、研究と教育を融合し国際的に開かれた大学を追求する本学の基本方針を具体化することを期している。</p>			

本審査・評価部会においては、次のような意見がありました。

なお、この意見についてのご質問、ご照会には応じかねますので、あらかじめご了承ください。

(本年度の審査状況)

21世紀COEプログラムは、我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を学問分野別に形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としています。

国公私各大学から研究教育拠点形成に向けた意欲的な申請が176件ありました。申請のあった拠点形成計画には、研究業績のレベルが高く、拠点形成の内容において優れたものが多く、審査は非常に困難を極めました。

本審査・評価部会では、この中から審査方針に該当するものとして、ヒアリング対象を37件選定し、うち25件を採択しました。

採択理由及び補助事業開始にあたっての留意事項	(総合評価コメント)
	研究実績は概ね世界水準にあるし、拠点計画、目的の水準も高いと認められる。さらなる努力によってより優れた実績を上げ、世界最高水準の拠点形成を目指していただきたい。
	(採択理由)
	非文字資料の収集・整理・体系化は、日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となるのが最もふさわしい。非文字資料を体系化する普通的方法は未だ確立されておらず、きわめて独創的な試みであり、その成果が期待される。メンバーには優れた研究実績を備えた人材がそろっており、研究教育を遂行するうえでも十分にポテンシャルがある。
(補助事業開始にあたっての留意事項)	
非文字資料の体系化や収集した資料を基に日本から発信していくうえでは、拠点メンバーだけでは不十分であり、情報科学の専門家や海外の研究者との協力が必要である。遂行すべき目標があまりにも多すぎるために、仕事をこなすことに追われる恐れがある。大学院博士課程の定員はわずか3人であり、したがって研究者に比べて少ない大学院生が研究に専念できるよう研究環境に十分な配慮が必要である。	

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)進捗状況報告書(中間評価用)

		機関番号	32702
1. 機関の代表者(学長)	(大学名)	神奈川大学	
	(ふりがな<ローマ字>)	YAMABI MASANORI	
	(氏名)	山火 正則	
<p>2. 大学の将来構想</p> <p>(世界最高水準の研究教育拠点の形成を目指し、学長を中心としたマネジメント体制の下、どのような拠点形成の実現を進めてきたか。そのために、どのような重点的支援(例:学内予算措置、研究教育組織の改編、施設・スペースの整備、研究者及び研究支援者の措置等)を実施してきたか、具体的に記入してください。)</p> <p>神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、これまで総合的に取り組まれていることがなかった、画像・身体技法・感性・環境・景観など、文字資料以外の諸事象を研究対象として、人類文化の研究を行おうという意欲的な取組であり、また、その事業の終了後には世界最高水準の研究教育拠点たる「非文字資料研究センター」を創設しようという雄大な計画である。</p> <p>この取組を成就させるべく、本プログラムを含む神奈川大学の学術研究活動を専管する担当副学長を新たに置いて、その下に「神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会」を設置、またそのための規程や「神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程」等のCOE関連諸規程を整備して、学内における本事業の位置付けを明確にした。</p> <p>また、平成17年度より、担当副学長のもとに、神奈川大学における研究活動を総合的に支援・推進する「総合学術研究支援委員会」を発足させる。本委員会は、COEプログラムやハイテク・リサーチセンター、学術フロンティア事業等の大型研究プロジェクトを管轄し、産官学の連携や研究成果の社会的還元、国際的な学術交流をより一層強力に推進して、本学が「個性輝く大学」・「国際競争力のある大学」となることを目指している。</p> <p>こうした中で、これまで実施してきたCOEプログラムに対する重点的支援策は以下の如くである。</p> <p>(1) 学内予算措置等</p> <p>① 事務局体制 学長室の下に本プログラムを遂行する事務組織としてCOE支援事務局を設けた。専任の事務職員2名、専門性の高い派遣職員3名(編集、図書整理、経理事務を担当)を雇用。この5人の人件費(本年度約2900万円)及び事務局経費(本年度140万円)は大学の予算で賄っている。</p> <p>② 2000万円の支援金 本プログラムを直接支援するため(機器備品費、印刷費、委託費等)、本年度、2000万円を大学予算から拠出した。</p> <p>③ 研究拠点形成費補助金及び大学からの支援金の支出については、本学の内部監査室の監査を定期的に行う(本年度は5回)適切、厳格な支出が行われるようにしている。</p> <p>(2) 研究教育組織の改編等</p> <p>① 博物館資料学コースの新設 これまで、本プログラムの主たる研究教育拠点である、歴史民俗資料学研究科は「文献史料学」と「民俗民具資料学」の二つのコースのみであったが、本プログラムの達成目的の一つである非文字資料を取り扱うことのできる高度専門職学芸員の養成という課題に積極的に対応するため、平成16年度から、新たに「博物館資料学」というコースを新設した。</p> <p>② 歴史民俗資料学研究科の独立研究科化 歴史民俗資料学研究科は、特定の学部に基づかない大学院として設立されたが、COEプログラムの採択を契機に、世界最高水準の研究教育拠点を形成するために、完全な独立研究科化を検討している。</p> <p>(3) 施設・スペースの整備</p> <p>① プログラムのための専用施設の確保 21号館の4階全フロアを中心に、COE支援事務局、共同研究室、資料室、COE研究員(PD)研究室、同(RA)研究室、分析作業室等、計6室、260.62㎡の専用施設を確保した。</p> <p>将来的には、本プログラム終了後に設置される非文字資料研究センター、歴史民俗資料学研究科、日本常民文化研究所、常民参考室(展示施設)等を一体化した施設の設置の可能性を検討している。</p> <p>(4) 研究者及び研究支援者の措置</p> <p>① COE共同研究員 本プログラムが十全な成果を挙げられるよう、20名の事業推進担当の他に、学内外の専門研究者20名を共同研究員として本プログラムに参画させている。</p> <p>② COE特任教員の採用 COE事業期間に、若手研究者の養成を主たる目的として、拠点となる大学院での教育指導にあたり、併せて本事業の研究活動にも参加するCOE特任教授1名、COE非常勤講師2名を採用している。</p> <p>③ COE研究員(PD)、同(RA)の採用 非文字資料の研究を担うポスト・ドクターの若手研究者の育成のために、本プログラム遂行にふさわしいCOE研究員(PD)を学内外から公募し、本年度は3名を採用した。また、本学大学院後期課程に在籍している学生を対象に、本プログラム遂行の支援を行うと共に、調査・研究の経験を蓄積させる目的をもって、COE研究員(RA)を本年度5名採用している。</p> <p>④ 授業担当責任時間の減 本学の専任教員の授業担当責任時間は5コマ(10時間)とされているが、本プログラムを中心的に推進する拠点リーダーは2コマ、サブリーダー・研究遂行責任者については1コマの授業担当責任時間の減を行い、それらが本事業に専念できる体制をとっている。</p>			

様式 2

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)進捗状況報告書(中間評価用)

機関名	神奈川大学	機関番号	32702	拠点番号	J23
1. 申請分野 (該当するものに0印)	F<医学系> G<数学・物理学・地球科学> H<農・林・獣・食・工学> I<社会科学> J<学際・複合・新領域>				
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	人類文化研究のための非文字資料の体系化 Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies ※副題を添えている場合は、記入して下さい(和文のみ)				
研究分野及びキーワード	<研究分野:情報学> (社会情報システム)(歴史情報システム)(社会の防災力)(身体運動文化論)(地域間比較研究)				
3. 専攻等名	歴史民俗資料学専攻、日本常民文化研究所、外国語学専攻、中国言語文化専攻				
4. 事業推進担当者	(拠点リーダー) 福田 アジオ				計 21 名
5. 拠点形成の目的等					
①【学問分野】 本事業の推進担当者は、文化人類学・民俗学・歴史学・建築史・情報環境工学・災害情報論を専門とする。他に共同研究員として地理学・博物館学・美術史の専門家の協力を得ている。これらの専門家の学際的協力によって、人類文化の総体的把握のために、非文字資料の収集・整理・情報発信の方法の確立を目指して研究を推進している。					
②【目的】 社会・人文諸科学の研究対象は人類文化の総体であるが、従来、実際の分析対象は文字・文章で表現された事象に限定されてきたきらいがある。しかし、人間諸活動の表現形態は、文字・文章にとどまらず、画像・身体技法・感性・環境・景観など多様な形態をとっている。本拠点は、これら文字に記されてこなかった事象を資料として定着させる方法を開発し、体系的に整理するとともに、その解析方法を開発し、その成果を世界に向けて発信する、非文字資料研究センターを目指す。					
③【計画：当初目的に対する進捗状況等】 本拠点においては、当初2年間は、研究対象資料の所在調査および収集・整理・解析方法の確定、所蔵資料の活用方針の策定、情報発信の技法の開発に関する動向調査等、今後の拠点形成の展開の基礎となる事業の推進に重点を置いてきた。もちろん、すでに研究蓄積のある分野では、それをさらに発展させる研究も遂行し、その成果を公表してきた。その結果、画像・身体技法・感性・環境・景観のそれぞれについて集積すべき資料の確定、収集・整理、資料化の方法の確立という課題については、計画にしたがって順調に進捗している。情報発信についても、多少の遅れはあるが、モデルとなる地域の確定を終え、具体化の段階に確実に入りつつある。					
④【特色】 本拠点の特色は、非文字資料を中核とした人間諸活動の総体に関わる資料群を調査・研究の対象にし、それらの資料群の相互関係を体系的に捉える点にある。こうした事業は、人文・社会諸科学の学際的研究・調査を推進してきた日本常民文化研究所の長年にわたる実績と資料学を専門とする全国唯一の歴史民俗資料学専攻を基礎としてはじめて展開できる。さらに、情報工学との結合によって、資料整備・情報発信の方法においても新しい方法を提示できる。					
⑤【重要性・発展性】 地球的規模で相互関係が展開している今日、異文化間の相互理解の促進が重要な意味を持つことはいうまでもない。本拠点の事業の成果によって、人類文化の生活に密着した最も根源的なレベルで、自らの文化の理解を深めると同時に、国際的相互理解の可能性を飛躍的に高めることができる。非文字資料群の体系化は、特定の文字・言語に拘束されないが故に普遍性を有し、人類文化に等しく適用できる方法として世界に提供できる。					
⑥【終了後の成果】 全般にわたる成果の中心は、非文字資料の体系化に関わる普遍性のある方法論の提示である。具体的・個別的には、i『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳を基本としたマルチ言語版、ii『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』、iii 身体技法・環境・文化情報発信に関する研究成果報告書などの刊行、iv 画像・写真・民具などの資料及び文献に関するデータベースの作成と公開、v 非文字資料の収集・整理・公開システムの開発、vi 高度専門職学芸員養成システムについての提言書の作成、vii 海外研究機関・研究者のネットワークの形成、viii PD、RA の研究成果論文集の刊行、などである。					
⑦【学術的・社会的意義など】 近年、画像を中心とした非文字資料は、文化人類学・民俗学・歴史学などの分野で研究が推進されるようになってきたが、動作・感性・景観などを含めた資料群については、その体系化・活用法についての理論は未確立である。その意味で、非文字資料の収集・体系化を進めることは、学際的研究・文化比較の深化等学術的に重要な意味を持つ。また、収集・整理の成果は、人々の日常生活記録として文化遺産の重要な一部となる。また、その成果の新技術の応用を含む展示・公開によって、人々に普通の生活の価値を再発見させ、自己認識を高めさせることができるばかりでなく、国際的相互理解の可能性を広げるという点でも大きな社会的意義を有する。					

6. 平成16年度までの研究拠点形成進捗状況

①運営状況

- ・当初の拠点形成の目的に沿って計画は着実に進展しているか
 - ・研究活動において、新たな学術的知見の創出や特筆すべきことがあったか
 - ・博士課程等若手研究者が有為な人材として活躍できるような仕組みを措置し、機能しているか
 - ・拠点リーダーを中心として事業推進担当者相互の有機的な連携が保たれ、活発な研究活動が展開される組織となっているか
 - ・国際競争力のある大学づくりに資するための取組みを行っているか
 - ・研究経費は効率的・効果的に使用されているか
 - ・国内外に向けて積極的な情報発信が行われているか
- について、具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

【当初目的に対する進捗状況】

本拠点では、課題別に4班に編成し、事業推進を図ってきた。図像を中心とした第1班では、『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版の翻訳作業を開始し、日本近世・近代、東アジア生活絵引作成のための基礎的データの収集、図像文献データベースの作成にも見通しがついた。身体技法・感性の体系化をめざす第2班では、アジア内陸部および中南米におけるデータの収集をはじめ、国内各地の用具に関するデータの集積、モーションキャプチャーによる解析方法の開発も順調に進んでいる。環境・景観を課題とする第3班では、日本常民文化研究所所蔵の映像資料のデータ化を進め、景観変化の時系列的比較の作業を開始した。また、環境に刻印された災害・人間活動の痕跡の研究では、国内外の調査によって新たな資料を獲得することができた。情報発信を中心とする第4班は、多少の遅れは見られるが、地域に密着した情報発信のための地域を特定し、自治体との協力関係の下にモデルとなる発信方法の開発に着手した。また、展示等資料の活用について、国内外における調査を行い貴重な情報を入手した。以上のように、それぞれの班の事業は、概ね計画にしたがって進捗している。

【研究活動の新たな学術的知見】

『絵巻物による日本常民生活絵引』の翻訳作業の中で、原著の誤りをいくつか発見すると同時に、物と言葉との対応関係における国際比較上の問題点を指摘しえた。また、今までほとんど手が付けられてこなかったアジア内陸部および中南米における身体技法に関して現地調査によって獲得した基礎データは、人類3大集団の比較研究のための貴重な資料となる。用具と身体技法の関係性の調査によって、用具の地域的偏差が、日本列島における文化形成過程を解明する有力な資料となることを発見した。日本常民文化研究所所蔵の約70年前に撮影された日本および朝鮮半島・台湾各地の映像と現況の比較によって、それらの地域での景観変化の様相を明らかにした。北東アジア・太平洋地域での神社跡地の悉皆調査によって蓄積したデータは、日本統治という人間活動が異文化地域にどのような痕跡を残しているかについて究明する基礎資料となる。

【人材育成】

本拠点では、非文字資料を対象とした研究ができる若手研究者育成のため、COE研究員(PD)、同(RA)の制度を設け、前者は学内外から広く人材を募集し、他大学学位取得者PD1名を含め3名を、後者は本学大学院後期課程在籍者から選抜した5名を現在採用している。特に、COE研究員(PD)には、学術振興会特別研究員と同等の待遇を与え、基本的に研究に専念できる体制を整えている。また、COE研究員の研究成果としての論文は、事業推進担当者2名の審査を経て『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』に掲載を許可している。さらに、COE研究員には、事業推進担当者による調査に同行させ、調査経験を積ませると同時に、短期ではあるが海外提携研究機関に派遣し、独自に調査・研究する機会を与えている。

【有機的連携】

研究組織は、学長を頂点とし、副学長が委員長となる「拠点形成委員会」の下に、拠点リーダーを長とし、研究遂行責任者およびCOE事務局長をメンバーとする「研究推進会議」を設置し、事業推進担当者および学内外から参加を得た共同研究員20名を4班に分けるという構成をとっている。各班は、それぞれの研究課題を達成するために定期的に研究会を開催している。研究会は班によってバラつきはあるが、活発に行われているとよい。さらに、問題意識の共有と全体的調整のために、本拠点構成員全員による全体会議を適宜開催し、その際、各班の成果を報告する全体研究会を同時に行っている。今後は、非文字資料の体系化という総体的テーマの深化のために、全体会議・研究会の強化を図るつもりである。

【国際競争力】

多様な形態を持つ非文字資料の総体的な体系化という事業は、国際的に見ても極めてユニークなものであり、本拠点には生活絵引や民具研究の分野において追随を許さない研究蓄積がある。また、現在中国4大学、韓国、カナダ、ブラジル各1大学と協力協定を締結しているが、さらに海外研究機関との提携を拡大中であり、国際的研究展開の条件が整いつつある。

【経費】

経費は、非文字資料のデータベース化・解析のための電子機器をはじめとする設備・備品の充実、関連文献・資料の収集、国内外における現地調査の遂行、若手研究者の育成、COE教員の雇用、年報等の情報発信などを中心にして適正に使用されている。その結果、必要な設備はほぼ整い、特に図像に重点を置いた文献は、類例を見ないほど充実してきた。

【情報発信】

現在、『ニューズレター』(年4回発行)とその年の研究成果をまとめた『年報』(A4版、約300頁)を刊行している。また本年度は第3班の『報告書』も刊行した。そのほか、英文を含む『概要』を作成し、非文字資料研究への理解の獲得に努めている。ホームページも作成しているが、その充実と、世界に向けての情報発信は、今後取り組みを強化してゆく方針である。

様式 2

②留意事項への対応

(「21世紀COEプログラム委員会」の審査結果による留意事項への対応について、具体的かつ明確、簡潔に記入してください。)

採択の際指摘された留意事項の第一は「情報科学の専門家や海外の研究者との協力が必要である」ということであった。この点については、事業推進担当者および共同研究員として本学工学研究科に所属する情報工学を専門とする教員4名を補充した。また、海外の研究機関との提携を進め、現在、中国、韓国、ブラジル、カナダなどの大学・研究所との間に、情報交換・研究交流・若手研究者の相互派遣を内容とする交流協定を締結した。さらに、海外での現地調査に当たっては、専門知識の提供者として現地研究者の参加・協力を仰いでいる。第二の「遂行すべき目標が多すぎる」という指摘については、実現可能性の観点から、目標の絞込みを行い、5班構成を4班に編成しなおした。第三の「大学院生の研究環境への配慮」については、PD、RAともに、専用の研究スペースを確保すると同時に、自分の研究に専念できるように、事業推進担当者の研究補助等の業務に従事する時間をできる限り最小限にとどめるように配慮した。

③今後の展望

- ・今後、拠点形成を進める上で改善点を検討し、適切に対応しているか。
 - ・COEとして、研究を通じた人材育成の評価、国際的評価、国内の関連する学会での評価、産学官連携の視点からの評価、社会貢献等が期待できるか
- について、具体的かつ明確、簡潔に記入してください。

本拠点では、拠点形成を進める上で改善すべき点を検討するために、外部の研究者に依頼し、点検・評価を実施している。前年度の点検・評価の結果は、概ね良好な評価を得た。なお指摘を受けた改善すべき点については以下のように対応した。

第1に「非文字資料」という用語のわかりにくさが指摘されたが、これについては概要、ニューズレター、ホームページ等で平易な解説をつけるなどの工夫をした。

第2に、外部研究者の協力が必要ではないかという点については、すでに事業推進担当者の他に学内外の研究者20名を共同研究員として迎えているが、さらにCOE教員3名を採用し、また研究の進展にあわせて、適宜必要な専門家を調査研究協力者として参加させており、十分対応できる条件は整えられている。

第3にデータベース構築のための要員を確保すべきという指摘があった。これに対しては本年度より専門技術者を確保するなどによって体勢の整備を進めている。

第4に、拠点の基礎となる各研究科・研究所の連携強化の必要性が指摘されたが、各研究科・研究所会議等においてCOE情報を報告し、情報の共有化を図るなど、COEの研究成果が、各組織の強化に結実するよう努めている。

第5に、限られた年数を考慮して研究課題を見直す必要があるという指摘があった。この点は、研究の進展状況と、5年後のCOE終了後の展開を見据えて、常に検討を加えていくことにしており、そのために外部評価も毎年度実施することにした。

第6に、若手研究者育成のプログラムが外からはみえにくいと指摘された。これについても各若手研究者の研究課題の明確化と公表、研究成果発表の義務化など、募集要項の明確化を含めて対応することを考えている。

以上のように、改善点を検討し、適切な対応をとるための体勢は整えられており、これまでも適切に対応してきている。

研究を通じた人材の育成は、研究の性格上、明白な結果が出るには時間がかかるが、招聘した外国人若手研究者との交流の活性化など一定の成果を挙げていると考える。また、「非文字資料の体系化」というテーマは、国際的にも、国内的にも極めてユニークなテーマであるので、国内外学界での注目度は高い。特に、かつての日本と同じような経済の高度成長によって社会・文化の大きな変化を遂げつつある東アジア地域では、文化の保存と社会変動の問題を考える先例として本拠点の研究成果が注目されている。普遍性を持った方法論の提起によって、それら諸国の文化維持・発展に資するところが少なくない。さらに、地方自治体との協力の下、地域に密着した研究・情報発信のモデルを構築することによって、社会貢献の実をあげられると考えている。

④その他(学内外に対しどのようなインパクト等を与えたかについて、具体的かつ明確、簡潔に記入してください。)

「非文字資料の体系化」というテーマは、これまで比較的研究対象に取り上げられてこなかった画像・身体技法・感性・環境・景観などに焦点をあわせているため、文化人類学・民俗学・歴史学等の各学界で注目されているが、それらの事象を実際に扱うことが多い博物館関係者からは特に大きな反響があった。現地調査の際、新聞等に報道されるなど、社会的関心も集めている。また、国際的にも関心は高く、中国、カナダ、ブラジルの大学研究機関の代表者が、本拠点を訪問している。特に、東アジア各国の研究者からも、方法論の提示を含め、大きな期待が寄せられている。若手研究者の招聘制度は、中国、韓国からは積極的に利用されており、すでに5名の若手研究者が本拠点の事業に参加していることでも、そのことは明らかである。研究は、ようやく本格的展開を迎える段階に達したが、今後の研究成果の発表によって、こうした注目に応えようと、非文字資料研究のさらなる深化と拡大に貢献したい。

大学内においても、研究活動の展開に大きな刺激を与え、特に共同研究の気運が盛り上がってきた。大学として、従来の研究所体制に加え、共同研究支援のため学長の下に「総合学術研究支援委員会」を平成17年度に設置することを決定した。また、共同研究の活性化のために、従来からあった大学独自の共同研究助成金の制度を拡充し、「学内版COE」として運用することになった。さらに、大学の所蔵する資料・文献の重要性についての認識も高まり、それらの整備・公開に向けての取り組みも、図書館を中心にして強化されつつある。すでに開設されているバーチャル自然史博物館や常民参考室は、さらに充実を目指すことになり、大学が所蔵する文化遺産を公開し、研究成果を発表することによって大学と社会を結び、社会全体の文化水準の向上に寄与するという課題にも自覚的に取り組む体勢が整いつつある。

様式 2

7. 研究活動実績

①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名

(事業推進担当者(拠点リーダーを含む)が2003年~2004年に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文名、著書名、学会誌名、巻、号、最初と最後の頁、発表年(西暦)の各項目について記入してください。)

(下記のうちで、主な発表論文の抜刷(A4版)を3編程度添付し、添付した抜刷の右上に赤字でそれぞれに「拠点番号-1」「拠点番号-2」「拠点番号-3」と記入するとともに、下記にも明記してください。)

- (注1) 本プログラムが刊行している『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』については『年報』と、神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料『環境と景観の資料化と体系化』については『調査研究資料』と略した。
- (注2) 執筆者名の前に付した①~⑤は、添付した抜刷の番号を示す。

福田アジオ「生活図像資料と文献書誌データベースの作成」『年報』第1号、6-12、2004年
 福田アジオ「歴史のなかの民俗・民俗のなかの歴史」『歴史民俗資料学研究』第9号、35-43、2004年
 ①福田アジオ「図像資料としての素人絵—生活絵引き編さん資料としての可能性—」『年報』第2号、1-16、2004年
 川田順造「感性の諸領域、とくに匂いの文化についてのフランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査」
 『年報』第1号、27-35、2004年
 川田順造“Reflexions sur les rapports dynamiques entre les cultures sonores d’une part, et la cognition historique et sa représentation d’autre part: cas des sociétés de l’intérieur de l’Afrique occidentale”
Cultures sonores d’Afrique III、5-26、2004年
 川田順造『人類学的認識論のために』岩波書店、2004年
 ②川田順造「メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告—人力運搬法と座法を中心に—」
 『年報』第2号、219-238、2004年
 中村政則「20世紀・日本史学史の里程標」『歴史評論』第646号、61-67、2004年
 中村政則「自分史・地域史・国民史」『長野県飯田市地域史研究所年報』2、7-18、2004年
 中村政則「歴史学という学問」『歴史民俗資料学研究』第9号、25-33、2004年
 西 和夫「1枚の写真と23枚の絵—東京下落合の歴史を探る—」『年報』第2号、62-73、2004年
 西 和夫・吉池美奈・山田由香里「棟札・絵画資料等による益富家住宅建設年代の検討」『日本建築学会学術講演梗概集』、171-172、2004年
 河野通明「東北地方の木摺臼の全域調査—身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み—」『年報』第1号、36-45、2004年
 河野通明「長谷川雪旦筆『四季耕作図屏風』の基礎的検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集、269-302、2004年
 河野通明「在来農具の分布から見た東北地方」『年報』第2号、94-109、2004年
 小馬 徹『『さかい』の論理と『あいだ』の論理—言語の人類学的側面』『歴史と民俗』第20号、49-78、2004年
 小馬 徹「ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語—仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ—」『年報』第2号、125-135、2004年
 香月洋一郎「海人のむら民俗誌から(上)」『歴史と民俗』第20号、167-198、2004年
 ③香月洋一郎「集落景観分析への一試論」『調査研究資料』1、1-76、2004年
 鈴木陽一「中国の図像についてのノート」『年報』第1号、20-23、2004年
 佐野賢治「“非文字資料”と地域社会—福島県只見町の民具保存活用運動—」『年報』第1号、159-168、2004年
 佐野賢治「納西族文化の象徴・東巴文字」『アジア遊学』第63号、64-72、2004年
 佐野賢治“Ethnical Acceptations of the Ksitigarbha Belief: On the Afterlife Concepts of Asian Peoples”
Cultural Diversity and Common Values Korean National Commission for UNESCO、140-160、2004年
 富井正憲・藤田庄一・中島三千男「旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告」『年報』第1号、126-157、2004年
 富井正憲・中島三千男・大坪潤子・サイモン・ジョン「旧南洋群島の神社跡地調査報告」『年報』第2号、239-322、2004年
 中島三千男「海外神社跡地に見る景観の変容」『調査研究資料』1、161-236、2004年
 廣田律子「中国石郵村の追儺行事に登場する鬼と翁の身体技法に関する調査」『年報』第1号、46-54、2004年
 廣田律子「中国の善鬼—江南の仮面劇から—」『アジア遊学』第59号、59-67、2004年
 廣田律子「中国湖南省新寧県瑶族『盤王節』調査報告」『年報』第2号、323-339、2004年
 田島佳也「蝦夷地の鱈漁業と文化財」『月刊文化財』第493号、34-37、2004年
 山口建治「『散楽』の語義の変容—『散楽』日本伝来に関わって—」『年報』第2号、136-142、2004年
 孫 安石「上海的無線广播与日语大東広播電台」上海市档案馆『租界里的上海』上海社会科学出版社、121-130、2003年
 ジョン・ボチャリ「『絵巻物による日本常民生活絵引』英訳の課題と問題点」『年報』第1号、1-5、2004年
 北原系子・原信田實「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『年報』第1号、62-104、2004年
 北原系子「災害の社会像」『1855 安政江戸地震報告』中央防災会議、43-125、2004年
 北原系子“Review: Exhibition on <Documenting disaster: natural disasters in Japanese history1703-2003>”
Annals of Geophysics Vol.47、909-911、2004年
 ④北原系子「災害と写真メディア—1894年庄内地震のケーススタディー—」『調査研究資料』1、77-126、2004年
 ⑤齊藤隆弘「デジタル画像処理による古い映像フィルムの修復とデジタルフィルムアーカイブの構築」『年報』第1号、169-187、2004年

様式 2

②国際会議等の開催状況

(開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度)の情報について記入してください。)

当初2年間は、調査・研究自体の遂行に重点を置いたため、国際会議等は実施しなかった。しかし、COEの研究成果の一部を公開するため、平成16年11月13日、本学において日本常民文化研究所主催の常民文化研究講座「わざ・こころ・からだ——芸能の継承と現状」を実施した。参加者は約150名、うち外国人は10名であった。講演者として、日中伝統戯劇交流促進会会長で京劇研究者である靳飛氏、観世流能楽師の関根祥人氏、昭和女子大学名誉教授で日本の芸能研究の第一人者である後藤淑氏等5名を招待した。講座では、講演のほか、モーションキャプチャーによる身体動作解析の成果も発表され、会場の注目を浴びた。

8. 教育活動実績

(博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組み等(名称、対象、具体的内容(簡条書きで列記)、選考方法、支給額等)について記入してください。)

PD・RA制度の確立、派遣・訪問研究員の制度化、大学院博物館資料学コースの開設など、研究と教育の一体化による世界水準の研究者養成の具体化を一歩進めた。

① **COE研究員(PD)** この制度は、課程博士学位取得者・論文博士提出予定者が世界水準の研究者に成長することを支援するために設けたものである。35歳未満の若手研究者を公募により採用し、日本学術振興会特別研究員に準ずる待遇(月額376000円)を与え、研究に専念できる条件を整え、調査・研究会参加、年報執筆など研究上の便宜を図った。全国から8名の応募があり、研究推進会議において厳密な書類審査の上、拠点形成委員会の議を経て、他大学学位取得者1名を含む3名を採用した。

② **COE研究員(RA)** 本制度は博士後期課程の学生を在籍のままCOE研究員として採用し、事業推進担当者の指導の下、研究に従事させ、高度の研究能力を身につけさせるために設けられたものである。歴史民俗資料学研究科は、非文字資料の調査・研究の体系化に関し、日本で唯一の大学院博士後期課程を持ち、同じく外国語学研究科中国言語文化専攻は口承・芸能分野の研究に多大な成果をあげてきた。この学内の二つの研究科を対象にして公募し、書類審査、拠点形成委員会の議を経て、5名を採用した。研究員は、時給1500円、研究旅費など研究に要する費用の実費支給、研究会参加、年報執筆など研究の便宜が与えられている。

③ **派遣・訪問研究員** COE研究員には、派遣研究員として、海外学術調査を始め、海外提携研究機関へ派遣して、研究実績を積み重ねることに努めた。PD1名を中国・北京師範大学に派遣し、都市景観の現地調査に従事させた。韓国(延世大学)、中国(北京師範大学・華東師範大学・浙江大学)、ブラジル(サンパウロ大学)の提携機関から若手研究者5名を訪問研究員として招き、それぞれ事業推進担当者の指導の下、現地調査・資料収集などを行わせた。それぞれ多方面にわたる成果を挙げ帰国した。今後、派遣・訪問期間の長期化を検討している。

④ **博物館資料学コースの開設** COEプログラムに連動させ歴史民俗資料学研究科では、平成16年度からカリキュラムの大幅な改定を行い、従来の文献史料学と民俗民具資料学の2つのコースに加え、博物館資料学のコースを新設した。これは、世界の資料保存機関専門家と対等な立場で資料についての交渉や研究交流ができる、高度な専門的知識を有する学芸員の養成を目指すものである。博物館資料学をCOE特任教授1名、博物館情報学と博物館展示学をCOE非常勤講師2名がそれぞれ担当している。

また、国内外の博物館・学芸員養成制度の調査のためPD・RAを事業推進担当者とともにアメリカ合衆国・フランスに派遣した。歴史民俗資料学研究科では博物館研究会も発足し、RAを含む学生を主体に研究活動が行われている。

⑤ **国際的コミュニケーション能力の向上** COEプログラムとの関連の下、歴史民俗資料学研究科のカリキュラムの改定では、選択必修科目に英語、中国語、日本語(外国人留学生対象)のネイティブスピーカーが担当する科目を開設し、国際会議などで活躍できる大学院学生育成の一助とした。外国語学研究科中国言語文化専攻では、中国上海市の都市景観ビデオを研究協力校と協同の下に、完成させ現地で大きな評価を受けた。

⑥ **日本常民文化研究所特別研究員** COEプログラムの拠点の一つである日本常民文化研究所では、博士後期課程退学者及び学位取得者を対象にして特別研究員の制度を設け、調査・研究の支援・便宜を図っている。現在7名が採用されている。所蔵されている画像・写真・民具資料や文書資料を利用しての、研究を支援している。また、日本常民文化研究所常民参考室の企画に参画し、展示手法・文化情報発信の開発の試みに参加するなど、COEプログラムと連携しつつ、教育研究実績をあげている。

⑦ **教育の成果** 本COEプログラム採択後の教育環境の下で、歴史民俗資料学研究科では2名の院生が新たに課程博士の学位を取得した。いずれも民俗民具研究分野の課程博士であり、本プログラムによる人材育成の成果があらわれたものである。PD1名の学位論文は平成16年に著書として出版社から公刊された。PDやRAの論文・調査報告などの研究成果は、レフェリー制度をとる『年報 人類文化研究のための非文字の体系化』1・2、『歴史民俗資料学研究』9・10に主に掲載され公開された。なお、この間、課程博士修了者1名が岐阜市立女子短期大学国際文化学科に専任講師として採用され比較文化・民俗学担当教員として活躍し、中国言語文化専攻の課程博士修了者1名も本学の専任講師として教育研究に当たっている。日本常民文化研究所特別研究員のうち、1名はこの4月より民俗学担当助教授として国内の大学への採用が内定している。

様式 2

9. この拠点形成計画に関連した研究費				
事業推進担当者(拠点リーダーを含む)及び拠点となる専攻等が2003年から2004年に交付を受けた研究費(科学研究費補助金、その他の省庁・研究助成法人・民間企業等からの研究費を含む。)のうち、主なものを記入してください。				
研究費の名称	期 間	研 究 課 題 等	交付を受けた者 (研究者名又は組織名)	研究経費(総額、千円)
科学研究費	2003～2004	中国江南沿海村落の民俗誌的研究	福田アジオ	13,130千円
科学研究費	2003～2004	織豊期発給文書の史料学的研究	三鬼清一郎	1,000千円
科学研究費	2003～2004	不完全観測データからの高品質共有型リアル 三次元映像空間表現の作成に関する研究	齊藤 隆弘	3,800千円
福岡市教育委員 会受託研究	2003	福岡城跡表御門等関連遺構建物調査業務	西 和夫	525千円
長野市教育委員 会受託研究	2004	平成16年度松代城下町建造物調査	西 和夫	700千円
独立行政法人 日本学術振興会 受託研究	2004	人文学分野に関する学術動向の調査・研究	佐野 賢治	2,500千円
株式会社東芝 受託研究	2003～2004	情報源符号化に関する研究	齊藤 隆弘	1,000千円
株式会社富士通 研究所受託研究	2003	画像品質エンハンスメント技術に関する研究	齊藤 隆弘	500千円
総務省情報通信 政策局受託研究	2003～2004	映像が生体を与える悪影響を防止する技術	齊藤 隆弘	1,400千円
LG電子株式会社 受託研究	2004	PDPに応用できる動き検出方式とその最適化	齊藤 隆弘	200千円
日本私立学校振 興・共済事業団学 術振興資金	2003～2004	山城国大山崎荘の総合的研究	日本常民文 化研究所	3,840千円
科学研究費(研究 成果公開促進費)	2003～2004	日本常民文化研究所デジタル資料群データベ ース	日本常民文 化研究所	20,400千円

【非公表】

様式 2

10. その他
このページは、非公表のページです。公表されると支障が生じると考えられるが、拠点形成を推進する上で特に必要な事項について、具体的に記入してください。

現時点では、指示されている、公表されると支障が生じると予測される事項は本プログラムには存在しない。

中間評価結果通知書

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択) 中間評価結果

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

本研究教育拠点形成計画は、日本常民文化研究所の調査研究の蓄積を踏まえて、新たな構想の下に設置された歴史民俗資料学研究科の研究者養成の実績を基礎に、文字に表現されない人間活動の資料化とその体系化を行うことで、人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的としている。

本プログラムは重要な課題に挑戦しており、個々の活動分野については顕著な進展が見られ、生活絵引の資料化や実験展示等にその成果が結実していて、評価できる。体系化は段階的になされるのは止むを得ないが、今後、各分野における資料の体系化から、プログラムとして当初期待した統合的な「体系化」へとさらに進展が見られることが期待される。

人材育成に関しては、その理念をより明確にして、社会的要請に応えられる博士の学位をより多く授与する努力が必要であると考えます。

進捗状況報告書（中間評価後修正変更版）〈抄録〉

様式 2

5 拠点形成の目的等

[1. 学問分野]

本事業の推進担当者は、文化人類学・民俗学・歴史学・建築史・情報環境工学・災害情報論を専門とする。他に共同研究員として地理学・博物館学・美術史の専門家の協力を得ている。これらの専門家の学際的協力によって、人類文化の総合的把握のために、非文字資料の収集・整理・情報発信の方法の確立を目指して研究を推進している。

[2. 目的]

社会・人文諸科学の研究対象は人類文化の総体であるが、従来、実際の分析対象は文字・文章で表現された事象に限定されてきたきらいがある。しかし、人間諸活動の表現形態は、文字・文章にとどまらず、図像、身体技法・感性、環境・景観など多様な形態をとっている。本拠点は、これら文字に記されてこなかった事象を資料として定着させる方法を開発し、体系的に整理するとともに、その解析方法を開発し、その成果を世界に向けて発信する、非文字資料研究センターを目指す。

[3. 計画：当初目的に対する進捗状況等]

本拠点においては、当初2年間は、研究対象資料の所在調査および収集・整理、解析方法の確定、所蔵資料の活用方針の策定、情報発信の技法の開発に関する動向調査等、今後の拠点形成の展開の基礎となる事業の推進に重点を置いてきた。もちろん、すでに研究蓄積のある分野では、それをさらに発展させる研究も遂行し、その成果を公表してきた。その結果、図像、身体技法・感性、環境・景観のそれぞれについて集積すべき資料の確定、収集・整理、資料化の方法の確立という課題は達成しつつあり、非文字資料の体系化の理論構築の段階に入った。情報発信についても、実験展示・地域統合情報発信を軸として、国際シンポジウムなど積極的な取り組みを開始した。

[4. 特色]

本拠点の特色は、非文字資料を中核とした人間諸活動の総体に関わる資料群を調査・研究の対象にし、それらの資料群の相互関係を体系的に捉える点にある。こうした事業は、人文・社会諸科学の学際的研究・調査を推進してきた日本常民文化研究所の長年にわたる実績と資料学を専門とする全国唯一の歴史民俗資料学研究科を基礎としてはじめて展開できる。さらに、情報工学との結合によって、資料整備・情報発信の方法においても新しい方法を提示できる。

[5. 重要性・発展性]

地球規模で相互関係が展開している今日、異文化間の相互理解の促進が重要な意味を持つことはいうまでもない。本拠点の事業の成果によって、人類文化の生活に密着した最も根底的なレベルで、自らの文化の理解を深めると同時に、国際的相互理解の可能性を飛躍的に高めることができる。非文字資料群の体系化は、特定の文字・言語に拘束されないが故に普遍性を有し、人類文化に等しく適用できる方法として世界に提供できる。

[6. 終了後の成果]

全般にわたる成果の中心は、非文字資料の体系化に関わる普遍性のある方法論の提示である。具体的・個別的には、i『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳を基本としたマルチ言語版、ii『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』、iii 身体技法・環境・文化情報発信に関する研究成果報告書などの刊行、iv 図像・写真・民具などの資料及び文献に関するデータベースの作成と公開、v 非文字資料の収集・整理・公開システムの開発、vi 高度専門職学芸員養成システムについての提言書の作成、vii 海外研究機関・研究者のネットワークの形成、viii PD・RAの研究成果論文集の刊行などである。

[7. 学術的・社会的意義など]

近年、図像を中心とした非文字資料は、文化人類学・民俗学・歴史学などの分野で研究が推進されるようになってきたが、動作・感性・景観などを含めた資料群については、その体系化・活用法についての理論は未確立である。その意味で、非文字資料の

収集・体系化を進めることは、学際的研究・文化比較の深化等学術的に重要な意味を持つ。また、収集・整理の成果は、人々の日常の生活記録として文化遺産の重要な一部となる。また、その成果の新技術の応用を含む展示・公開によって、人々に普通の生活の価値を再発見させ、自己認識を高めさせることができるばかりでなく、国際的相互理解の可能性を広げるといふ点でも大きな社会的意義を有する。

6 中間評価結果について

本プログラムに対する中間評価では、先ずコメントとして、本プログラムは「重大な課題に挑戦しており、個々の活動分野については顕著な進展が見られ、生活絵引の資料化や実験展示等にその成果が結実していて、評価できる」とされた。

本プログラムは、この評価を受けて、さらに非文字資料の体系化に向けて邁進することになっている。具体的には、文字に表現されない様々な事象のうち、図像、身体技法、環境・景観の三つに絞って資料化し、体系化し、発信するが、図像、身体技法、環境・景観の資料は所与として存在するのではなく、非文字事象として見られるものから一定の指標と方法に基づいて選択し、定着させることで資料となるという認識のもとに、研究を進めてきた。この資料化自体が研究の大きな部分を占めてきたが、残り2年間で調査研究で蓄積した資料を人類文化研究に資するために公開する。

またコメントにおいて、「今後、各分野における資料の体系化から、プログラムとして当初期待した統合的な『体系化』へとさらに進展が見られることが期待される」とされた。

これに対しては、4年度と5年度は蓄積した資料の体系化に向けて取り組む段階と位置づけ、個別分野の研究成果と共に、その全体を総合し、体系化することを大きな目標として設定している。そのために組織変更その他の新たな取り組みをすでに3年度目から始めている。

さらにコメントでは、「人材育成に関しては、その理念をより明確にして、社会的要請に応えられる博士の学位をより多く授与する努力が必要であると

考える」という厳しい指摘を受けた。

若手研究者の育成は、本プログラムにおいても当初より重要課題と位置づけ、取り組んできた。COE採択後、学位取得者は増加しており、しかも学位取得者の学位論文が出版社から相次いで刊行され、また研究機関への就職も増大している。その点では、本プログラムの取り組みは稔りつつあるといえるが、さらに一層の努力をすることとし、そのための方策も検討している。

特記事項の〈留意事項〉において、「2年間の成果をもとに、体系化についての最終的な形態（成果刊行物、データベース、展示など）を明確にして、組織を再編し、とくに全体の有機的連携を会議・委員会のレベル以上に考えることに留意して、一層の努力をされたい」と具体的な取り組みの方向について指摘を受けた。

本プログラムは、図像、身体技法、環境・景観そして情報発信という4つの大きな課題を設定して、それぞれに適切な人員を配置し、調査研究を行ってきたが、4年度目・5年度目にはそれらを統合し、体系化を行って情報発信することを目指している。指摘を受けたように、今まではややもすると会議・委員会レベルでの統合や体系化の検討であったが、今後実質的な研究として統合と体系化を図るために組織を大きく変更した。すなわち、図像、身体技法、環境・景観それぞれの個別課題を追究し、成果に結実させる活動に加えて、三者を統合する研究組織として、地域統合情報発信、実験展示、理論総括という3つの班を編成した。すでにこの3つの班は活動を開始し、最終的な成果への展望を獲得しつつある。

また、本プログラムの一部の活動について、「基礎作業項目の連関が明らかになったとは言いがたく、たとえば、身体技法の研究位置づけが曖昧なままに残されている。経費の多くが身体技法・感性プロジェクトのモンゴル、南アメリカ外国出張に費やされていて、プログラムの目的との関係について明確に示す必要がある」という指摘があった。

確かに、指摘されるような、課題間、また課題内の担当者間の相互理解が十分でなく、関係性や関連性が曖昧なまま進められてきたことが、一部にあっ

たことは否めない。その点、拠点リーダーを中心に強力に是正のための指導を行っており、問題は解消しつつある。ただし、指摘にある、特定の研究活動が経費の多くを費やして海外出張をしているという事実はなく、その点では必ずしも指摘はあたらないと考えているが、海外出張を含め、調査研究活動とプログラムの達成目標との関係やその効果についてはより厳しく判断し、当事者にも指導するようにする。

留意事項として「リーダーシップを発揮して、このプログラムにおける『研究』の意義を改めて問い直し、実現可能な組織で残りの期間を邁進していただきたい」とも勧告された。

拠点リーダーを中心とした研究遂行に責任をもつ者の組織である研究推進会議は、単なる調整機関ではなく、研究全体を掌握し、指導するという役割を強化し、4年度目の予算編成にはその査定を含めて強力な指導を行った。また、最終的な体系化の成果を情報発信するための方法についても指示を与えている。

上記と関連するが、〈参考意見〉として記された、「リーダーがプログラムの体系化について何らかの形でイメージを提示することが望まれる」を受けて、各種会議や研究会において積極的にその方向性について主張、判断、指示を示すようにしている。また4年度目の開始にあたり、プログラムの理念とその達成目標を研究担当者全員に徹底することとしている。

様式 3

6-1 研究拠点形成実施計画 (平成17～19年度)

本プログラムは、旧来総合的に取り込まれることがなかった、文字で表現されることのない様々な人間活動を把握し、資料化する方法を開発し、それに基づいて各種形態の非文字資料を集積するところから開始した。前半2年間は本プログラムが重点的に対象とする画像、身体技法・感性、環境・景観について、課題別に編成した3つの班が担当し、主としてそれぞれ人間活動を把握する調査を行い、その資

料化に力を傾けてきた。その結果、資料として集積できる事象がほぼ明らかになり、また資料化する方法も確定させることができ、多くの資料をすでに集積した。17年度から始まる後半の3年間は、それら集積した資料を解析すると共に、解析の新たな方法を作り出し、またそれぞれの集積した資料から描き出すことができる人類文化の具体的様相を情報として世界に発信することが課題となる。この課題を具体化する研究計画は以下の通りである。

[1] 画像資料については、本プログラムの計画策定の前提となった、世界的に類例がなく、その点で世界に誇るべき『絵巻物による日本常民生活絵引』を前提に、それを人類共有の財産にするための英語を中心としたマルチ言語版の編纂刊行を達成し、海外の画像資料研究者や日本研究者に届け、広く研究に活用してもらおう。あわせて、それをモデルに世界各地で同様の絵引が編纂されるようにする。次に、日本の古代・中世を基本とする『絵巻物による日本常民生活絵引』に対して、続編ともいうべき『日本近世・近代生活絵引』の編纂を進め、その一部の刊行を開始する。また、『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の手法を東アジアの画像資料に適用して『東アジア生活絵引』編纂のための資料収集と解析を進め、試案本を作成し、その一部を印刷刊行して、広く世界に提供すると共に、データベースとして公開する。これらの編纂過程で獲得した知見の一部は、画像文献書誌情報データベースとして公開しているが、さらに方法的一般化を進め、画像資料の研究法として発信する。

[2] 身体技法・感性については、事業推進担当者の長年の研究蓄積が前提にあって計画が策定されているが、今までほとんど手つかずであったアジア大陸の内陸部および中南米における身体技法について詳細な人体計測をも含む調査を実施した。今後その分析を進め、コーカソイド、ネグロイドそしてモンゴロイドという人類3大集団における身体技法の相違と共通性を明らかにし、身体技法を人類文化の問題として位置づける。あわせて、東アジアにおける身体技法について、日本および中国における芸能の所作をCGあるいはモーションキャプチャを駆使し

ての把握を進め、東アジアの身体技法の特質を明らかにする。また身体技法と用具との関係性を、日本各地における調査によって明らかにすると共に、そこに示された日本列島における文化形成の過程を明らかにする。感性の領域については、身体技法の調査に際してあわせて把握し、その資料化を試みてきたが、予想以上の方法的困難さがあるため、成果の発信は将来の課題とすることとした。

[3] 環境及び景観については、基本的には人間の行為そのものの把握ではなく、行為の結果として刻印された事象を把握し、その刻印の様相を人類文化研究に貢献する資料として世界に提供しようとするものである。その第1の課題は、拠点の一つである日本常民文化研究所が所蔵する約70年前に撮影された多くの映像資料（写真・映画フィルム）を活用し、それと現在の状況を比較検討することを通して環境・景観の変化の跡をおってきたが、その時系列比較分析を進め、完成させる。また人々の環境認識をも把握することで、対象としての環境の理解もより一層深まる。そのため、特定の地域において実施している定点調査を継続して、環境認識と環境との関係性について明確にする。そして、環境と人間との関係がもっとも深刻な形で出現する災害について、災害とそれに対応した人々の行為が環境に如何に刻印されたかを日本各地で明らかにし、その研究法を提出する。あわせて、異文化地域において人間活動を行った場合の、環境への刻印の仕方について、かつて日本が統治した北東アジアや太平洋地域で調査を重ねてきたが、それをさらに進めて、今まで明らかにされなかった様相を明確にすると共に、そこから獲得される研究方法を発信する。

[4] 以上の3つの研究課題を残る2年間で遂行すると同時に、第4班を改組して、理論総括、実験展示、地域統合情報発信の3つの班を横断的に組織し、これまでの成果を総合して、新たな情報として統一的に発信する。理論総括班は、人類文化研究のために文字資料との関係をふまえて非文字資料を体系化する理論の構築を目指す。地域統合情報発信班は、福島県只見町を舞台に、図像、身体技法、環境・景観を中心とする非文字資料を統合した新しい情報発

信の方法を開発し、その実現を図るとともに、非文字資料の総合的な保存・管理・活用について新しい方式を提出する。また、その活用法の一環として非文字資料の新たな展示方法による実験的展示を行い公開する。さらに図像、身体技法・感性、環境・景観を対象とした各研究活動の成果をデータベースとして構築し、広く世界に発信する。

本プログラムは、5年間で解消するものではなく、むしろ5年間の成果を基礎に、世界的な非文字資料研究センターとして活動を続けることを構想している。5年間の蓄積はその活動のなかでよりはっきりと示され、人類文化研究に大きく貢献することになるものと考えている。

6-2 年度別の具体的な研究拠点 形成実施計画

平成17年度

1 図像資料の体系化については、第1に、『絵巻物による日本常民生活絵引』の読み取り解説文の英語訳、絵引事項の英・中・韓・仏語訳を完了し、マルチ言語版の編集作業に入る。第2に、『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』試案本のそれぞれ編集を終えた。図像文献書誌情報データベースを作成し、ホームページ上で公開した。

2 身体技法・感性の資料化については、2年間で獲得した具体的なデータ、特に内蒙古と中米におけるデータの解析を進めた。また同じく調査を実施した中国のデータを身体技法の映像解析資料として位置づけるためモーションキャプチャによる実験的作業を完成させつつある。さらに身体技法と用具との関係性について詳細なデータを獲得するために、東日本を中心に調査を実施し、解析した。

3 環境と景観の資料化については、約70年前に撮影された澁澤敬三映像資料の現状との比較研究を通して映像資料による景観の時系列的研究を行った。さらに、環境に刻印された人間活動の足跡や自然災害の痕跡等の解読方法の開発をすすめ、韓国・台湾・日本各地で調査を実施した。

4 情報発信は、文字資料と非文字資料の両者をあわせた資料収集・整理・保存システムの構築のため

の調査地を福島県只見町に設定し、地域統合情報発信のためのデータを収集した。また、実験展示の試みにとりくみ、そのための作業班を発足させた。

5 研究員としてPD 3名、RA 5名を採用し、調査研究活動に参加させ、研究経験を積ませると共に、短期ではあるが自らの研究のために海外へ資料調査に派遣した。

6 前年度までに提携した海外研究機関との情報の共有化を中核とした研究協力を推進した。

7 COE教員（特任教授及び非常勤講師）を継続採用し、研究の一層の推進をはかると共に、歴史民俗資料学研究科の教育・研究指導の充実を行った。

8 今までの研究成果を世界に広く報告するための国際研究集会・シンポジウム等を開催した。また引き続き研究年報、ニューズレターを刊行し、シンポジウムの報告書を作成している。

平成18年度

1 図像資料の体系化については、『絵巻物による日本常民生活絵引』マルチ言語版を印刷刊行する。また前年度に完成させた『日本近世・近代生活絵引』、『東アジア生活絵引』中国編・韓国編の試案本を検討し、作成上の問題点をクリアした上で、一部を印刷刊行する。

2 身体技法と感性の調査を引き続き中国・韓国および日本で行い、前年度までに獲得した方法によって比較研究を行う。また身体技法と用具との関係性について、西日本を中心に調査を行う。

3 環境・景観の資料化については、前年度に引き続き、映像資料による景観の時系列的研究を行い、当初目的を完成させる。また環境認識に関する定点調査および環境に刻印された人間活動の足跡調査を前年度からの継続として行う。水害と環境に関する調査を、大規模被害地域で実施する。また、収集したデータを調査研究資料シリーズとして刊行する。

4 新たに編成した理論総括班を中心として、文字資料との関係も含め、非文字資料体系化のための理論構築を行い、人類文化研究のための新しい視座の獲得につとめる。

5 只見町との提携の下に、データの収集・集積に

努めると同時に、各種データを統合した新しい情報発信の方法を開発し、地域統合情報発信の具体化を図る。

6 集積した非文字資料の活用法の一環として、新たな展示方法による実験的展示の試みのために展示計画を策定し、最終年度の公開に向けた具体的準備を行う。

7 若手研究者の育成を強力に進めるため、PD・RAの採用を前年同様行い、研究成果を挙げられるように支援する。特に、海外への調査研究活動を奨励する。

8 海外提携研究機関と研究成果の交換、共有の仕組みを作り上げる。

9 COE教員を継続採用し、研究及び拠点の教育を充実させる。

10 研究成果を世に問うため海外からも研究者を招聘して国際シンポジウムを開催する。引き続き、研究年報、ニューズレターなどを刊行する。

平成19年度

1 図像資料の体系化の成果として、『日本近世・近代生活絵引』の刊行を開始すると共に、『東アジア生活絵引』中国編・韓国編を引続き印刷刊行する。またそれらの基礎データを図像資料データベースとして作成公開する。

2 「身体技法・感性の比較と人類文化」、「非文字資料としての環境・景観」、「非文字資料の文化情報化」（以上いずれも仮題）を含む研究成果報告書『人類文化研究のための非文字資料の体系化』を印刷刊行する。

3 「澁澤映像資料」「環境認識」「地表に刻まれた人間活動及び災害情報」「芸能にみる身体技法」（以上いずれも仮題）のデータベースを作成公開する。

4 集積した非文字資料を活用した実験的展示を行う。また、只見町における地域統合情報発信を展開する。

5 高度専門職学芸員養成方法についての提言書を作成発表する。

6 前年同様、PD・RAを採用し、研究を支援する。

7 若手研究者の育成成果を示す5年間のPD・RAの研究結果論文集を印刷刊行する。

8 5年間の研究成果を総括するための国際シンポジウムを開催すると共に、その記録を報告書として印刷刊行する。

9 非文字資料研究センターとして活動を続けるため、5年間に集積した資料の整備を行う。

7 教育実施計画

各拠点相互の連携を一層強化し、研究と教育の一体化による世界水準の研究者の養成、及びその裾野としての幅広い専門的職業人の訓練、また世界各国の大学院生及び研究者の受け入れによる非文字資料研究の国際化を図る。

[1. COE 研究員 (PD)]

PDの専門に応じて、本プログラムの研究課題の一部を担当させ、自立した研究者としての資質の向上を図る。そのために、東アジアおよび欧米の提携研究機関への派遣内容を充実させ、また、期間も出来る限り長期になるよう配慮して世界的水準の研究者に成長することを支援する。平成17年度までに2名を中国・韓国に派遣し、報告書の執筆など研究成果をあげている。その結果、研究員1名が国立大学専任講師に採用され、1名が博士号を取得した。

[2. COE 研究員 (RA)]

博士後期課程院生を在籍のままCOE研究員として採用し、事業推進担当者の指導を受けつつ調査研究に従事させ、実際の資料収集とその解析について専門的スキルを向上させると共に、かつ高度な研究能力を身につけさせる。特に、学位論文作成については便宜を与えると同時に指導を強化する。世界各地の研究者との交流を重視し、一流の研究者に直接指導を受けさせるために、提携している東アジア及び欧米の大学等研究機関に派遣する。平成17年度までに中国に3名、ブラジルに1名派遣した。

[3. 派遣・訪問研究員]

PD・RAを派遣研究員として海外提携研究機関に派遣し、研究を国際的水準にまで高めるため、提携機関の研究者と連絡を密に取り、教育研究指導の内容をさらに向上させる。また、海外提携研究機関

の若手研究者を招いて共同研究を推進する訪問研究員制度についても、同様にその内容を充実させる。本プログラムで開発する非文字資料の資料化の技法とそれによる研究は世界に対してモデルとして輸出可能であり、外国人留学生及び研究員の受け入れは、それを具体化する有力な方法である。歴史民俗資料学研究科ではすでにフランス・中国・韓国からの後期課程留学生、また日本常民文化研究所ではアメリカ合衆国・カナダ・ブラジル・中国・韓国などの若手研究者を外国人研究員として受け入れ、国際的な交流と研究上の協力関係に大きな成果をあげているが、訪問研究員の受け入れはそれを一層発展させることになる。平成17年度までに中国8名、韓国1名、ブラジル2名の若手研究者を受け入れて海外提携研究機関との連携を強化した。

[4. 歴史民俗資料学研究科カリキュラムの充実]

COEプログラムに関連して、平成16年度より改定したカリキュラムの授業内容、特に新設の博物館資料学コースの充実と、ネイティブスピーカーによる講義（英語、中国語、日本語）及び実習科目（博物館実習、民俗民具調査実習等）の整備、向上を図ると共にCOE教員として特任教授1名、非常勤講師3名を任用し、将来を見据えた世界に通用する研究人材の育成に努めている。

[5. 歴史民俗資料学研究科の学位取得の促進]

歴史民俗資料学研究科では、開設以来11年にして、本年度までに11名が課程博士の学位を取得し、また1名の中途退学者が論文博士となっている。そのうちCOEを開始して以後、平成16年度に2名、平成17年度に3名と確実に学位取得者が増加した。また、学位論文の出版刊行が相次ぐなど、内容的にも高い評価を受けている。これは、COEの活動による刺激が効果を発揮したものであり、今後も、学位の取得を促進するために指導を強化する予定である。

[6. 拠点間の提携]

歴史民俗資料学研究科と外国語学研究科中国言語文化専攻との共通科目の開設も検討し、アジア研究の共同性をさらに深化させる。非文字資料の体系的な調査及び研究に関しては日本で唯一の大学院博士

後期課程を持つ歴史民俗資料学研究科と中国の口承文芸・民俗芸能研究に多大な成果をあげてきた外国語学研究科中国言語文化専攻の結合は新たな研究対象、方法を切り開く契機となる。さらに、日本常民文化研究所が蓄積してきた民具・図像・写真資料の分析とあわせ、非文字資料研究に新たな地平を切り開く可能性が期待される。そのためにも日本常民文化研究所の特別研究員とCOEプログラムとの連携をより一層図り、共同研究作業に従事させる。

[7. 高度専門職教育の実施]

従来非文字資料を取り扱ってきた専門的職業人は博物館・資料館などの学芸員であるが、日本の現状では学芸員は非文字資料に対処する理論も方法も体系的に学ぶことなく、経験のみに頼って調査研究に

従事している。日本常民文化研究所では、博物館・資料館の学芸員などの専門職の資質向上に貢献するために毎年講座を開催し、各地の博物館・資料館の専門職員に対して講義と実技指導を行ってきた。さらに、高度専門職学芸員の養成法開発の一環として、客員研究員などに長期の研修制度を設けるなど、この方面を一層充実させることを検討している。また、歴史民俗資料学研究科の博物館資料学コースにおいては、高度な講義・実習科目を開講し、在籍学生のみならず社会人も積極的に受け入れる。それらを通して、博物館・資料館の専門職員の研究能力の向上を図り、また欧米のキュレーターやアーキビストと同等の能力と見識を有する専門家育成のプログラム開発を行う。

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択) 経費関係調書

金額(千円)
千円未満は切り捨てる

＜平成18年度の各経費の明細＞	COE 補助金	学内経費	外部資金 (競争的資金)	計
[設備備品費]	1,704			1,704
・設備備品費				
・図書	1,704			
[旅費]	17,427	100		17,527
・国内旅費	6,416	100		
・外国旅費	6,195			
・外国人招へい等旅費	4,816			
[人件費]	53,550	32,350		85,900
・COE教員	5,877			
・COE研究員	22,728			
・技術者	6,000			
・謝金	18,945	756		
・事務職員		31,594		
[事業推進費]	13,819	30,965		44,784
・消耗品費	1,714	718		
・借料・損料	423			
・印刷製本費	9,125	7,100		
・通信運搬費	1,520			
・光熱水料	59			
・雑役務費	408			
・会議費	480	477		
・委託費		22,670		
・交通費	90			
[その他]				
(平成18年度) 合計	a 86,500	b 63,415	c	a+b+c 149,915

＜平成19年度の各経費の明細＞	COE 補助金	学内経費	外部資金 (競争的資金)	計
[設備備品費]	400			400
・設備備品費	400			
・図書				
[旅費]	16,979	100		17,079
・国内旅費	886	100		
・外国旅費	1,605			
・外国人招へい等旅費	14,488			
[人件費]	41,691	32,350		74,041
・COE教員	5,877			
・COE研究員	22,728			
・技術者	6,000			
・謝金	7,086	756		
・事務職員		31,594		
[事業推進費]	29,930	965		30,895
・消耗品費	4,117	488		
・印刷製本費	17,000			
・通信運搬費	2,200			
・会議費	480	477		
・委託費	6,133			
[その他]				
(平成19年度) 合計	a 89,000	b 33,415	c	a+b+c 122,415

中間評価後修正変更版へのコメント通知書

「21世紀COEプログラム」(中間評価後修正変更版)についてのコメント

機 関 名	神奈川大学
拠点番号・拠点のプログラム名称	J23・人類文化研究のための非文字資料の体系化
拠 点 リ ー ダ ー	福田 アジオ
<p>(コメント)</p> <p>中間評価後修正変更版について、特段のコメントはありません。当初目的が達成されるよう、研究教育活動に努めていただきたい。</p>	

Ⅲ フォローアップ（書面調査）

学振事第125号
平成19年1月29日

神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
拠点リーダー 福田 アジオ 殿

21世紀COEプログラム委員会学際・複合・新領域
[平成15年度採択拠点] 評価部会長 末松 安晴

21世紀COEプログラム 平成15年度採択拠点に対する フォローアップ（書面調査）の実施について（通知）

平成15年度に採択され、平成19年度が標記プログラムの最終年度となる貴拠点に対し、平成17年度に実施した中間評価結果（コメント）を受けての対応・進捗状況等について、事業の目的に沿って研究教育拠点形成計画がより効果的に達成されるよう、その状況を確認するため、このたび、プログラム委員会の決定に基づき、書面による調査を実施することとなりました。

つきましては、別紙【中間評価結果表】に記載の留意事項を踏まえ、進捗状況報告書〔様式2〕・拠点形成計画調書〔様式3〕・経費関係調書〔様式4〕（いずれも中間評価後修正変更版）提出後の進捗状況や、最終年度を向かえるに際しての見通し等を、**WORD**にて作成（様式自由）のうえ、平成19年2月8日（木）までに、プログラム委員会事務局に電子メールにて提出してください。

フォローアップ（書面調査）回答書

（1）中間評価結果への対応とその進捗状況

『「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果』に示されたコメント及び留意事項については、『「21世紀COEプログラム」(平成15年採択)進捗状況報告書(中間評価後修正版)』において、本拠点の対応(考え方と取り組み方針)について記している。今回のフォローアップ(書面調査)では、この進捗状況報告書の記載順に、その後の取り組みと進捗状況および最終年度に向けての展望(予測される最終成果)について記載し、回答とする。

以下では、先ず中間評価結果に記された本文を記し、次いで各項目について、『進捗状況報告書(中間評価後修正版)』に記載した本プログラムの計画構想を転記した。その後に現時点での進捗状況、今後の展望を回答した。

[中間評価結果1]

体系化は段階的になされるのは止むを得ないが、今後、各分野における資料の体系化から、プログラムとして当初期待した統合的な「体系化」へとさらに進展が見られることが期待される。

[進捗状況報告書(中間評価後修正版)]

これに対しては、4年度と5年度は蓄積した資料の体系化に向けて取り組む段階と位置づけ、個別分野の研究成果と共に、その全体を統合し、体系化することを大きな目標として設定している。そのため組織変更その他の新たな取り組みをすでに3年度目から始めている。

本プログラムは、無限に存在すると言っても良い非文字の事象の中から図像、身体技法、環境・景観の三つを選び、それらの資料化を行い、その資料を分析、相互関連付けし、その成果を情報発信して、人類文化研究を進める諸科学に提供し、豊かな人類文化研究に資することを構想するものである。中間評価段階では、三つの事象から資料化することに専

ら研究が集中していた。日本内外でフィールドワークを行い、事象を定着させ資料化することに研究の中心があった。その段階での中間評価であったので、個別調査のみの印象が強かったものと思われる。それに対し、『進捗状況報告書(中間評価後修正版)』において、各資料の統合と体系化を図るために大きく組織変更を行うことを記した。すでに採択時の申請書においても、年次の経過に応じて研究人員を移動させる傾斜配分方式を採用する構想を記しており、それを具体化するため、3年度目の後半から準備に入り、4年度目から実際に新しい研究組織を追加発足させ、研究を進めている。

これまでの組織を再編成して、追加した新しい研究組織は、『進捗状況報告書(中間評価後修正版)』にも記したように、図像、身体技法、環境・景観を統合し発信するための地域統合情報発信班、実験展示班そして理論総括研究班の三つである。地域統合情報発信班は、福島県只見町を対象地域と定め、地元地方自治体の協力の下、図像、身体技法、環境・景観を一つの地域で統合し、体系化して、バーチャルミュージアムとしてウェブ上で発信することを目指している。実験展示班は図像、身体技法、環境・景観を展示という方式で統合し公開することを構想している。展示の手法には様々な実験的な手法を採用し、また展示に求められているバリアフリーのユニバーサルデザインを目指している。理論総括研究班は、図像、身体技法、環境・景観の相互関連を理論的に検討し、統合することを目標としている。特に、文字資料と非文字資料との関係を明確にすることを課題としている。これら三つの班による三つの課題を通して、非文字資料を統合し、体系化して、5年度目にはいずれも成果を発信する。

[中間評価結果2]

人材育成に関しては、その理念をより明確にして、社会的要請に応えられる博士の学位をより多く授与する努力が必要であると考えます。

[進捗状況報告書(中間評価後修正版)]

若手研究者の育成は、本プログラムにおいても当

初より重要課題と位置づけ、特色ある制度を導入して積極的に取り組んできた。COE採択後、学位取得者は増加しており、しかも学位取得者の学位論文が出版社から相次いで刊行され、また研究機関への就職も増大している。その点では、本プログラムの取り組みは稔りつつあると言えるが、さらに一層の努力をすることとし、そのための方策も検討している。

まず、COE研究員制度については、PDを平成18年度まで延べ人数12名（実人数7名）採用し、本プログラムの研究課題の一部を担当させることによって、自立した研究者としての資質の向上を図っている。その結果、研究員1名が国立大学専任講師に採用され、1名が平成19年度より私立大学非常勤講師に就任することが決定している。また、RAとして博士後期課程学生を在籍のままCOE研究員として採用し、調査研究に従事させることによって、収集資料とその解析について専門的スキルを向上させると共に、高度な研究能力を身につけさせている。とくに、学位論文作成については便宜を与えると同時に、指導を強化している。平成18年度までに11名を採用し、そのうち、2名が博士論文をまとめて学位を取得した。

本プログラムでは、これらPD・RAを派遣研究員として海外提携研究機関に派遣し、研究を国際的水準にまで高めるための派遣研究員制度を導入しているが、平成18年度までにPD4名を中国・韓国・カナダ・ブラジルに派遣し、RA5名を中国にそれぞれ派遣した。

次に、本プログラムの研究拠点における若手研究者の育成についてみると、歴史民俗資料学研究科では、平成7年度の博士後期課程開設以来12年にして、平成18年度まで15名が課程博士の学位を取得し（平成18年度取得見込みを含む）、また1名の中途退学者が論文博士となっている。そのうちCOEプログラムを開始して以後、平成16年度に2名、平成17年度に3名、平成18年度に4名（取得見込み）と確実に学位取得者が増加した。学位論文の出版刊行が相次ぐなど、その論文内容にも高い評価が与えられている。これは、COEの活動による刺激

がその効果を生み出したものであり、平成19年度入学試験の博士後期課程志願者が11名（定員3名）と大幅に増加しているのもその影響によるものであると考えられる。他方、外国語学研究科中国言語文化専攻では、平成7年度の博士後期課程開設以来、5名が博士の学位を取得した。現在5名の博士後期課程学生が在籍し、博士論文を準備中である。今後も、学位の取得を促進するために指導をさらに強化する方針である。

[中間評価結果3]

2年間の成果をもとに、体系化についての最終的な形態（成果刊行物、データベース、展示など）を明確にして、組織を再編し、とくに全体の有機的連携を会議・委員会のレベル以上に考えることに留意して、一層の努力をされたい。

[進捗状況報告書（中間評価後修正版）]

本プログラムは、図像、身体技法、環境・景観そして情報発信という4つの大きな課題を設定して、それぞれに適切な人員を配置し、調査研究を行ってきたが、4年度目・5年度目にはそれらを統合し、体系化を行って情報発信することを目指している。指摘を受けたように、今まではややもすると会議・委員会レベルでの統合や体系化の検討であったが、今後実質的な研究として統合と体系化を図るために組織を大きく変更した。すなわち、図像、身体技法、環境・景観それぞれの個別課題を追究し、成果に結実させる活動に加えて、3者を統合する研究組織として、地域統合情報発信、実験展示、理論総括という3つの班を編成した。すでにこの3つの班は活動を開始し、最終的な成果への展望を獲得しつつある。

本プログラムにおいては、平成17年度から始まる後半の3年間は、図像、身体技法、環境・景観の課題別に編成した3つの班によって集積された資料を解析すると共に、その成果を統合して体系化を図ることが主たる課題となる。

その3つの研究課題を残る2年間で遂行すると共に、過去3年間、第4班文化情報発信の新しい技術開発という名称で、総合化・体系化と情報発信を担

う班を組織し、活動してきたものを新たに三つの班に再編成した。特定の地域において総合し、体系化し地域から発信する第4班地域統合情報発信班、展示という方法によって非文字を総合し、発信する第5班実験展示班、そして文字資料をも念頭に置いて理論的に非文字資料を体系化し、情報発信する理論総括研究班の三つがそれである。

まず、第4班地域統合情報発信班は、画像データベース、モーションキャプチャ分析、景観の経年変化解析などの情報処理・発信法を福島県只見町の当該資料により組み合わせ、山村に生きる人々の生活の営みを統合・構造的に体系化する作業を進めている。具体的には、資料のデジタル・コンテンツ化を進め、インターネット上で情報発信するシステム開発に取り組んでいる。

第5班実験展示班は、各班の収集資料を活用し、展示という方式で研究成果を統合して発信するため、「あるく—身体記憶—」とする展示テーマを決め、平成19年11月1日～30日の1ヶ月間にわたる実験展示を開催する。現在、展示構想案、展示設計案を作成して準備を進めている。

第6班理論総括研究班は、各班・各課題の成果を統合して、本プログラムにおいて分析の対象とした画像、身体技法、環境・景観という非文字資料を体系化するために、その理論的考察を行っている。

これらの新たな三つの班は、最終年度の平成19年度には、それぞれ非文字資料の体系化と情報発信の方法に関する研究成果をまとめ、公刊することになる。

[中間評価結果4]

基礎作業項目の連関が明らかになったとはいいがたく、たとえば、身体技法の研究位置づけが曖昧なままに残されている。経費の多くが身体技法・感性プロジェクトのモンゴル、南アメリカ外国出張に費やされていて、プログラムの目的との関係について明確に示す必要がある。

[進捗状況報告書（中間評価後修正版）]

確かに、指摘されるような、課題間、また課題内

の担当者間の相互理解が十分でなく、関係性や関連性が曖昧なまま進められてきたことが、一部にあったことは否めない。その点、拠点リーダーを中心に強力に是正のための指導を行っており、問題は解消しつつある。ただし、指摘にある、特定の研究活動が経費の多くを費やして海外出張をしているという事実はなく、その点では必ずしも指摘はあたらないと考えているが、海外出張を含め、調査研究活動とプログラムの達成目標との関係やその効果についてはより厳しく判断し、当事者にも指導するようにする。

中間評価結果の留意事項において基礎作業項目間の連関が明らかになっていない旨指摘された。ただその際指摘された、海外調査に多くの経費が使用されているが、その調査とプログラムの目的との連関が明確でないという点については、『進捗状況報告書（中間評価後修正版）』において記したように、特に経費を多く用いて調査しているということではなく、必要最小限で効率よく調査を進めた。その点を除いた指摘、すなわち基礎作業間の連関が弱く、不明確という点については、是正の努力をしてきた。

人文・社会科学系の研究者は、単独で研究するのが常態であり、共同研究には慣れておらず、共同研究によって一つの研究成果を出すという考えは弱い。研究成果も多くが個別論文が並んでいるに過ぎない報告書が多かった。本プログラムにおいても、自己の課題のみに関心を集中させ、関連する他の課題を顧みないことが発足当初から顕著に見られたので、その是正に努め、共同研究として事業を展開するように絶えず要請し、また指導を行ってきた。具体的には、個別課題の個人による単独請負ではなく、必ず複数の研究者がチームを組んで、課題について議論し、作業を共同にして、一人の研究では達成できない成果を出すように求めてきた。

最終的な研究成果報告書を取りまとめることが視野に入ってきた現在では、共同研究の成果を取りまとめ、情報発信することについても理解が深まり、研究参加者は共同研究に積極的に取り組んでいる。

[中間評価結果5]

リーダーシップを発揮して、このプログラムにおける「研究」の意義を改めて問い直し、実現可能な組織で残りの時間を邁進していただきたい。

[進捗状況報告書（中間評価後修正版）]

拠点リーダーを中心とした研究遂行に責任をもつ者の組織である研究推進会議は、単なる調整機関ではなく、研究全体を掌握し、指導するという役割を強化し、4年度目の予算編成にはその査定を含めて強力な指導を行った。また、最終的な体系化の成果を情報発信するための方法についても指示を与えている。

中間評価結果の留意事項において、より一層リーダーシップを発揮して、研究成果を出すようにと促され、それに関連して〈参考意見〉として拠点リーダーがプログラムの体系化についてイメージを出してイニシアティブをとるようにと勧告された。この点については、指摘されるような、やや各研究者や研究班の自主性に任せ、主体的な研究意欲を損なわないように配慮しすぎたことを反省して、新たな取り組みを『進捗状況報告書（中間評価後修正版）』においても記した。拠点リーダーは全体会議での指示、また定期的に刊行しているニューズレターでの方針表明を通して、全体的関連付け、体系化について指示すると共に、各研究グループの活動や会合にも参加し、意見を出してきた。さらに、予算編成においてもリーダーシップを発揮し、研究内容を指導し、厳しい査定を行い、配分した予算についても研究グループに執行を総て委ねるのではなく、執行できない項目などについてはリーダーとして適切に再配分するか、あるいは緊急に必要な事柄に投入することをやっている。リーダーを中心とした研究推進会議は単なる連絡調整機関であることを脱し、本来の目的である、リーダーを中心とした研究指導組織として機能するようになってきている。

(2) 現在までの研究成果一覧

本プログラムは、事業開始以降、調査研究の成果を主として印刷物として公刊し、広く研究資料とし

て活用してもらうように努力してきた。それを列挙すれば以下の通りである。

①「人類文化研究のための非文字資料の体系化」年報 1年1冊刊行 本年度末までに4冊刊行 事業参画者の調査研究の成果論文を収録。

②ニューズレター「非文字資料研究」1年4回刊行 本年度末までに15冊刊行 調査研究過程で得た新知見や関連情報を掲載。

③調査研究資料 随時刊行 本年度末までに4冊刊行 調査研究過程で獲得した資料や関連情報の目録を収録。

1 『環境と景観の資料化と体系化にむけて』(2004年12月刊行)

2 『図像文献書誌情報目録』(2005年3月刊行)

3 『図像研究文献目録』(2005年9月刊行)

4 『手段としての写真』(2007年3月刊行 予定)

④シンポジウム報告 随時刊行 本年度末までに4冊刊行 本プログラムの主催した国際シンポジウムや各班が開催した公開研究会などの記録を収録。

1 『版画と写真—19世紀後半出来事とイメージの創出』(2006年3月刊行)

2 『非文字資料とは何か—人類文化の記憶と記録』(2006年6月刊行)

3 『図像から読み解く東アジアの生活文化』(2006年6月刊行)

4 『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』(2007年3月刊行 予定)

5 『歴史災害と都市』(立命館大学21世紀COEプログラムとの共催)(2007年3月刊行 予定)

⑤データベース 随時公開 調査研究活動で得たデータを検索可能なデータベースにして本プログラムのホームページ上に公開。

1 「図像文献書誌情報データベース」(2006年2月WEB公開)

2 「図像研究文献目録データベース」(2006年4月WEB公開)

(3) 最終研究成果予定一覧（一部本年度刊行のものを含む、いずれも仮題）

①印刷物

- 1 『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』 2冊
- 2 『日本近世生活絵引』 2冊
- 3 『東アジア生活絵引』 2冊
- 4 『身体技法の比較と人類文化』 1冊
- 5 『景観認識とその変遷の研究』 1冊
- 6 『非文字資料としての渋沢写真』 1冊
- 7 『環境に刻印された人間活動』 1冊
- 8 『展示を作る—展示実施報告書』 1冊
- 9 『インターネット・エコミュージアムへの道』 1冊
- 10 『非文字資料の体系化—その理論』 1冊

- 11 『若手研究者育成成果論文集』 1冊
- 12 『研究参画者研究成果論文集』 1冊
- 13 『人類文化研究のための非文字資料の体系化・総括編』 1冊

②ネット上での情報発信

- 1 「常民生活絵引マルチ言語対照データベース」
- 2 「海外神社及びその跡地に関するデータベース」
- 3 「江戸地震データベース」
- 4 「関東大震災写真データベース」
- 5 「インターネット・エコミュージアム」

③展示

- 1 実験展示「あるく—身体の記憶」の実施公開（2007年11月）

フォローアップ（書面調査）回答書へのコメント通知書

学振事第14号

平成19年5月15日

神奈川県立21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
拠点リーダー 福田 アジオ 殿

21世紀COEプログラム委員会学際・複合・新領域
[平成15年度採択拠点] 評価部会長 末松 安晴

21世紀COEプログラム（平成15年度採択拠点）フォローアップ
（書面調査）回答書に対するコメントについて（通知）

貴拠点より提出のありました回答書について、標記部会において内容を確認した結果は、下記のとおりです。

貴拠点におかれましては、本コメントの意向を踏まえ、今後の研究・教育活動を適切に実施して下さるようお願いいたします。

記

[コメント]

着実に研究が推進していることがうかがわれ、また留意事項への対応も適切であると認められる。

ただし、最終成果の具体的な内容についての展望はいまひとつ書きこまれていないので、今後それをより明確に打ち出していくことが望まれる。

例えば、各資料の統合と体系化から、その全体を統合した体系化へのステップとしての組織上の取組みはよく分かるものの、その一環としての最終刊行予定の『非文字資料の体系化—その理論』と『人類文化研究のための非文字資料の体系化・総括編』については、その体系化の具体的なイメージを早期に明らかにすることが必要と思われる。

三つの分野の資料のそれぞれの体系化は、素晴らしい成果となることを予期させるものと言える。

IV 外部評価

2003年度外部評価と対応策

2004年2月21日



外部評価報告 1

八重樫 純樹（静岡大学情報学部教授）

1. 課題と組織化・活動について

(1) 課題について

“非文字資料”について、民俗学と歴史学周辺の専門家の世界では、これで課題の意味が十分に理解されるものと考えているが、全く別な専門分野（社会・経済学分野や理工学系）および社会一般の人々にはわかりにくかったり、誤解を招く恐れもあります。ここにおける定義をホームページや刊行印刷物等の目に付く所に具体的な解説が必要と感じる（“非文字資料”だけだと考古学資料も美術工芸品も入ってしまう）。

(2) 組織化と研究拠点について

現状の日本常民文化研究所、歴史民俗資料学研究所、外国語学部のスタッフから考え、十分であり、学内事務組織の協力体制も可能な限り支援しており、始まったばかりの研究であり、これで十分と考えます。しかし、学内専門家数は有限であり、テーマから広範な専門分野の協力が必要である。今後の4年間に所定の成果を得るには、学外専門家の組織化・体制作りが必須と考えます。また、人文科学系研究者は個人研究がほとんどであり、組織研究が下手なので、そこが心配です。また、学内協力組織同士の揉め事は研究の足を引っ張る源ともなります。

2. 研究事業について

当座、始まったばかりであり、下記4項目で適当と考え、まずまずの進行状況と考えます。しかし、今後、以下を留意する必要があるものと考えます。

(1) 外部研究者の協力体制

1. でも述べましたが、研究方法に幅広く、色々な分野の専門家の意見を取り入れる必要があります。歴史学、民俗学研究方法の世界の常識は、他分野の研究手法論から相当遅れている部分も少なくないと考えます。学外協力専門家は固定の部分（データ収集、データベース作成等）と流動（方法論や調査活動等）の部分が必要で、組織を常に新鮮にして活動しなければ成果は期待できません。

(2) データベース構築の組織化

情報公開の研究作業（データベース構築）は、いずれ来年度あたりから4本の研究事業の共通組織として、独立させる必要があるのではないかと考えます。研究活動と“情報整理”を一緒にすると、混乱してくるのではないかと心配です。特に、文系研究者は目先の研究にだけ神経を注ぎ（論文作りはするが）、重要な情報の一般化整理には興味を示さない場合が多い。また、この程度の補助職員の人数ではデータベースは出来ません。データベース構築は人海戦術であり、外注構築するにしても、数人の専門活動要員が継続的に必要です。

(3) データベース構築と世界のデータベース動向への配慮

情報整理（データベース）は、現在インターネットの世界的普及により、データそのものの規格化が急速な勢いで進行しています。これにそぐわないと世界的孤立化を招きかねません。十分に注意と配慮が必須です。しかし、今まで、特に日本民俗学の世界では本格的な民俗資料データベース研究が殆どなされてきてないので心配です。

(4) 各研究事業について主な点

(a) 1班 画像データ作成と用語辞書作成が必須。国立公文書アジア歴史資料センターが参考事例。

(b) 2班 モーションキャプチャーは、ロボット工学や立命館大学のCOE研究が事例参考に。

(c) 3班 GISやグラフィックス技術の応用が必須と考える。

(4月から東京国立博物館で行われる(仮称)九州国立博物館の紹介展示の中に、装飾古墳データベースの参考事例が。また、3月27日～28日に奈良市帝塚山大学で開催される日本情報考古学会第17回大会の発表にいくつか参考事例が)

(d) 4班 日本民俗学では資料と情報の体系化の研究がなされてこなかった。来年度早々から、本格的着手が必須。学外専門家を交えたワーキング組織化と本格活動着手が必須。同時にデータ作成の規準化設定(データ台帳作成マニュアル)も必須。文字資料はどうにかなるが、非文字資料は大変な問題を含んでいます。

外部評価報告2

常光 徹(国立歴史民俗博物館助教授)

1. 本プログラムの名称は、人間活動の文字化されない領域を対象として資料の体系化を図るという構想に照らして相応しいが、ただ「非文字資料」という言葉は、一般にはなじみが薄くその内容を具体的にイメージしづらい。広く知ってもらうためにも、非文字資料とは何かを分かりやすく説明する工夫をしたほうがよい。

2. プロジェクトの目的に沿って、各種の資料を精力的に調査し収集を進めている点は評価される。資料の蓄積にともなって、収蔵庫をはじめとして整理や分類作業のためはかなり広い空間の必要が予想されるが、現在の施設では十分とはいえない。併せて、COE支援事務室と担当教員の研究室との関係が機能的な配置となっているかどうか、検討の余地がある。

3. 研究の全体計画、および4班構成、事業推進者の編成は本プログラムを推進していく上で適切なものと考えられるが、実際の活動をより円滑に展開していくには、組織面において日本常民文化研究所等との関係のあり方を明確にして、さらに総合力を高める必要があるのではないかと。

4. 各班の目標の明確度には差があるが、いずれの班も目標の達成に向けて調査・研究活動を活発に展開している。ただ、5年間という限られた時間のなかで、何をどこまでできるのか早い段階でその可能性を検討し、場合によってはテーマを絞ることも必要ではないかと。

現地調査等については、その計画や成果が常にプロジェクトの目標の達成とどう関わるのか(関わる可能性があるのか)という意識のもとに綿密な検討がなされ実施されている点は、当たり前のことではあるが重要であり評価される。

研究活動を推進していく上で、構成員については必要性に応じて強化したほうがよいと思われる。4班ではコンテンツを担当する教員の補充。

5. 若手研究者育成のプログラムや条件は概ね妥当だと考えられるが、実際にどのような研究活動や作業を行っているのかが見えにくい。

研究推進会議検討結果

研究推進会議は八重樫、常光両氏からの評価報告を受け、現状の問題点を整理・検討の結果、以下のような対応策を決定した。

問題点

1. 「非文字資料」という用語が一般に理解困難であり、その内容や範囲を十分に理解してもらうための方策を考えなければならない。(八重樫・常光)

対応策

非文字資料の意味する内容、取り扱う具体的な対象などを一般の人々にも理解できるように解説し、周知するための方策を以下のように2004年度で実

施する。

①7月にプログラム概要を発行し、そのなかで「非文字資料」について分かりやすく説明する。コラム的に用語解説をすることも検討している。概要を神奈川県大学の各種広報活動、あるいは関連学会の会合などにおいて広く配布することで、本プログラムの内容を普及させるようにする。

②本プログラムのホームページのコンテンツを見直し、分かりやすい表現と理解しやすい具体的事例を盛り込んだ構成にする。

③ニューズレターにおいて、事業展開に伴って獲得した新知見をできるだけ分かりやすく解説し、速報性をもって広く知らせることで、「非文字資料」の内容を周知させ、一般の人々にも理解してもらえるようにする。

問題点

2. 学内専門家のみではプログラムの目標達成は困難な面があるので、外部の専門研究者を積極的に組織し、研究体制を強化する必要がある。また、人文系研究者は組織的研究が必ずしも得意ではないので、学内外の研究者を組織し、共同研究として成果を挙げるようにするための工夫が必要である。(八重樫)

対応策

昨年度は事業推進担当者20名に加えて18名の学内外の研究者を共同研究員として組織し、研究を進めたが、2004年度にはさらにCOE教員3名(特任教授1名、非常勤講師2名)を採用して組織を強化するとともに、共同研究員も2名増員し、研究組織としては43名とした。指摘のように、人文系研究者は共同研究の経験も少なく、個人研究に走りがちであるので、達成目標に向けて共同するように種々の工夫を行なう。そのため、各班では共同作業、共同調査などをできるだけ実施し、また成果を班員全体で検討することを行なうように各班に対して要請する。また研究の進展と課題の変化に応じて、研究員の交替も考えている。

問題点

3. COEプログラムの成果としてデータベースの構築・公開は不可欠であるが、その作成のための体制は弱いので、要員の確保をはじめ種々の点で改善される必要がある。(八重樫)

対応策

現在、データベース作成は各班任せが現状であり、その作成従事者もPD、RAに依存しており、指摘のように弱体であるといわざるを得ない。2004年度以降、全体としてデータベース作成のための要員を確保し、また作成計画を策定し、統一的に実施するようにしたい。

問題点

4. 拠点間の連携をはかり、効率よく事業を展開するための方策が必要である。(常光)

対応策

現在、大学院歴史民俗資料学研究科、日本常民文化研究所および中国言語文化専攻とCOEの研究施設との間は物理的に離れており、その往来にも時間を要し、それが相互の連携・協力を弱めている。COEと各拠点の緊密な関係を形成するため、先ずその配置を近づけるべく、また事業展開に必要な面積を確保するべく現在大学当局と折衝中である。

日本常民文化研究所には専任職員がおり、研究所の運営に大きな力となっているが、COEとも連携・協力して拠点としての研究所の発展を期するようにする。また各拠点の所蔵資料の活用を図る。

問題点

5. 限られた年数のなかで大きな成果を挙げるためには研究課題の見直しを考える必要がある。(常光)

対応策

現在、課題別に4班に分かれて研究を展開しているが、各班には各3本の具体的課題が設定されている。従って、合計12課題となる。確かに研究組織の規模、予算額などから判断して、指摘の通り、残

りの年数で目標を達成することは困難になることが予想される。2004年度の終了時には全体を見直し、達成が困難と予想される課題は廃止・統合し、再編成する。

問題点

6. 若手研究者育成のプログラムが外から見えにくい。(常光)

対応策

現在COE研究員としてPD 3名、RA 5名を採用し、本プログラムの事業展開に大きな役割を果たしてもらったとともに、各人の研究が進展するように

研究に従事する勤務の割り振りを行っている。その日常的な様相は外部からは分かりにくい面があるので、ニューズレターその他の媒体でPD、RAの活動を積極的に取り上げて紹介する。そして、プログラムの全体事業に貢献した成果については、公刊する印刷物にその氏名を掲げて明確にし、また個人の研究成果を発表する機会をCOEとして設け、特に印刷公刊する場としての年報に収録するようにする。さらに2004年度から海外提携研究機関への短期派遣制度を開始し、海外への調査研究の機会を作る。

(出典：ニューズレター非文字資料研究No.5 22-25頁)

2004年度外部評価と対応策

2005年2月14日



委員の評価（要旨）

I 黒田 日出男 委員（立正大学文学部教授）

2年目の活動は、ゆっくりとしたペースではあるが、おおむね着実かつ順調に研究計画が実行されている。3年目には研究計画の遂行をスピードアップし、全体的な飛躍を期待したい。

1. 『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳について

- ①作業がスローペース過ぎる。
- ②翻訳出版のターゲットが明確でない。誰のための翻訳か。

例えば次のような目的が考えられる。

A. 日本のきわめて独創的な学問伝統を紹介し、絵画資料を活用する研究スタイルを国際的に広げる。

B. 日本史や日本文化の研究に興味を持つ学生・研究者にビジュアルでユニークな、そして役立つ入門書として提供する。

C. 翻訳というよりも新たな本文を創り出すという展望を持った翻訳作業。

2. データベースと本作りの関係

- ①先ず本作りをして、それを後からデータベース化するという順序では良いデータベースを作ることにならない。
- ②分析作業室のパソコン及び関連機器が十分に活用

されていない。またPD、RAの研究室にパソコンが見当たらなかったが、各人にノートパソコンを与え、日常的に利用できるようにすべきである。

③第4班の活動が、第1班～第3班の活動と有機的に連携していない。第4班のメンバーが第1～3班の研究活動に加わって、活動や情報発信を発展すべきであろう。そのために、データベース構築をベースにした研究活動の発展に寄与できる編成に組み直すべきである。

④このままでは、国際的な情報発信は書籍という形にとどまる。

3. 日本常民文化研究所の遺産

漁民史料のフルテキスト・データベース化など、もっと積極的に日本常民文化研究所の遺産をデータベース化して情報発信することを考えてほしい。

II 八重樫 純樹 委員（静岡大学情報学部教授）

1. 課題名・組織化・活動全般

- ①課題名の一般への浸透は薄い。
- ②大学の取り組みは高く評価できるが、現在確保されているスペースでは不安である。
- ③第4班の整合性に問題がある。第4班が第1～第3班に常に接して活動する必要がある。

2. 研究事業について

- ①外部研究者の協力体制については、COE終了後も日本の非文字資料研究の拠点として活動することを視野に入れて支援体制を模索する必要がある。
- ②データベースの構築と情報発信についての2004年度の活動は残念ながら評価に値しない。第4班が第1班～第3班から遊離して活動してきたように見える。本プログラムの体系的な情報の枠組み設定がされておらず、1～3班の成果との関係が明確でない。また情報の抽出・整理・記述作業には専門家の

確保が不可欠であり、そのための人員確保と予算措置をすべきである。

- ③世界的な情報化・情報発信の動向に注意し、配慮する必要がある。
- ④1～3班については今後各班の間の連携が必要である。4班については情報化と情報発信について取り組み、その方向を明確にする必要がある。

Ⅲ 常光 徹 委員（国立歴史民俗博物館助教授）

1. 総括評価

- ①前年度に指摘した問題点は着実に改善されつつある。施設の充実、COE教員・共同研究員の採用による組織強化の努力は高く評価できる。
- ②データベース構築については、組織体制を早急に強化する必要がある。

2. 各班の活動

- ①1班の一部課題修正は、今後も常に進捗状況に応じて検討し、早い段階で行うべきであろう。
- ②2班・3班については新たな領域であり、有効な方法論の模索段階であるとはいえ、次年度の早い段階には見通しをつけるべきであろう。

3. 共同研究について

外部の専門研究者を交えて共同研究を行う方式は高く評価できるが、効果的に機能しているとはいえない。

研究推進会議検討結果

研究推進会議は各氏からの評価報告を受け、現状の問題点を整理・検討の結果、以下のような対応策（2005年度に実行している内容）を決定した。

1. データベース化と情報発信について

各委員から厳しい意見が出された。データベース構築の見通しが無いということ、情報発信の全体構想が明確でないこと、またデータベース構築のための人員・予算の確保がなされていないこと等が指摘された。

これらの点については、強く反省しなければならない。3年目を迎えた2005年度には、データベース構築のために専門的なキャリアを持った職員1名を増員し、研究成果をデータベース化する過程を支援することにした。また、情報発信・データベース構築については、4班を中心にしながらも、1～3班の成果を各班でも独自に作成し公開することも考え、2005年度には一部文字データベースについては公開する予定である。

2. 第4班の役割と活動について

各委員から、情報発信を担う第4班の活動が不十分であり、データベースの構築についても十分に検討を進めていないことが指摘された。この点については、第4班の自覚を促し、工夫するように指示をしている。4班では、データベース構築のための検討作業を、事業推進担当者・共同研究員の属する研究室の支援を受けて進めている。また広くデータベース、特に歴史情報のデータベースについて様々な試行をしている他研究機関とも提携するよう取り組んでいる。

3. 事業間の連携

各委員から、第4班と他の1～3班との間の連携がほとんどなく、そのため十分な成果が見られないと指摘された。この点については、2005年度を通して活動内容を点検し、地域情報発信・実験展示及び理論研究の三つを課題とする新たな活動組織を編成し、発足させることにした。従来の第4班の成員がそれらで中心的な役割を担うことになるが、それに加えて1～3班の成員も加わり、図像・身体技法・環境の三つの統合した研究活動を展開し、4年度・5年度に情報発信を実現する。

4. マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編さんについて

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さんは、日本語版の翻訳であるが、その目標は単に日本研究者にあるものではなく、図像資料から絵引きを作るというユニークな図像活用方法を世界

の共有財産にするために行うものであるが、その点についての可能な方法あるいは工夫すべき点の検討をさらに進めるように第1班に指示する。

5. 総括

以上のように、2年度目になる今回の外部評価では、3人の委員から多くの厳しい指摘があった。それらの問題点はいずれも本プログラムの弱点と内部においてもある程度認識してきた点であり、指摘を真摯に受け止め、改善の努力をしている。

人文系研究者中心の本プログラムでは、データベース構築に関しては必ずしも十分な経験や素養がなく、その点で素人的な段階から始めていたことは間違いないが、工学研究科の本プログラム参画者と人文系研究者の連携もようやく軌道に乗り、2005年度には種々の試みも進められている。

さらに弱点・欠点を克服するために、組織全体の点検を行い、大幅な組織再編成を行うことを計画している。課題別に組織を編成し、予算配分もデータベース化と情報発信に重点を置いた配分をする。また、重点的な課題を地域情報発信、実験展示そして総括理論研究の三つとして設定し、新たな組織で情報発信にむけて活動を行う。

なお、PD、RAへパソコンを支給すべきこと、および分析作業室の活用が不十分であると指摘されたが、初年度からPD・RAには各1台のノートパソコンが貸与され研究および業務において十分活用され、また分析作業室のコンピュータも有効に利用されデータも豊富に蓄積されていると判断している。

(出典：ニューズレター非文字資料研究No.10 24-26頁)

2005年度外部評価と対応策

2006年2月13日、17日



委員の評価（要旨）

I 黒田 日出男 委員（立正大学文学部教授）

今回の外部評価については、前回指摘していた問題点・疑問点がさまざまな点で改善されており、残余の期間の研究推進とその結果に、ある程度の期待がもてるようになってきている。以下に留意点を挙げる。

①PDや若手研究者たちを本COEの研究の最前線で鍛え、かつ独創的研究の担い手とし、研究に参加できるようにする。

②研究メンバー内部の意志疎通と合意形成が十分になされていない面があるようなので、早急な改善を期待したい。予算も一層明確な研究課題ごとの重点化が図られるべきである。

③デジタル・コンテンツなどの制作に民間の業者との共同開発が有効である。

④本プログラムの拠点となっている、歴史民俗資料学研究所と日本常民文化研究所の研究施設及び環境は、実に素晴らしいものがある。充実した施設と貴重かつ膨大な史資料の蓄積は、神奈川大学の誇るべき「戦略的資産」であるとの認識を新たにした。

⑤本プログラム終了後も、研究と教育の両面で研究拠点に相応しい大学としてのステータスを形成して欲しいし、それに恥じない研究体制の継続を展望していくべきであろう。そのためには、研究継続のためのコスト、研究成果の公開を継続するためのコストをきちんと算定し、実行可能な計画を今か

ら検討していく必要がある。

II 八重樫 純樹 委員（静岡大学情報学部教授）

①展示・演習施設、資料管理・整理施設、情報整理施設等、博物館機能が充実している。大学の支援は極めて評価に値するが、本COEプログラム終了後の維持、利活用、そしてこれらを活かした研究活動のサポートとしての予算処置や諸施設に関する利用計画の策定に着手すべきである。

②今までの研究組織体制から、情報発信の組織体制へと移行していくべきである。今後の組織・研究活動の情報発信活動への取り組みについては、異議はなく、非常に合理的であると思われる。

③資料集や研究論集の刊行、そしてデータベース構築の取り組みは、ただちに活動を開始すべきである。国内と近隣国の動向について、調査、連携を行う必要があるものと考え、データベース研究の一環として、以下の点を18年度より、着手、推進することを提案する。

・国内の関連機関：アジアとの連携を大きなテーマとして、最新の情報システム開発、データベース開発を行っている、九州国立博物館の調査と連携が可能か検討する必要がある。

・韓国・中国の情報化関連機関：韓国の国立民俗博物館、国立中央博物館などでは、文化財資料の国家的分類基準に沿って諸資料が記録管理（データベースとして）されており、今後韓国との情報交流も必要となってくるので、それらの実態を把握し、協力関係を構築するための討議に入ることを提案する。

中国についても、(株)リコーソフトウェア研究所と中国科学院との連携共同研究として、北京に理光(中国)投資有限公司を設立し、中国のチベットの民俗資料をもとに情報化開発研究を遂行しているのので、ここについても調査することを薦

める。

Ⅲ 鈴木 正崇 委員（慶應義塾大学文学部教授）

従来の学問分野には抜け落ちていたユニークな領域に果敢に挑んでいる点を評価する。また、安易に国際シンポジウムを行わず、成果のある程度の蓄積と方向性の確立を待って実施した慎重さも貴重だと考えた。

①「非文字研究」は研究課題が拡散する傾向を帯びており、学問研究の成果を社会貢献に繋げる長期的ヴィジョンも考えるべきかもしれない。

②標題の「非文字」という用語は、非文字と文字の相互作用や、それによって生み出される想像力に関する考察が欠落する恐れがある。文字と非文字の間の曖昧な領域の研究が大事であろう。

③非文字文化に関しては、世界的に進む「文化財化」の動きも考慮すべきかもしれない。近年、無形の文化をユネスコで世界遺産に登録する動きが加速している。開発や災害と環境に関して実態調査を数多く実施して、知識や情報を集積し、一方的な発信ではなく、地元住民の体験知との双方向的な交換を行える場の構築を考えるべきであろう。

④中国の場合、『姑蘇繁華図』のような漢族の図像だけでなく、清代の『苗蛮図冊』のような、漢族から非漢族を見る視点、文字を持つ人々が文字を持たない人々を表象してきた状況についても検討すべきかもしれない。また、戦前の海外の神社の調査では、東アジアの近代で日本が果たした役割や位置を明らかにするだけでなく、植民地化状況の議論を含めての大きな比較の視点が必要であろう。

⑤日本常民文化研究所の施設やスペースを活かして、世界の中でもユニークな「非文字研究」あるいは「民衆文化」の研究拠点になることを期待したい。国際交流を通じて、「非文字研究」が開かれた学問となり、将来は社会貢献に結びつく可能性もある。研究会をもっと公開し、研究者だけでなく、「民俗知」を活用する場を作ることや、職人の手仕事を評価できるような交流の場を生成してほしい。最終的には、デジタル・アーカイブのような形での情報の

共有を構想し、検索システムのあり方を再検討し、デジタルだけでなく、アナログの発想を残していく方策を考慮すべきである。

⑥学生の教育は、博物館実習などの教育や研修の充実への取り組みも今後の課題である。

⑦国際シンポジウムは、ユニークな試みを小規模でも良いから、各班ごとに実施すべきであろう。

⑧『絵巻物による日本常民生活絵引』には間違いもあるので、翻訳によって世界的な図像資料にする場合には、注釈や解説をつけるなどして補整に留意すべきであろう。

外部評価に対する対応策

問題点1＜組織の改編について＞

①21世紀COEプログラム委員会の中間評価などをうけて、必要な組織再編と研究目的の明確化と重点化がなされつつある点は評価できる。ただし、研究メンバー内部の意思疎通と合意形成が十分になされていない面があるようなので、早急な改善を期待したい。（黒田）

②プログラム全体への印象は、全体的なまとまりや有機的な結合に欠ける点があるといえよう。「非文字研究」は研究課題は拡散する傾向を帯びており、総合や収斂の方策が求められる。今後は、学問研究の成果を社会貢献に繋げる長期的ヴィジョンも考えるべきかもしれない。（鈴木）

問題点1の対応策＜組織の改編について＞

本プログラムでは、当初、前半の3年間を各班の調査研究による資料の蓄積と解析、後半の2年間を収集した諸資料の総合と体系化、ならびに情報発信という計画のもとに事業を推進してきた。しかし、前半の調査研究段階における各班内・班間での統合に向けた合意形成の不足などにより、全体的な連携が適切になされていない部分があったことは否めない。そのことが、後半の重点課題である体系化、情報発信といった課題の取り組みにも大きな影響をあたえている。

そこで、後半の目標達成をより確実にするために

大幅な組織改編を行った。その中心的なものが、従来の第4班統合情報発信班を発展的に分けて、第4班地域統合情報発信、第5班実験展示、第6班理論総括研究の3つの班を編成したことである。各班には旧来の第4班のメンバーだけでなく、第1～第3班のメンバーも加え、図像、身体技法、環境・景観の各資料を活用し、研究成果の統合、体系化する方法が確立できるものと考えられる。

問題点2 <研究成果のデータベース構築と公開について>

①資料集や研究論集の刊行、そしてデータベース構築の取り組みは、本格的には平成18年度からであるが、すでに手遅れの部分もある。計画中の刊行資料集、刊行研究論集、データベースのリストと、担当研究者リストを作成し、18年度4月から直ちに活動を開始すべきである。(八重樫)

②現在、インターネットの普及により、発信情報の世界規模あるいは国家規模、分野規模のデータ規格化・標準化と世界規模での情報共有化が急速に進んでおり、こうした動向を無視してデータを作成すると、国際的な情報活動の部面で孤立してしまう恐れがある。そのため、国内と近隣国の動向について、調査、連携を行う必要があるものと考え、データベース研究の一環として18年度より着手、推進することを提案する。(八重樫)

③研究の推進の方法と研究成果の公開については、ずいぶん改善されているように思われる。デジタル・コンテンツなどの制作には、民間の業者との共同開発が有効であり、現在すすめている只見のデジタル・コンテンツの完成と公開を待ちたい。(黒田)

問題点2の対応策<研究成果のデータベース構築と公開について>

研究全体の有機的な結びつきの弱さとともに、これまで実施した3回の外部評価で毎回きびしい注文をうける問題点は、各班の調査研究が進展しているにもかかわらず、その成果を研究世界で広く共有するためのデータベースの構築、公開が進んでいないということである。この点については、研究組織の

あり方とも関係するが、個別課題においてその調査研究の成果を公表、発信する責任体制を作り、人員と予算執行もその課題単位とすることとした。その課題の責任の下でデータベースを構築し、資料の総合を行うとともに、それを基盤に各班は班の当初目標を達成していくことになる。その際、国際規格を十分考慮に入れながらその作成につとめる。

そうした3つの班で蓄積された研究成果を統合、体系化する試みとして新たに編成された第4班地域統合情報発信班では、只見を対象にしてその課題達成のための作業を進めている。そこでは、民間業者と共同してデジタル・コンテンツ化に取り組み、インターネット上で情報発信するシステムの開発を目指している。

問題点3 <若手研究員の育成と研究支援について>

①学生の教育については、各人の個別研究の成果の向上には繋がっているものの、全体の動きとRAやPDの学生の研究との有機的な協力関係が必要かもしれない。博物館実習などの教育や研修の充実への取り組みも今後の課題である。(鈴木)

②現状での最大の問題点は、PDや若手研究者たちが本プログラムの中心に十分に組み入れられていないことである。若手研究者たちを本COEの研究の最前線で鍛え、かつ独創的研究の担い手としてPDや大学院生たちをいかに研究に参加できるようにするかが、本COEの成果のレベルを決定するといっても過言ではない。(黒田)

問題点3の対応策<若手研究員の育成と研究支援について>

これまでPD、RAについては、研究業務に従事する負担をできるだけ軽くして、自己の研究に専念できる条件を確保させるため、本プログラムの研究業務に従事する日数を週に2日(PD)ないしは1日(RA)義務付けるだけで、あとは各自の研究日としてきた。また、本プログラムの各課題への積極的な参加を求めてきたが、各人の自主的判断に任せ、制度化してこなかった。本年度から各班・各課題の研究に参画できるシステムを新たに導入し、参加す

る課題を登録させ、各課題では研究班員の一人として位置付けることにした。

若手育成に関しては、PD・RAの中から博士の学位を取得する者や大学の専任教員に採用される者が出るなど、一定の成果があらわれている。今後も、社会的要請に応えられる人材の育成に取り組んでいく。

高度専門職学芸員の教育プログラムの作成については、国内の学芸員、国外のキュレーター、アーキビストなどの養成に関する現地調査、資料収集を敢行するとともに、研究会や検討会を通じてその現状分析と、大学院における養成カリキュラム作りを進めている。18年度は主に国内の大学における学芸員教育の現状調査と研究会を行い、その内容を分析してまとめ上げていくことになる。

問題点4＜今後の研究と終了後の将来構想について＞

①充実した施設と貴重かつ膨大な史資料の蓄積を基礎に、私立大学では数少ないCOEとしての本研究プログラムを推進できているということは、神奈川大学の誇るべき「戦略的資産」であるとの認識を新たにした。(黒田)

②神奈川大学は、本21世紀COEプログラムという「金冠」の終了後も、この「金冠」を最大限に活かして、研究と教育の両面で、本プログラムの研究拠点に相応しい大学としてのステータスを形成していった欲しいし、それに恥じない研究体制の継続を展望していくべきであろう。(黒田)

③本COEプログラムは平成19年度までであり、その後の維持、利活用、そしてこれらを活かした研究活動のサポートとしての予算処置が必要となってくる。平成18年度から終了後の、研究拠点としての諸施設に関する利用計画の策定に着手すべきである。(八重樫)

④最終的には、デジタル・アーカイブのような形での情報の共有を構想し、検索システムのあり方を再検討し、デジタルだけでなく、アナログの発想を残していく方策を考慮すべきである。いずれにせよ、私立大学として、これだけ充実した研究活動を行っ

ている所は数少ないので、大学側も経営の戦略拠点として、援助や協力を惜しまないことを期待したい。(鈴木)

問題点4の対応策＜今後の研究と終了後の将来構想について＞

研究メンバーは、本COEプログラムが世界に発信しうる研究拠点を構築するものとして、単に5年間で終了する研究ではないとの共通認識はもっている。各外部評価委員が指摘されるように、「非文字資料研究」は従来の研究で欠落していた重要な問題を含んでおり、今後の研究の進展により、世界的にも一段と注目される研究課題となろう。

したがって、終了後にどのような研究体制を構築するのか、終了時期を2年後に控えた現在、研究メンバーと大学関係者が真剣に検討する必要がある、本プログラムでは、拠点形成委員会と研究推進会議のメンバーによる「COE将来検討会議」を開いて討議を始めている。今後、その討議内容の結果をうけて、今秋を目処に将来構想に関する計画案を作成し、継続を視野に入れた研究拠点形成の支援を大学側へ要請していく予定である。

総括

上記のように、3回目となる今回の外部評価においても、各委員より多くのきびしい指摘があった。今回の外部評価で指摘された弱点は、これまでの本プログラムの4班編成について、具体的な研究を行う3つの班と、それらの研究成果を総合して、情報発信を行う第4班との連携が適切に機能していないこと、その蓄積した研究成果・資料を国内外で広く共有するためのデータベースの構築と公開が進んでいないこと、の二点に集約されるであろう。

そこで、第一の指摘に対しては、大幅な組織の改編を行い、従来の第4班を分けて、新たに4班地域統合情報発信、5班実験展示、6班理論総括研究の3つの班を組織することにより、その弱点の克服を図った。第二については、組織を課題別に明確化し、予算もその班単位につけることで、データベース構築の迅速化、情報発信による早期公開を目指した。

また、予算も均一的に配分するのではなく、データベース化と情報発信に重点をおいた傾斜配分とした。

終了後の研究体制の確立については、今後あらゆる角度から検討を加え、世界の研究拠点として相応しい研究内容と組織作りを目指し、大学側に対しても強力な支援体制の構築を働きかけていく。

(出典：ニューズレター非文字資料研究No.13 18-21頁)



2006年度外部評価と対応策

2007年2月13日



委員の評価（要旨）

I 鈴木 正崇 委員（慶應義塾大学文学部教授）

1. 前年度の評価に対処して、すみやかに対応策を考え、班を再構成したことを高く評価したい。成果も着実に積み重ねられており、他に見られないユニークな研究を総合的に統合し、今後は理論化する道筋がついたと考える。

2. 大学当局の支援が継続的に行われるならば、世界的な研究拠点になる可能性は十分あると思う。具体的には、

①日本常民文化研究所所蔵品の常設展示を可能にする博物館の設置

②大学院歴史民俗資料学研究科の独立大学院への移行

③フィールドワークの実習と報告書を継続できる予算の恒常化

などといった諸点が挙げられる。神奈川大学が今後の運営にあたり、大学のイメージアップや独自性を打ち出す必要があるが、「非文字研究」の体系化は、大きな推進要因となる。

3. 本プログラムの最大の問題点は、「非文字資料」の研究を、現代という時代において行うことの意義は一体何かという統一的な見解が欠けているように見受けられることである。本研究の基盤は、農村・山村・漁村、職人など第一次産業の社会が主体であり、それらは、過疎化・少子高齢化・農業改革（大規模化・集団化）の中で、急速に崩壊しつつある。

こうした社会の文化を、単なる「失われていくもの」として愛惜するのではなく、「人間らしく生きること」「多様な知の形の提示」「もう一つの近代」など、現代へのアンチテーゼとして提示できないか。

4. 情報発信については、ホームページへのアクセス数が少ないという説明であったが、キーワードとして「非文字」を入力できないことが原因であろう。他のキーワードとして表象・身体・図像・声・景観・民具などが考えられる。文字と非文字を対等にみる、あるいは非文字の方がより大きな可能性を持ち、21世紀の大きな課題となるという方向に関心が向けば面白い。海外への発信については、グローバルな対話ができるような用語を考えることが望ましい。

5. 「非文字」non-writtenでは馴染みがない。無形遺産 intangible heritage、非言語コミュニケーション non-verbal communicationなど、流通している概念との接合を考えて、議論できる土壌を設定する。また、民具・芸能・図像は、ユネスコの「文化的景観」重視の施策の展開、特に世界遺産の認定や「無形遺産」の保護などとも関係が深く、グローバルな視野からのモノとコトの見直しが迫られている。今後、世界遺産の認定への継続審議となった地域に関しても、求められれば助言ができよう。

6. 各班に共通する主題を鮮明化するようなシンポジウムを企画することも一つの案である。例えば、「身体」をテーマに、哲学・社会学・人類学・宗教学・歴史学・政治学・地理学・舞踏学などの研究者と対話して「非文字」の役割や位置付けを考え直す企画などである。

7. 地域統合情報発信のモデルケースとして只見の事例は期待が大きい。しかし、安易な町おこし、村おこしに飛びつくことなく、21世紀の課題という大きな視野に立って、現実と渡り合う接点を持ち続けることが望ましい。

Ⅱ 水嶋 英治 委員（常磐大学コミュニティ振興学部教授）

1. 非文字資料研究の拠点として

①神奈川大学の誇るべき「日本常民文化研究所」はまさに歴史民俗資料学の至極の宝庫であり、世界的に見ても最高水準の研究所である。日本常民文化研究所で蓄積してきた資料を活用して、新たな視点で非文字資料を体系化する試みは、学際的な研究領域であり、同時に極めて複合的な研究領域である。本研究は、新領域の開拓分野であると評価できよう。それゆえに、旧来の発想と方法論では「体系化」という大事業は自ずと限界があり、諸成果の公表についても、これまでにない方法を模索し続ける宿命にある。

②例えば、『絵巻物による日本常民生活絵引』でも、「非文字」を文字化する際の危険性についても、注意を促しておかなければならない。非文字資料を資料化する試みは、「文字化」への回帰であり、また現代社会を反映する「図像化」という手段を用いることによって、非文字が非文字であり続ける、というジレンマに陥るといった危険性がある。

③研究班については、4班から6班編成にしなおして、「理論総括研究」を加えたことは評価できる。まとめの時期に入って、まさに正念場はこの理論化、体系化の部分に重点が移りつつあるのではないかと予見している。

2. 研究・教育内容の充実と成果

①「非文字」というキーワードは研究者を奮い立たせる不思議な魅力がある。しかし、一般人にとっては、非文字という用語は通常思い付かないことばであり、範囲があまりにも幅広く、焦点が定まりにくい。今回の研究では、身体技法・感性・環境・景観などに焦点をカテゴライズしているが、それらの領域がどのように結びつくのか、研究者にとっても理解しにくい。「非文字資料とは何か」という本質的問題とどう関連づけ、全体系としてどのように捉えるかが明瞭に示されていない。

②そこで、最終年度である平成19年度は、特に理論総括班の果たす役割は大きく、「資料化」「体系

化」「統合化」について一層の努力を要するようと思われる。そのためにも課題間または課題内の研究担当者との協議と相互理解、個別研究よりも全体像を把握する努力を怠ってはならないであろう。

③また、データベースについては、インターネット上での情報発信は、COE終了後の組織体制や本研究の位置づけが再確認されなければならない。民具などのデータベースの進捗状況については危惧する点もあり、なるべく早く、著作権等の問題を解決して公開を進めていく必要がある。

3. 本研究成果の学術的意義と社会的意義

①本プログラムでは調査研究の成果を印刷物として数多く公刊してきた。年報やニューズレターの内容は充実しており、研究の進捗状況が広く紹介されることは、本研究の社会的な意味が生じてくる。

②しかし、大部分が日本語のみであり、これらの成果が英文で記載されていれば、さらに学術的価値は高まるであろう。

Ⅲ 保立 道久 委員（東京大学史料編纂所教授）

1. 本COEプログラムは、研究プロジェクトとしてきわめて興味深いものであることは衆目の一致するところである。

本プログラムの興味深い点は、

①その民俗学・人類学・歴史学などをおおう学際性にあるといえるだろう。

②また、その理論性にあり、とくに川田順造教授の立論は、相当の一般性をもっているといってよい。

③このプログラムが民俗学を中心として東アジアにひろげてきた国際的なネットワークにある。

上述したように、各班の展開している仕事も各々実りがあり、興味深いものである。これらは有用であって、学界にとって利益が多い。それとの関係で、本プログラムの採択とそれに対する神奈川大学の理解ある支援は十分に元が取れているということも確認すべきである。

2. 計画全体の実現には様々な困難が見え、とくに成果を絞り込む点については不十分な点が多いと言わざるをえないことも事実である。せっかくの有益

な内容とかけがえのない努力がそのような評価を受けられないように、全体をまとめる方向を確認することが必要であろう。問題点としては、

①計画調書において約束した情報システムの問題である。これは、「約束」なので、どうしても実現すべき事柄であろう。そもそも情報システムを、本プログラムの中にどのように位置づけるかについて、グループ内部で十分な理解がないのではないかというのが、全体的な疑問である。

出発点は、日本常民文化研究所の日常的な仕事と実績を前提にどのような情報化が必要であり、有用であるか確認することであろう。データベースやシステムの構築は日常的な仕事の中で持ちこんで考えなければならないというのが鉄則である。そのためには、(ア) 採訪民具の写真・記録を画像・テキストデータベース化すること、(イ) 濫澤写真、『絵巻物による日本常民生活絵引』などの画像資料のデータベース化、(ウ) 水産庁採集の漁業史料のフルテキスト化、などといったことを推進する必要がある。

②本プログラムの全体的なまとまりに欠けることも問題である。それは、学際性、理論性、国際性という本プログラムの長所を、現在の段階でどのように位置づけているかという問題に関わっている。本プログラムにおいては民俗学・人類学・歴史学の相互関係を捉え直すことが基本的な意味をもっているが、もっとも重要なのは、人類学と民俗学の関係であろう。

特に、(ア) 東アジアという観点を面に立てた民俗学的な立場からの方法議論がどのように展開されるかは注目すべきことであるだけに、議論が途中で止まっているようにみえるのは残念である。(イ) 歴史学における「社会史」の研究は、現在、視角や方法の点で行き詰まりを迎えているが、それを東アジアにおける歴史的な民俗比較という方向に転回する上でも、東アジア民俗学ともいうべき動きの意味は大きい。(ウ) 研究班の中での歴史学の位置、方法的な位置が全体としてどうなっているのかが分かりにくい点も気になった。

外部評価に対する対応策

問題点1 <研究成果とその体系化について>の対応策

現在、本プログラムでは最終年度を迎え、6班・11課題による研究成果が逐次まとめられつつある。印刷刊行物による研究成果は全部で18冊を予定しており、平成20年3月までにはすべて公刊する運びとなっている。さらに、各班・課題では、収集資料や研究成果の一部をデータベース化して公開することになるが、それらも印刷刊行物と併せて6種類のデータベースを完成させる予定である。こうした成果物は、外部評価委員から一様に高い評価を受けている、前年度の外部評価に対応して平成18年度に行った班再編の効果によってもたらされるものと考えられる。

しかし、評価委員が最も期待される班・課題相互間の研究の「体系化」「統合化」という問題については、現時点においては必ずしも十分な結果が出ているとは言い難い。この点については、理論総括研究班(6班)により、「非文字資料とは何か」という本質に関わる理論的な枠組みの構築とともに、図像、身体技法、環境・景観のこれまでの研究成果を分析し、その上で相互の「体系化」「統合化」を図ることになる。

また、具体的な「体系化」の試みは、地域統合情報発信班(4班)により、福島県只見町をモデルケースとして、山村に生きる人々の営みを統合し、構造的に体系化する。加えて、実験展示班(5班)でも図像、身体技法、環境・景観の三者を展示という方法に統合し、情報発信するという方法を試みることになっている。実験展示のテーマとして「あるく—身体の記憶—」を選定し、本年11月に本学の常民参考室で開催する。

問題点2 <情報システムの構築と情報発信について>の対応策

これまでの外部評価で常に弱点の一つとして指摘されてきたのが、収集資料と研究成果を広く公開する情報システムの開発ならびに情報発信に関するも

のであった。今回の外部評価においても、全委員がインターネット上での情報発信の遅れを指摘している。ホームページのアクセス数の少なさや、海外への情報発信に対してグローバルな会話ができる訳語の再考、採訪民具の写真・記録、濫澤写真などのデータベース化の進捗状況を危惧するなどといった意見が寄せられた。また、情報公開の際の著作権問題についても、すべてをクリアして公開する必要性を説いている。

こうした問題点に対して、地域統合情報発信班では、他の班・課題の研究成果である画像データベース、モーションキャプチャ分析、景観の経年変化解析などの情報処理・発信法を特定地域において統合し、情報発信することに取り組んでいる。福島県只見町をモデルとして、民間業者と共同してデジタル・コンテンツ化を目指し、インターネット上での情報発信システムを開発することになる。他の班・課題でも収集資料や研究成果のデータベース化を進めている。

また、著作権の問題については、研究担当者の中から3名を選出し、「知的財産権担当」としてその問題に対処するなどの対応策を講じている。

問題点3 <終了後の拠点構想について>の対応策

最終年度にあたって、民俗学・人類学・歴史学をはじめ関連諸学の協同によって推進される本プログラムが、新たな非文字資料研究を確立するという学際的な研究領域であり、今後、この研究を継承発展させていくことで、世界に発信しうる研究拠点になりうると評価された点は、研究メンバー一同重く受けとめ、終了後も「非文字資料研究センター」（仮称）として、研究を継続していくことが確認されている。そのため、すでに平成18年6月に「COE将来検討会議」を立ち上げ、新たな研究体制の構築を目指してあらゆる角度から討議し、近日、将来構想に関する計画案を作成し、大学側へ研究拠点形成の支援を要請することになっている。

若手研究者の育成については特に指摘はなかったが、本プログラムで採用したPD・RAの中から博士の学位を取得する者や大学教員などの研究職に就

任する者も出ており、一定の成果はあらわれた。また、派遣研究員・訪問研究員制度も十分に機能しており、国内外の若手研究者の交流が活発に行われた。こうした若手研究者育成の制度を組み入れた拠点形成が構想されなければならないであろう。

総括

最終年度を翌年次に控えた2006年度の外部評価ということで、問題点の指摘は研究成果の内容に集中した。第一に、研究内容に関わるものとしては、「非文字資料」研究そのものの意義づけと、第二に、本プログラムで対象とした画像、身体技法、環境・景観の研究成果の「統合化」「体系化」に関する問題である。特に後者は、当初から指摘されていた本プログラムの弱点であり、残されたわずかな期間で、理論総括研究班による理論的枠組みの構築、只見町をモデルケースとした三つの非文字資料の体系化、実験展示という方法を導入した統合、といった試みによりその弱点を克服することになる。

第三の問題は、収集資料のデータベース化と情報発信についてである。とりわけ、本プログラムを推進する過程で得た諸資料とともに、拠点の一つである日本常民文化研究所が所蔵する濫澤写真に代表される貴重資料のデータベース化と公開が期待されている。この同研究所所蔵資料の情報発信については、当初計画のある資料は本年度中にWeb上の公開などで発信されることになるが、その他の資料の情報公開は、終了後に開設が予定されている「非文字資料研究センター」（仮称）の業務として引き継がれることになる。また、そのセンターを基盤として若手研究者の育成を含めた研究活動を継続するために、「グローバルCOEプログラム」を申請する方向でその準備に取りかかっている。

なお、本プログラムの総括として、第3回国際シンポジウムを「場の記憶・からだの記憶—非文字資料研究の新天地—」というタイトルで平成20年2月に開催する。さらに、各班・課題の研究成果とは別に、それら個別の成果を通観、統合し、非文字資料の体系化を指向する総括編を刊行する。この総括編の編纂は、5年間にわたる事業に関する各種資料、

情報を整理し、記録として残すことも目的としており、それ自体、6年目以降、本プログラムを継承、



推進していく上での指標ともなる。

(出典：ニューズレター非文字資料研究No.17 24-27頁)



2007年度外部評価書

2008年2月25日、26日

井上順孝委員（國學院大學研究推進機構日本文化研究所教授）

1. 全体評価

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という研究課題は、非常に幅広い内容を予想させるものである。本プログラムは、非文字資料のうち、図像、身体技法、環境・景観の3つに絞って研究対象とすることを目指すとされているが、実際に実施された研究内容はきわめて多岐にわたっている。それゆえ、各々の班で、個々の優れた研究が実施される一方で、プログラム全体として、ときには一つの班内においてさえ、有機的な関連付けが必ずしも十分でないという弱点が見出される。なお、これについては理論的考察が個々の実証研究の進捗に対し、かなり遅れたという事情も関係していると見受けられる。

各班の研究推進に当たっては、拠点のひとつである日本常民文化研究所における研究成果が十分活かされており、従来の研究蓄積の上に世界的研究拠点を形成するというCOEプログラムの基本的目的はおおむね達成されている。

2. 各班の成果について

①第1班

非文字資料を蓄積するというこのプログラムの中心に位置するものの1つは、第1班の「図像資料の体系化と情報発信」によって実施された事業である。すでに日本常民文化研究所によって作成されていた『絵巻物による日本常民生活絵引』を展開させていくという明確な方針があったことが着実な研究を生んだ理由であろう。この班では実質的な共同研究が推進されたことが、成果によくあらわれている。なかでもマルチ言語版の編纂・出版は学術的意義が高く評価される。「東アジア生活絵引」という課題と並行させて、常民生活絵引の図のキャプションが、

中国語、韓国語にも翻訳されたことは、東アジアにおける今後の共同研究を促進するものとして高く評価される。

②第2班

第2班の「身体技法および感性の資料化と体系化」は、多くの先進的な試みを含みながら、それぞれの関連づけにおいては、いくつかの問題点を残したと言わざるを得ない。この班の2つの課題、すなわち「身体技法の比較研究」と「用具と人間の動作の関係の分析」との相互の関連性は乏しい。また前者の課題においては、芸能の記録化の手段としてモーションキャプチャーを採用している。この方法は、芸能における体の動きの「資料化」に関する新たな研究方法を導入しているものであるが、今回集められたデータは量的に少ないため、その意義を議論する上ではまだ十分な成果をあげているとは言いがたい。

もう1つの課題は、民具・用具あるいは道具というモノと、それを使用する人間の身体技法に着目している。そして「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原」および「用具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較研究」として展開され、具体的には犁という農具の形状と利用法に着目して実地調査が重ねられた。これは研究推進者の従来の研究の基盤の上に展開されたものであるが、きわめてマクロな理論が背後に想定されている。縄文人と弥生人の違い、及び大化改新政府の導入した中国の技術と朝鮮系渡来人のもたらされた技術との関係である。考古学、歴史学、民俗学を横断するようなこうした分析枠の構築は学術的な刺激となるが、これをより実証的に議論していく上では、関連する研究領域からの研究者の協力が必要と思われる。そうした研究協力態勢が十分構築されなかった点が残念である。

③第3班

第3班「環境と景観の資料化と体系化」は、3つ

の課題を担っていたが、研究が細分化される反面、全体としての有機的連関が薄れたことが担当者自身からも述べられている。ただ「景観の時系列的研究」の課題では、日本常民文化研究所所蔵の1930年代撮影の「澁澤映像資料」がベースとなった研究であり、「資料化」という目的は一定程度達成されている。非文字資料の中で、絵と並んで写真は資料化の対象としては適したものであるが、資料化の質を左右するのは、そこからどのような情報を読み取り、また付加するかである。とくに写真に関するメタ情報が必須である。どのようなメタ情報が必要か、あるいはどのようなメタ情報に注目すると、その写真から新たな情報が読み取れることになるかについての理論的考察と並行させる必要がある。

この点で関東大震災に関する絵葉書の分析は、理論構築への一定のプロセスを示しており評価される。海外神社の景観の分析も一定の成果が示されている。神社跡地の景観の変容を「改変」「放置」「再建」「復活」の4類型に分け、さらにこうした変容に関わる要因について、政治的要因、社会的変動、経済的發展、文化伝統、支配勢力交代の「刻印」という5つを提示している。こうした分析は、個々の神社跡地のインテンシブな研究が伴うことによって、さらに深みを増すと期待される。

④第4班

第4班の「地域統合情報発信」は、上記の課題を特定地域において総合的に研究することと、ネット上に発信していくことを目指すものであったが、いずれも研究成果がまだ十分提出されておらず、評価は困難である。とくにネット上での発信は不十分である。

⑤第5班

第5班「実験展示」では、身体技法の中で「歩く」ことがもっとも基本的であるとして「あるく—身体記憶—」の展示を実施したが、実験的試みとはいえ、十分な研究成果とは言えない。会場において動画で示される「ナンバ歩き」は、身体工学あるいは人間工学でも注目されており、これを身体技法としてとらえるなら、こうした分野での研究成果を取り込むことも必要になるのではないかと感じられる。

⑥第6班

非文字資料に含まれるものはきわめて範囲が広いので、それがどのように区分されるか、文字資料と非文字資料はどのように関係し、どのような違いがあるのかという基本的な議論が求められるが、この点はあまり議論がなされていない。またこのプログラムでは古代から現代に至るまでの多様な非文字資料が対象となっているが、時代・社会の違いによる非文字資料の位置づけの違いをどう処理するかについても、ある程度の理解が研究推進者の間に必要であったのではないかと感じられる。シンポジウムにおいて、非文字資料は何か、資料化とは何かといった形での議論もなされているが、これを展開させて理論的部門を今少し充実させるべきであったとの印象を与える。

3. 若手研究者の育成について

若手研究者の育成は、研究室が確保され、自由な研究とプログラムへの参加との双方が考慮されており、研究成果も報告書等に一部掲載されている。ただ、このプログラムに直接関係するような研究論文は少なく、その点では若干物足りなさが感じられる。

神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程では「COE研究員(RA)及びCOE支援者(TA)として学生を任用する場合にあっては、第1項に定める者のほか、本学大学院博士後期課程に在籍する者に限る。」となっている。非文字資料を研究する若手研究者を神奈川大学の大学院の研究課程で育成するという意図は理解できるが、実際に非文字資料の内容はきわめて多岐にわたっており、他大学の大学院生に開くという姿勢が示されてもよかったのではないか。

4. 研究成果の公開について

プログラムの基本的情報及び研究成果は、書籍、ニュースレターとして刊行された他、ウェブ上でも公開されている。印刷物による研究成果の公開性は一定の水準を満たしているが、ウェブ上の公開については、若干の工夫の余地が残る。研究成果、ニュースレター等はPDFファイルとして閲覧が可能と

なっており、また透明テキストファイルが付されているので便利である。しかし作成された3点のデータベースは、どのような利用者とどのような利用方法を想定しているのか、やや不明瞭である。自由検索だけではどのような対象を調べられるのか分かりづらい。改善の余地を残すものとなっている。

水嶋英治委員(常磐大学コミュニティ振興学部教授)

① 画像資料の体系化と情報発信

神奈川大学がこれまでに蓄積してきた膨大な資料群を活用し、また優れた研究実績を備えた研究者を組織化して、新たな視点で歴史民俗資料を活用しながら非文字資料を体系化する試みは、極めて学際的な研究領域であり、また同時に、複合的な研究領域である。

本研究は真の意味で、新領域の開拓分野であり、非常に大きな挑戦であったと思量される。5年間の研究・思考プロセスは常に革新的なものであったと考えられ、後に続く研究者たちにとっても非常に有益な情報を含み、またその結果としての学術成果は膨大であり、極めて学術的水準が高いものと評価に値する。

今回の研究素材として大きな役割を果たした『絵巻物による日本常民生活絵引』をひとつの例にとってみても、一国の民俗学にとどまらず、アジア圏域を見通した視野の広いものであり、世界的な研究として推進させたことはわが国を代表する成果と言っても過言ではないだろう。

「字引」に対する「絵引」という概念は、研究者のみならず、未知の専門用語を知らない者にとっては、字引を引くことすらできないのが本当のところである。しかし、一般人の自然的思考に近く、絵引きという概念を具現化し、さらに非文字を可視化・発展させ、情報化したものを英訳、中国語訳、韓国語訳するなど、マルチ言語化の試みは壮大な作業の積み重ねであり、今後この分野で国際的にも一挙に加速・推進させるものとして期待できよう。

筆者は、昨年の外部評価において「非文字」を文字化する際の危険性について指摘した。すなわち、非文字資料を資料化する試みは、「文字化」への回帰であり、また現代社会を反映する「画像化」という手段を用いることによって、非文字が非文字であり続けるというジレンマに陥る危険性があることに警告を発したつもりであった。しかし、今回の最終年度の成果は、ウェブサイト上で公開されており、実際にそのサイトを検証してみると、この危険性は筆者の杞憂に過ぎなかったものと自省しているところである。

今後、この種の学際的分野が(研究推進の方法論として)国際的に汎用性を持たせるためには、画像から文字化する際の方法論やプロセスを示す必要があるが、これまで出版された『年報』の各報告書を注意深く読めば、各所に研究者たちのノウハウも記述されており、申し分ない。しかし、敢えて欲を言えば、この5年間で培ったノウハウや今回の研究チームに携わったメンバーたちのメソドロジー(研究方法論)を暗黙知として温存するのではなく、広く一般にも分かりやすい形で公開し、普及啓発事業にも取り組んでいけば、さらに国際的にも学際的にも活性化していくと考えられる。

② 研究・教育内容の充実と成果

また、今回の研究では、身体技法・感性・環境・景観などに焦点化しながらカテゴライズしているが、それらの個々の領域がどのように結びつくのか、研究者にとってもなかなか理解しにくいものであった。

しかし、今回試みた実験展示「あるく一身体の記憶—」のような成果公表の一手法も大胆な提案であり、様々なメディアと神奈川大学の所蔵する歴史資料とを組み合わせ、また研究プロセスで蓄積した身体技法などの非文字資料を可視化する技術などを表現して見せた試みは非常に大きな成果であると高く評価したい。

(とは言うものの、展示表現には常に限界があり、その実験展示を見た人でしか成果の公開はできないのが残念である。今後はバーチャル展示としての活

用を検討していくべきであろう)。

「景観の時系列的研究」は神奈川大学の所蔵資料「澁澤写真」の可視化作業であり、膨大な労力と時間がかかったが、デジタル・アーカイブ化の本質的課題である著作権問題や出典の確認作業についても真摯に取り組んでおり、高く評価できる。限られた時間の中で、紆余曲折あったとは言え、一定の成果が出されたことによって、死蔵資料が使用価値の高いものになったことは、今回の非文字資料の体系化の中核をなすものと評価できよう。

地域情報統合情報発信班の「文化情報発信の新しい技術」は単なる技術だけではなく、一連の作業過程を体系化したところに意味を持つものと評価したい。民具、民俗、文書、景観資料等を、使用動作、民具写真、実測図、民俗誌と裏づけ、さらに文書資料との整合性を図り、環境景観の変遷との比較をする・・・というフローは、研究者だけによって成しえる仕事ではなく、地域住民の協力なしではできなかった研究であろう。その意味では、本研究によって、市民生活にも多大な影響を及ぼしたことと思量され、地域市民が文化を守り、あたらしい形態で文化を情報発信していくという、まさに産官学プラス市民の良き関係が構築されたと考えられ、無形の副次的成果もあったものと高く評価できる。

③本研究成果の学術的意義と社会的意義

本「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は調査研究の成果を印刷物としてこれまで数多く公開してきた。『年報』に掲載される成果論文やニュースレターの内容は非常に充実しており、この5年間の着実な成果が表れている。

研究の進捗状況が広く紹介されることによって、本研究の社会的な意味が生じてくるであろう。(可能ならば、非売品としての報告書を、市販化できる手立てをはかり、広く一般市民にも公開・普及啓発してほしいと考えるのは筆者だけではあるまい)。また大部分が日本語のみであり、これらの成果が英文で記載されていれば、さらに学術的価値は高まることは間違いない。「非文字資料」に関して神奈川大学が国際的拠点と位置づけられている以上、掲載

論文も英文で紹介できるよう、今後の充実化計画を学内的にも位置づけ、さらに国際的にも成果が広く知れ渡ることに期待したい。

文字化されていない資料群を情報化し、またそれらをどのように活用していくか、という現代的な課題に取り組んだ神奈川大学の今回の5年間の果敢な姿勢と成果は、わが国の範であり、さらに大きな潜在性を有している。

博物館の設立もあるように聞いているが、具現化できるよう期待したい。世界に誇る「日本常民文化研究所」などの歴史民俗資料学の宝庫との組織的位置づけ・整合性など、学内的な課題もあるだろうが、記念碑的な研究成果の次なるステップを考え、実験展示で培った成果を基礎に博物館設立運動も推進していただきたい。それが、今回の5年間の可視化の新たな成果であるかも知れないからである。

今回のCOEプログラム「人類文化研究のために非文字資料の体系化」の研究成果は、この分野に新風を巻き起こす果敢な挑戦であったと高く評価でき、また本研究にエネルギーを注いだ研究者たちに敬意の念を抱くとともに、独創的な研究成果が公表されたことに大きな拍手を送るものである。

保立道久委員(東京大学史料編纂所教授)

①「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という課題について

昨年の外部評価でも申し上げ、今回、理論グループの橘川教授も明瞭に発言されていたように、「人類文化」の側面をどのように説得的に提示するかが重い課題となっているように思われる。結局のところ、これについては次の二点が必要になっているように思う。

第一は、民俗学と人類学の関係という日本の人類学と民俗学の研究史にとっての積年の課題について仮説的総論を提示することによって、「人類文化」への接近を示すこと、第二には東アジアとの民俗学的な諸関係の検討によって、福田リーダーのいう「一国民俗学」からの脱却の道筋を示すことである。

とくに後者については、本COEはこの間、10年ほどの間に形成された東アジアの人文科学のネットワークの中でも相当の蓄積を果たしたことは確実であり、この点を整合的に示すことによって説得的な立論が可能になると考える。

なお、これは構想中の「非文字資料研究センター」の性格に関わってくる。そこでどのように「人類文化」という構想を引き継ぐか、あるいは引き継がないのかは、結局、神奈川大学の研究戦略、そして常民文化研究所の将来構想に関わってくる問題である。私見では、神奈川大学内部において部局を越えたレベルで常民文化研究所と非文字研究センターを位置づけるためには、「人類文化」というテーマは、引き継いだ方がよいと思う。安定的に民俗学の実分野センターとしての常民文化研究所を維持するためには、経済史や法史の研究者のみでなく、人類学あるいは人類学的な視野をもった社会学研究者を連携研究者としてもっている方向を考えてもよいと思う。

②本プログラムに対する大学の取り組みについて

今回の外部評価資料において予算関係の処置が整然と行われている様子がわかった。これは大学全体の関わりによって可能となったことであると思われる。これは毎年相当金額の大学からの援助があることと同時に特筆すべきことであると思う。

また大学博物館への発展の構想があるということの意味は大きい。これは民俗学を一つの重点としてもつ研究科と博物館のセットを大学の長期戦略として位置づけることを意味する。その場合、これが単に大学博物館であるのではなく、ある分野の学問の中心的センターを背景としたものであることを確認しておくべきである（なおいうまでもないが、スペースについては展示スペースと研究スペースを一体化した構想がまとめられればベストである）。

現在、文部科学省、学術審議会の研究基盤部会を中心に進められている国公私立の大学の研究所の拠点化、ネットワーク化の動きは、(1)特定の分野での中心研究所を重視していること、(2)私立大学を重視していることの二点において、「非文字研究センター」と「博物館」構想にとっては追い風となり

うるものである。しかもそれは短期的な追い風であるとは考えられない。その意味でも、常民文化研究所のような Prestige の高い中核的研究所をもっている強みを十分に位置づけるべきであると思う。もしグローバルCOEが通過した場合は長期戦略を立てる機会であると思う。

なお、博物館といってもどのような博物館を考えるかについては相当の議論が必要になると思われる。その場合、民俗学の中心センターをもつ神奈川大学にとっては、そこを中心に文理連携・情報化という視野をもつことが有効であると思うが、それ故に、博物館とはいっても、可能ならば、それが実質上は情報学的な研究の基盤的センターを組み込んでいることが望ましいと思う。

なお、博物館の一つのあり方について、発言したアメリカ各地域にある「Historical Society」といわれるNGOの組織について若干の情報を提供したい。たとえばArizona Historical SocietyのHPをみますと「The Arizona Historical Society has the world's largest collection of Arizona history artifacts, documents, and photographs. Feel free to ask us about research, educational programs, and tours. The Arizona Historical Society was founded by the territorial legislature on Nov. 7, 1864. The Society is Arizona's oldest cultural institution, fulfilling its mission "to collect, preserve, interpret and disseminate the history of Arizona」とあります。ネットワークで検索すると「Historical Society」がズラッとならぶのは壮観です。史料の蒐集と編纂を行い、さらに博物館・教育施設をもっていて、だいたい民間の基金によって支えられているのが一般のようです。これは一九世紀、アメリカの建国を記念するためにできあがったもののようなものですから、アメリカ独特のもので、東アジアで同じようなものを考えることはむずかしいと思うのですが、しかし、この組織はフォークロアの研究を重要な仕事としているようですから、今後の博物館について文部科学省に対して議論する場合に、重要な範型になると思います。

③本プログラムの研究拠点について

大学にとってのCOEは上記のような文理連携をふくめて長期戦略としての意味があるが、それと基礎となる研究拠点にとってのCOEの意味は別個である。基礎拠点にとってはCOEはあくまでも臨時的な企画であり、むしろそれを研究拠点としてどう利用するかを戦略を確定し、そのレベルで意思統一しておくことが重要であると思う。

その場合、キーとなるのは、やはり常民文化研究所の将来構想ではないかと思う。常民文化研究所は、民俗学における渋沢一宮本常一の流れに依拠して形成されていると思うが、民俗学のセンターとしては、今後、どのような道を考えるかは、民俗学の今後の展望全体に関わっている。他のシェーレや研究組織との関係、方法的な論争、今COEで新たな問題となった「環境」・「身体」などの問題にどう関わるかなど議論すべきことは多い。なお、この将来構想の中には、情報学的な仕事を日常的な研究業務の中にどう組み込むかという問題があるに違いないことは、前回の外部評価で意見をいったので再説しない。

もう一つの問題は、今後の歴史学と非文字研究センターの関わりである。これについては、歴史学の側からのまとまった意見を聞きたかったように思った。なかなか困難なことではあろうが、これは広い意味では、歴史学と民俗学・人類学の学際的関係の将来にも関係することであり等閑にふせないことであると思う。

なお、研究科においては学位取得者の数は立派なものだと思う。他大学からの院生の入学が多いという特徴は常民文化をもつ組織として維持すべきものと思う。

④本プログラムの研究事業について

常民文化研究所として受託事業・委託事業を行っているということを伺ったが、今後は、大規模研究にそのような側面を最初からビルトインすることを考えてよいと思う。けっして事業性に収益性を求めるということではなく、民間委託論にはさらに賛成できないが、しかし、大学が一方の当事者となった受託・委託という事業展開は行政の理解もえやすく、またそもそも博物館学や民俗学のペースに合致

する部分があるように思う。

また、『絵引』の出版の意義は大きく、これを事業としてどのように継続するかについての検討をお願いしたいと思う。

⑤若手研究者の育成について

PD・RAの研究の自主性を尊重せよという文部科学省の指針は、基本的に自然系の発想によっていることに注意する必要がある。自然系では、特定の施設・設備を必要としており、しかも、その施設・設備は特定の研究分野に対応している。自然系での研究の基礎は、それらの施設・設備を作成し、その可能性をできる限り多面的に使い切ることにおかれる。それ故に、大学院生は、所詮、その施設・設備からのがれられないのであり、また、機械の可能性を使い切るためにも多面的な自主性が実際上の必要となる。

しかし、人文社会系では、研究対象は、現存する、過去あるいは現存した社会・文化の総体となり、特定の設備・施設によって囲い込まれている訳ではない。それ故に、理系でいわれるようなPD・RAの研究の自主性の原則は（それ自体としては正しいとしてもが）、そのまま受け入れると、ぎゃくにいわゆる「放し飼い」となって指導放棄にもなりかねない。

ただ、常民文化研究所のように、相当の資料蓄積、さらに民俗学調査にあたっての過去の蓄積や信用・人脈をもっている場合、そこに若手研究者を迎え入れることは重要な意味をもっていると思う。この点は、文部科学省にも正確にしておくべきことであると思う。

⑥研究成果の公表について

多数かつ大部の報告書・出版物は、充実した研究成果を表現していると思う。

ホームページへのアクセス数が、期待されたほど多くないことを知り、昨年の外部評価では意見を述べさせていただいたが、これは結局、画像資料（絵画・模写・写真など）のネットワークオープンにともなう様々な問題が多いことを意味していると考え直した。

また『絵引』や渋沢写真などの研究所の資産の公

開の方向を進めたことの意味は大きい。『絵引』については出版の方向、あるいは商用的なナレッジベースを通じての公開などの手段が有効かどうかも検討の必要があるかもしれない。原蔵者の諸権利を尊重しながらも、公開の方向へ進めてほしいと思う。もちろん、この問題は、まずは研究によって、画像資料の読み解きを進めていくことによって、研究内容を公表していくという側面がある。その意味でも、近現代における写真資料の利用と研究方法についての民俗学からの貢献として、渋沢写真の研究は貴重である。

⑦本プログラムの研究内容について

全体としては、このCOEの成果を引き継ぐために、(1)人類学と民俗学についての仮説的な議論、(2)環境論と身体技法論の見直し(労働論、技術論、情報論などによる媒介)、(3)民俗学と情報論研究の関係のあり方の点検が必要であるという感想をもった。そして、その上にたって、常民文化研究所が「非文字資料研究センター」を支えとして、どのような将来構想を打ち出すかに注目したい。

1班

有力な個人研究者が『絵引』という枠組みを共有してむらがって研究を遂行するという戦略は成功したといえると思う。集中戦略が成功している。マルチリンガル版、近世絵引、韓国・中国の絵引など多様な『絵引』の公刊は壮観である。一国民俗学を越えた東アジアのイメージを打ち出すというイメージが明瞭となった。これを研究動向として確実なものとするために、江戸時代史研究者と東アジア史の研究者に対する問いかけをつよめてほしい。

2班

身体技法の問題にモーションキャプチャーという文理連携的な技法から挑み、そのネットワーク化の国際的な基礎の形成に成功している。東アジアの芸能分析の体系化の見通しは影響の大きな仕事である。他方、道具・民具からの身体技法についても日本社会の多民族性という大きな仮説と関係している。これによって常民文化研究所にとっての新領域としての芸能と伝統的領域としての民具についての線端的研究を進めていることが理解できた。そこか

らもう一度、身体技法そのものと民具学の体系化に立ち戻って、身体技法と技術という形で問題をとらえ直し、統合することを考えていただきたいと思う。
3班

課題①景観の時系列的研究(渋沢写真)、③災害史はおのおの有意義な仕事で、これらに関する『景観と環境についての覚書』などの報告書は充実したものである。とくに渋沢写真は迫力があり、また「災害史」の研究方向は成功したということができると思う。

問題は課題②の「環境認識の歴史の変遷」であるが、これについては、環境と民俗という問題設定そのものを象徴するような不可抗力の事情で、難しい問題を抱えたことは了解した。「環境」というテーマ設定が「曖昧なものに流れ込んでしまう危険性」をふまえて設定したフィールドの調査自身に障害が発生した以上、このような経過はやむをえなかったのかもしれない。

しかし、そもそも、この「非文字」のプランが、当初、環境学を相当大きな領域として提案されたこと自身にも無理があったように思われる。当然のことではあるが、環境認識の歴史の変遷という視角は、きわめて難しい問題である。環境学という場合は、やはり自然系の環境学研究者の存在は必須であるだろうし、歴史学の側の環境史研究がどうしても必要であり、これについては直接には歴史学の側からの応答が問われることになる。とはいえ、歴史学の側にとっても自然科学の側にとっても、これはきわめて難しい問題であるのは周知のことであろう。

問題が大きく、かつ未開拓な点が多すぎて、私見を提示することはできないが、これについて、どのように引き継ぎ、「非文字資料研究センター」の中に統合するかは徹底的に検討したほうがよいと思う。

4班

新設の班として研究計画全体の連関性を示す上で有効な役割を果たしたことが理解できた。とくに情報学との積極的なコラボレーションや、情報化社会の中で民俗学のネットワークを形成する手法の提示についても興味深いものがある。昨年の外部評価で

は私見として「情報システムの提示は約束なので、どうしても実現する必要がある」と述べたが、今年度の報告ではいちおうの形をみせられる体的な進捗状況がわかった。とくに「地域研究と情報学の連携」の国際シンポジウムの組織の意義は大きいと思われる。ただし、昨年、述べさせていただいた「常民文化研究所の日常的な仕事と実績を前提にどのような情報化が必要であり、有用であるかを確認することであろう。データベースやシステムの構築は日常的な仕事の中にもちこんで考えなければならないというのが鉄則である。この問題は常民文化研究所の位置からして、今後の民俗学にとっての情報学の意味という問題に直結している」という私見は、検討を続けていただきたいと思う。今後は、ある意味で「見せるシステム」よりも「使うシステム」が重要になると思う。

5 班

実験展示は興味深かった。民俗学研究者の発想で、発達した電子的ディスプレイと情報システムを使用

して展示を行うことのもつ可能性を実感させてくれた。また「展示の記録保存」という提言も重要であると思う。この二点は、展示を外部委託や展示業者にまかせず、研究者の発想で展示を行っていく上で、民俗学的手法や民俗学的な記録保存の意識がきわめて重要であるのではないかという感を抱かせるものであった。博物館構想の一つの中核になりえるものと思う。

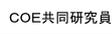
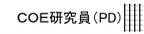
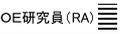
6 班

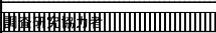
「理論」については、冒頭にふれたように、橘川教授が会議で明瞭に発言され、総括的な議論の準備があることが了解された。しかし、繰り返すようであるが、民俗学と人類学の関係という日本の人類学と民俗学の研究史にとっての積年の課題について仮説的な総論はリーダー自身が行い、それを通じて「一国民俗学」からの脱却の方向を示していただきたいと思う。本COEは、それを説得的に支える様々な実績を用意することに成功していると思う。

3 研究参画者

I 研究参画者異動一覧

事業推進担当者・共同研究員・COE教員・COE研究員(PD)・COE研究員(RA)

COE事業推進担当者  COE共同研究員  COE教員  COE研究員(PD)  COE研究員(RA) 

氏名	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
福田アジオ	事業推進担当者(1/25)				
川田順造	事業推進担当者(1/25)			COE共同研究員(4/1)	
中村政則	事業推進担当者(1/25)				COE共同研究員(4/1)
香月洋一郎	事業推進担当者(1/25)				
佐野賢治	事業推進担当者(1/25)				
鈴木陽一	事業推進担当者(1/25)				
橋川俊忠	事業推進担当者(1/25)				
三鬼清一郎	事業推進担当者(1/25)			COE共同研究員(4/1)	
西和夫	事業推進担当者(1/25)				
河野通明	事業推進担当者(1/25)				
小馬徹	事業推進担当者(1/25)				
中島三千男	事業推進担当者(1/25)				
田上繁	事業推進担当者(1/25)				
廣田律子	事業推進担当者(1/25)				
田島佳也	事業推進担当者(1/25)				
山口建治	事業推進担当者(1/25)				
孫安石	事業推進担当者(1/25)				
ジョン・ボチャリ	事業推進担当者(1/25)				
北原系子	事業推進担当者(1/25)				
齊藤隆弘	事業推進担当者(1/25)				
声澤玖美	COE共同研究員(11/1)				
宇佐見義之	COE共同研究員(9/1)				
梅野光興	COE共同研究員(10/1)				
大里浩秋	COE共同研究員(9/1)		事業推進担当者(4/1)		
落合一泰	COE共同研究員(10/1)				
金子隆一	COE共同研究員(10/1)				
菊池勇夫	COE共同研究員(10/1)				
木下宏揚	COE共同研究員(10/1)				
君康道	COE共同研究員(10/1)				
金貞我	COE共同研究員(10/1)			COE教員(4/1)	
佐々木睦	COE共同研究員(10/1)				
須山聡	COE共同研究員(10/1)		COE共同研究員(4/1)		
富井正憲	COE共同研究員(10/1)				
長瀬一男	COE共同研究員(10/1)		COE共同研究員(4/1)		
八久保厚志	COE共同研究員(9/1)				
原信田實	COE共同研究員(10/1)				
的場昭弘	COE共同研究員(9/1)			事業推進担当者(4/1)	

氏名	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
丸山宏	COE共同研究員(10/1)				
楠本彩乃		COE共同研究員(4/1)			
田口洋美		COE共同研究員(4/1)			
夏宇継		COE共同研究員(4/1)			
能登正人		COE共同研究員(6/1)			
彭国躍		COE共同研究員(4/1)			
増野恵子		COE共同研究員(4/1)			
鈴木廣之			COE共同研究員(4/1)		
前田禎彦			COE共同研究員(4/1)	事業推進担当者(4/1)	
刈田均				COE共同研究員(4/1)	
河野真知郎				COE共同研究員(4/1)	
佐々木長生				COE共同研究員(4/1)	
榎美香				COE共同研究員(4/1)	
津田良樹				COE共同研究員(4/1)	
平井誠				COE共同研究員(4/1)	
鄭美愛					COE共同研究員(4/1)
青木俊也		COE教員(4/1)			
中村ひろ子		COE教員(4/1)			
浜田弘明		COE教員(4/1)			
網野暁	COE共同研究員(10/1)				
富澤達三	COE共同研究員(10/1)				
藤永豪	COE共同研究員(10/1)				
大西万知子	COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)			
中町泰子	COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)			
フレデリック・ルシーニュ	COE研究員(RA)(5/1)			COE研究員(RA)(5/1)	
大坪潤子		COE研究員(RA)(5/1)			
櫻村賢二		COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)		
彭偉文		COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)
丸山泰明			COE研究員(RA)(5/1)		
王京			COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)	COE共同研究員(10/1)
小林光一郎			COE研究員(RA)(5/1)		
土田拓			COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)
宮本大輔			COE研究員(RA)(5/1)	日本学術振興会特別研究員(21COE)	日本学術振興会特別研究員(21COE)
國弘暁子				COE共同研究員(10/1)	
本田佳奈				COE共同研究員(10/1)	
劉鴻水				COE研究員(RA)(5/1)	COE研究員(RA)(5/1)
小野地健					COE共同研究員(10/1)
佐々木弘美					COE研究員(RA)(5/1)
高野宏康	日本学術振興会特別研究員(21COE) 2003年10月1日～2006年3月31日				

COE 調査研究協力者

氏名	2003年度 登録者なし	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
海賀孝明		2004年6月30日登録	2005年4月15日登録	2006年4月19日登録	2007年9月21日登録
金鋒		2004年7月30日登録			
ティモシー・コールマン		2004年12月22日登録	2005年4月15日登録	2006年5月24日登録	
サイモン・ジョン		2004年12月22日登録	2005年9月28日登録		
長瀬一男		2004年12月22日登録			
林海濤		2004年3月2日登録			
ラクエル・ヒル		2004年12月22日登録			
李善愛		2004年4月16日登録			2007年5月23日登録
ウイリアム・リンゼイ		2004年12月22日登録	2005年6月29日登録		
岡本浩一			2005年7月29日登録	2006年4月19日登録	2007年5月23日登録
木下慶子			2005年7月8日登録		
貴志俊彦			2005年5月25日登録		
金泰順			2005年5月25日登録		
アラン・クリスティ			2005年7月29日登録	2006年6月28日登録	
河野眞知郎			2005年4月1日登録		
小松大介			2005年7月8日登録		2007年6月29日登録
関根祥人			2005年6月29日登録		
鈴木彰			2005年4月15日登録	2006年5月24日登録	2007年5月23日登録
津田良樹			2005年5月25日登録		
富澤達三			2005年4月15日登録	2006年9月27日登録	2007年4月18日登録
中井真木			2005年4月15日登録	2006年5月24日登録	
中町泰子			2005年12月21日登録		
原信田實			2005年4月15日登録		
増野恵子			2005年4月15日登録		
林淑姫			2005年5月25日登録		
ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ			2005年7月8日登録		
フレデリック・ルシーニュ			2005年6月29日登録		2007年6月29日登録
泉雅博				2006年6月14日登録	2008年2月1日登録
井谷善恵				2006年7月28日登録	
韓東洙				2006年10月25日登録	2007年5月23日登録
尚峰				2006年12月20日登録	
中野泰				2006年12月20日登録	2007年4月18日登録
平山康典				2006年7月28日登録	
藤永豪				2006年9月27日登録	
堀内寛晃				2006年9月27日登録	2007年4月13日登録
ルシ・サウス・マクレリー				2006年9月27日登録	
諸井孝文				2006年5月24日登録	
尹賢鎮				2006年10月25日登録	2007年5月23日登録
高坂嘉孝					2007年6月29日登録
蔡文高					2007年6月29日登録
田口洋美					2007年5月23日登録
西田幸夫					2007年6月29日登録
新国勇					2007年6月29日登録
山本志乃				2006年9月27日登録	2007年4月18日登録
鄭淳英					2007年6月15日登録
蔽明					2007年7月20日登録
上田純広					2007年9月21日登録

II 出張記録

2003 年度

2003

- | | | | |
|-------------|---|-------------|---|
| 8.16～8.22 | 青森県南郡・岩手県、八戸市博物館・岩手県立博物館他（農具と身体技法との関連についての基礎調査）河野通明（2班） | 10.24～10.27 | 島根県隠岐島（隠岐島における景観変化の実態調査）八久保厚志（3班） |
| 8.19～8.26 | 中国 上海市・杭州市、復旦大学・同济大学・上海師範大学・浙江大學（画像資料の収集について協議）鈴木陽一（1班） | 10.28 | 大阪府吹田市、国立民族学博物館（施設視察および情報システムに関する意見交換）宇佐見義之、木下宏揚、齊藤隆弘、佐野賢治、田上繁、中村政則（4班）、網野暁（PD） |
| 9.8～9.13 | 北海道札幌市（アイヌ文化文献情報収集）田島佳也（1班） | 11.1 | 千葉県佐倉市、国立歴史民俗博物館（生活絵巻、屏風などの調査）ジョン・ボチャラリ（1班） |
| 9.11 | 秋田県田沢湖芸術村、わらび座（デジタルファクトリー事業の調査）廣田律子（2班） | 11.9～11.10 | 東京都青梅市・あきる野市（景観調査のための検討資料収集）香月洋一郎（3班） |
| 9.26～9.30 | 新潟県佐渡島（海岸集落の景観変化の実態調査）八久保厚志（3班） | 11.14～11.17 | 高知県本川村（本川神楽の調査・鬼と翁の身体技法の考察）梅野光興、廣田律子、山口建治（2班） |
| 9.30～10.12 | フランス パリ・南フランス・ヴォークリューズ地方他（伝統的な生業道具との関係での身体技法の事例研究調査）川田順造（2班） | 11.19～11.21 | 宮城県金成町・登米市迫町他（民具からの身体技法の検出のための木摺臼の調査）河野通明（2班） |
| 10.8 | 東京都墨田区、江戸東京博物館（「熙代勝覧」などの調査）ジョン・ボチャラリ（1班） | 11.21～11.23 | 北海道札幌市・江別市（近世アイヌ関係を中心とした画像資料の閲覧・収集）菊池勇夫（1班） |
| 10.8～10.13 | ロシア サハリン（南サハリンに建てられた神社跡の調査）富井正憲、中島三千男（3班）大里浩秋、孫安石（4班）、藤田庄市（写真家） | 11.22～11.26 | 中国 北京市、北京師範大学他（東アジア画像資料の所在調査・収集）田島佳也、福田アジオ（1班） |
| 10.9～10.13 | 青森県・岩手県（青森県立郷土館他での身体技法基礎調査）河野通明（2班） | 11.28～11.30 | 広島県尾道市・愛媛県今治市・大三島町他（濫澤写真資料の現地比定）須山聡（3班） |
| 10.10～10.19 | 中国 河南省他（各研究機関における画像資料収蔵状況調査等）鈴木陽一（1班） | 11.28～11.29 | 広島県尾道市・三原市・竹原市・愛媛県大三島町（景観変化に関する実態調査）八久保厚志（3班） |
| 10.23～10.25 | 北海道札幌市、北海道開拓記念館（展示品および収蔵庫収集品の調 | 12.1～12.5 | 山口県大島郡・広島県、大島郡久賀町役場（景観調査のための地割図の複写及び研究地点の空撮）香月洋一郎（3班） |

12.4	東京都、東京都写真美術館（文化情報発信システムの開発・写真資料の修復、保存技術、データ化、検索システムに関する情報交換） 北原糸子、原信田實（3班）、木下宏揚、齊藤隆弘、佐野賢治、中村政則（4班）網野暁、富澤達三（PD）、中町泰子（RA）	12.25～12.30	仙岳災害記念館他資料調査）北原糸子（3班） 中国 広州市・香港（広州市・香港市内資料所蔵機関などにおける図像資料所在調査）佐々木睦（1班）
12.7	東京都内京橋・上野・日暮里・深川他各所（『名所江戸百景』に描かれた場所の現況の確認調査） 北原糸子、原信田實（3班）	12.27～1.11	ケニア共和国（ケニア国立博物館・ケニア国立文書館の非文字資料収蔵状況調査）小馬徹（1班）
12.8～12.22	西アフリカ ベナン・ブルキナファソ・マリ（西アフリカ三カ国の伝統文化センターでの資料収集・伝統的職能者の面接調査）川田順造（2班）	2004 1.8～1.12	沖縄県那覇市および周辺地域（沖縄における図像資料の所在確認と収集）菊池勇夫、田島佳也、福田アジオ（1班）
12.9～12.13	韓国 ソウル、延世大学校・国立中央博物館他（図像資料所在調査・関連資料の収集）福田アジオ、金貞我（1班）網野暁（PD）	1.18 1.18～1.23	東京都内赤坂・上野・千駄木・日暮里・王子・佃島（『名所江戸百景』が描かれた場所の現況の確認調査）北原糸子、原信田實（3班） 鹿児島県名瀬市・大島郡和泊町・知名町・大和村・住用村、各市町村の教育委員会他（澁澤写真の撮影地確定の為の調査）須山聡（3班）
12.16～12.18	福島県南会津郡只見町（山村民具・民俗・文書資料のデータ化・保存、管理、展示法の視察・情報交換）橋川俊忠、佐野賢治、田上繁（4班）	12.16～12.18 1.22～1.24	青森県三沢市・岩手県北上市（柵摺白の計測と撮影）河野通明（2班）
12.18～12.20	東京都新島（海岸集落の景観実態調査）八久保厚志（3班）	1.22～1.27	中国 江西省南豊県石郵村（旧正月の祭りに登場する翁と鬼の動きの研究）梅野光興、長瀬一男、廣田律子、山口建治（2班）
12.18～12.20	岩手県遠野市・平泉市（木摺白の計測データの収集）河野通明（2班）	1.31～2.2 2.22～2.28	大分県中津市、北原原田神社（人形芝居の調査）山口建治（2班） アメリカ ワシントン・ニューヨーク（ブルックリン美術館、スミソニアン博物館などにおける『名所江戸百景』（版画）の閲覧・アメリカの災害景観に関する社会認識調査）北原糸子、原信田實（3班）、富澤達三（PD）
12.19～12.21	北海道函館市、市立函館図書館（近世アイヌ関係を中心とした図像資料の閲覧・収集）菊池勇夫（1班）		
12.21	東京都内京橋・上野・日暮里・深川他各所（『名所江戸百景』に描かれた場所の現況の確認調査） 北原糸子、原信田實（3班）		
12.24～12.27	長崎県島原市・兵庫県姫路市（雲		

2.25～2.29	鹿児島県鹿児島市・名瀬市（鹿児島県立図書館における景観資料の収集・奄美大島の海岸集落の景観変化の調査）八久保厚志（3班）		ポチャラリ（1班）
3.1～3.3	宮城県仙台市・多賀城市、仙台市歴史民俗資料館、東北歴史博物館（杣摺臼・馬鍬の調査）河野通明（2班）	3.27～3.31	香川県・愛媛県（香川県歴史博物館他における杣摺臼調査）河野通明（2班）
3.3～3.12	中国 雲南省昆明市・麗江県（東巴関係資料の現地調査・資料のデータ化・展示法・教育普及活動の調査）佐野賢治、田上繁、中村政則、的場昭弘（4班）、フレデリック・ルシーニュ（RA）	3.29	秋田県田沢湖芸術村、わらび座（中国人演者の動きをモーショントリッキングで記録・分析する為の準備作業）廣田律子（2班）
3.9～3.12	静岡県静岡市・山梨県南巨摩郡南部町（静岡市立登呂博物館他での杣摺臼調査）河野通明（2班）	2004年度	
3.12～3.17	愛知県名古屋市（倭城、倭館関係の資料の所在確認・調査研究）三鬼清一郎（3班）	2004	
3.15～3.16	静岡県沼津市（沼津市三浦地区の景観変化の実態調査）八久保厚志（3班）	4.22～4.25	山形県山形市他、山形県立博物館他（杣摺臼、馬鍬など在来農具の比較調査）河野通明（2班）
3.15～3.17	新潟県佐渡郡新穂村（歴史民俗資料館での人形芝居調査）山口建治（2班）	4.27～5.1	中国 北京、中国科学院遺伝与发育生物学研究所（モンゴル調査に係る予備調査）川田順造、芦澤玖美（2班）
3.16～3.23	韓国 ソウル・釜山、国立民俗博物館・潤松美術館・釜山大学・釜山近代歴史館（『東アジア生活絵引』編纂のための図像資料調査）金貞我（1班）	4.29～5.5	高知県高知市・長岡郡大豊町、高知県立図書館郷土資料書庫他（環境認識の定点観測調査）香月洋一郎（3班）
3.20～3.21	福島県南会津郡只見町（奥会津地方博物館における杣摺臼調査）河野通明（2班）	5.6～5.9	山形県鶴岡市・羽黒町他、到道博物館・松ヶ岡開墾記念館他（杣摺臼、馬鍬、四季耕作図、明治農具絵図などの調査）河野通明（2班）
3.20～3.26	高知県長岡郡大豊町（環境と景観における資料調査）香月洋一郎（3班）	5.20～5.23	秋田県鹿角市・大館市（鹿角市花輪図書館民俗資料室他での農具民具の資料収集と調査）河野通明（2班）、大里浩秋（4班）
3.23～3.26	岐阜県大野郡白川村・高山市・八幡町（中部地方における非文字資料調査・収集）君康道、ジョン・	5.24～5.28	中国 雲南省麗江県、東巴文化研究院他（納西族の宗教文化における経典とその表現方法・内容の調査）丸山宏（4班）、網野暁（PD）
		5.26～5.30	韓国 ソウル・水原、ホアム美術館・潤松美術館他（『東アジア生活絵引』編さんのための図像資料調査）金貞我（1班）

5.29～5.31	岩手県遠野市（東北地域の山村集落における景観変化の調査研究） 八久保厚志（3班）、藤永豪（PD）	7.6	垣市立図書館（資料調査）北原糸子、増野恵子（3班） 東京都新宿区、国立科学博物館新宿分館（明治期の災害写真の閲覧、調査）北原糸子、増野恵子（3班）、金子隆一（4班）、富澤達三（PD）
6.2～6.6	秋田県秋田市・南秋田郡昭和町他、秋田県立博物館・昭和町歴史民俗資料館他（鍬、馬鍬、馬耕犁、農耕鞍、荷鞍など由来農具の比較調査）河野通明（2班）	7.23	神奈川県横浜市、横浜市歴史博物館（「江戸風俗絵巻展」の見学、および近世風俗に関する絵引作成のための調査）福田アジオ、菊池勇夫、君康道、金貞我、佐々木睦、田島佳也、中村ひろ子（1班）、網野暁、富澤達三（PD）、中町泰子（RA）
6.11～6.13	岐阜県岐阜市・大阪府大阪市、岐阜県美術館・大阪歴史博物館・中之島図書館（山本芳翠についての調査研究と水害関連資料閲覧等） 北原糸子、増野恵子（3班）	7.24～7.29	中国 福建省（厦門・泉州での画像調査と資料収集）佐々木睦（1班）
6.14～6.21	長野県下水内郡栄村（集落生業及び景観に関する現地調査）田口洋美（3班）	7.29～8.7	中国 上海市・江蘇省・浙江省、復旦大学・華東師範大学・蘇州大学他（色彩意味論に関する資料調査）彭国躍（2班）
6.16～6.20	秋田県大曲市・田沢湖町・千畑町他、秋田県立農業科学館・千畑町郷土資料館他（鍬、馬鍬、馬耕犁、農耕鞍、粉摺臼など由来農具の比較調査）河野通明（2班）	8.3～8.6	岐阜県岐阜市、岐阜県立図書館（災害メディアの調査研究）増野恵子（3班）
6.16～6.18	秋田県仙北郡、わらび座デジタルアートファクトリー（中国石郵村の儼戯舞の演技をモーションキャプチャで記録する作業の実施） 廣田律子（2班）	8.4～8.17	メキシコ メキシコシティ・モレリア・パツクアロ湖他（周辺村落において農耕村落・工芸品生産村落における先住民の身体技法の調査）川田順造、落合一泰（2班）
6.17～6.19	福島県南会津郡（只見町の民具、民俗、文書資料の資料化、データ化保存法の現地調査）佐野賢治、大里浩秋、田上繁、中村政則、能登正人、的場昭弘（4班）、網野暁（PD）	8.6～8.14	山形県米沢市他・秋田県平鹿郡平鹿町他・宮城県七ヶ宿町他、置賜民俗資料館・矢島町郷土資料館他（鍬、馬鍬、馬耕犁、粉摺臼など由来農具の比較調査）河野通明（2班）
6.24～6.27	韓国 ソウル・釜山、韓国国立中央博物館・国史編纂委員会他（朝鮮通信使随行画員が描いた日本人の風俗画の調査と収集）田島佳也（1班）、孫安石（4班）	8.7～8.16	グアム・北マリアナ諸島連邦・パラオ共和国（サイパン、テニアン、ロタ、コロールなどの旧南洋諸島に建てられた旧官幣社南洋神社他
6.25～6.27	岐阜県岐阜市・大垣市、根尾谷地震断層観察館・岐阜県図書館・大		

8.13～8.14	の神社跡地の調査) 富井正憲、中島三千男 (3班) 大坪潤子 (RA) 新潟県佐渡市 (新穂地区における人形芝居調査) 山口建治 (2班)	8.28～8.29	地巡見) 菊池勇夫 (1班) 福島県南会津郡 (只見町の画像資料の収集・調査) 中村ひろ子 (1班)
8.16～8.23	長野県下水内郡栄村秋山郷一帯 (秋山郷における環境と景観に関する現地調査) 田口洋美 (3班)	8.31～9.8	中国 上海市・南京市、上海市文化局・南京江蘇省曲芸家協会 (中国伝統人形劇の調査) 山口建治 (2班)
8.16～8.23	中国 広東省潮州・汕頭 (香港・広東の寺院、祠廟における画像調査およびデジタル記録の実施) 佐々木睦 (1班)	8.31～9.8	オーストリア ウィーン他・ドイツ ベルリン他、ウィーン民俗学博物館・ヨーロッパ文化博物館他 (現地の博物館事情、シニアキュレーター養成制度についての情報交換および民俗民具資料調査) 佐野賢治、木下宏揚、中村政則 (4班)
8.17～8.19	山形県酒田市、酒田市立光丘文庫他 (庄内地震に関する写真所在調査) 北原糸子 (3班)	9.4～9.13	中国 内蒙古自治区呼和浩特市・北京、内蒙古智力引進外語專修学院・中国科学院遺伝与发育生物学研究所 (蒙古族特有の身体技法、体の柔軟性、体形の関連などについての調査) 川田順造、芦澤玖美、楠本彩乃 (2班)
8.18～8.28	福島県会津若松市・山形県南陽市・岩手県北上市他 (福島県立博物館他での在来農具比較調査) 河野通明 (2班)	9.5～9.12	韓国 ソウル市・蔚山市・釜山市 (韓国多島海地域の景観調査) 八久保厚志、浜田弘明 (3班)
8.19～8.22	鹿児島県鹿児島市・奄美大島 (笠利町歴史民俗資料館・名瀬市立奄美博物館他における南島関係の画像資料調査) 菊池勇夫、田島佳也 (1班)、富澤達三 (PD)	9.8～9.9	岐阜県、岐阜地方気象台 (濃尾地震に関する写真資料の収集) 北原糸子 (3班)
8.21～8.29	フランス パリ、ルーブル美術館・オルセー美術館他 (博物館・美術館の情報発信方法の調査) 橘川俊忠、能登正人、的場昭弘 (4班)	9.9～9.12	愛知県名古屋市、名古屋大学図書館・名古屋市立鶴舞図書館・愛知県立図書館他 (文献資料の調査研究) 三鬼清一郎 (3班)
8.23～8.25	北海道白老郡白老町 (白老地区での旧アイヌ居住地区および周辺地域の景観の記録) 八久保厚志 (3班)	9.13～9.14	東京都中央区、築地魚市場・おさかな資料館 (海に関する環境データの収集) 香月洋一郎 (3班)
8.25	福島県会津若松市・福島市、福島県立博物館・福島県立図書館 (災害写真の調査・研究) 増野恵子 (3班)、金子隆一 (4班)	9.16	山梨県甲府市、山梨県立美術館 (明治期ルポタージュ絵画に関する調査) 増野恵子 (3班)
8.27～8.29	北海道函館市他、大成町郷土館・厚沢部町郷土資料館・熊石町歴史記念館他 (道南地域に関する画像資料調査および菅江真澄日記関係	9.18～9.23	北海道札幌市・中川郡豊頃町、北

	海道大学・旧豊頃町立二宮小学校 (現二宮報徳館) (絵引作成に関する資料の収集) 君康道 (1班)	12.9～12.11	大阪府大阪市、大阪府公文書館 (明治18年大阪洪水資料の調査) 増野恵子 (3班)
9.21	東京都青梅市、青梅市役所 (地割資料閲覧および景観分析データ収集) 香月洋一郎 (3班)	12.10～12.15	韓国 ソウル市・釜山市、漢陽大学校博物館・慶熙大学校博物館 (韓国版生活絵引制作のための図像資料調査) 金貞我、田島佳也 (1班)
9.26～9.28	愛媛県松山市・広島県佐伯郡宮島町、愛媛県立歴史民俗資料館・宮島町立歴史民俗資料館 (『一遍聖絵』に関連する資料収集) 君康道 (1班)	12.11～12.13	山口県周防大島町・広島県佐伯郡宮島町、周防大島文化交流センター・宮島町歴史民俗資料館 (絵引作成のための資料収集) 君康道 (1班)
10.2～10.8	韓国 ソウル市 (国際博物館協議会、2004 ソウル世界博物館大会 (ICOM) 「博物館と無形文化遺産」、およびICOM総会への参加と各国博物館の情報収集) 金貞我、中村ひろ子 (1班) 佐野賢治、青木俊也 (4班)	12.11～12.15	愛知県名古屋市、名古屋市博物館・名古屋大学図書館 (文献資料の調査研究) 三鬼清一郎 (3班)
10.2～10.8	中国 湖南省 (新寧県における竹王節調査) 廣田律子 (2班)	12.18～12.20	兵庫県神戸市・大阪府大阪市・京都府京都市、真光寺・天王寺・因幡堂 (『一遍聖絵』関連の資料収集) 君康道 (1班)
10.5～10.6	静岡県下田市、了仙寺宝物館 (石版画資料調査) 北原糸子 (3班)、富澤達三 (PD)	12.23～12.24	埼玉県秩父市、秩父市役所・西部山間 (環境データを収集している西日本の山村との比較調査) 香月洋一郎 (3班)
10.8～10.12	中国 上海市・江蘇省蘇州市 (『東アジア生活絵引』作成計画に基づく現地確認調査) 福田アジオ、金貞我、佐々木睦 (1班)、田上繁 (4班)、彭偉文 (RA)	12.23～12.24	福島県南会津郡、只見町教育委員会 (民俗資料情報発信法の「学行 (大学と行政)」提携の方法論的検討) 佐野賢治、橘川俊忠 (4班)
10.8～11.10	福島県南会津郡 (只見町教育委員会蔵の民具カードの撮影と古老へのインタビュー) 中村政則 (4班) 網野暁 (PD)	12.24～12.25	島根県浜田市、浜田市立浜田図書館等 (明治5年浜田地震資料の調査) 増野恵子 (3班)
11.24～12.8	フランス パリ・エピナル、社会科学高等研究院 EHESS・民衆版画博物館など (図像資料の収集と農村での身体技法の調査) 川田順造 (2班)	2005	
11.29～12.5	山口県大島郡久賀町・岡山県笠岡市 (瀬戸内の島の集落の景観データの収集) 香月洋一郎 (3班)	1.20～1.22	千葉県市川市・八千代市・浦安市他、市立市川歴史博物館・八千代市立郷土博物館・浦安市郷土博物館他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)
		1.20～1.23	中国 遼寧省瀋陽市、遼寧省博物館 (原資料確認および撮影等の資

	料調査) 鈴木陽一、佐々木睦 (1 班)		班)、網野暁 (P D)
1.21~1.22	宮城県仙台市、宮城学院女子大学・宮城県美術館・東北歴史博物館他 (現地調査および『近世・近代生活絵引』の編纂のための研究会開催) 福田アジオ、菊池勇夫、君康道、金貞我、田島佳也、中村ひろ子 (1 班)、富澤達三 (P D)	2005 年度	
		2005	
		4.1~4.9	中国 雲南省麗江市 (納西族の東巴・求寿儀式の調査) 夏宇継 (2 班)
2.3~2.5	奈良県奈良市・兵庫県神崎郡・大阪府三島郡、興福寺・日本玩具博物館・伏偶舎郷土玩具資料館等 (興福寺の追灘行事と人形博物館の見学) 山口建治 (2 班)	4.14~4.15	静岡県三島市・藤枝市・島田市、三島市郷土資料館・藤枝市郷土博物館・島田市博物館他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2 班)
2.7~2.8	京都府京都市、京都国立博物館・京都市歴史資料館等 (C O E 訪問研究員の京都仏像調査指導) 橘川俊忠 (4 班)	5.6	千葉県佐倉市、国立歴史民俗博物館 (江戸図屏風原本の見学および図像史料の処理・検討についての聞き取り調査) 金貞我、田島佳也、中村ひろ子、前田禎彦 (1 班)
3.4~3.8	北海道札幌市・帯広市、十勝毎日新聞社・北海道開拓記念館・北海道大学附属図書館北方資料室 (アイヌ絵の調査・収集) 田島佳也 (1 班)	5.16~5.21	ロシア サンクトペテルブルグ、ロシア中央海軍博物館他 (モジャイスキーの「下田の情景」(1854 年当時) 等についての現地調査) 北原糸子 (3 班)
3.17~3.23	中国 上海市、復旦大学・華東師範大学 (色彩意味論に関する社会言語学術研究の実施) 彭国躍 (2 班)	5.22~5.23	秋田県田沢湖町、わらび座デジタルアートファクトリー (能楽師関根祥人氏の動きを対象にモーションキャプチャによるデジタル資料の収録) 廣田律子 (2 班)
3.20~3.31	ケニア ナイロビ他、イギリス ロンドン他、(ナイロビ市を中心に勃興している新たな混成語であるシェン語の現地参与観察調査、ならびに文献調査) 小馬徹 (1 班)	5.26~5.28	長野県長野市・千曲市・小布施町他、長野県立歴史館・長野市立博物館・小布施町歴史民俗資料館他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2 班)
3.21~3.24	山口県岩国市・光市他、岩国市民具収蔵庫・光市歴史民俗資料館・本郷村歴史民俗資料館他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2 班)	5.26~5.29	中国 香港、香港大学博物館 (所蔵品 (絵画中心) の見学と調査) 金貞我 (1 班)
3.26~3.29	福島県南会津郡、只見町教育委員会 (民俗民具資料の現地調査および資料・データ・検索化の検討) 佐野賢治、孫安石、中村政則 (4	6.4~6.7	福島県南会津郡、只見町教育委員会 (民俗・民具資料の現地調査) 佐野賢治 (4 班)
		6.10~6.16	中国 江西省南昌市・南豊県 (江西国際儺文化芸術祭での伝統芸能

	の身体技法調査と儺文化国際検討会への参加) 廣田律子・山口建治 (2班)	7.13～7.14	愛知県豊田市、日本赤十字豊田看護大学(濃尾地震救済活動資料の調査) 北原糸子 (3班)
6.16～6.18	長野県松本市・塩尻市・豊科町、日本民俗資料館・塩尻市民具収蔵庫・豊科町郷土博物館他(在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)	7.21～7.22	秋田県田沢湖町、わらび座デジタルアートファクトリー(モーションキャプチャによるデジタル資料の収録) 廣田律子 (2班)
6.17～6.21	愛知県名古屋市、名古屋大学図書館・名古屋市博物館他(文献史料の調査研究) 三鬼清一郎 (3班)	7.21～7.22	福島県南会津郡(地域統合情報発信プログラムのための只見町との協議及び資料収集) 佐野賢治、橘川俊忠 (4班)、藤永豪 (PD)
6.18～6.19	静岡県沼津市(三浦地区の景観記録、資料収集) 八久保厚志 (3班)	8.4～8.13	韓国 全羅南道(全羅南道における海外神社跡地調査) 中島三千男 (3班)
6.22～6.26	韓国 ソウル、ソウル市立大学博物館他(所蔵作品の調査) 金貞我 (1班)	8.8～8.20	長野県南安曇郡梓川村・下伊那郡高森町他、新潟県上越市他、梓川村資料館・高森町歴史民俗資料館・上越市総合博物館・新潟県立歴史博物館他(在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)
6.23	茨城県水戸市、常磐大学(全国大学博物館学講座協議会大会への参加) 青木俊也 (4班)	8.14～8.27	韓国 江原道・慶尚北道・ウルサン・ソウル(澁澤フィルムの現地比定および関連する資料の収集) 須山聡、浜田弘明 (8.16～8.23) (3班)
6.23～6.24	山口県平生町・周東町・由宇町他、平生町民具館・周東町祖生民俗資料館・由宇歴史民俗資料館他(在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)	8.22～8.27	大阪府大阪市・兵庫県姫路市他、大阪城天守閣・姫路市立城郭研究室他(文献史料の調査研究) 三鬼清一郎 (3班)
6.24～6.26	長野県長野市・上田市・小諸市・佐久市、善光寺・常楽寺・十念寺・金台寺(絵引関連資料収集) 君康道 (1班)	8.23～8.25	和歌山県西牟婁郡白浜町、南方熊楠記念館(所蔵漢籍調査) 山口建治 (2班)
6.24～6.29	中国 香港、香港大学他(東アジアの祠廟・寺院における図像資料の収集) 佐々木睦 (1班)	8.28～9.5	中国 西安市・合陽県・北京市(地方人形劇団に関する現地調査) 山口建治 (2班)
7.2	大阪府大阪市、大阪市立すまいのミュージアム(生活再現などの展示方法、ならびに実験展示情報の収集) 青木俊也 (4班)	8.30～9.1	青森県青森市・北海道松前郡、青森県立郷土館・松前町郷土資料館他(北方・南島関係資料の確認、および諸資料読解のための現地調査) 菊池勇夫 (1班)
7.4～7.18	モンゴル ウランバートル・ホブド(身体技法・感性の領域の現地調査) 川田順造 (2班)		
7.5	新潟県新潟市、北方文化博物館新潟分館(所蔵絵画史料の調査検討) 西和夫 (1班)		

9.1～9.6	富山県砺波市・氷見市・魚津市 他、砺波郷土資料館・氷見市立博 物館・魚津市歴史民俗博物館他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)	10.7～10.11	京都府京都市、京都府立図書館他 (倭城を中心とする文献資料の調 査研究) 三鬼清一郎 (3班)
9.2～9.4	和歌山県和歌山市・粉河町・那智 勝浦町他、和歌山県立博物館・粉 河寺・那智大社他(絵引関連資料 収集のための現地調査) 君康道 (1班)	10.10～10.16	中国 蘇州市・瀋陽市、遼寧省博 物館(『東アジア生活絵引』編纂 に伴う現地調査) 福田アジオ、金 貞我、田島佳也(1班)、王京、 彭偉文(RA)
9.17～9.23	中国 武漢市・上海市、武漢市档 案館・上海市檔案館(資料収集お よび現地調査) 富井正憲(3班)、 大里浩秋、孫安石(4班)	10.13～10.16	富山県滑川市・富山市他、滑川市 立博物館・富山市民俗民芸村他 (在来農具の比較調査) 河野通明 (2班)
9.19～9.24	北海道札幌市・旭川市・帯広市、 北海道大学図書館・旭川市博物 館・帯広百年記念館他(アイヌ関 係文献資料および図像資料の調 査・収集) 君康道(1班)	10.15～10.17	新潟県佐渡市、佐渡島開発総合セ ンター(人形芝居の現地調査) 山口建治(2班)
9.22～10.2	アメリカ カンザス・ボストン・ サンフランシスコ(アメリカにお ける学芸員養成課程の現地調査、 および博物館展示、資料保存・検 索法の実地調査) 佐野賢治(4班)	10.20～10.22	福島県南会津郡、只見町教育委員 会(所蔵資料および只見町景観 CD化の現地打合せ) 佐野賢治、 橘川俊忠(4班)
9.23～9.26	台湾 台北、国立中央図書館(民 間信仰・道教で使われている図像 表現に関する資料調査) 丸山宏 (4班)	10.20～10.23	石川県羽咋市・富山県新湊市他、 羽咋市歴史民俗資料館・新湊市博 物館他(在来農具の比較調査) 河野通明(2班)
9.29～10.2	富山県砺波市・富山市・滑川市 他、砺波郷土資料館・山田村歴史 民俗資料館(在来農具の比較調査) 河野通明(2班)	11.12～11.13	福岡県太宰府市他、九州国立博物 館等(展示に関する最新の情報を 得るための視察調査) 福田アジオ、 中村ひろ子(1班)、河野通明 (2班)、浜田弘明(3班)、青木 俊也、田上繁(4班)
10.1～10.19	ケニア ナイロビ・イギリス ロン ドン(ナイロビで急速に成長発展 する正書法をもたないシェン語を 事例とした非文字資料の体系化の 研究) 小馬徹(4班)	11.30～12.12	フランス グラス・カルパント ラ・ディジョン(感性の領域、と くに嗅覚、と身体技法の研究資料 収集) 川田順造(2班)
10.6～10.8	島根県浜田市、浜田市教育委員会 他(1872年浜田地震についての 実地調査) 北原糸子(3班)	12.1～12.3	北海道札幌市(近世の北方・アイ ヌ関係の図像資料解読のための関 連文献の閲覧・収集) 菊池勇夫 (1班)
		12.2～12.3	京都府京都市・大阪府大阪市、立 命館大学・淀川資料館(文化遺産 シンポジウム参加および所蔵写真

	資料（1885年の大阪洪水）の調査）北原糸子（3班）	3.8～3.11	子（3班） 三重県名張市・伊賀市他、名張市教育委員会収蔵庫、伊賀町歴史資料館他（在来農具の比較調査）
12.10	新潟県新潟市、新潟大学（文化遺産救出シンポジウム参加、災害体験の回復過程についての現代社会のあり方の事例調査）北原糸子（3班）	3.15～3.19	河野通明（2班） 山口県柳井市・周防大島町他、柳井市民具収蔵庫・周防大島文化交流センター他（在来農具の比較調査）河野通明（2班）
12.12～12.19	福岡県福岡市・佐賀県佐賀市・大阪府大阪市他、（倭城・倭館に関する文献資料の調査研究）三鬼清一郎（3班）	3.17～3.23	台湾 台北市、台北中央研究院・国史館（中央研究院及び国史館に関する資料調査）大里浩秋、孫安石（3班）
12.14	東京都文京区、東京大学東洋文化研究所（所蔵資料『清俗紀聞』の写真撮影）金貞我（1班）	3.17～3.20	愛媛県松山市・広島県廿日市市、宝巖寺・岩屋寺・巖島神社（「日本常民生活絵引」マルチ言語版作成のための確認調査）君康道（1班）
12.15～12.16	群馬県吾妻郡、上郷岡原遺跡（天明浅間噴火の遺跡調査、災害痕跡の顕著な事例とその耕地化の痕跡の確認調査）北原糸子（3班）	3.18～3.24	中国 浙江省温州市・泰順県、泰順県木偶劇団（身体技法研究の一環としての中国人形劇調査）山口建治（2班）
12.16～12.18	山口県萩市・長門市・下関市、萩博物館・長門市くじら資料館・下関市立長府博物館他（『鸞輿巡幸図』ほか絵図資料の収集）田島佳也（1班）	3.21～3.22	大阪府吹田市・福井県福井市・石川県金沢市、国立民族学博物館・福井県立博物館・金沢21世紀美術館（実験展示実施のための先進展示技術等の視察調査）中村ひろ子（1班）
12.23～12.26	青森県三沢市・北海道函館市（絵引作成のための資料調査・収集作業）君康道（1班）	3.21～3.24	三重県松阪市・四日市市他、松阪市立歴史民俗資料館・四日市市立博物館他、（在来農具の比較調査）河野通明（2班）
2006			
2.1～2.2	愛知県豊田市、日本赤十字豊田看護大学（関東大震災の日本赤十字社救護活動の調査）北原糸子（3班）	3.22～3.23	石川県金沢市・滋賀県草津市、金沢21世紀美術館・琵琶湖博物館（実験展示実施のための先進展示技術等の視察調査）浜田弘明（3班）
2.3～2.6	福島県南会津郡（只見町小林地区田植え踊りデジタルコンテンツ作成のための現地調査、只見町文化情報発信システム検討）佐野賢治、中村政則（4班）	3.23～3.25	香川県小豆島（瀬戸内海の漁村景観について記録・資料収集）八久保厚志（3班）
2.28	大阪府大阪市、大阪市立中央図書館内大阪市史編纂所（資料「澱川流域水害図」閲覧・調査）北原糸		

3.24～3.25	大阪府吹田市・石川県金沢市他、国立民族学博物館・金沢21世紀美術館他（実験展示準備のための現地調査）青木俊也（4班）	5.28	良国立博物館・大阪市立東洋陶磁美術館（絵巻作品の調査）金貞我（1班） 大阪府吹田市、吹田市立博物館（企画展「千里ニュータウン展」を実験展示の参考とするため実地調査）刈田均（5班）
3.24～3.27	北海道札幌市、北海道立文書館・北海道大学附属図書館（マルチ言語版「日本常民生活絵引」作成のための確認調査）君康道（1班）	5.28～5.29	長崎県長崎市、長崎歴史文化博物館（実験展示および高度専門職学芸員養成に関する情報収集のための視察調査）浜田弘明（5班）
3.29～3.31	岩手県一関市・遠野市他、一関市博物館・遠野市立博物館他（岩手県における凶像資料現地調査）ジョン・ポチャラリ（1班）	6.1～6.2	京都府京都市、京都大学・京都国立博物館（「マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂」のための追加調査）前田禎彦（1班）
2006 年度			
2006			
4.1～4.8	中国 雲南省麗江市、東巴研究院（東巴踊の身体技法や前回調査の反応についての調査）夏宇継（2班）	6.1～6.4	長野県千曲市他、長野県立歴史館他（在来農具の比較調査）河野通明（2班）
4.16～4.17	福島県南会津郡、只見町教育委員会（只見町無文字・非文字資料のデジタルコンテンツ化についての打合わせ）佐々木長生・佐野賢治（4班）	6.7～6.11	韓国 ソウル市、梨花女子大学博物館・国立中央博物館・国立民俗博物館他（『東アジア生活絵引』編纂資料の調査）金貞我（1班）
4.21～4.22	京都府京都市・兵庫県姫路市、立命館大学他（8月開催のワークショップ打合せ、および姫路市において関東震災写真閲覧）北原糸子（3班）	6.15～6.16	福岡県福岡市、九州産業大学（高度専門職学芸員養成プログラムのための調査）中村ひろ子（5班）
5.8～5.12	東京都台東区、震災記念堂（写真所蔵室において災害写真調査）北原糸子（3班）	6.15～6.18	山梨県笛吹市他、山梨県立博物館他（在来農具の比較調査）河野通明（2班）
5.13～5.14	京都府京都市・大阪府大阪市、京都国立博物館、四天王寺（マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』作成のための資料追加調査）君康道（1班）	6.21～6.23	福島県南会津郡、只見町教育委員会（只見町民俗行事デジタルコンテンツ化事業のための、古老からのライフ・ヒストリーの聞き書き調査）佐々木長生・佐野賢治・中村政則・フレデリック ルシーニュ（RA）（4班）
5.27～5.28	京都府京都市・奈良県奈良市・大阪府大阪市、京都国立博物館・奈	7.2～7.3	大阪府吹田市・奈良県奈良市、吹田市立博物館・奈良大学（先進展示の視察調査及び学芸員育成プログラム作成のための調査）青木俊

7.5～7.8	也・田上繁・中村ひろ子（5班） 台湾 台北市、故宮博物院・台湾 大学・中央研究院他（『東アジア 生活絵引』編纂資料の調査）金貞 我（1班）	8.28～8.31	宜供与の依頼）福田アジオ（1班） 韓国 ソウル市、延世大学中央博 物館・独立記念館他（関東大震災 と朝鮮人問題に関する資料調査） 北原糸子（3班）
7.30～8.1	福島県南会津郡、只見町教育委員 会（只見町撮影プロデュース）橘 川俊忠（4班）	8.28～8.31	高知県長岡郡（大豊町での「環境 認識とその変遷の研究」の補足調 査）香月洋一郎（3班）
8.2～8.7	カナダ バンクーバー市、ブリテ イッシュコロンビア大学（大学主 催「Tokugawa Travel Workshop」 への出席および研究発表）北原糸 子・福田アジオ	8.29～9.1	長野県・山梨県、原村教育委員 会・南アルプス市教育委員会（在 来農具の比較調査）河野通明（2 班）
8.5～8.14	中国 東北部（旧満洲国）、瀋陽～ 四平（旧満鉄沿線都市に建てられ た神社跡地の調査、3班課題「環 境に刻印された人間活動および災 害の痕跡解説」の事業のための調 査）津田良樹・中島三千男（3班）	9.3～9.6	中国 山東省青島市（第2回国際 シンポジウムにおいて青島の租界 跡などの対象地を総合的に理解す るための現地調査）北原糸子（3 班）
8.17～8.19	福井県小浜市、福井県立若狭歴史 民俗資料館（遠敷の民俗全般の調 査）山口建治（2班）	9.3～9.11	中国 浙江省温州市・秦順県他、 秦順県文博館等（木偶祭祀調査） 山口建治（2班）
8.20～8.26	中国 上海市、上海市档案馆・上 海市図書館・旧内外棉工場跡等 （旧租界の現状調査と資料収集） 大里浩秋・富井正憲（3班）	9.12～9.14	北海道有珠・虻田他、有珠善光 寺・有珠郷土館・虻田町立郷土資 料館他（江戸期有珠・虻田辺の絵 図情報の巡見調査—建物・地名・ 馬牧等の場所の確認）菊池勇夫 （1班）
8.22～8.26	韓国 江原道麟蹄郡・光州広域市 他、麟蹄山村民俗博物館・東津水 利民俗博物館他（日韓の農具の比 較調査および国際シンポジウム打 合せ）河野通明（2班）	9.13～9.20	フランス パリ市・リヨン市、 INP・Institut d'Asie Orientale・ Le Havre 市立美術館・Musée du quai・リヨン大学（理論総括のた めのフランス博物館調査および聞 き取り調査、シンポジウムの打合 せ）的場昭弘（6班）
8.22～8.31	韓国 ソウル市・全羅北道金提市 他、国立中央博物館・民俗博物 館・漢陽大学博物館・農業博物館 （『東アジア生活絵引』関連資料調 査）金貞我（1班）	9.14～9.17	静岡県東部、御殿場市・沼津市な どの資料館（在来農具の比較調査） 河野通明（2班）
8.28～8.31	韓国 ソウル市、延世大学校中央 博物館・国立民俗博物館・漢陽大 学博物館等（『東アジア生活絵引』 関連資料調査および利用申請・便	9.15～9.16	福島県南会津郡（只見町民具カー ドのデジタルデータ化のための入 力作業）橘川俊忠・木下宏揚・佐 野賢治（4班）

9.21～9.23	石川県金沢市・滋賀県草津市、金沢21世紀美術館・滋賀県立琵琶湖博物館（博物館の先進的展示に関する調査）榎美香（5班）		伝集落を中心とした地域での「澁澤写真」喜界島分の追跡調査）香月洋一郎（3班）
9.23～9.24	大阪府吹田市、国立民族学博物館（実験展示にかかわるシンポジウム「ユニバーサル・ミュージアムを考える」参加）中村ひろ子・福田アジオ（5班）	11.16～11.17	福岡県太宰府市・長崎県長崎市、九州国立博物館・長崎歴史文化博物館（実験展示参考のための現地調査）刈田均（5班）
9.29	長野県、山梨県、原村教育委員会・南アルプス市教育委員会（在来農具の比較調査）河野通明（2班）	11.23～11.28	中国 江蘇省蘇州市（『東アジア生活絵引』編纂のための現地調査）金貞我・鈴木陽一・福田アジオ・王京（R A）・彭偉文（R A）（1班）
10.8	滋賀県草津市、琵琶湖博物館（実験展示班の展示調査）青木俊也（5班）	12.3	神奈川県小田原市（「景観の認識とその変遷の研究」鎌倉調査の一環として、北条氏の旧城下との事例比較のための現地調査）香月洋一郎（3班）
10.11～10.14	福島県南会津郡只見町・秋田県田沢湖町、只見町教育委員会・わらび座（只見町芸能情報・資料収集・作成のため）橘川俊忠・廣田律子（4班）	12.23～12.24	広島県福山市、日本はきもの博物館・広島県立歴史博物館（実験展示のための先進展示の調査）青木俊也・中村ひろ子・丸山泰明（P D）（5班）
10.19	愛知県愛知郡長久手町、愛知県農業総合試験場（在来農具の比較調査）河野通明（2班）	12.25～12.27	石川県金沢市、石川県立図書館・石川県立歴史博物館・近世史料館（旧玉川図書館）（『農業図絵』の記載内容確認と補充情報の収集）田島佳也（1班）
10.24～10.28	鹿児島県大島郡喜界町、喜界町教育委員会・阿伝集落の公民館（「澁澤写真」喜界島分の追跡調査及び発表にむけての地元との合意確認）香月洋一郎（3班）	2007	
11.10	神奈川県横浜市、鶴見大学（同大学院文化財学専攻における高度専門職学芸員養成プログラムの調査）田上繁・中村ひろ子・浜田弘明・福田アジオ・丸山泰明（P D）（5班）	1.24	神奈川県小田原市、神奈川県立生命の星・地球博物館（実験展示にかかわる「バリアフリー研修会」への参加）中村ひろ子（5班）
11.11～11.13	福島県南会津郡只見町（シンポジウム「民具は世界を結ぶ」に参加）福田アジオ、佐野賢治、橘川俊忠、河野通明、佐々木長生（4班）	2.1～2.4	京都府京都市・兵庫県神戸市、神戸女子大学古典芸能研究センター・吉田神社・長田神社（鬼追行司と祓いの技法の現地調査）山口建治（2班）
11.12～11.14	鹿児島県大島郡喜界町（喜界町阿	2.27	東京都墨田区、江戸東京博物館（実験展示にかかわるシンポジウ

3.2～3.3	ム「誰にもやさしい博物館づくり」に参加) 中村ひろ子 (5班)	7.3	香月洋一郎 (3班) 東京都港区、鹿島建設株式会社「関東大震災写真データベース」作成のための技術者との打合せ)
3.10～3.18	福井県小浜市、神宮寺 (お水送り行事の調査) 山口建治 (2班)		
3.13～3.14	中国 天津市・山東省青島市、天津南開大学および天津旧日本租界・青島旧日本人居住区 (旧日本租界に関する現地調査) 大里浩秋・富井正憲 (3班)	7.13～7.16	王京 (PD) (3班) 東京都文京区、東京大学 (東京大学COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」が共催する国際シンポジウムに参加のため) 王京 (PD)
3.22～3.25	福岡県大宰府市、九州国立博物館 (『東アジア生活絵引』関連資料調査) 金貞我 (1班)	7.17	東京都港区、東京都公文書館 (「関東大震災写真データベース」作成のため、航空写真の所蔵状況とその撮影背景についての資料調査) 王京 (PD) (3班)
3.23～3.28	福島県南会津郡只見町 (データベース構築のための民具カードスキャナ取込作業、および現地調査) フレデリック・ルシーニュ	11.9	東京都町田市、玉川大学 (平成19年度全国大学博物館学講座協議会東日本部会大会出席) 中村ひろ子 (5班)
2007 年度		12.25～12.28	中国遼寧省瀋陽市、遼寧省博物館 (遼寧省博物館所蔵資料の利用について報告協議) 鈴木陽一・金貞我 (1班)
2007		1.22	東京都港区、東京都公文書館 (「関東大震災・地図と写真のデータベース」作成の基礎的資料としての関連について資料のデジタル化) 北原糸子・王京 (PD) (3班)
4.28	千葉県佐倉市、国立歴史民俗博物館 (企画展示「西のみやこ・東のみやこ」の見学、調査) 菊池勇夫・金貞我・中村ひろ子・福田アジオ・前田禎彦 (1班)	3.18～3.19	石川県金沢市 (『日本近世生活絵引』作成資料所蔵者他への報告) 田島佳也 (1班)
4.29～4.30	福島県南会津郡、只見町教育委員会 (地域統合情報発信のコンテンツとしての民具カードの入力作業方法の開発と指導) 佐野賢治・小野地健 (PD) (4班)		
6.20～6.21	山形県山形市 (平成19年度全国大学博物館学講座協議会全国大会への参加) 中村ひろ子 (5班)		
6.24	山形県山形市、東北工科大学 (本年度の作業班の報告書の内容検討及びそれに使用する写真資料につ		

4 研究組織

I 拠点形成委員会

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
委員長	中島三千男	中島三千男	中島三千男	中島三千男	池上和夫
副委員長	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ
委員	田上 繁	田上 繁	田上 繁	田上 繁	香月洋一郎
委員	鈴木陽一	鈴木陽一	大里浩秋	大里浩秋	大里浩秋
委員	香月洋一郎	橘川俊忠	橘川俊忠	佐野賢治	佐野賢治
委員	橘川俊忠	西 和夫	西 和夫	西 和夫	西 和夫
委員	木川紘治	木川紘治	木川紘治	高橋規則	高橋規則

II 研究推進会議

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
拠点リーダー	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ	福田アジオ
サブリーダー	川田順造	川田順造	川田順造	橘川俊忠	橘川俊忠
サブリーダー	中村政則	中村政則	中村政則	中村政則	西 和夫
研究遂行 責任者	香月洋一郎	香月洋一郎	中島三千男	香月洋一郎	香月洋一郎
研究遂行 責任者	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治
研究遂行 責任者	鈴木陽一	鈴木陽一	大里浩秋	大里浩秋	大里浩秋
事務局長	橘川俊忠	橘川俊忠	橘川俊忠	田上 繁	田上 繁

Ⅲ 各種委員会委員

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度
研究会					
委員長	香月洋一郎	香月洋一郎	中島三千男	大里浩秋	大里浩秋
研究会担当	八久保厚志	八久保厚志	大里浩秋	前田禎彦	前田禎彦
研究会担当	田上 繁	田上 繁		田島佳也	田島佳也
広報委員会				編集・出版委員会	
委員長	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治	香月洋一郎	香月洋一郎
委員	橘川俊忠	橘川俊忠	橘川俊忠	橘川俊忠	橘川俊忠
委員	田島佳也	田島佳也	田島佳也	中村ひろ子	中村ひろ子
委員	中村ひろ子	中村ひろ子	中村ひろ子	富井正憲	富井正憲
委員	木下宏揚	木下宏揚	木下宏揚	田上 繁	田上 繁
委員	能登正人	能登正人	能登正人		
ホームページ委員会 含・拡大ホームページ委員会					
委員長	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治	佐野賢治
委員	橘川俊忠	橘川俊忠	橘川俊忠	木下宏揚	木下宏揚
委員	香月洋一郎	香月洋一郎	孫安石	能登正人	能登正人
委員	孫安石	孫安石	齊藤隆弘		福田アジオ
委員	齊藤隆弘	齊藤隆弘			田上 繁
委員					北原糸子
国際シンポジウム実施委員会					
委員長			佐野賢治	大里浩秋	山口建治
委員			西 和夫	河野通明	北原糸子
委員			的場昭弘	田上 繁	金貞我
委員			孫安石	的場昭弘	能登正人
委員			北原糸子	北原糸子	田上 繁
委員				金貞我	田島佳也

IV 拠点形成委員会開催記録

2003年度（平成15年度）

- 2003年10月1日（第1回） 副委員長選出、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議内規他
- 10月29日（第2回） 拠点リーダー・研究遂行責任者担当授業時間数軽減、COE教員採用、拠点形成費補助金使用に関する内規他
- 12月3日（第3回） COE教員採用、ホームページ管理運用内規、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク形成他
- 2004年1月13日（第4回） 「平成16年度21世紀COEプログラム拠点形成調書」他
- 1月28日（第5回） COE教員人事、来年度研究組織、COE共同研究員人事、外部評価実施、2004年度COE研究員（PD・RA）募集他
- 3月10日（第6回） 平成16年度COE研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）交付申請、来年度COE研究員（PD）任用期間の更新他

2004年度（平成16年度）

- 2004年4月21日（第1回） 平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）実績報告書、COE研究員（RA）採用、施設その他懸案事項他
- 5月26日（第2回） 施設に関する要望、COE共同研究員委嘱他
- 6月30日（第3回） 本委員会委員交替、外部評価書への対応、若手研究者派遣・招聘他
- 9月29日（第4回） COE教員の海外出張、海外研究機関との覚書締結、若手研究者の派遣・招聘、中間評価に対する対応、外部評価他
- 10月27日（第5回） COE教員人事、海外研究機関との覚書締結、若手研究者招聘他
- 12月22日（第6回） 事業推進担当者追加、平成17年度21世紀COEプログラム研究拠点形成調書他
- 2005年1月19日（第7回） 21世紀COEプログラム「中間評価関係書類」他
- 2月2日（第8回） 2005年度COE共同研究員人事、2005年度COE研究員（PD）募集要項他
- 3月2日（第9回） 平成17年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）交付申請、2005年度COE研究員（PD）選考、2005年度COE研究員（RA）募集要項他

2005年度（平成17年度）

- 2005年4月15日（第1回） 研究推進会議委員交替、COE研究員（RA）採用、中間評価のヒアリングの実施および各関係調書他
- 4月20日（第2回） 平成16年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）実績報告書、中間評価ヒアリング関係各種調書等事前提出資料他
- 9月28日（第3回） COE教員人事、COE研究員（RA）人事、現地調査および追加説明資料、海外研究機関との覚書締結他
- 12月21日（第4回） COE教員（非常勤講師）増員、来年度研究組織、来年度運営組織、来年度研究計画・予算、日本学術振興会特別研究員（21世紀COEプログラム採択

拠点分) 候補者募集、海外研究機関との覚書締結他

- 2006年 1月11日 (第 5回) 日本学術振興会特別研究員 (21世紀COEプログラム採択拠点分) 候補者の選考方法、「21世紀COEプログラム」に関するアンケート他
- 1月25日 (第 6回) 日本学術振興会特別研究員 (21世紀COEプログラム採択拠点分) 候補者選考他
- 2月 1日 (第 7回) COE教員 (非常勤講師) 人事、2006年度COE研究員 (PD) 募集要項他
- 3月 8日 (第 8回) 2006年度COE研究員 (PD) 選考、研究推進会議委員交替、COE共同研究員人事、2006年度研究担当者の課題別所属、2006年度課題別研究費、2006年度COE研究員 (RA) 募集要項他
- 3月15日 (第 9回) 平成18年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金 (研究拠点形成費) 交付申請書類、「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択) 進捗状況報告書 (中間評価後修正変更版) 提出書類、21世紀COEプログラム「研究拠点形成費補助金 (研究拠点形成費) に係わる代表者等交替届」他

2006年度 (平成18年度)

- 2006年 4月14日 (第 1回) 拠点形成委員会委員交替、COE研究員 (RA) 採用他
- 4月19日 (第 2回) 平成17年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金 (研究拠点形成費) 実績報告書、海外研究機関との覚書締結他
- 7月28日 (第 3回) 外部評価書への対応案、本プログラムと他組織の共催他
- 9月27日 (第 4回) COE教員人事他
- 10月11日 (第 5回) 平成18年度研究拠点形成費補助金追加配分申請他
- 11月15日 (第 6回) 平成18年度研究拠点形成費補助金交付申請、2007年度予算編成の考え方他
- 12月20日 (第 7回) COE研究員 (PD) 人事、サブリーダー代行人事、来年度事業推進担当者ならびに運営組織他
- 2007年 2月 7日 (第 8回) 21世紀COEプログラム平成15年度採択拠点に対するフォローアップ書面調査、来年度COE研究員 (PD) 募集要項他
- 3月 7日 (第 9回) 2007年度COE研究員 (PD) 選考、来年度事業推進担当者の退任、COE共同研究員人事、2007年度研究担当者の課題別所属、平成19年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金 (研究拠点形成費) 交付申請、2007年度COE研究員 (RA) 募集要項他

2007年度 (平成19年度)

- 2007年 4月13日 (第 1回) 拠点形成委員会委員交替、COE研究員 (RA) 採用、代表者 (学長) 交替届他
- 4月18日 (第 2回) 平成18年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金 (研究拠点形成費) 実績報告書、海外提携校派遣若手研究者募集要項、海外提携研究機関若手研究者招聘募集要項他
- 7月20日 (第 3回) 外部評価書への対応、只見町との「学術交流に関する覚書」「映像資料および写真資料の活用に関する覚書」、派遣研究員派遣、訪問研究員受け入れ、第3回COE国際シンポジウム開催について他

- 9月21日（第4回） 研究成果報告書の刊行方法、若手研究者受け入れ、調査研究協力者登録、若手研究者ワークショップ開催計画、COEホームページリニューアル他
- 12月19日（第5回） 事後評価とそれへの対応について、COE終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員および外部評価スケジュール、研究成果報告書・データベース進捗状況、若手研究者ワークショップ、調査研究協力者の登録、COE研究員（PD）の海外研究調査他
- 2008年 2月 1日（第6回） COE終了後の事業継承・発展計画、研究成果報告書・データベース進捗状況、地域統合情報発信データベース、ホームページリニューアル他
- 3月 7日（第7回） COE終了後の事業継承・発展計画、引継ぎ事項、実験展示巡回展、研究成果報告書・データベース進捗状況、第4四半期予算執行について他
- 3月28日（第8回） 事後評価体制、COE終了後の研究参画者のCOE備品・図書・資料の利用、引継ぎ事項、リニューアルホームページ公開について他

V 研究推進会議

2003年度（平成15年度）

- 2003年 8月18日（第1回） 日本学術振興会特別研究員の推薦について他
- 9月19日（第2回） COE研究員（PD・RA）の選考、班別組織、班別研究費他
- 10月29日（第3回） 本年度予算、研究成果とりまとめ、COE調査研究協力者、COE研究員（PD・RA）指導教員・研究業務、ニューズレター発行他
- 12月 3日（第4回） COE教員採用、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク、2004年度予算編成の基本的考え方他
- 12月26日（第5回） 「平成16年度21世紀COEプログラム研究拠点調書」、COE教員採用、来年度研究組織、平成16年度PD・RA募集他
- 2004年 1月13日（第6回） 「平成16年度21世紀COEプログラム研究拠点調書」、平成15年度年報案他

2004年度（平成16年度）

- 2004年 4月16日（第1回） 平成15年度「21世紀COEプログラム」研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）実績報告、2004年度COE研究員（RA）選考、今年度研究実施計画他
- 5月26日（第2回） 外部評価書の対応、COE研究員（PD・RA）の研究業務、COE共同研究員の追加委嘱他
- 6月30日（第3回） 若手研究者の派遣・招聘、海外提携対象機関の追加他
- 7月30日（第4回） 第2四半期の予算執行、2003年度外部評価対応の具体化の方策他
- 9月29日（第5回） 海外研究機関との覚書締結、海外提携研究機関への若手研究者の派遣、COE概要の刊行他
- 10月27日（第6回） COE教員人事、2005年度事業計画、2005年度予算編成の基本的考え方、文部科学省に提出する中間報告書作成準備他
- 12月15日（第7回） 2005年度研究計画・研究組織、中間評価実施への対応、研究拠点形成調書提出他

12月22日（第8回）	中間評価実施への対応、2005年度予算、事業推進担当者の追加他
2005年 1月11日（第9回）	研究拠点形成調書提出、収集資料等の保存・管理（案）について他
1月19日（第10回）	中間評価用関係書類について、2005年度C O E共同研究員人事他
2月 2日（第11回）	2005年度C O E共同研究員人事、国際シンポジウム実施委員会について他
3月 2日（第12回）	2005年度C O E研究員（P D）の選考、C O E研究員（R A）の募集要項（案）他
2005年度（平成17年度）	
2005年 4月15日（第1回）	研究推進会議委員の交替、C O E研究員（R A）の選考、中間評価のヒアリングの実施および各関係調書等の提出について他
4月20日（第2回）	平成16年度「21世紀C O Eプログラム」研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）実績報告書、中間評価ヒアリング提出資料、国際シンポジウム実施計画案について他
5月25日（第3回）	情報発信および実験展示・高度学芸員養成に関するワーキンググループ編成、海外提携研究機関への若手研究者派遣、C O E研究員（R A）の指導教授について他
6月 1日（第4回）	中間評価の現地調査への対応、第1四半期予算執行状況について他
6月29日（第5回）	中間評価の現地調査への対応、データベースの作成及び公開について他
7月 8日（第6回）	中間評価現地調査質問事項への対応、調査研究協力者の登録について他
7月29日（第7回）	中間評価現地調査報告、海外提携研究機関への派遣研究員および訪問研究員について他
9月 1日（第8回）	現地調査および追加説明資料、実験展示および高度専門職学芸員養成方法検討、ワーキンググループ答申について他
9月28日（第9回）	C O E教員・C O E研究員（R A）人事、外部評価への対応、地域における統合と情報発信検討、派遣研究員および訪問研究員について他
10月26日（第10回）	2006年度以降の組織・事業計画、統合情報発信班発足、本年度外部評価委員および実施日程、年報執筆者エントリー状況について他
11月30日（第11回）	2006年度研究組織、派遣研究員募集結果、訪問研究員受け入れ、国際シンポジウム、プレシンポジウム報告書について他
12月21日（第12回）	2006年度研究組織・研究計画、C O E教員増員、日本学術振興会特別研究員候補者募集について他
2006年 1月11日（第13回）	日本学術振興会特別研究員候補者選考、2006年度研究計画・予算、第3四半期の予算執行について他
1月25日（第14回）	日本学術振興会特別研究員候補者選考について他
2月 1日（第15回）	C O E教員（非常勤講師）人事の承認、2006年度組織体制・研究計画について他
3月 8日（第16回）	C O E研究員（P D）選考、2006年度組織体制、2006年度C O E補助金内定通知、R A研究員募集要項について他
3月15日（第17回）	2006年度研究拠点形成費交付申請書類、進捗状況報告書提出書類について他

2006年度（平成18年度）

- 2006年 4月14日（第1回） 2006年度事業推進組織、国際シンポジウム実施計画（案）について他
- 4月19日（第2回） 研究拠点形成費の実績報告書、浙江工商大学日本文化研究所との覚書締結、海外提携研究機関派遣・招聘研究者募集要項（案）について他
- 5月24日（第3回） 海外提携研究機関派遣研究員、訪問研究員、ジョイントワークショップについて他
- 6月28日（第4回） 海外提携研究機関への派遣若手研究者選考と派遣期間の変更および訪問研究員受け入れ、第2回COE国際シンポジウムについて他
- 7月28日（第5回） 外部評価書への対応案、本プログラムの最終研究成果とりまとめ、班・課題班のデータベース構築および印刷物等の刊行計画について他
- 9月27日（第6回） COE教員人事、COEプログラムの最終研究成果とりまとめ、COE終了後の事業継続・発展計画について他
- 10月11日（第7回） 平成18年度研究拠点形成費補助金の追加配分申請、海外提携研究機関からの訪問研究員の受け入れについて他
- 10月25日（第8回） 本年度外部評価委員及び評価日程、海外提携研究機関からの訪問研究員の受け入れ、5年目の研究成果論文集刊行について他
- 11月15日（第9回） 平成18年度研究拠点形成費補助金の交付申請（追加配分）、2007年度予算編成の考え方について他
- 11月29日（第10回） COE終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員および日程、第3回国際シンポジウム実施委員会委員について他
- 12月20日（第11回） COE研究員（PD）人事、来年度事業推進担当者・運営組織、来年度研究計画・予算について他
- 2007年 2月7日（第12回） 2007年度研究計画・予算、COE終了後の事業継承、発展計画について他
- 3月7日（第13回） 2007年度COE研究員（PD）の選考、共同研究員人事について他

2007年度（平成19年度）

- 2007年 4月13日（第1回） 2007年度COE研究員（PD）の選考、2007年度研究担当者の研究班等の所屬について他
- 4月18日（第2回） 平成18年度21世紀COEプログラム研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）の実績報告書、海外提携研究機関派遣・招聘若手研究者募集要項（案）について他
- 5月23日（第3回） 海外提携研究機関派遣研究員選考、COE研究員（PD・RA）の研究業務分担について他
- 6月29日（第4回） 映像資料及び写真資料の活用に関する覚書、映像利用許諾書、海外提携研究機関からの訪問研究員受け入れ、第3回国際シンポジウム、外部評価書への対応他
- 7月20日（第5回） COE終了後の事業継承・発展計画、只見町との覚書、実験展示開催期間の変更および開催要項他
- 9月21日（第6回） 2008年度COE後継組織（暫定）予算要望（案）、研究成果報告書、訪問研究員受け入れについて他

- 10月19日 (第 7回) 本年度外部評価委員および評価日程、COE終了後の事業継承・発展計画、研究成果報告書・データベース進捗状況、調査研究協力者の登録他
- 11月28日 (第 8回) 研究成果報告書・データベース進捗状況、データベース掲載の共通様式およびホームページ掲載に伴う諸問題、COE終了後の事業継承・発展計画、COE研究員(PD)の海外研究調査他
- 12月19日 (第 9回) COE終了後の事業継承・発展計画、事後評価とそれへの対応について、研究成果報告書・データベース進捗状況、若手研究者ワークショップ開催計画他
- 2008年 2月 1日 (第10回) COE終了後の事業継承・発展計画、研究成果報告書・データベース進捗状況、地域統合情報発信データベース、ホームページリニューアル他
- 3月 7日 (第11回) COE終了後の事業継承・発展計画、引継ぎ事項、実験展示巡回展、研究成果報告書・データベース進捗状況、第4四半期予算執行について
- 3月28日 (第12回) COE終了後の事業継承・発展計画、COE終了後の研究参加者のCOE備品・図書・資料の利用、研究成果報告書・データベース、事後評価体制、引継ぎ事項、外部評価書、リニューアルホームページ公開について他

VI 全体会議

2003年度 (平成15年度)

- 2003年 7月28日 (第 1回) 事業計画・研究組織
- 9月 1日 (第 2回) 経過報告、研究組織の確定、研究実施に関する諸規程、研究計画および予算執行計画、施設・人員その他の支援体制他
- 10月 1日 (第 3回) 研究組織、COE研究員(PD・RA)採用他
- 10月31日 (第 4回) 本年度予算、COE共同研究員の委嘱、調査研究協力者、COE研究員(PD・RA)の指導教員及び研究業務、ホームページ他
- 12月 5日 (第 5回) COE教員採用、来年度研究計画、外部評価依頼、海外研究者とのネットワーク形成、2004年度予算編成の基本的考え方他
- 2004年 1月31日 (第 6回) 2004年度COE教員人事、来年度研究組織、COE共同研究員人事
2003年度年報編集委員会、海外研究機関とのネットワーク形成他

2004年度 (平成16年度)

- 2004年 5月14日 (第 1回) 本年度研究実施計画、本年度予算執行、実績報告書、COE研究員(PD・RA)採用、広報委員会他
- 7月 9日 (第 2回) COE共同研究員委嘱、PD・RAの研究業務、外部評価への対応、若手研究者派遣・招聘、調査研究協力者の登録他
- 9月29日 (第 3回) 海外研究機関との覚書締結、若手研究者派遣・招聘、中間評価対応、調査研究者登録他
- 11月12日 (第 4回) 2005年度予算編成の基本的考え方、各班研究の進捗状況と課題、海外研究機関との覚書締結他

2005年度（平成17年度）

- 2005年 5月13日（第1回） 本年度研究実施計画、実績報告書、調査研究協力者登録、COE国際シンポジウム実施案他
- 7月 8日（第2回） 中間評価現地調査対応、情報発信ワーキンググループ編成、若手研究者派遣・招聘、調査研究協力者登録、ホームページリニューアル、データベース作成および公開他
- 11月11日（第3回） 現地調査および2006年度以降の組織・事業計画、ワーキンググループ答申、外部評価対応他

2006年度（平成18年度）

- 2006年 4月21日（第1回） 2006年度事業推進組織、研究実施計画、予算他
- 6月30日（第2回） 若手研究者派遣・招聘、立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラムジョイントワークショップ、第2回COE国際シンポジウム他
- 9月29日（第3回） 最終成果とりまとめ、COE終了後の事業継承・発展計画他
- 11月10日（第4回） COE終了後の事業継承・発展計画、5年目の研究成果論文集刊行他
- 12月22日（第5回） 来年度事業推進担当者・運営組織、予算編成の基本的考え方他
- 2007年 2月16日（第6回） 平成15年度採択拠点に対するフォローアップ、2007年度研究組織他

2007年度（平成19年度）

- 2007年 4月20日（第1回） 本年度事業推進組織、研究実施計画、予算、若手研究者派遣・招聘他
- 6月29日（第2回） 只見町との学術交流覚書締結、COE終了後の事業継承・発展計画、若手研究者派遣・招聘、第3回COE国際シンポジウム、外部評価書対応、最終成果報告書総括編纂計画、ホームページリニューアル他
- 9月28日（第3回） 研究成果報告書の刊行、実験展示開催期間の変更および開催要領、若手研究者招聘、調査研究協力者登録、若手研究者ワークショップ開催他
- 11月 9日（第4回） COE終了後の事業継承・発展計画、本年度外部評価委員および外部評価日程、最終成果報告書・データベース進捗状況、調査研究協力者の登録他
- 12月21日（第5回） COE終了後の事業継承・発展計画、事後評価とそれへの対応について、調査研究協力者の登録、COE研究員（PD）の海外研究調査について他
- 2008年 2月15日（第6回） COE終了後の事業継承・発展計画、班・課題の成果要約・データベース共通表記事項の変更、最終研究成果発信に伴うホームページリニューアル、調査研究協力者の登録、若手研究者ワークショップ、第3回COE国際シンポジウムについて他
- 3月28日（第7回） COE終了後の事業継承・発展計画、COE終了後の研究参画者のCOE備品・図書・資料の利用、研究成果報告書・データベース、事後評価体制、引継ぎ事項、外部評価書、リニューアルホームページ公開について

Ⅶ COE広報委員会

2004年度（平成16年度）

- 2004年 6月 7日（第 1回） COE概要発行、ニューズレター編集方針、ホームページ運営他
6月28日（第 2回） 概要の初校2案の提案、ニューズレター5号内容案の説明他
7月22日（第 3回） 概要の体裁の決定・英文翻訳、ホームページの現状説明と今後、年報の制作の流れ・検討事項他
10月12日（第 4回） ホームページに概要の英文の盛り込み、トップページを含めたインフォメーション部分の変更検討、ニューズレター6号案と執筆者肩書きの併記、年報の進捗状況他
2005年 2月16日（第 5回） ホームページリニューアル他

2005年度（平成17年度）

※ホームページ委員会と合同開催

- 2005年 4月11日（第 1回） ホームページリニューアル、ニューズレター編集案他
6月10日（第 2回） ホームページリニューアル他
7月12日（第 3回） ホームページリニューアル、ニューズレター、年報のスケジュール確認他
10月24日（第 4回） ニューズレターリニューアル、ホームページ、年報他
2006年 2月22日（第 5回） ホームページの管理運用・課題別編成に伴うリニューアルの検討、概要の作成、刊行物における掲載許可、年報の進捗状況、ニューズレター11号の進捗状況他

Ⅷ COEホームページ委員会

2003年度（平成15年度）

- 2003年12月26日（第 1回） COEプログラムホームページ内容の一部修正、COEプログラムホームページリンク集、今後のホームページのあり方、ホームページのアクセス件数の報告他
2004年 2月 3日（第 2回） COEプログラムホームページの委託契約、ホームページの内容の手直し、ホームページの英文作成他

2004年度（平成16年度）

- 2004年 4月16日（第 1回） COEプログラムホームページの内容の更新、ホームページの内容の追加（英文掲載など）、ホームページの性格と役割他

2005年度（平成17年度）

※広報委員会と合同開催

- 2005年 4月11日（第 1回） ホームページリニューアル、ニューズレター編集案他
6月10日（第 2回） ホームページリニューアル他
7月12日（第 3回） ホームページリニューアル、ニューズレター、年報のスケジュール確認他
10月24日（第 4回） ニューズレターリニューアル、ホームページ、年報他
2006年 2月22日（第 5回） ホームページの管理運用・課題別編成に伴うリニューアルの検討、概要の作

成、刊行物における掲載許可、年報の進捗状況、ニュースレター11号の進捗状況他

2006年度（平成18年度）

- 2006年 5月19日（第1回） メインメニューの変更、2005年度の活動報告、デザイン、著作権対応としての文字画像ファイルのセキュリティー、画質、転載不可の表記他
- 11月 8日（第2回） 各班成果のウェブ上での情報発信、情報公開に関する問題点、研究内容紹介文、英語版のサイト運用、只見シンポジウムの詳細内容、COE終了後の調査研究資料について他
- 12月 5日（第3回） 新サーバー購入、各班のヒアリング日、ホームページの更新他
- 2007年 2月 7日（第4回） ホームページ委員会と知的所有権担当者の役割分担の確認、著作権等知的所有権に係る資料等の使用許諾から公開までの流れの確認、「名所江戸百景と江戸地震」データベースのホームページ掲載

2007年度（平成19年度）

- 2007年 4月25日（第1回） ホームページのレイアウト変更、地域統合情報班の情報発信に伴う問題についての検討他

拡大ホームページ委員会2007年12月～

- 12月21日（第1回） データベース共通表記事項、最終成果を盛り込んだホームページ作成について他
- 2008年 1月 7日（第2回） 最終研究成果を盛り込んだホームページの作成、サーバーについて
- 1月24日（第3回） 研究成果要約のとりまとめ、最終研究成果を盛り込んだホームページの作成について他
- 3月26日（第4回） リニューアルホームページの公開、データベースの公開について他

5 研究集会

I 国際シンポジウム

(1) 第1回国際シンポジウム

テーマ 非文字資料とはなにか ～人類文化の記憶と記録～

開催日 2005年11月26日(土)・27日(日)

会場 横浜キャンパス16号館 セレストホール

第1日目 11月26日(土)

プログラム

開会挨拶 山火正則(神奈川大学学長)

主催者挨拶 福田アジオ(神奈川大学教授・COE拠点リーダー)

基調講演 川田順造(神奈川大学教授・COEサブリーダー)

「非文字資料から見る人類文化」

セッションI「記号と写実－19世紀後半メディアがもたらした衝撃－」

[コーディネーター]

- 北原糸子(神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者)

[パネリスト]

- 原信田實(国際浮世絵学会会員・2003年度COE共同研究員)
「見えない都市－出来事を語る江戸の錦絵」
- セバスチャン・ドブソン(イギリス、写真歴史家)
「写真による日本に対してのまなざしの形成」
- コンスタンチン・グーバー(ロシア、ロシア海軍博物館チーフアーティスト)
「航海と発明の先達アレキサンダー・モジャイスキーが残した芸術と科学の遺産」

[コメンテーター]

- 渡辺俊夫(イギリス、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授)
- 金子隆一(東京都写真美術館学芸課専門調査員・COE共同研究員)

セッションII「身体技法と祭祀芸能－祭祀者の動きと人形の動きから－」

[コーディネーター]

- 廣田律子(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

[パネリスト]

- 張勁松(中国、湖南省民間文芸家協会副主席)
「中国瑶族の祭祀者の身体技法」
- 田耕旭(韓国、高麗大学校民俗学研究所所長)
「韓国の祭祀芸能における身体技法」
- 大谷津早苗(昭和女子大学助教授)
「人形から見る身体技法」

[コメンテーター]

- 康保成(中国、中山大学教授)
- 山口建治(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

第2日目 11月27日(日)

セッションIII「民具と民俗技術」

[コーディネーター]

- 河野通明(神奈川県大学教授・COE事業推進担当者)

[パネリスト]

- 周星(愛知大学教授)
「中国民俗学は日本の民具研究から何を学ぶべきか」
- 尹紹亭(中国、雲南大学教授・人類学博物館館長)
「中国木製犁の形態と分布」
- 高光敏(韓国、済州大学校博物館学芸研究員)
「排泄の民俗と民具—済州島・韓半島・舟山島の比較」

[コメンテーター]

- 近藤雅樹(国立民族学博物館教授)
- 安室知(国立歴史民俗博物館助教授)

セッションIV「非文字資料の情報化と教育」

[コーディネーター]

- 的場昭弘(神奈川県大学教授・COE共同研究員)

[パネリスト]

- 白庚勝(中国、民間文芸家協会副主席)
「中国における文化遺産の保護について」
- ジュヌヴィエーヴ・ガロ(フランス、パリ国立文化遺産研究所校長)
「フランスにおける文化遺産の保護について」
- 能登正人(神奈川県大学助教授・COE共同研究員)
「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」

[コメンテーター]

- アラン＝マルク・リュ(フランス、リヨン第3大学教授)
- 橘川俊忠(神奈川県大学教授・COE事業推進担当者)

総合討論

[コーディネーター]

- 佐野賢治(神奈川県大学教授・COE事業推進担当者)

[各セッションの報告]

- セッションIコーディネーター:北原糸子(神奈川県大学非常勤講師・COE事業推進担当者)
- セッションIIコーディネーター:廣田律子(神奈川県大学教授・COE事業推進担当者)
- セッションIIIコーディネーター:河野通明(神奈川県大学教授・COE事業推進担当者)
- セッションIVコーディネーター:的場昭弘(神奈川県大学教授・COE共同研究員)

[討論]

[まとめ]

閉会挨拶

(2) 第2回国際シンポジウム

テーマ 画像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く

開催日 2006年10月28日(土)・29日(日)

会場 横浜キャンパス16号館 セレストホール

第1日目 10月28日(土)

プログラム

開会挨拶 山火正則(神奈川大学長)

主催者挨拶 福田アジオ(神奈川大学教授・COE 拠点リーダー)

セッションI「非文字資料をめぐる方法論的諸問題」

[コーディネーター]

- 的場昭弘(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

[パネリスト]

- アラン＝マルク・リュ(フランス、リヨン第3大学教授)
「デジタル人類学・マルチメディア環境のためのデジタル資料」
- 的場昭弘(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)
「非文字資料はいかに認識されるかー知覚をめぐる哲学的諸問題ー」

[コメンテーター・司会]

- 橘川俊忠(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

セッションII「画像のなかの暮らしと文化ー日本と東アジアの近世」前半

[コーディネーター]

- 金貞我(神奈川大学 COE 教員)

[パネリスト]

- 福田アジオ(神奈川大学教授・COE 拠点リーダー)
「生活絵引編纂の世界的意義」
- 田島佳也(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)
「『近世生活絵引』の作成に向けての試みー『農業図絵』を題材にしてー」
- 王正華(台湾、中央研究院近代史研究所研究員)
「17・18世紀中国における都市図、都市文化と風俗画の興隆」
- 金貞我(神奈川大学 COE 教員)
「韓国・朝鮮編絵引編纂と画像資料ー「平壤監司饗宴図」を例にしてー」

[司会]

- 西和夫(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

セッションII「画像のなかの暮らしと文化ー日本と東アジアの近世」後半

[コーディネーター]

- 金貞我(神奈川大学 COE 教員)

[コメンテーター]

- ジョシュア・モスター(カナダ、ブリティッシュコロンビア大学教授)
- メラニー・トレーデ(ドイツ、ハイデルベルグ大学教授)

[司会]

- 西和夫（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

閉会挨拶

第2日目 10月29日（日）

セッションIII「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」

[コーディネーター・司会]

- 河野通明（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

[パネリスト]

- 渡部武（東海大学教授）
「中国の伝統犁とその技術移転」
- 金光彦（韓国、仁荷大学校名誉教授）
「韓国犁の形態と地域的特徴」
- 河野通明（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）
「日本犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」

[コメンテーター]

- 尹紹亭（中国、雲南大学教授）

セッションIV「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」

[コーディネーター・司会]

- 八久保厚志（神奈川大学助教授・COE 共同研究員）

[パネリスト]

- 藤永豪（佐賀大学講師・元神奈川大学 COE 研究員（PD））
「景観分析における資料としての写真の可能性」
- 浜田弘明（桜美林大学助教授・神奈川大学 COE 教員）
「景観研究資料としての『渋沢フィルム』の今日的意味—韓国南部を例に—」

[コメンテーター]

- 鄭美愛（平成国際大学非常勤講師）
- 奥野志偉（神戸流通科学大学教授）

総合討論

[司会]

- 北原糸子（神奈川大学非常勤講師・COE 事業推進担当者）

[パネリスト]

- 的場昭弘（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）
- 金貞我（神奈川大学 COE 教員）
- 河野通明（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）
- 八久保厚志（神奈川大学助教授・COE 共同研究員）

閉会挨拶

(3) 第3回国際シンポジウム

テーマ 場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平

開催日 2008年2月23日(土)・24日(日)

会場 横浜キャンパス16号館 セレストホール

第1日目 2月23日(土)

プログラム

〈総合司会〉 西和夫(神奈川大学教授・COE サブリーダー)

開会挨拶 中島三千男(神奈川大学長)

主催者挨拶 福田アジオ(神奈川大学教授・COE 拠点リーダー)

セッションI 「マルチ言語版『日本常民生活絵引』の編纂刊行」

[コーディネーター]

- 前田禎彦(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)

[パネリスト]

- 前田禎彦(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)
「オリジナル版『生活絵引』の編纂とその意義」
- 君康道(東京大学大学院総合文化研究科講師・COE 共同研究員)
「マルチ言語版『生活絵引』の編纂とその意義」

[コメンテーター]

- 韓東洙(韓国、漢陽大学校建築大学教授)
- クリスティーナ・ラフィン(カナダ、ブリティッシュコロンビア大学助教授)

セッションII 「租界、神社の遺跡から過去の実態を読み解く試み」

[コーディネーター]

- 大里浩秋(神奈川大学教授・COE 事業推進担当者)

[パネリスト]

- 富井正憲(神奈川大学助教・COE 共同研究員)
「旧在華企業の居住環境—公大紡績住宅を中心に」
- 孫安石(神奈川大学准教授・COE 事業推進担当者)
「漢口日本租界と日本人—菊地洋氏の資料を中心に」
- 津田良樹(神奈川大学助手・COE 共同研究員)
「旧満州における神社のありよう」
- 三鬼清一郎(元神奈川大学教授・COE 共同研究員)
「倭城と近世城郭」

[コメンテーター]

- 李百浩(中国、武漢理工大学教授・武漢理工大学土木工程与建築学院院長)
- 蔡錦堂(台湾、国立台湾師範大学副教授・台湾史研究所所長)

セッションIII「インターネット・エコミュージアムの可能性

—地域研究と情報学の連携—

[コーディネーター]

- 佐野賢治（神奈川県大学教授・COE 事業推進担当者）

<事例報告>

- 小野博（コンテンツ株）

「福島県只見町におけるインターネット・エコミュージアム」

[パネリスト]

- 佐野賢治（神奈川県大学教授・COE 事業推進担当者）

「非文字資料と地域社会—地域統合情報発信システムとしてのインターネット・エコミュージアム—」

- 木下宏揚（神奈川県大学教授・COE 共同研究員）

「地域情報の統合化—民具データを事例にして—」

- 朽木量（千葉商科大学准教授）

「地域を博物館にすること—記憶という地域文化資産—」

- 柴山守（京都大学東南アジア研究所副所長）

「地域情報学の創出—ハノイ都市形成研究を事例にして—」

[コメンテーター]

- 尹紹亭（雲南大学教授）

「中国文化生態村の構想と実際から」

- 任章赫（韓国、韓国中央大学校副教授・文化財庁文化専門委員）

「韓国民俗村の実績と可能性から」

質疑応答

閉会挨拶

第2日目 2月24日（日）

<総合司会> 田上繁（神奈川県大学教授・COE 事務局長）

セッションIV「身体技法及び感性の資料化と体系化」

[コーディネーター]

- 廣田律子（神奈川県大学教授・COE 事業推進担当者）

[パネリスト]

- 川田順造（元神奈川県大学教授・COE 共同研究員）

「身体技法及び感性の体系的資料化にむけて」

- 廣田律子（神奈川県大学教授・COE 事業推進担当者）・

海賀孝明（株わらび座チーフエンジニア）

「モーションキャプチャ技術と身体技法」

- 渡部信一（東北大学教授）

「民俗芸能の『わざ』はデジタルで伝わるのか？」

[コメンテーター]

- アルベール・ピアンヴニュ・アコハ（ベナン共和国、アボメ＝カラヴィ大学教授）
- 中村美奈子（お茶の水女子大学准教授）
- 小島一成（神奈川工科大学准教授）

セッションV「身体技法を展示する」

[コーディネーター]

- 中村ひろ子（神奈川大学 COE 教員）

[パネリスト]

- 中村ひろ子（神奈川大学 COE 教員）
「展示をつくるⅠ－研究成果発信装置としての可能性－」
- 青木俊也（松戸市立博物館学芸員・神奈川大学 COE 教員）
「展示をつくるⅡ－研究成果発信装置としての可能性－」

[コメンテーター]

- 笹原亮二（国立民族学博物館准教授）
- 村井良子（（有）プランニング・ラボ代表取締役）

質疑応答

総合討論

前半 国際シンポジウムのまとめ

〈司会〉 佐野賢治（神奈川大学教授・COE 事業推進担当者）

後半 COE プログラム全体についてのまとめ

〈司会〉 橘川俊忠（神奈川大学教授・COE サブリーダー）

閉会挨拶

II ワークショップ・公開研究会

（1）第1回国際シンポジウムプレシンポジウム

テーマ 版画と写真－19世紀後半出来事とイメージの創出－

開催日 2005年11月20日（日）

会場 神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール

プログラム

開会の辞

挨拶 中島三千男（神奈川大学副学長）

- 木下直之（東京大学教授）
「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」
- 原信田實（国際浮世絵学会会員、2003年度 COE 共同研究員）
「浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか」
- 鈴木廣之（東京学芸大学教授、2005年度 COE 共同研究員）
「変貌する明治の図録」
- 増野恵子（早稲田大学非常勤講師、2004年度 COE 共同研究員）

「見える民族・見えない民族－『輿地誌略』の世界観－」

- 金子隆一（東京都写真美術館学芸課専門調査員、COE 共同研究員）
「内田九一の『西国・九州巡幸写真』の位置」

（２）第１班 「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会

テーマ 図像から読み解く東アジアの生活文化

開催日 2005年12月10日（土）13：00～17：00

会場 神奈川大学横浜キャンパス 16号館 第2会議室

プログラム

- 挨拶 福田アジオ（神奈川大学教授、COE 拠点リーダー）
- 司会 鈴木陽一（神奈川大学教授、COE 事業推進担当者）
- 戴立強（中国、遼寧省博物館研究員）
「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」
 - 馬漢民（中国、中国俗文学学会常務理事／副秘書長・蘇州市民間文芸協会名誉主席）
「蘇州の生活と民俗」
 - 張長植（韓国、国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官）
「朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相」
 - 金貞我（COE 共同研究員）
「都市図における風俗表現の機能」

（３）立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラムジョイントワークショップ

テーマ 歴史災害と都市－京都・東京を中心に－

開催日 2006年8月26日（土）・27日（日）

会場 みなとみらい クイーンズタワーA 5階会議室

共催 立命館大学 21 世紀 COE プログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」
神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

第1日 8月26日（土）

プログラム

1部 都市の歴史と災害復元

- | | |
|------------------|------------------|
| 「平安京の地形環境と災害」 | 河角龍典（立命館大学） |
| 「平安京の祭礼と災害」 | 片平博文（立命館大学） |
| 「公家町の火災と防災」 | 冷泉為人（財・冷泉家時雨亭文庫） |
| 「近世京都の火災と復興」 | 鈴木栄樹（京都薬科大学） |
| 「3次元でみる京都の景観と災害」 | 中谷友樹（立命館大学） |

第2日 8月27日(日)**2部 関東大震災と社会**

- 「関東大震災の写真と地図のデータベース」 諸井孝文(鹿島建設)・北原糸子(神奈川大学)
 「関東大震災の救済」 鈴木淳(東京大学)
 「関東大震災後の社会」 佐藤健二(東京大学)

3部 歴史災害と現代

- 「絵画を活用した防災—三河地震を素材として」 林能成(名古屋大学)・木村玲欧(名古屋大学)
 「文化財と災害痕跡」 桂雄三(文化庁)
 「日常生活のなかの災害認識」 香月洋一郎(神奈川大学)

4部 討論**(4) 神奈川大学 21世紀 COE プログラム若手研究者ワークショップ**

テーマ 手段としての「非文字」—資料と方法のあいだ—

開催日 2008年1月26日(土) 10:30~18:00

会場 神奈川大学 16号館 視聴覚ホール B

プログラム

開催のことば 山口建治(COE事業推進担当者、ワークショップ実行委員会委員長)

ワークショップの経緯、趣旨と構成

王京(COE研究員(PD)、司会、ワークショップ実行委員会委員)

セッション1: 絵画を読み解く

彭偉文(COE研究員(RA))「記録手段としての絵画—「姑蘇繁華図」に描かれた女性を例として」

佐々木弘美(COE研究員(RA))「絵画の構図をよむ—遍聖絵の場合」

セッション2: フィールドで考える

土田拓(COE研究員(RA))「調査写真の性格と用法—景観の中のコンクリートブロック」

樫村賢二(元COE研究員(PD))「調査写真の資料化—韓国のオートバイ宅配便調査を事例に」

宮本大輔(日本学術振興会特別研究員、元神奈川大学COE研究員(RA))

「非文字と言語—北京大学生の言語イメージを通して」

セッション3: 博物館から展望する

大西万知子(元COE研究員(RA))「感性を展示すること—英国と日本の事例から」

丸山泰明(元COE研究員(PD))「21世紀における博物館の可能性—北欧で考えた二、三のこと」

コメント

香月洋一郎(COE事業推進担当者)

北原糸子(COE事業推進担当者)

青木俊也(COE教員、松戸市立博物館学芸員)

総合討論

閉会のことば 土田拓(COE研究員(RA)、ワークショップ実行委員会委員)

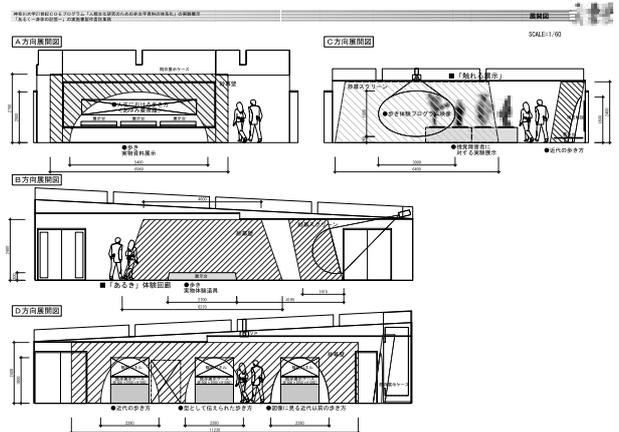
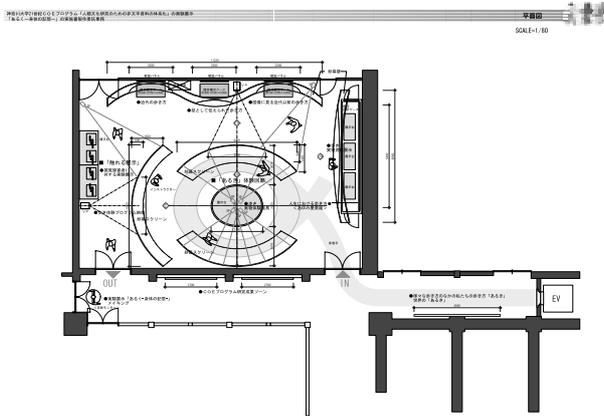
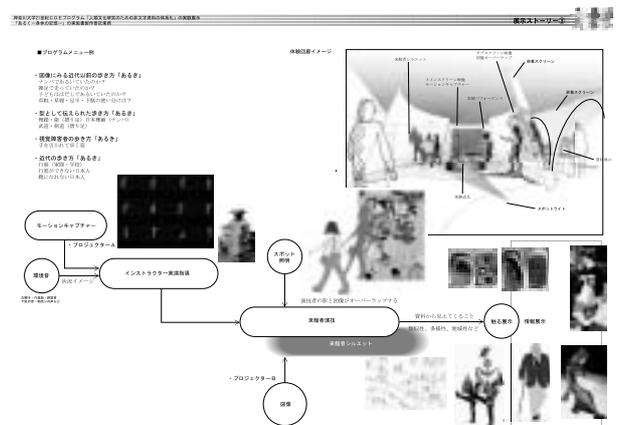
Ⅲ 展 示

(1) 企画展示

テーマ 浮世絵における常識と非常識—復刻版でみる『名所江戸百景』
 開催日 2005年11月18日(金)～30日(水) 23日(水・祝)は休室
 会場 神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室

(2) 実験展示

テーマ 実験展示「あるく—身体の記憶」
 開催日 2007年11月1日(木)～30日(金)
 2008年2月23日(土)・24日(日)
 会場 神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参考室



IV 全体研究会

2003年度（平成15年度）

- 2003年10月1日（第1回）北原糸子・原信田實「地震の痕跡と名所絵—『名所江戸百景』の新しい読み方」
齊藤隆弘「画像・動作情報のデジタル入力について」
- 2003年10月31日（第2回）川田順造「非文字資料の諸相とその研究法—人類学の立場からの問題提起—音文化、身体技法、道具、感性等の領域」
- 2003年12月5日（第3回）河野通明「身体技法・感性を手掛かりとした古代日本列島の多民族状況の検出の模索」
- 2004年1月31日（第4回）高橋郁夫（弁護士）「知的財産権に対する技術のチャレンジ」

2004年度（平成16年度）

- 2004年7月9日（第1回）増野恵子「明治前期のメディアと天皇肖像」
- 2004年9月29日（第2回）田口洋美「景観のモンタージュ—狩猟と農耕の織り成す世界—」
富澤達三「画像資料のデジタル化と歴史研究への活用」
- 2004年11月12日（第3回）落合一泰「絵画から写真へ—非西洋諸民族表象における変化と無変化」

2005年度（平成17年度）

- 2005年5月13日（第1回）各班リーダー「昨年度の総括と本年度活動目標について」
八久保厚志「『環境と景観の資料化と体系化にむけて』を発行して」
- 2005年7月8日（第2回）木下宏揚・木下慶子（調査研究協力者）「COEにおける非文字資料の共有と流通—福島県只見町のデータ化に向けて—」
佐野賢治「資料のコラボレーションから資料館建設まで—飯豊山信仰展示を事例として—」

2006年度（平成18年度）

- 2006年4月21日（第1回）各班からの昨年度研究成果報告
- 2006年6月30日（第2回）孫安石・富井正憲・大里浩秋「租界と居留地に刻印された人間活動の営み」
津田良樹・中島三千男「環境に刻印された人間活動の痕跡解読—朝鮮の神社跡地を中心に」
- 2006年9月29日（第3回）山口建治「祓いの身体技法と人形」
夏宇継「東巴求寿儀礼について」

- 廣田律子「モーションキャプチャを応用した芸能比較研究」
- 2006年11月10日（第4回） 君康道・前田禎彦「マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』
編纂の現状と問題点」
- 2006年12月22日（第5回） 香月洋一郎「手段としての写真－「濫澤写真」の追跡調査から」
- 2007年2月16日（第6回） 佐野賢治「インターネット・エコミュージアムの可能性」
- 2007年度（平成19年度）
- 2007年4月20日（第1回） 各班・課題からの昨年度研究成果報告
- 2007年6月29日（第2回） 的場昭弘「ポール・リクール『記憶・歴史・忘却』を読む－非文字
資料の理論化に向けて－」
- 2007年9月28日（第3回） 王京「関東大震災と航空写真」
- 2007年11月9日（第4回） 國弘暁子「ブリティッシュコロンビアにおける先住民『ベルダーシュ』
に関する調査報告」
- 小野地健「クシャミと人類文化」
- 2007年12月21日（第5回） 堀内寛晃「『海外神社』跡地に関するデータベース構築」
- 上田純広「関東大震災・地図と写真データベース」構築に関する新手法」
- 西田幸夫「関東大震災における火災被害の可視化」
- 孫安石「租界とアジアデータベース作成の中間報告」

V 各班・課題研究会

(1) 1班研究会

2003年度

- 2003年 9月19日 窪田涼子 「『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂について」
- 2003年10月15日 西和夫 「新版『日本常民生活絵引』編纂作業について」
ジョン ボチャラリ 「『日本常民生活絵引』の英訳の試みについて」
- 2003年12月 5日 金貞我 「『日本常民生活絵引』英語訳の試みとその問題点」
- 2004年 1月31日 富澤達三 「図像資料のデジタル化」
- 2004年 3月11日 「『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂刊行について
- 2004年 3月26日 東アジア生活絵引の編纂について
金貞我 「韓国版「常民生活絵引」編纂のための研究計画案」
- 2004年 3月29日 近世・近代生活絵引の編纂について
金貞我 「英語版『絵巻物による日本常民生活絵引』制作のための絵巻作品の再編成」

2004年度

- 2004年 4月 2日 「『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂刊行について
- 2004年 4月 5日 東アジア生活絵引の編纂について
- 2004年 4月 9日 近世・近代生活絵引の編纂について
富澤達三 「近世・近代の蝦夷・琉球の庶民生活画像資料について」
- 2004年 5月14日 近世・近代生活絵引の編纂について
福田アジオ 「生活絵引類似本の検討」
金貞我 「近世初期風俗画の紹介と図像資料への活用について」
- 2004年 5月21日 西和夫・福田アジオ・「『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂刊行について」
佐々木睦
- 2004年 6月25日 金貞我 「徐揚筆『姑蘇繁華図』について」
佐々木睦 「清末絵入り新聞についての覚え書き」
- 2004年 7月 9日 田島佳也 「東アジア版生活絵引の編纂について」
- 2004年 7月23日 中村ひろ子・「『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂について」
ジョン ボチャラリ・
菊池勇夫
- 2004年 9月14日 君康道・「『絵巻物による日本常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂について」
ジョン ボチャラリ
- 2004年 9月24日 田島佳也 「近世・近代の『常民生活絵引』の試作本の作成について」
中村ひろ子 「近世・近代生活絵引」の編纂について」
富澤達三 「『江戸名所図屏風』をテキストとして江戸初期の生活絵

		引を編む試み」
2004年10月20日	金貞我 ジョン ボチャラリ	「『日本常民生活絵引』 英語訳のための実例」 「『絵巻物による日本常民生活絵引』 マルチ言語版の編纂 について」
2004年11月10日	ジョン ボチャラリ	「『絵巻物による日本常民生活絵引』 マルチ言語版の編纂 について」
2004年12月 3日	佐々木睦 金貞我	「『姑蘇繁華図』の編纂について」 「『朝鮮版生活絵引』 試作本の作成」
2005年 1月12日	ジョン ボチャラリ	「『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳成果」
2005年 1月21日 ～22日	菊池勇夫	「アイヌ・北方史関係の絵引試案本に向けて」 「戦後生活再現展示に関する問題」
2005年 1月31日	佐々木睦	「遼寧省博物館訪問についての報告」 『姑蘇繁華図』 図像抽出作業
2005年度		
2005年 4月 4日	ジョン ボチャラリ	「昨年度の英語翻訳作業の経過と問題点」
2005年 4月15日		今年度の東アジア生活絵引の編纂のための図像読み取り作 業
2005年 5月25日		『常民生活絵引』のマルチ言語版の編纂のための翻訳成果 の検討
2005年 6月 6日	佐多芳彦（大正大学・ 立正大学非常勤講師）	「データベース構築を前提とした肖像画の画面記述につい て—有職故実学の立場から—」
2005年 6月10日	菊池勇夫・田島佳也	「東アジア生活絵引の編纂および日本近世・近代生活絵引 編纂」
2005年 6月29日		『常民生活絵引』 マルチ言語版の編纂
2005年 7月13日		各課題の進捗状況検討
2005年 8月 2日		研究会
2005年 8月19日		研究会
2005年 9月28日		研究会
2005年12月10日		公開研究会「図像から読み解く東アジアの生活文化」
	福田アジオ	
	鈴木陽一	
	戴立強（中国、遼寧省 博物館研究員）	「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」
	馬漢民（中国、中国俗 文学学会常務理事）	「蘇州の生活と民俗」
	張長植（韓国・国立民 俗博物館民俗研究科学 芸研究官）	「朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相」
	金貞我	「都市図における風俗表現の機能」

2006年 1月25日		各課題の進捗状況と今後の計画
2006年 3月 6日		公開研究会「『洛中洛外図屏風』を読む」
	①鈴木陽一	①「『姑蘇繁華図』と『点石斎画報』」
	②田島佳也	②「『江差浜鯉漁之図』を読む」
	③横田冬彦（京都橘大 学教授）	③「『洛中洛外図屏風』を読む」
2006年 7月21日	福田アジオ 前田禎彦 菊池勇夫 鈴木陽一 藤原重雄	各課題の進捗状況の報告と検討
2006年 8月17日		公開研究会「『絵巻物による日本常民生活絵引』と中世史 研究—『絵引』の遺産継承の観点から」
2006年12月 6日	前田禎彦 鈴木陽一 金貞我 田島佳也 福田アジオ	1班全体研究会 各課題の進捗状況の報告と検討 「何故常民生活絵引でなく、単なる生活絵引なのか」

(2) 1班課題1 「マルチ言語版『絵巻物による常民生活絵引』の編纂刊行」研究会

2006年度

2006年 5月10日	校閲作業
2006年 5月24日	打合せ、校閲作業
2006年 6月21日	校閲作業
2006年 7月 5日	校閲作業
2006年10月 4日	校閲作業
2006年10月18日	校閲作業
2006年11月 1日	校閲作業
2006年11月15日	校閲作業

2007年度

2007年 4月 9日	研究会
2007年 7月25日	研究会
2007年 7月31日	研究会

(3) 1班課題2 「『近世・近代生活絵引』の編纂」研究会

2006年度

2006年 6月24日	研究会
2006年 8月17日	研究会
2006年 9月 1日	研究会

2006年12月 1日		研究会
2006年12月16日	菊池勇夫・田島佳也	公開研究会 「人びとの暮らしと生業—『日本近代生活絵引』作成への問題点をさぐる—」 「菅江真澄がみたコタンの景観」 「土屋又三郎『農業図絵』に描かれた城下金沢と近郊村に生活する人びと」 「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと—『江差浜鯨漁之図』から—」
2006年12月17日		研究会
2007年 1月20日		研究会
2007年 2月 4日		研究会
2007年 2月24日		研究会
2007年 3月 8日		研究会
2007年度		
2007年 5月 1日		研究会
2007年 5月27日		研究会
2007年 6月10日		研究会
2007年 7月 4日		研究会
2007年 7月16日		研究会
2007年 7月28日		研究会
2007年 8月24日		研究会
2007年 9月 2日		研究会
2007年10月 1日		研究会
2007年10月 8日		研究会
2007年11月13日		研究会

(4) 1班課題3 「『東アジア生活絵引』の編纂」研究会

2006年度		
2006年 4月22日		打合せ
2006年 6月26日	三山陵（日本民藝館 共同研究員）	研究会「中国民間版画に見る庶民生活—清末民国初期を中心—」
2006年 7月22日	武田雅哉（北海道大学 文学部教授）	研究会「楊貴妃になりたかった男たち—『点石斎画報』に見る〈女装くん〉」
2006年 8月 9日		会議
2006年 9月 6日		研究会
2006年 9月21日		研究会
2006年10月17日		研究会
2006年11月18日		研究会

2006年12月15日	小川陽一（東北大学 名誉教授）	公開研究会「明清期の生活文化図像資料としての善書—と くに『太上感應篇図説』—」
2006年12月19日		研究会
2007年1月16日		研究会
2007年2月2日		研究会
2007年2月26日		研究会
2007年3月6日		研究会
2007年3月15日		研究会
2007年度		
2007年4月7日		研究会
2007年4月17日		研究会
2007年4月27日		研究会
2007年5月11日		研究会
2007年6月1日		研究会
2007年6月9日		研究会
2007年6月23日		研究会
2007年7月4日		研究会
2007年7月23日		研究会
2007年7月27日		研究会
2007年8月18日		研究会
2007年8月19日		研究会
2007年10月8日		研究会
2007年10月13日		研究会
2007年10月20日		研究会
2007年11月17日		研究会
2008年1月6日		研究会

(5) 2班研究会

2003年度

2003年9月10日	川田順造	「身体技法、感性把握、道具と人間の動作について」
2003年10月22日	河野通明	「『身体技法』を手がかりとした日本列島の多民族情況の 復原の模索について」

2004年度

2004年7月9日		調査概況
2004年11月12日		研究会

2005年度

2005年4月27日	川田順造	「人力運搬の方法、回転道具の回転方向など、道具と身体 技法についての問題提起」
2005年5月25日	河野通明	「非文字資料の体系化をめぐる川田流と河野流」

2005年 7月20日	廣田律子	「モーショキャプチャを使っ ての演技の比較への取 り組み」
2005年 9月28日		研究会
2005年10月 5日		研究会
2005年10月19日	川田順造	「感性の領域研究のため の予備的考察」
2006年度		
2006年 5月24日		会議
2006年12月 6日		会議
2007年度		
2007年 4月20日		会議
2007年 5月23日		会議

(6) 3班研究会

2003年度

2003年11月11日	三鬼清一郎	「倭城・倭館・合戦図—朝鮮半島における日本関係建造物をめぐって—」
	須山聡	「澁澤敬三のまなざし」
	香月洋一郎	「方法としての景観に向けて」
2003年12月16日		「漢城・京城・ソウル—南山を中心として—」
	富井正憲	「景観変化に関する地理学的分析と分析手法についての研究(案・構想)—」
	八久保厚志	「アチック・ミュージアムに残された景観資料を起点として—」

2004年度

2004年 5月14日		平成15年度年報合評会
2004年 6月 8日	浜田弘明	「景観を記録し保存すること」
	増野恵子	「明治中期のマスメディアに現われた天皇肖像について」
2004年 9月13日		環境としての海・資源としての海—アワビ・ワカメ・イリコ(煎海鼠)—
	①香月洋一郎	①現代における素潜り漁法—上五島を中心に—
	②李善愛(宮崎公立大学)	②海女の移動と環境—韓国ワカメ漁場利用をとおして—
	③赤嶺淳(名古屋市立大学)	③ナマコをめぐる国際環境と生産地の動向
2004年11月26日	竹内啓一(元人文地理学会会長・一橋大学名誉教授)	「地理学における景観—風景概念の変遷と問題点—」

(7) 3班課題1 「景観の時系列的な研究」研究会

2006年度

2006年 5月10日 久田肇 「写真、絵画資料の著作権について—出版の現場から」

(8) 3班課題2 「環境認識とその変遷の研究」研究会

2006年度

2006年 8月10日 宗臺秀明（鶴見大学・研究会（講演会・報告会）「鎌倉・前浜—職能民のいる風
神奈川大学非常勤講師）景」、（中間報告）「中世都市鎌倉の景観・環境を復原する
河野真知郎（鶴見大学 ための基礎データ収集」
教授）、鈴木弘太（鶴見
大学大学院博士後期)2006年10月13日 田鳳熙（ソウル大学校 研究会「韓国の多島海を写した「濫澤写真」について」
工科大学副教授)

2007年度

2007年 4月 6日 打合せ

2007年 4月18日 研究会

2007年 6月15日 会議

2007年 6月19日 打合せ

(9) 3班課題3 「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」研究会

2006年度

2006年 6月14日 会議

2006年 7月 8日 野村優夫（NHK・ 科研「東アジアメディア産業研究」共催「『音』という非
日本放送協会アナ 文字資料を考える」、「満州国ラジオ録音盤の発見について
ウンサー） —『音』という非文字資料」

(10) 4班研究会

2004年度

2004年 4月23日 佐野賢治 「“非文字資料”と地域社会—福島県只見町の民具保存活用
運動—」フレデリック・ 「中国雲南省麗江納西族東巴文化についての調査報告」
ルシーニュ2004年 5月21日 宇佐見義之 「『バーチャル地球史博物館—生物進化史展示の試み—」
展示解説」2004年10月29日 「情報発信の場としての博物館：“個別”と“普遍”—ヨー
ロッパ博物館事情—」

①佐野賢治、中村政則 ①オーストリア・ドイツの民俗系博物館

②的場昭弘、橘川俊忠、 ②フランスの博物館・美術館

能登正人

	③中村ひろ子、 青木俊也、金貞我	③ I C O Mソウル大会参加記
2005年 2月21日	青木俊也	「戦後生活再現展示に関する問題」
2005年 3月11日		研究会
2005年度		
2005年 5月12日	木下慶子（工学部木下研究室）	「非文字資料による情報資源と情報流通の管理」
2005年 7月 1日	水嶋英治（常磐大学教授）	「大学院における博物館学教育」

(11) 4班（2005年12月以降）研究会

2005年度		
2005年12月 6日	小野博（コンテンツ株式会社）	「只見地区における高精度デジタル画像データ化の試み」
2006年 3月16日	野間晴雄（関西大学文学部教授）	公開研究会「水田の認識と多機能性の複合類型試論—稲作の起源と執着をめぐって—」
2006年度		
2006年 5月19日		打合せ
2006年 7月14日	フレデリック ルシー ニユ	合同会議「只見町研究調査」
2006年 8月28日	佐々木長生	公開研究会および班会議「非文字資料としての会津農書」
2006年11月29日		打合せ
2007年度		
2007年 4月24日		打合せ
2007年 5月31日	小野博（コンテンツ株式会社） 佐野賢治、小松大介、 フレデリック ルシー ニユ	研究会「只見町インターネット・エコミュージアムのコンテンツ構想」、「地域情報のコンテンツ化」
2007年 6月19日		打合せ

(12) 5班研究会

2006年度		
2006年 4月24日		班会議「実験展示の基本的な理念をめぐって」
2006年 5月17日	青木俊也、榎美香 中村ひろ子、浜田弘明	班会議「展示構想の具体化をめぐる課題について」
2006年 6月21日	青木俊也	班会議「身体の記憶—非文字資料の世界—」展示構想案について」

2006年 7月12日		班会議
2006年 7月26日	鷹野光行（お茶の水女子大学教授）	公開研究会「大学院における博物館学教育」
2006年 8月 8日		濫澤フィルム（DVD）上映、班会議
2006年 9月 5日		班会議
2006年10月 6日		班会議
2006年10月23日	村井良子（プランニング・ラボ代表取締役）	公開研究会「展示評価をめぐって」
2006年11月 6日		班会議
2006年11月21日		研究会「高度専門職学芸員養成プログラムの策定について」
2006年12月18日		研究会
2007年 1月29日	北村彰（日展博学支援室室長）	班会議、公開研究会「展示の現在」
2007年 3月12日	瀧端真理子（追手門学院大学助教授） 井上敏（桃山学院大学助教授）	班会議、公開研究会「学芸員の専門性をめぐって」、第1回「今後の学芸員養成と博物館学の方向性」
2007年 3月22日	青木俊也、中村ひろ子 乃村工芸	展示部会
2007年 3月26日	犬塚康博（愛知文教大学国際文化学部非常勤講師） 金子淳（パルテノン多摩学芸員） 竹内有里（長崎歴史文化博物館研究員）	班会議、公開研究会「学芸員の専門性をめぐって」、第2回「今後の博物館活動と博物館学の方向性」
2007年 3月29日	青木俊也、中村ひろ子 乃村工芸	展示部会
2007年度		
2007年 4月 2日		展示部会
2007年 4月10日		会議
2007年 5月16日		会議
2007年 6月11日	青木俊也、中村ひろ子 福田アジオ	展示部会
2007年 6月12日	浜田弘明、福田アジオ 中村ひろ子	学芸員養成プログラム部会
2007年 6月20日		研究会
2007年 7月 3日	福田アジオ	学芸員養成プログラム部会

2007年 7月 6日	中村ひろ子、浜田弘明 廣田律子、福田アジオ	展示部会
2007年 7月 9日	中村ひろ子、青木俊也 青木俊也、中村ひろ子	展示部会
2007年 8月23日	乃村工芸 浜田弘明、福田アジオ	学芸員養成プログラム部会
2007年 9月14日	田上繁、中村ひろ子 青木俊也、中村ひろ子	展示部会
2007年10月 8日	福田アジオ	研究会

(13) 6班研究会

2006年度

2006年 4月12日		打合せ
2006年 6月16日	廣田律子	「モーションキャプチャを使った芸能の記録化及び比較研究の試み」
	田島佳也	「近世近代生活絵引編纂について」
2006年 7月14日	佐野賢治	合同会議「只見町研究調査」
2006年 9月22日	香月洋一郎、 八久保厚志	「これまでの3班の作業と分解後の動向」
2006年11月17日	的場昭弘	「博物館のあり方、ブランリ美術館」
2007年 3月16日		「最終報告書作成にあたって」

2007年度

2007年 6月15日		研究会
-------------	--	-----

I 研究成果報告書

1 マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引 第1巻 (本文編・語彙編)

2008年2月10日発行

本文編 A4判 191ページ

編纂 ジョン・ボチャラリ 君 康道 金 貞我

鈴木 彰 前田 禎彦

翻訳 ルシ・サウス・マクレリー (概説、54-63) 中井真木 (1-38、45-47、64-98)

井谷善恵 (39-44)

トリン・ポンピリ・カーン (48-53)

ティモシー・コールマン (99-162)

語彙編 A4判 91ページ

編纂

英語 ジョン・ボチャラリ 君 康道 金 貞我

鈴木 彰 前田 禎彦

中国語 蔡 文高

韓国語 金 貞我

翻訳

英語 ルシ・サウス・マクレリー (概説、54-63) 中井 真木 (1-38、45-47、64-98)

井谷 善恵 (39-44)

トリン・ポンピリ・カーン (48-53)

ティモシー・コールマン (99-162)

中国語 王 京 彭 偉文

韓国語 鄭 淳英

Explanatory Notes to the Original Edition	iii	7 Well	12
Explanatory Notes to the English Edition	iii	8 By the Well	13
		9 By the Well	14
Introduction to the English Edition	1	10 By the Well, Thunder	15
<i>Senmen koshakyō</i>		11 Noisemaker	16
<i>Senmen koshakyō</i> Overview	5	12 Bird Trap	17
1 <i>Uchigi</i> and <i>Kinnkazuki</i>	6	13 Chestnut Picking	18
2 Female Travel Attire	7	14 Oxcart	19
3 Laundry	8	15, 16 Shop	20
4 Bleached Cloth, Apron	8	17 Children's Play	25
5 <i>Hitoe</i> , Plank Well	9	18 Children's Play	26
6 Washing Hair, Washing Object	10	19 <i>Kamisogi</i>	27
	11	20 Bird Cage	28

21 God of the Crossroad, Shrine Functionary	29	65 Thatched Roof	88
Ban Dainagon ekotoba		66 Open Fireplace	89
<i>Ban Dainagon ekotoba</i> Overview	32	67 Kitchen	90
22 Sleeping Quarters	33	68 <i>Argha</i> Shelf	91
23 <i>Taka-ashida</i> , Long-handled Umbrella	34	69 <i>Tai</i>	92
24 Clothing of Ordinary People	35	70 Gate, Well, Washing	93
25 Clothing of Ordinary People	36	71 Partition Screen	94
26 Clothing of Ordinary People	37	72 Hand Spindle	95
27 Clothing of Ordinary People	38	73 Stove, Oil Press	96
28 Clothing of Ordinary People	39	74 Toothblack	97
29 Clothing of Ordinary People	40	75 Child Servant, Portable Urinal	98
30 Flint Sack	41	76 Blowing the Nose with One's Hand	99
31 Torch	42	77 Vegetable Garden	100
32 Shouldering, Carrying on One's Back	43	78 Picking Greens	101
33 Man Shouldering Luggage and <i>Hitai-eboshi</i>	44	79 Drying Rice Plants	102
34 Fight	45	80 <i>Azekura</i> Structure, Bales of Rice	103
35 Ways of Sitting	46	81 Kiso Road	104
36 Oxherd and Servants	47	82 Travel	105
37 Prayer	48	83 Lodgings	106
38 Dogs	49	84 Hospitality	107
		85 Old People	108
Chōjū giga		86 Skin Disease	109
<i>Chōjū giga</i> Overview	53	87 Priest with a Red Nose	110
39 Large Umbrella, Sedge Hat, and Straw Sandals	55	88 <i>Dōsojin (Sai no Kami)</i>	111
40 Woman's Travel Attire, Round Fan	56	89 Rumor	112
41 <i>Kazuki</i> , Straw Mat	57	90 <i>Nusa</i>	113
42 Floor Covering	58	91 House with a Painted Target	114
43 Fruits	59	92 Horse	115
44 <i>Sake</i> Pot	60		
45 <i>Sake</i> Pot, <i>Sake</i> Holder	61	Gaki zōshi	
46 Long Chest	62	<i>Gaki zōshi</i> Overview	118
47 Buddhist Rosary, Headwear	63	93 Defecation	119
48 <i>Sugoroku</i> Board	64	94 Childbirth	120
49 <i>Einzasara</i>	65	95 Tombs	121
50 Crawling, Sitting	66	96 Tomb	122
51 Cart	67	97 Feast	123
52 People Pulling a Rope	68	98 <i>Biwa</i>	124
53 Transporting a Log	69		
54 <i>Go</i>	70	Kitano Tenjin engi	
55 <i>Sugoroku</i>	71	<i>Kitano Tenjin engi</i> Overview	126
56 <i>Musashi</i>	72	99 <i>Kuroki-zukuri</i> House	127
57 Staring Contest, Loincloth Tug-of-War	73	100 Sleeping Quarters	128
58 Ear Tugging, Neck Tugging	74	101 <i>Tatami</i>	129
59 Bird Cage, <i>Hitai-eboshi</i>	75	102 Headwear	130
60, 61 Cock Fighting	76	103 Headwear	131
62 <i>Dengaku</i>	78	104 <i>Ryōtō</i>	132
63 <i>Gitchō</i>	79	105 <i>Chikaya</i>	133
		106 Loincloth	134
Shigisan engi		107 <i>Habaki</i>	135
<i>Shigisan engi</i> Overview	82	108 <i>Habaki</i>	136
64 <i>Chōja's</i> Mansion	84	109 <i>Habaki</i>	137
		110 Long-handled Umbrella	138
		111 Chopping Board, Cooking Chopsticks	139

112 Drinking Party	140	138 People Crying	166
113 Drinking Party	141	139 Man Baring His Shoulder and Man with a Topknot	167
114 Food on Skewers	142	140 Varieties of Beards	168
115 Well	143	141 Childbirth, Ritual Bow-plucking	169
116 Cypress Wood Fan	144	142 Prayer for Childbirth	170
117 Seats	145	143 Invalid	171
118 Brazier	146	144 Funeral Procession	172
119 Palanquin	147	145 Burial	173
120 Wooden Bridge	148	146 Cemetery	174
121 Iron Tongs	149	147 <i>Tamaya</i>	175
122 Adze	150	148 <i>Sotoba</i>	176
123 Chisel, Spear Plane	151	149 <i>Gaki</i> and <i>Gakimeshi</i>	177
124 Rope Dipped in Ink	152	150 World of Children	178
125 Winnow	153	151 Children	179
126 Carrying on One's Head	154	152 Children	180
127 Carrying on One's Back	155	153 Conch Shell, Messenger	181
128 Carrying by Ox	156	154 <i>Biwa</i> , <i>Go</i> Board	182
129 Man Fallen on His Back	157	155 Bird Cage	183
130 Fallen Man and Running Man	158	156 Protective Amulet	184
131 People Fleeing and Carrying Belongings	159	157 Head Shaving	185
132 Holding and Carrying on the Back	160	158 Thunder	186
133 Carrying on One's Back	161	159 Pigeons and Dog	187
134 Bystanders Watching Event	162	160 Ox	188
135 Sitting on the Ground	163	161 Mixed-colored Ox	189
136 Sitting on the Ground and Hanging from Cart Shafts	164	162 Boat	190
137 Blowing One's Nose	165		

2 マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引 第2巻 (本文編・語彙編)

2007年3月26日発行

本文編 A4判 219ページ

編纂 ジョン・ボチャラリ 君 康道 金 貞我
鈴木 彰 前田 禎彦
翻訳 ルシ・サウス・マクレリー (概説)
ジョン・ボチャラリ (163-187、296-309)
中井真木 (188-212、249-265、310-320)
ティモシー・コールマン (213-237、266-295)
サイモン・ジョン (238-248)

語彙編 A4判 106ページ

編纂
英語 ジョン・ボチャラリ 君 康道 金 貞我
鈴木 彰 前田 禎彦
中国語 蔡 文高
韓国語 金 貞我

翻訳

- 英語 ジョン・ボチャラリ (163-187、296-309)
 中井真木 (188-212、249-265、310-320)
 ティモシー・コールマン (213-237、266-295)
 サイモン・ジョン (238-248)
 中国語 林 海濤 (163-243) 彭 偉文 (244-320)
 韓国語 林 淑姫 (163-241) 金 泰順 (242-320)

Explanatory Notes to the Original Edition	5	200 Umbrella, <i>Amaginu</i> , <i>Geta</i> , <i>Ashinaka</i>	62
Explanatory Notes to the English Edition	5	201 <i>Kinuta</i> (Cloth Beating), Commoners' Attire	64
		202 Meals	66
		203 Meals	68
		204 Riverbank	69
IPPEN HIJIRIE			
The <i>Ippen Hijirie</i> Overview	9	205 Plank Bridge, Irrigation Conduit	70
163 Houses	17	206 Plank Bridge	71
164 Warrior's Home	18	207 Overlapping Plank Bridge, Log Bridge	72
165 Warrior's Residence	20	208 Bridged Irrigation Conduit	73
166 House	22	209 Wooden Bridge	74
167 House	23	210 Ladder	75
168 Residence and Well	24	211 Boat Bridge	76
169 House	25	212 Watchtower	78
170 House	26	213 Roadside Well	79
171 Temple Town and Houses	28	214 Boar Fence	80
172 House on Riverbed	30	215 Rice Paddies and Paths	82
173 Houses in Town	31	216 Well Sweep	83
174 Houses in Town	32	217 Bath	84
175 Temple Precincts	34	218 Shields and Box Seats	86
176 Gates with Turrets	36	219 Box Seats	87
177 Building with a Wooden Floor	38	220 Town with a Wooden Gate	88
178 Wall	39	221 Town with a Ditch	90
179 Ditch, Fence, Gate Talisman	40	222 Rice Paddies	92
180 Fence, Gate Talisman	41	223 Noisemaker and Scarecrow	93
181 Gate Talisman	42	224 Noisemaker	94
182 Gate with a Thrust-up Door	43	225 Drying Crops on Tree Branches	96
183 Porch, Stone for Removing Footwear, Fence	44	226 Rice Drying Frame	97
184 <i>Tatami</i>	45	227 Stack of Rice Straw and Ditch by a Mansion	98
185 Clothing of Common People	46	228 Cattle Grazing	100
186 Clothing of Common People	47	229 Cattle in Pasture	101
187 Clothing of Common People	48	230 Cormorant, Fisherman Using Cormorants, and Fish Trap	102
188 Women's Clothing and <i>Zukin</i>	49		
189 Traveling Attire	50	231 Duck Hunting	104
190 Passersby	51	232 Field on Riverbed, River Fishing	105
191 Passersby	52	233 Rafts	106
192 Veils and <i>Zukin</i>	54	234 Spare Horses	108
193 Hunter's Attire	55	235 General's Journey, Shintō Priest's Journey	110
194 Priest's Traveling Attire	56	236 Ways of Carrying, Clothing of Hunters and Luggage Bearers	112
195 Priest's Traveling Attire	57		
196 <i>Amiginu</i>	58	237 Carrying Goods on One's Back	113
197 Umbrella, <i>Amaginu</i> , Headband	59	238 Carrying on the Head, Holding, Shouldering	114
198 Lacquered Rain-hat and Umbrella	60	239 Shouldering, Carrying on the Head	115
199 <i>Amaginu</i> and Hall	61	240 Holding, Shouldering	116

241	Transportation of Rice and Hay	117	292	<i>Nembutsu Odori</i>	182
242	Chest with Legs	118	293	<i>Nembutsu Odori</i>	184
243	Wading Across the River	119	294	<i>Nembutsu Odori</i>	186
244	Transportation	120	295	<i>Nembutsu Odori</i>	188
245	Riverboat	122	296	Stage	189
246	Ferryboat, Thatch-boat	123	297	Drinking Party	190
247	Boats	124	298	Small Shrines	192
248	Boats	125	299	Small Shrine	193
249	Boats	126	300	Small Shrine	194
250	Ship	128	301	Small Shrine	195
251	Shirakawa Checkpoint	129	302	Shizuki Tenjin Shrine	196
252	Market and House in Town	130	303	Former Shrine Site	198
253	Market	132	304	<i>Yutate</i> Caldron	199
254	Market	134	305	Buddha Hall	200
255	Worship Hall and Market Stall	136	306	Buddha Hall	201
256	Display of <i>Waraji</i>	138	307	Temple in the Country	202
257	Worship	140	308	Mount Shoshazan	204
258	Poses for Worship	141	309	Belfry	205
259	Poses for Worship	142	310	Hermitage	206
260	People on the Roof	143	311	<i>Etoki</i> Priests	208
261	Riding on Someone's Shoulders	144	312	Kumano Pilgrimage and <i>Etoki</i> Nun	210
262	People Washing a Horse	145	313	Invocation	211
263	Bathing	146	314	Shrine Maiden	212
264	Pulling a Boat	147	315	Fortune Telling	213
265	Short-haired Man	148	316	Head Shaving and Chanting the <i>Nembutsu</i>	214
266	Beggars	149	317	Head Shaving	216
267	Beggars	150	318	Stable, Waterfowls and Hunter	217
268	Beggars	151	319	Stable and Monkey	218
269	Beggars	152	320	Monkey	219
270	Beggars	154			
271	Beggars	156			
272	Beggars' Huts	157			
273	Beggars	158			
274	Place for Receiving Ashes and Bones, Beggars' Huts	160			
275	Outskirts of Village	162			
276	Servant Boys	163			
277	Dying	164			
278	Ritual Death by Drowning	166			
279	Funeral Services	167			
280	Place for Receiving Ashes and Bones	168			
281	<i>Sotoba</i>	169			
282	Grave and Raised Torch	170			
283	Oku-no-In at Mount Kōya and <i>Sotoba</i> Fence	172			
284	<i>Gorintō</i> , <i>Sotoba</i> , <i>Hōgyōdō</i>	174			
285	<i>Hōgyōdō</i>	175			
286	Graves	176			
287	Tumulus	177			
288	Group of Children	178			
289	People on a Bridge, Birdcages	179			
290	<i>Biwa-hōshi</i>	180			
291	<i>Biwa-hōshi</i>	181			

3 『日本近世生活絵引』 東海道編

2007年12月20日発行

A4判 138ページ

編纂 富澤 達三 中村 ひろ子 福田 アジオ 山本 志乃

まえがき	福田 アジオ	i
凡例		iv
I 街道と生活		1
1 草津追分		2
2 坂下宿本陣		4
3 宿場の往来		6
4 旅籠の宿入り		8
5 七里の渡し		10
6 秋葉山中の茶店		12
7 大井川の渡し		14
8 大井川を渡る大名行列		16
9 安倍川の渡し		18
10 富士川の渡船		20
II 街の賑わい		23
11 祇園の賑わい		24
12 東三条の送迎風景		26
13 大津の遊郭		28
14 岡崎宿の朝		30
15 三島宿の夕暮れ		32
16 江戸の本屋		34
17 京橋から新橋へ		36
18 日本橋魚市場		38
19 お江戸日本橋		40
III さまざまな生業		43
20 草津の青花紙		44
21 桑名の海		46
22 有松絞		48
23 油鯉鮒の馬市		50
24 駿河湾の地曳網漁		52
25 大森の麦わら細工店		54
26 大森の海苔採取		56
27 大森の海苔作り		58
28 江戸湾の漁業		60

IV 行事と娯楽	63
29 坂本の山王祭	64
30 石山の蛭狩り	66
31 金勝山の震岩	68
32 津島祭	70
33 吉田天王祭	72
34 三島大社のお田打ち	74
35 箱根塔沢の温泉宿	76
36 品川御殿山の花見	78
V 名物・名産	81
37 走井の名水	82
38 大津絵販売店	84
39 草津の姥ヶ餅	86
40 目川の茶店	88
41 梅木和中散の店構え	90
42 富田の焼き蛤	92
43 阿波手の社と讀け物	94
44 藤枝瀬戸の染め飯	96
45 箱根湯本の挽物細工店	98
46 小田原いろいろ	100
解題と考察	103
「東海道名所図会」と生活絵引	福田 アジオ 105
「東海道名所図会」の視点	富澤 達三 111
「東海道名所図会」にみる旅と飲食	山本 志乃 117
「東海道名所図会」に描かれた運搬のかたち	中村 ひろ子 123
参考文献目録	129
索引	131

4 『日本近世生活絵引』北海道編

2007年12月20日発行

A4判 116ページ

編纂 菊池 勇夫 田島 佳也

まえがき	福田 アジオ	i
I 道南のアイヌの人びとの生活相——菅江真澄の民俗図録より		1
作品解説		3
1 コタンの遠景—ウスの湖・ウスの谷		4
2 コタンのすがた—チセと付属施設		7
3 チセの内部—セツカの上の女性		10
4 豎白・横白 (ネマリ白)		12
5 食用の草の根		15
6 酒を飲む		18

7 狩猟—仕掛け可	21
8 イルカ猟	24
9 鰯の力で担う	27
10 ムクンリ・ムツクリ (口髷)	29
11 こうがいつき—子どもの遊び	32
12 陸小屋・丸屋形	34
Ⅱ 松前地の社会相—尖斎「模地数墨」より	37
作品解説	39
13 赤塗りの御用船—長春丸	40
14 松前町々大略絵図	42
15 アイヌの御目見	44
16 商人の店	46
17 女商人・れんじゃく	48
18 野飼いの馬と馬士	50
19 夜番人と鳴子	52
20 門付けする座頭・替女 (ごぞ)	54
21 角力興行—土俵の図	56
22 船頭の客	58
23 昆布を採る	60
Ⅲ 江差檜山の人びとの生活と生業	63
作品解説	64
Ⅲ-1 厚沢部川の土場に働く人びと	67
24 厚沢部川河口土場の留め縄と管流し材	68
25 地山師と手代、子ども	70
26 宰領人と日用人	72
27 材木の流送と筏組みに携わる日用	74
28 樽木・細丸太棒・角材の貯木場	76
29 筏組み作業中に一服する日用	78
Ⅲ-2 鯨漁をめぐる江差浜漁民と問屋 (商人)	81
30 檜山番所とその界限	82
31 沖の口番所とその前の中歌町を行きかう人々	84
32 江差町の姥神神社	86
33 多忙をきわめる鯨刺網漁	88
34 江差浜に運ばれた鯨を刺網から外す	92
35 網からの鯨外しと廊下での鯨貯蔵	94
36 鯨漬しと尻繋ぎ、鯨干場への運搬	96
37 干場での身欠鯨の早切干し	98
38 江差町の問屋街	100
39 江差町草分けの商人店と順正寺への道	102
40 土蔵群と梱包鯨製品の荷役、その検査	104
41 國島 (弁天島) に訪う船々	107
42 蝦夷地漁場に急ぐ追鯨漁者たちと荷舟	109
索引	111

5 『日本近世生活絵引』北陸編

2008年3月10日発行

A4判 71ページ

編纂 泉 雅博 田島 佳也

まえがき	福田 アジオ	
凡例		i
序	田島 佳也	1
I 金沢城下と近郊農村		3
1 金沢城下の武家屋敷と町屋へ糞尿肥貰いに		4
2 金沢城下に門付けに行く春駒と肥担桶を駄馬で運ぶ百姓		6
3 正月の挨拶回りに忙しい武士たちと僧侶		8
4 犀川大橋を渡る武士団		10
5 犀川大橋際の商店街と道行く越前万歳師や町人家族		12
6 金沢の片町を行く駄馬と肥汲みの百姓		14
7 南町から武蔵辻街道沿いの正月風景		16
8 金沢城を下城して浅野川大橋へ向う武士の行列		18
9 城下町郊外を行く人びと		20
10 田に踏土（土肥）や下肥を運ぶ		22
11 春、馬草（鋤）耕などに勤む百姓と花見を楽しむ家族		24
12 山から刈り草を運搬する牛と童		26
13 稲蔵入り後の小祝い		28
14 犀川下流域の漁撈		30
15 年末の農家の洗濯風景		32
II 金沢城下をゆきかう人びと		35
1 武士		
(1) 浅野川大橋を行く藩士の一行 正月		36
(2) 町角で 正月		38
(3) 待機する若党・小者ら 12月		40
2 僧侶		
(1) 寺町寺院群辺りを行く僧侶の一行 正月		42
(2) 僧侶の一行と酔っぱらい 正月		44
3 町人		
(1) 町角で 正月		46
(2) 役者と文人 正月 12月		48
4 女性と子ども		
(1) 揚げ羽根をする娘たち 正月		50
(2) 雪だるまを作る子どもたち 正月		52
(3) 鉢籠を手に提げる女性 正月		53
5 芸能・卑賤の民		
(1) 鳥追 正月		54
(2) 節季候 12月		55
6 百姓		
交易 10月 12月		56

解題	田島 佳也/泉 雅博	59
参考文献目録		63
索引		65

6 『東アジア生活絵引』 中国江南編

2008年2月20日発行

A4判 155ページ

編纂 金 貞我 佐々木 睦 鈴木 陽一 福田 アジオ

編纂補佐 王 京 彭 偉 文

まえがき	福田 アジオ	i
凡例		iv
I 水のある風景		1
1 船		2
2 船着場		4
3 船着場と驢馬		6
4 水辺の庭		8
5 水上生活		10
6 筏		12
7 太鼓橋を渡る		14
8 船で働く女性		16
II 村の風景		19
9 運河に囲まれた農村風景		20
10 村の広場		22
11 普請の現場と塾		24
12 橋のたもとの牌樓と物見櫓		26
13 春の野良仕事		28
14 家庭内の生糸作りと織物生産		30
15 焼物問屋		32
16 煉瓦造り		34
17 槌音響く村の鍛冶屋		36
18 村はずれの寺院		38
III 賑わう街並み		41
19 橋上の露店		42
20 万年橋のたもと		44
21 質屋と米問屋		46
22 官僚の外出		48
23 城内の街並み		50
24 川端の問屋街		52
25 物資行き交う川辺の商店街		54
26 老舗が並ぶ商店街		56
27 買物客で混雑する橋の上		58
28 托鉢に向かう僧侶の行列		60
29 人相見に聞き入る		62

30	道観と文字占い	64
31	山塘橋を渡れば繁華街	66
32	高級店の並ぶ半塘橋	68
IV	喜びと楽しみ	71
33	屋敷での観劇	72
34	村芝居に集まる観客	74
35	露台の踊り子	76
36	河岸の賑わい	78
37	料理屋と屋形船	80
38	絵と音楽のある楼台	82
39	船着き場の書画売り	84
40	庭園と「名人字画」	86
41	水路を進む嫁迎え	88
42	婚礼	90
43	山上の宴会	92
44	虎丘とその門前	94
V	権力の表象	97
45	城門	98
46	練兵場	100
47	役所の門前	102
48	税銀の入庫	104
49	試験官と受験生	106
50	試験場の門前	108
51	義学	110
	解題と考察	113
	「姑苏繁華図」と絵引編纂	福田アジオ 115
	「姑苏繁華図」と18世紀蘇州	鈴木 陽一 121
	明清小説と「姑苏繁華図」	佐々木 睦 127
	「姑苏繁華図」と蘇州の都市空間構造	巖 明 133
	参考文献目録	137
	索引	141

7 『東アジア生活絵引』 朝鮮風俗画編

2008年2月20日発行

A4判 177ページ

編纂 金 貞我 中野 泰 福田 アジオ

まえがき	福田 アジオ	i
凡例		iv
I	耕織風俗図屏風	1
1	女性の仕事・子供の遊び	2
2	洗濯物を干す	4
3	頭上運搬と背負い運搬	6
4	男の田起こし・女の種子播き	8
5	鋤で耕す	10

6	秋の稔りの庭仕事	12
7	稲束を打ちつけ脱穀	14
8	碓を搗く女	16
9	小正月の月迎え	18
II	檀園風俗画帖	21
10	昼飯を食う	22
11	井戸端の風景	24
12	川辺の洗濯	26
13	道行く家族	28
14	州途につく馬方	30
15	満載の渡し船	32
16	朝鮮相撲シルム	34
17	舞の喜び	36
18	少年たちのゴヌ遊び	38
19	書堂での勉強	40
20	脱穀作業と監督する男	42
21	水田を耕す	44
22	糸紡ぎと筵編み	46
23	機織りと女性	48
24	魃の仕掛けで魚を獲る	50
25	瓦屋根を葺く	52
26	村の鍛冶屋	54
27	煙草を刻む	56
28	蹄鉄打ち	58
29	旅籠での食事	60
30	背負う男・いただく女	62
31	占卦	64
32	嫁迎いの行列	66
III	平壤監司饗宴図	69
33	城内の風景	70
34	街の賑わい	72
35	御座船に乗る平壤監司	74
IV	蕙園傳神帖	77
36	夜道に行く男と女	78
37	大人の喧嘩	80
38	女性の沐浴空間	82
39	洗濯と沐浴	84
40	音楽のある野の宴	86
41	小料理屋	88
42	巫女の舞と女性の願い	90
43	法鼓と招福の願い	92
V	平生図	95
44	両班の夜間外出	96
45	峠を越え行く官吏一行	98
46	官吏の一行と土下座する男	100
47	科擧の合格祝い	102
48	街中を進む嫁迎え	104
49	結婚60年の祝い	106

50 初誕生	108
Ⅵ 四季風俗図屏風	111
51 野外で焼き肉を楽しむ	112
52 官吏の外出に直訴	114
53 冬の街角	116
54 町場で喜捨を乞う	118
解題と考察	121
朝鮮時代の風俗画資料と絵引編纂..... 金 貞我	123
絵画資料の民俗学的意義..... 中野 泰	133
朝鮮風俗画に見る民俗	福田 アジオ 143
参考文献目録.....	151
索引（日本語・韓国語）.....	156

8 身体技法・感性・民具の資料化と体系化

2008年3月10日発行

A4判 254ページ

2班の研究事業について iii

第1部 身体技法

非文字資料による人類文化研究のために

——感性の諸領域と身体技法を中心に 川田 順造 3

モーションキャプチャによる芸能の定量比較研究

..... 廣田 律子 / 海賀 孝明 / 岡本 浩一 31

第2部 用具と人間の動作の関係の分析

非文字資料研究・身体技法研究の河野なりの受け止め方と調査の概要

——神奈川大学21世紀COEプログラムへの参加にあたっての基本姿勢
..... 河野 通明 97

身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原

..... 河野 通明 133

民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査

——「民具からの歴史学」の有効性の追究と方法論確立の試み
..... 河野 通明 197

9 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説

2007年12月20日発行

A4判 179ページ

序

「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説」班の研究をまとめるにあたって
.....北原 糸子 1

第1部 景観に刻印された人間の諸活動の痕跡を辿る

——優城・租界

蘆山城合戦図をめぐる三鬼 清一郎 7
在華紡の居住環境について——上海の事例大里 浩秋 / 富井 正憲 17

第2部 景観に刻印された人間の諸活動の痕跡を尋ねる

——「海外神社」跡地とそのデータベース化

「海外神社」跡地に見る景観の変容とその要因
.....中島 三千男 / 津田 良樹 / 富井 正憲 55
「海外神社」跡地に関するデータベース」構築について
.....津田 良樹 / 中島 三千男 / 堀内 寛晃 95

第3部 景観に刻印された災害の痕跡を調べる

——関東大震災・地図と写真のデータベース化

災害メディアと景観変容北原 糸子 109
「関東大震災・地図と写真のデータベース」の作業手順王 京 121
「関東大震災・地図と写真のデータベース」の情報公開について上田 純広 127
関東大震災の火災被害と写真映像西田 幸夫 133
関東大震災と航空写真王 京 147

10 「景観」と「環境」についての覚書

2007年12月20日発行

A4判 77ページ

景観の時系列的研究

「澁澤写真」の活用に向けての一試行香月 洋一郎 3
「澁澤写真」の喜界島の馬を見て高坂 嘉孝 33
景観資料としての写真をめぐって藤永 豪 43

環境認識とその変遷の研究

「環境認識」調査覚書……………香月 洋一郎 57

11 地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—

2008年3月10日発行

A4判 95ページ

まえがき ……………	佐野 賢治	i
地域研究と情報学の連携		
——只見町インターネット・エコミュージアムの可能性 ……………	佐野 賢治	1
非文字資料としての農書・風俗帳		
——「金津農書」を中心に ……………	佐々木 長生	9
文字資料と非文字資料のはざま		
——オーラル・ヒストリーの可能性 ……………	中村 政則	17
早乙女踊りの因子分析		
……………	岡本 浩一	25
福島県南会津郡只見町の民具のデータベース化とその問題点		
……………	小松 大介	33
民俗学研究のための情報発信		
……………	木下 宏揚/能登 正人	41

12 高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言—

2008年3月20日発行

A4判 112ページ

まえがき ……………	田上 繁	i
高度専門職学芸員養成策検討の意義 ……………		
……………	福田 アジオ	1
大学院における高度専門職学芸員養成プログラムの提言		
大学院における博物館学専攻プログラム ……………	浜田 弘明	11
1 学芸員養成における博物館学		
2 日本の博物館学の現状と課題		
3 近年の高度学芸員養成・博物館学関連論議		

4 大学院における博物館学専攻プログラムの検討	
歴史・民俗系大学院における養成プログラム ……福田 アジオ	23
1 学部における学芸員教育	
2 大学院における学芸員教育	
3 神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科の研究教育	
4 歴史民俗資料科学研究科における学芸員養成	
5 高度専門職学芸員養成プログラム	
6 養成プログラムの提言	

資料

大学院における学芸員教育の現状 ……田上 繁	31
COE 公開研究会「学芸員の専門性をめぐって」	
第1回 今後の学芸員養成と博物館学の方向性 ……45	
第2回 今後の博物館活動と博物館学の方向性 ……82	

13 実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる

2008年3月20日発行

A4判 76ページ

序にかえて—研究成果発信装置としての展示 ……中村 ひろ子	1
-------------------------------	---

実験展示をつくる

実験展示をつくる記録 基本構想から展示実施まで ……青木 俊也	7
---------------------------------	---

実験展示を記録する

実験展示の実施記録 ……中村 ひろ子	27
--------------------	----

【資料】 展示の記録

1 展示構想 ……32	
2 展示設計図 ……34	
3 パネル・キャプション・印刷物 ……40	
4 映像展示「身体の記憶の発見」台本 ……49	
5 記録写真 ……58	

実験展示を評価する

「あるく—身体の記録—」は実験展示でありえたか? ……村井 良子	65
実験展示「あるく—身体の記憶—」の課題 ……笹原 亮二	71

まとめ—実験展示は成功したか ……福田 アジオ	75
-------------------------	----

付録 DVD 実験展示「あるく—身体の記憶—」

14 非文字資料研究の理論的諸問題

2008年3月20日発行

A4判 90ページ

はじめに	橘川 俊忠	i
人類文化研究のための 非文字資料の理論的課題について	的場 昭弘	1
神奈川大学21世紀COEプログラムにおける 「非文字資料の体系化」とは何か	河野 通明	49
「非文字資料の体系化」についての 理論的諸問題	橘川 俊忠	73

15 非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—

2008年3月20日発行

A4判 115ページ

論 文

明治6年の住宅建設絵解き	西 和夫	3
方相・傀儡・郭秃・鍾馗—「天籟」もう一つの身体技法—	山口 建治	27
デジタル映像アーカイブのための画像修復技術の研究開発	齊藤 隆弘	39
東巴教「求寿」儀式に見る東巴經典および東巴舞	夏 宇継	51
「渣澤写真」の体系的な研究と課題—地理学的視座からの経験—	八久保 厚志/平井 誠/鄭 美愛/藤永 豪	63
「満洲国」建国忠霊廟と建国神廟の建築について —両廟の造営決定から竣工にいたる経過とその様相—	津田 良樹	71

研究ノート

丸小屋と移動する人々	菊池 勇夫	91
志賀重昂「日本風景論」の挿図に関する報告	増野 恵子	101

16 非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—

2008年3月20日発行

A4判 272ページ

論文

人類の記憶、ヒロシマ	大西 万知子	3
「姑蘇繁華図」における女性の世界	彭 偉文	53
熊野と律僧と市女笠——遍聖絵を読む	佐々木 弘美	73
クシャミと人類文化——身体音から的人类文化研究の体系化のための試論	小野地 健	89
オートバイ宅配便(クイックサービス)にみる韓国社会	樫村 賢二	109
文化遺産化する「景観」——観光旅行、博覧会、博物館の19-20世紀	丸山 泰明	121
北京における言語評価	宮本 大輔	137
「異装」が意味するもの ——インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に関する考察	國弘 暁子	153

研究ノート

西米良村の山で働く人々と狩りの記録	本田 佳奈	167
非文字資料のデジタル化と歴史研究——近世画像資料を背景として	富澤 達三	219
「踊り歌う猫の話」に歌が組み込まれた背景——「猫じゃ猫じゃ」の歌を事例に	小林 光一郎	233
アルバムのなかの戦後開拓	土田 拓	251
騎馬像の居場所	大坪 潤子	265

II 年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化

第1号 2004年3月31日発行 A4判 228ページ

年報の創刊によせて	福田アジオ
第1班 図像資料の体系化と情報発信	
『絵巻物による日本常民生活絵引』英訳の課題と問題点	ジョン・ボチャラリ 1
生活図像資料と文献書誌データベースの作成	福田アジオ 6
荷を負うアイヌの姿——菅江真澄の絵から——	菊池 勇夫 13
中国の図像についてのノート	鈴木 陽一 20
第2班 身体技法および感性の資料化と体系化	
平成15年度第2班活動報告	川田 順 造 25
感性の諸領域、とくに匂いの文化についての、 フランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査	川田 順 造 27
東北地方の木摺臼の全域調査 ——身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み——	河野 通 明 36
中国石郵村の追儺行事に登場する鬼と翁の身体技法に関する調査	廣 田 律 子 46
高知県の神楽における鬼と翁の身体技法の調査	梅 野 光 興 55
第3班 環境と景観の資料化と体系化	
なにからどのように始めるか	香月 洋一 郎 59
地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方	原 信 田 實 62 北 原 糸 子
沢沢フィルムの図像解析とその応用	
第1部 沢沢コレクションの図像解析とその応用案	八久保 厚 志 105
第2部 沢沢フィルムの現地比定——奄美大島を事例として——	須 山 聡 109
旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告	富 井 正 憲 藤 田 庄 市 126 中 島 三 千 男
第4班 文化情報発信の新技术の開発	
“非文字資料”と地域社会——福島県只見町の民具保存活用運動——	佐 野 賢 治 159
デジタル画像処理による古い映像フィルムの修復と デジタルフィルムアーカイブの構築	齊 藤 隆 弘 169
電子図書館と情報セキュリティ	木 下 宏 揚 188
COE 研究員 (PD・RA) 研究ノート	
非文字資料研究についての一考察	網 野 暁 195
写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論 ——佐賀平野における村落景観を事例に——	藤 永 豪 202
博物館におけるモノとヒトとのかかわりについての一考察 ——広島平和記念資料館の事例から——	大 西 万 知 子 212
図像から考えるモノと技術 ——伏見の煎餅職人の道具と技術から——	中 町 泰 子 221
活動日誌	
執筆者一覧・編集後記	

論文

図像資料としての素人絵——生活絵引き編さん資料としての可能性—— ……福田アジオ…… 1
中潤福筆『恵園傳神帖』について——朝鮮時代の風俗画にみる女性像—— ……金 貞 我…… 17
明治中期の災害画像を考える——メディア史の視点から—— ……増野 恵子…… 36
1枚の写真と23枚の絵——東京下落合の歴史を探る—— ……西 和 夫…… 62
「渋沢フィルム」の景観分析とその課題——朝鮮半島多島海を事例として—— ……浜田 弘明…… 74
在来農具の分布から見た東北地方 ……河野 通明…… 94
鷹の捕獲技術について——江戸時代の北日本を中心に—— ……菊池 勇夫……110

研究ノート

ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語
——仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカへ—— ……小 馬 徹……125
「散衆」の語義の変容——「散衆」日本伝来に関わって—— ……山口 建 治……136
「黒船かわら版」の情報………富澤 達三……143
詰職風俗図像と「新撰百工図」………中町 泰子……153
中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化
——写真にみる景観の変遷をととして—— ……藤 永 豪……171
銅像の建つ場についての考察 ……大坪 潤子……187
広島における記憶と身体のかかわりについての考察 ……大西万知子……195
非文字の資料と資料化 ……網野 暁……204
納西東巴古籍訳注全集の資料的価値について ……丸 山 宏……212

調査報告

メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告 ……川田 順 造……219
——人力運搬法と産法を中心に——
旧南洋群島の神社跡地調査報告 ……富井正憲
中島三千男……239
大坪潤子
サイモン・ジョン
中国湖南省新寧県瑶族「盤王節」調査報告 ……廣 田 律 子……323

活動日誌

執筆者一覧・編集後記

論 文

文化情報発信システムとしてのインターネット博物館 —大学・地域博物館の連携を中心にして—	佐野賢治	1
民俗学研究のための情報発信	木下宏揚	16
文化政策としての民俗博物館—国民国家日本の形成と「国立民俗博物館」構想—	丸山泰明	53
『模地数里』に描かれた松前—長春丸・女商人・馬—	菊池勇夫	78
風俗表現における図様の伝統と創造—東アジア風俗画資料の作例から—	金 貞我	97
台南道教の符篆について—放教科儀の九龍符命とその歴史を中心に—	丸山 宏	112
「渋沢フィルム」撮影地の景観変貌—韓国・蔚山を事例として—	浜田弘明	129
韓国におけるコロニアルタウンの景観—同化と異化, 保存・利用・破壊—	須山 聡	150

研究ノート

感性の人類学のための予備的覚え書き	川田順造	175
中国内モンゴルの若者の身体形状の特性	芦澤玖美	183
モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み	廣田律子 長瀬一男 海賀孝明 岡本浩一	188
蘇った納西族東巴教「求寿」儀式	夏 宇継	213
北京市都心部および郊外農山村の景観変容	藤永 豪	238
教会大学と日中戦争 —「北平私立輔仁大学檔案」(1925-1952年)から見た戦時下の学生収容—	王 京	250
「姑蘇繁華図」に見る清代前期の江南地域における紡織業及びその流通 —地方文献に照らして—	彭 偉文	260
住みつづける意思—紋別市内陸部における畜舎景観の成りたち—	土田 拓	271

調査報告

旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道, 和順郡を中心に—	津田良樹 中島三千男 金 花子 川村武史	285
--------------------------------	-------------------------------	-----

活動日誌		383
------	--	-----

執筆者一覧・編集後記

論文

非文字資料としての建築図面	西 和夫	1
中世都市鎌倉の環境—地形改変と都市化を考える—	河野真知郎	25
生活再現展示の思考	青木 俊也	55
近世の日記に見る旅と災害—19世紀庶民の旅日記「虎勢道中記」を中心に— (プリティッシュ・コロンビア大学「旅」ワークショップ参加論文)	北原 糸子	75
海外における災害研究の新しい傾向について	北原 糸子	93

研究ノート

「絵引」をする菅江真澄	菊池 勇夫	107
「澁澤写真」の類型化について—景観写真の体系化と空間編成—	八久保厚志	115
ユニバーシティ・ミュージアムと学芸員養成課程	檜村 賢二	125
戦時下の中国民俗研究—永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景—	王 京	171
中国における言語評価—浙江省の大学生を例にして—	宮本 大輔	193

調査報告

旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた神社の様相	津田 良樹 中島三千男 堀内 寛晃 尚 峰	203
日系カナダ人の持つ地名の記憶—バンクーバーにおける初歩的調査レポート—	本田 佳奈	291

2006年度全体研究会の概要と状況	295
活動日誌	311
執筆者一覧・編集後記	

Ⅲ 調査研究資料**1 環境と景観の資料化と体系化にむけて**

2004年12月27日発行

A4判 215ページ

口絵

- はじめに 香月洋一郎
1. 集落景観分析への一試論 香月洋一郎 1
2. 災害と写真メディア—1894年庄内地震のケーススタディ— 北原 糸子 77
3. 写真資料と景観変容—澁澤フィルムの分析にむけて— 浜田 弘明 八久保厚志 127
4. 海外神社跡地に見る景観の変容 中島三千男 161

2 図像文献書誌情報目録

2005年3月25日発行

A4判 409ページ

- まえがき 福田アジオ i
- 凡 例 iii
- 目 次 vi
- 目 録
- 第1部 図像名称五十音順目録 1
- 第2部 図像制作編年目録 139
- 第3部 図像内容分類別目録 275

3 図像研究文献目録

2005年9月25日発行

A4判 137ページ

まえがき	福田アジオ	i
凡 例		ii
目 次		iv
目 録		
第1部 著者五十音順目録		1
第2部 発行年次順目録		47
第3部 分析内容別目録		93

4 手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—

2007年3月20日発行

A4判 120ページ

風景としての情報	香月洋一郎	1
「澁澤写真」撮影地再訪に関する覚え書き	八久保厚志	35
「澁澤写真」の現場を歩いて	藤永 豪	42
災害写真のデジタル化作業の憂鬱	北原 糸子	50
「澁澤写真」リスト（アルバムNo.1～No.54分）		59
アルバムの背文字からの一覧		118
“The Shibusawa Photographs”	KATSUKI Yoichiro	119

5 「澁澤写真」に見る1935-1936年の喜界島

2008年2月20日発行

A4判 85ページ

はじめに	香月洋一郎	1
写真資料		
1 喜界島の人々	06	
2 一年の行事から その1 1月	10	
3 一年の行事から その2 3月	14	
4 一年の行事から その3 6月	15	
5 一年の行事から その4 たなばた	19	
6 一年の行事から その5 盆	20	
7 農作業 その1 田植えまで	22	
8 農作業 その2 稲の収穫	27	
9 農作業 その3 麦の収穫	30	
10 農作業 その4 砂糖	33	
11 島の信仰	39	
12 葬の習俗	46	
13 交通交易の諸相	50	
14 馬、牛、豚、ヤギ	57	
15 家と家まわり	65	
16 屋内	69	
17 家造り	71	
18 屋根葺き	73	
19 島の点描	74	
資料—アチック・ミュージアムの刊行物から		
「沖永良部島の印象」	岩倉市郎	82
「喜界島を訪ねて」	濱田國義	83
“The Shibusawa Photographs”		85

IV シンポジウム報告

1 第1回国際シンポジウム プレシンポジウム

「版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—」

2006年3月31日発行

A4判 95ページ

ご挨拶	福田アジオ
企画にあたって	北原糸子
写真は出来事をどのようにとらえてきたか	木下直之 1
浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか	原信田貢 15
変貌する明治の図録	鈴木廣之 33
見える民族・見えない民族—『興地誌略』の世界観	増野恵子 47
内田九一の「西国・九州巡幸写真」の位置	金子隆一 61
メディアとしての災害写真—明治中期の災害を中心に	北原糸子 73

2 第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～」

2006年6月30日発行

A4判 223ページ

趣旨 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実施委員会	VI
開会挨拶	神奈川大学長 山火 正則 VIII
主催者挨拶	神奈川大学21世紀COEプログラム拠点リーダー 福田 アジオ X
プログラムスケジュール	XVI
プロフィール	XX
基調講演	
非文字資料から見る人類文化	川田 順造 2
セッションI 「記号と写真—19世紀後半メディアがもたらした衝撃—」	
パネリスト	
見えない都市—出来事を語る錦絵—	原信田 實 14
写真による日本に対しての眼差しの形成	セバスチャン・ドブソン 20

船乗り・画家・発明家 アレキサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産	コンスタンチン・グーバー28
コメンテーター		
	渡辺 俊夫34
西洋人写真家の眼差しがもたらしたものーセバスチャン・ドブソン氏の報告をめぐってー	金子 隆一38
セッションⅡ「身体技法と祭祀芸能ー祭祀者の動きと人形の動きからー」		
パネリスト		
中国瑶族巫師の還願祭祀における身体技法	張 劲 松44
韓国の祭祀芸能における身体技法ー韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法ー	田 耕旭54
人形に見る身体技法ー日中の比較からー	大谷津 早苗68
コメンテーター		
	康 保 成78
身体技法と祭祀芸能	山口 建治84
セッションⅢ「民具と民俗技術」		
パネリスト		
中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか	周 星90
中国の犁の起源・形態とその分布	尹 紹 亭102
排泄の民俗と民具ー濟州島・韓半島・舟山島の比較ー	高 光敏114
コメンテーター		
	近藤 雅樹122
	安室 知126
セッションⅣ「非文字資料の情報化と教育」		
パネリスト		
フランスにおける非文字文化遺産ーその歴史、職業専門家養成方法、新たな課題ー	ジュヌヴィエーヴ・ガロ134
中国民間文化保護の近影	白 庚 勝146
オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討	能登 正人・木下 宏揚150
コメンテーター		
大規模データベース時代における研究と教育	アラン＝マルク・リュ166
	橘川 俊忠172
総合討論		
COE国際シンポジウム実施委員会178

3 第1班「図像資料の体系化と情報発信」公開研究会

図像から読み解く東アジアの生活文化

2006年6月30日発行

A4判 83ページ

まえがき	福田 アジオ
「姑蘇繁華図」をめぐる旅 —研究会開催にいたる経緯—	佐々木 睦 ……7
「姑蘇繁華図」と18世紀中国におけるリアリズムの曙光	鈴木 陽一 ……13
研究会報告	
「姑蘇繁華図」と「清明上河図」	戴 立 強 ……21
蘇州の生活と民俗	馬 漢 民 ……29
朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相	張 長植 ……33
都市図における風俗表現の機能	金 貞我 ……45
論文	
《姑蘇繁華図》与《清明上河図》的比較	戴 立 強 ……59
蘇州的生活和民俗 —民俗文化是人类共生的灵魂—	马 汉 民 ……67
甘露幀 図像에 登場하 는 民俗演戲 研究	張 長植 ……71
都市図における風俗表現の機能（概要）	金 貞我 ……81

4 第2回国際シンポジウム

図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く

2007年3月31日発行

A4判 275ページ

趣旨 神奈川大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム実施委員会	Ⅷ
第2回国際シンポジウム報告書の刊行に寄せて	
国際シンポジウム実施委員会委員長 大里 浩秋	Ⅹ
開会挨拶 神奈川大学長 山火 正則	Ⅻ
主催者挨拶 神奈川大学21世紀COEプログラム拠点リーダー 福田 アジオ	Ⅻ
プログラムスケジュール	ⅩⅥ
プロフィール	ⅩⅩ
セッションⅠ 非文字資料をめぐる方法論的諸問題	
パネリスト	
デジタル人類学—バーチャル・ミュージアムとしてのインターネット—	
リュ アラン=マルク	2
非文字資料はいかに認識されるか—知覚をめぐる哲学的諸問題—	
的場 昭弘	34
コメンテーター	
橋川 俊忠	52
セッションⅡ 図像のなかの暮らしと文化—日本と東アジアの近世—	
パネリスト	
生活絵引編纂の世界的意義	
福田 アジオ	60
『近世生活絵引』作成に向けての試み —土屋又三郎『農業図絵』を題材にして—	
田島 佳也	74
近世中国における芸術と都市文化 —都市図および関連する諸問題—	
王 正華	98
韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料 —「平壤監司饗宴図」を例にして—	
金 貞我	124
コメンテーター	
モストー ジョシュア	140
トレーデ メラニー	144
セッションⅢ 犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る	
パネリスト	
セッションⅢ「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」のねらい	
河野 通明	152
中国の伝統犁とその技術移転	
渡部 武	154
韓国の犁の形態と地域的特徴	
金 光彦	172
日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型	
河野 通明	184
コメンテーター	
尹 紹亭	200

セッションⅣ 景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性

パネリスト

景観分析における資料としての写真の可能性 ……藤永 豪 ……214

景観研究資料としての「渋沢フィルム」の今日的意義—韓国南部を例に— ……浜田 弘明 ……220

コメンテーター

鄭 美愛 ……232

奥野 志偉 ……236

総合討論 ……242

司会

北原 糸子

パネリスト

的場 昭弘

金 貞我

河野 通明

八久保 厚志

5 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム

ジョイント・ワークショップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」報告書

2007年2月15日発行

A4判 124ページ

ジョイント・ワークショップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」の意義

……………長田 豊臣（立命館大学長） ……viii

ジョイント・ワークショップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」の発刊にあたって

……………山火 正則（神奈川大学長） ……x

ジョイント・ワークショップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」開催主旨と内容

……………吉越 昭久（立命館大学） ……xii

北原 糸子（神奈川大学）

I 「都市の歴史と災害復元」

平安京の地形環境と災害 ……河角 龍典（立命館大学） ……3

平安京の祭礼と歴史災害 ……片平 博文（立命館大学） ……11

公家町の災害と防災—内裏（仙洞・大宮）御所をめぐって— ……冷泉 為人（冷泉家時雨亭文庫） ……21

近世京都の火災と復興

—嘉永7年の大火と安政内裏造営期の京都— ……鈴木 栄樹（京都薬科大学） ……29

3次元でみる京都の景観と災害 ……中谷 友樹（立命館大学） ……37

Ⅱ 「関東大震災と社会」

1923年関東地震の全体像とその痕跡を伝える試み

- 関東大震災の写真と地図のデータベース構築— ……諸井 孝文（鹿島建設小堀研究室）… 47
- 関東大震災の写真（東京都慰霊堂保管）について ……北原 糸子（神奈川大学）… 57
- 関東大震災時の救援 ……鈴木 淳（東京大学）… 73
- 関東大震災後における社会の変容 ……佐藤 健二（東京大学）… 81

Ⅲ 「歴史災害と現代」

絵画を活用した防災—1945年三河地震を事例とした地域防災教育の試み—

- ……………林 能成（名古屋大学）… 93
- ……………木村 玲欧（名古屋大学）
- 災害と文化財—天然記念物を中心として— ……桂 雄三（文化庁）…105
- 日常生活のなかの災害認識 ……香月 洋一郎（神奈川大学）…115
- ワークショップを了えて ……北原 糸子（神奈川大学）…123
- ……………吉越 昭久（立命館大学）

V ニュースレター 『非文字資料研究』

第1号

2003年10月発行

ご挨拶 3
山火 正剛 (神奈川大学学長)

プロジェクトの目的および研究計画 4
堀田 アジオ

研究構想図 7

各班の目指すもの

第1班「画像資料の体系化と情報発信」 8
堀田 アジオ

第2班「身体技法および感性の資料化と体系化」 10
川田 順造

第3班「環境と景観の資料化と体系化」 11
香月 洋一郎

第4班「文化情報発信の新しい技術の開発」 12
佐野 賢治

ESSAY

研究エッセイ

それは一枚の写真から始まった 14
中村 政剛

中国調査 中間レポート 15
鈴木 翔一

災害展示の絵図とCG 16
北原 糸子

サハリン調査ノート 17
富井 正憲

研究会報告 SCIENCE REPORT

地震の痕跡と名所絵
「名所江戸百景」の新しい読み方 18
原嶋田 賢

画像・動作情報のデジタル入力について 19
齊藤 隆弘

■主な研究活動 20

■研究担当者紹介・COE研究員紹介 22

■MAP・事務局・写真紹介・編集後記 23

■Information 24

第2号

2003年12月発行

巻頭言 3
網野 善彦 (神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科・元教授)

プロジェクトの構想および研究組織 4
橘川 俊忠

研究組織図 6

COE関係諸規程集

21世紀COEプログラム拠点形成に 7
関わる関係規程

1 神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会規程

2 神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程

3 神奈川大学COEプログラム研究協力者に関する取扱規程

4 神奈川大学研究拠点形成費補助金取扱規程

参考：COEプログラム「人類文化研究のための
非文字資料の体系化」研究推進会議内規

研究拠点紹介

歴史民俗資料科学研究科 12
田上 繁

日本常民文化研究所 13
香月 洋一郎

外国語学研究科中国言語文化専攻 14
大里 浩秋

研究エッセイ ESSAY

「鯨漁」図のあれこれ 16
田島 佳也

鬼神の面 18
廣田 律子

景色(景観)が変わるとのこと 20
八久保 厚志

WWWのセキュリティ 22
木下 宏揚

研究会報告 SCIENCE REPORT

人類学の立場からの問題提起 24
川田 順造

民具という非文字資料から日本列島の
古代多民族社会を復原する試み 26
河野 通明

■主な研究活動 28

■コラム 網野 暁 (PD)・富澤 達三 (PD) 30

■MAP・研究担当者紹介・編集後記 他 31

■Report & Information 32

第3号

2004年3月発行

巻頭言	3
笠松 宏至 (元神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所教授)	

研究エッセイ *ESSAY*

絵画史料と建物の復原	4
西 和夫	
紙の造形—いざなぎ流の御幣—	6
梅野 光興	
伝統芸能とデジタル技術の出会い	8
長瀬 一男	
「非文字資料」と歴史学	10
的場 昭弘	
「横浜写真」の位置	12
金子 隆一	

研究会報告 *SCIENCE REPORT*

可能性の宝庫—「絵引」	14
窪田 涼子	
風景印にみる地域の提示	16
須山 聡	

■コラム 「ボロ織り」から見えたもの	19
加藤 友子	

フィールド・ノート *Field Note*

奉安殿「発見」記	20
藤田 庄市	

海外博物館事情 *Foreign Museums*

フランス博物館の情報戦略	22
フレデリック・ルシーニュ	
■主な研究活動	24
■コラム 佐賀平野の干拓集落の景観を観察して	25
藤永 豪	
■コラム 煎餅のつやと道具のつや	26
中町 泰子	
■MAP・写真紹介・COE支援事務担当紹介	27
編集後記	
■Report & Information	28

第4号

2004年6月発行

ご挨拶	3
大野 泰 (学校法人 神奈川大学理事長)	

対談	4
----	---

感性のモデル化—人類学の立場から—	
尾本 恵市×川田 順造	

研究エッセイ *ESSAY*

2脚の椅子が跨ぐ空間と時間	
—ムテサ1世のトーネット#14—	12
小馬 徹	
非文字資料としての日本語を考える	
—音訓、当て字、語源—	14
山口 建治	
非文字資料としての景観	16
八久保 厚志	
中国画像学という迷宮	18
佐々木 睦	

海外博物館事情 *Foreign Museums*

威厳と挑戦	
—大英博物館の非文字資料から広がる風景—	20
大西 万知子	

フィールドノート *Field Note*

中国雲南省麗江調査記—東巴文化の今昔—	
1 東巴経典と現代に伝わる原初的な紙製法	22
田上 繁	
2 世界常民—雲南省で考える—	23
中村 政則	
3 麗江と大理の狭間で考えたこと	24
的場 昭弘	
4 “観光”という情報発信	25
佐野 賢治	
■受贈資料一覧	27
■主な研究活動	29
■研究担当者紹介・編集後記 他	31
■Report & Information	32

第5号

2004年9月発行

巻頭言	3
山口 徹 (神奈川大学名誉教授)	
対談	4
歴史的事実とは何か —文字資料と非文字資料のあいだ— 宮地 正人×中村 政則	
研究エッセイ ESSAY	
朝鮮時代の図像資料と風俗画 —女性をめぐる眼差し— 金 貞我	10
長くなった日本人の脚? 芦澤 玖美	12
近代天皇のイメージ形成 —視覚情報分析の可能性について— 増野 恵子	14
上海史研究と『良友』画報について 孫 安石	16
モバイルエージェント間通信のトラフィック 能登 正人	18
海外博物館事情 Foreign Museums	
韓国における大学博物館の現況と役割 金 花子	20
2003年度 外部評価と対応策	22
■コラム・自著を語る… 『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』 富澤 達三	26
■受贈資料一覧	27
■主な研究活動	28
■2004年度研究担当者紹介	30
■彙報	31
■Report & Information	32

第6号

2004年12月発行

巻頭言	3
永田 一清 (神奈川大学副学長)	
対談	4
図像資料から見た江戸のマチ 竹内 誠×福田 アジオ	
研究エッセイ ESSAY	
■特集：博物館資料は語る	
博物館資料は誰のもの 中村 ひろ子	10
トランス・アトランティック物語 —ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸— 落合 一泰	12
博物館空間に広がる景観的世界 浜田 弘明	14
展示における昔を考える 青木 俊也	16
フィールドノート Field Note	
ICOM2004年 ソウル世界博物館大会の参加報告 金 貞我	18
南洋群島に神社をたずねて 大坪 潤子	20
海外博物館事情 Foreign Museums	
中国・国家主導の博物館事業 王 京	22
■コラム 周期祭の背景 櫻村 賢二	24
■コラム 獅子で付き合う、獅子で競う—広東の醒獅— 彭 偉文	25
■受贈資料一覧	26
■主な研究活動	27
■海外研究機関との提携	30
■彙報	31
■Report & Information	32

第7号

2005年3月発行

巻頭言	3
桜井 邦朋 (神奈川県立大学名誉教授)	

対談	4
----	---

『民具が語る列島の歴史』

佐々木 長生×河野 通明

研究エッセイ	ESSAY
--------	-------

倭城・倭館・合戦図	10
—文献史料との関わりをめぐって—	
三鬼 清一郎	

『絵巻物による日本常民生活絵引』が	12
こだわるもの	
—あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの—	
君 康道	

色彩意味論研究の社会言語学的アプローチ	14
彭 国躍	

自然と人間、その関係の変移	16
田口 洋美	

フィールドノート	Field Note
----------	------------

環境と民具—再び世界常民について	18
中村 政則	

海外博物館事情	Foreign Museums
---------	-----------------

アメリカ	
博物館・美術館・大学図書館・暴力のあと	22
富澤 達三	

■コラム 北京—改革開放が生み出す景観—	24
藤永 豪	

■コラム 大衆文化の視覚イメージにおける	25
記憶の伝達	
尹 賢鎮	

■コラム 中国民俗界の「東方明珠」	26
—華東師範大学中国民俗保護開発研究センターの紹介—	
毛 巧暉	

■受贈資料一覧	27
---------	----

■研究業績一覧	28
---------	----

■主な研究活動	30
---------	----

■彙報	31
-----	----

■Report & Information	32
-----------------------	----

第8号

2005年6月発行

巻頭言	3
中島 三千男 (神奈川県立大学副学長・COE拠点形成委員会委員長)	

対談	4
----	---

土地の記憶—人と建物が織りなす景観—

森 まゆみ×西 和夫

研究エッセイ	ESSAY
--------	-------

■特集：文字と非文字の間

カモカモ(鴨々)について	10
—コトからモノへの関心—	
菊池 勇夫	

杭州に関わる二つのテーマ	12
大里 浩秋	

非文字資料としての	14
加賀藩検地絵図を読み解く	
田上 繁	

道教の符呪	16
—道教儀礼史における非文字資料研究の可能性をめぐって—	
丸山 宏	

フィールドノート	Field Note
----------	------------

納西族東巴教「求寿」儀式調査	18
夏 宇継	

■コラム 対抗と交流	21
江 静	

海外博物館事情	Foreign Museums
---------	-----------------

ロシア	
自由と想像—ロシアの博物館展示が教えるもの—	22
穆愷黛絲 (ムカイダイス)	

研究会報告	WORKSHOP REPORT
-------	-----------------

歴史研究と図像資料のデジタル化	24
孫 安石	

■受贈資料一覧	26
---------	----

■主な研究活動	28
---------	----

■2005年度 研究担当者紹介	30
-----------------	----

■彙報	31
-----	----

■Report & Information	32
-----------------------	----

第9号

2005年9月発行

巻頭言 3
橋川 俊忠 (日本常民文化研究所所長・COE事務局長)

対談 4

修験道と日本文化—その象徴する世界—
宮家 準×佐野 賢治

研究エッセイ **ESSAY**

Sex? Hapana, tume-chill— 10
「非文字」の混合言語、シェン語のVサイン
小馬 徹

民俗芸能のデジタル化の取り組み 14
廣田 律子

平安時代の和歌と呪術 16
繁田 信一

フィールドノート *Field Note*

古代地域史研究と出土史料 18
—「加賀郡勝示札」の史料的性格—
前田 禎彦

海外博物館事情 *Foreign Museums*

コンゴ
コンゴ国立美術館研究所 (IMNC) 20
ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ

研究会報告 **WORKSHOP REPORT**

穢い儀礼から見た呉越神歌の文化史的意義 22
顧 希佳

■コラム 日本での十日間 24
フェルナンド・カルロス・シャマス

■コラム 町の商店街と商業民俗研究 25
韓 同春

■コラム 同時代を見る眼と博物館 26
丸山 泰明

■コラム Ethnologueから見る言語危機の拡大 27
宮本 大輔

■主な研究活動 28

■彙報 31

■Report & Information 32

第10号

2005年12月発行

巻頭言 3
田上 繁 (歴史民俗資料学研究所委員長・COE事業推進担当者)



■はじめに 4

国際シンポジウム 「非文字資料とはなにか」

■開催レポート

プログラムスケジュール 5

セッションⅠ 「記号と写真」 6

セッションⅡ 「身体技法と祭祀芸能」 6

セッションⅢ 「民具と民俗技術」 7

セッションⅣ 「非文字資料の情報化と教育」 8

海外提携研究機関 COE国際シンポジウム参加記

「世界文明論構築の新視野」 王 勇 9

「非物質文化遺産研究との連携」 王 曉葵 9

「人類文化研究の新しい天地」 陳 勤建 10

『非文字』と『非言語』のあいだ 村上 史展 11

「歴史の復権と非文字資料」 許 南麟 12

「文化表現に対する理解」 織田 順子 14

●海外提携研究機関代表者懇談会 14

プレシンポジウム 「版画と写真」

■開催レポート

プレシンポジウム 15

同時開催 企画展示 16

■コラム 「開拓定住」を問う場としての北海道 17
土田 拓

研究エッセイ **ESSAY**

「非文字資料」と国際交流日誌 18
ジョン・ボチャラリ

フィールドノート *Field Note*

韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告 20
金 花子

海外博物館事情 *Foreign Museums*

オーストラリア
多文化展示への模索 22
サイモン・ジョン

2004年度外部評価と対応策 24

21世紀COEプログラム委員会による中間評価 27

■主な研究活動 28

■受贈図書一覧 30

■彙報 31

■Report & Information 32

第11号

2006年3月発行

- 巻頭言 3
大里 浩秋 (外国語学研究科委員長・COE事業推進担当者)

ワークショップ
報告 第1班公開研究会
「図像から読み解く東アジアの生活文化」

- 開催の主旨 4
鈴木 陽一

- 『姑蘇繁華図』と『清明上河図』の比較 6
戴 立強

- 蘇州における民俗生活の現状 7
馬 漢民

- 仏画「甘露嶺」にみる民俗演戯の諸相 8
張 長植

- 都市図における風俗表現の機能 9
金 貞我

研究エッセイ ESSAY

- 屏風絵を読むにあたって 10
—「江差松山屏風」の読み取り体験から—
田島 佳也

- なぜ「道具」ではなく「民具」なのか 14
河野 通明

フィールドノート Field Note

- 韓国を少し知るヒント—自転車とオートバイ— 16
櫻村 賢二

- むらの風景が語るもの—世界遺産白川郷を訪ねて— 18
藤永 豪

海外博物館事情 Foreign Museums

- ブラジル
歴史変遷の象徴 20
—サンパウロ市の2つのミュージアム—
菊池 渡

- コラム 日・中の民間芸能の比較—伝統の異なる変遷— 22
岳 永遠

2006年度以降の組織変更 24

- 受贈図書一覧 26

- 主な研究活動 28

- コラム 『民俗学誌 (Folklore Studies)』について 30
王 京

- 彙報 31

- Report & Information 32

第12号

2006年6月発行

調査研究から情報発信へ
—4年目を迎え大幅な組織改編—

- 成果の公表、発信にむけて 3
福田 アジオ

- 2006年度 課題別研究担当者 4

- 課題別各研究の紹介 6

- 組織図 11

8月開催 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム
ジョイントワークショップ
「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」

- 災害像の構築にむけて 12
—北原糸子氏に聞く—

- 立命館大学21世紀COEプログラムと 16
ジョイントワークショップ
吉越 昭久

- プログラムスケジュール 17

研究エッセイ ESSAY

- 租界と居留地に刻印された人間活動の営み 18
孫 安石

- コラム 20
日本における非物質文化遺産についての考察ノート
宋 俊華

- コラム 21
私の試みた、つたない「実験」
刈田 均

海外博物館事情 Foreign Museums

- デンマーク
デンマークの野外博物館 22
丸山 泰明

- 主な研究活動 24

- 「景観の時系列的研究」研究会報告 25
写真、絵画資料の著作権について—出版の現場から—
香月 洋一郎

- コラム 26
手のひらが受け継ぐもの
本田 佳奈

- 彙報 27

- Information 28

第13号

2006年9月発行

展示を考える1	
What Is a Museum Exhibition?	
展示と体験	3
榎 美香	
観覧料という心的バリア	5
浜田 弘明	
第2回国際シンポジウムにむけて	
An Invitation to the Second International Symposium on Nonwritten Cultural Materials	
画像・民具・景観	8
非文字資料から人類文化を読み解く	
大里 浩秋	
的場 昭弘	
金 貞我	
河野 通明	
八久保 厚志	
北原 糸子	
プログラムスケジュール	16
■コラム	17
アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)	
の発達比較—日本から一番遠い国、ブラジルでは—	
大西 万知子	
2005年度外部評価と対応策	18
委員の評価(要旨)	
外部評価に対する対応策	
■コラム	22
忘れられない二週間	
王 欣	
■コラム	23
中国の吉祥図案と日本の吉祥図案の比較研究	
尹 笑非	
主な研究活動	24
1班『東アジア生活絵引』編纂 公開研究会報告	26
楊貴妃になりたかった男たち—『点石齋画報』に見る〈女装くん〉	
佐々木 睦	
■立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム	27
ジョイントワークショップを了えて	
北原 糸子	
■受贈資料一覧	28
■コラム	30
インドにおけるフィールドワークの実践	
國弘 暁子	
■彙報	31
■Information	32

第14号

2006年12月発行

展示を考える2	
What Is a Museum Exhibition?	
博物館と体験学習	3
佐々木 長生	
『昔の暮らし』の展示すること	5
高木 健也	
第2回国際シンポジウム—開催レポート—	
Report on the Second International Symposium	
第2回国際シンポジウムを振り返って	8
大里 浩秋	
プログラムスケジュール	9
第2回国際シンポジウムを「総括」する	10
中村 政則	
第2回国際シンポジウムを終えて	13
大西 万知子	
国際民俗学研究会代表者懇談会	13
只良町・神奈川大学COE共催—シンポジウム—	
民具は世界を結ぶ—人と自然を結ぶわが国—	
■はじめに	14
佐野 賢治	
■プログラムスケジュール	14
只見町の生業と民具—雪・山・川のつくる世界—	15
佐々木 長生	
中国民具研究の視座	16
—農業考古学から民具研究へ—	
周 暉	
型の比較民具学—東アジアの民俗移動—	17
河野 通明	
生存からサバイバル文化へ	18
—民具に見る継承の役割—	
スチュアート ヘンリ	
■コラム	19
色彩装飾の保存化—京劇の装束の表すもの—	
前 澤水	
■フィールドノート	20
中国東北部、黒龍江の山神社跡地調査報告	20
堀内 高晃	
1班『東アジア生活絵引』編纂 公開研究会報告	22
新編の巻—(報告書による)日本民具生活絵引の〇〇こま—	
藤原 重晴	
■コラム	24
東京の都市景観についての一考察	
藤 原 重	
■コラム	25
少女の嫁姿から見た日本の「東西融合」	
藤 原 重	
主な研究活動	26
3班『新編の巻(民俗学による)日本民具生活絵引』の〇〇こま—	29
韓国が多島海を写した「流澤写真」について	
田 眞展	
■受贈資料一覧	30
■彙報	31
■Information	32

第15号

2007年3月発行

	
Interview	
中世鎌倉の景観を語る—私の発掘覚書—	3
河野 眞知郎	
研究エッセイ ESSAY	
「絵巻物による日本常民生活絵引」	16
マルチ言語版編集における問題	
若 原 暹	
写真から人口現象を読み解く	18
平井 誠	
フィールドノート Field Note	
性とジェンダーをどうとらえるか	19
—人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究—	
國弘 鏡子	
■コラム	21
瀬戸内の小さな島で	
香月 洋一郎	
フィールドノート Field Note	
変化しつつある文化遺産	22
広東解酨の現状について	
彭 偉文	
■コラム	24
野外民族博物館リトルワールドにおける「民族」概念に ついての初歩的レポート	
フレデリック・ルシーニユ	
■コラム	26
北斎を巡って	
ディオゴ・カワバテス	
■コラム	27
神奈川大学付近での考察に見られた日本の村落共同体	
劉 曉春	
■受贈資料一覧	28
■主な研究活動	29
■原信田實さんの笑顔にもう会えない	30
■景報	31
■Information	32

第16号

2007年6月発行

特集

公開研究会

「人びとの暮らしと生業—『日本近世生活絵引』
作成への問題点をさぐる—」を振り返って『日本近世生活絵引』の作成をめざして…………… 3
—近世の北陸農村と松前地漁村
の人びとの暮らしと生業—

田島 佳也

生活絵引と菅江真澄…………… 17

菊池 勇夫

「人びとの暮らしと生業」に参加して…………… 18

舟山 直治

鳥瞰の視線を考える…………… 20

—『生活絵引』作成における歴史学、
民俗学と美術史学の合流点をめぐって—

池田 貴夫

アイヌ民俗図資料の見方…………… 22

児島 恭子

『農業図絵』にみる喫煙とジェンダー…………… 23

長島 淳子

研究エッセイ

ESSAY

幻の「満洲国」建国神廟を復原する…………… 24

津田 良樹

■コラム…………… 26

「虹」と「市」

小野地 健

■コラム…………… 27

キリスト教と現代日本人の生活

曹 栄

■2007年度研究担当者紹介…………… 28

■主な研究活動…………… 29

■受贈資料一覧…………… 30

■彙報…………… 31

■Information…………… 32

第17号

2007年9月発行

Interview 1

5班 実験展示班代表者 中村先生に聞く

実験展示班の企て	3
「あるく—身体の記憶—」について	
中村 ひろ子	

Interview 2

6班 理論総括班代表者 的場先生に聞く

プロジェクトの総括にむけて	9
的場 昭弘	

Interview 3

1班 「日本近世・近代生活絵引」の編集班代表者 田島先生に聞く

絵引作業の舞台裏	15
田島 佳也	

研究エッセイ ESSAY

都市景観「いにしへのソウル」の復元	18
富井 正憲	

研究エッセイ ESSAY

文久2年の「はしか絵」	20
富澤 達三	

■コラム	22
鳥取県において民具調査を始めて	
樫村 賢二	

■コラム	23
「家族」と「故郷」	
吳 毓華	

2006年度外部評価と対応策	24
委員の評価（要旨）	
外部評価に対する対応策	

■主な研究活動	28
---------	----

■受贈資料一覧	29
---------	----

■彙報	31
-----	----

■Information	32
--------------	----

第18号

2007年9月発行

第3回国際シンポジウムにむけて 3

場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平

大里 浩秋
橘川 俊忠
佐野 賢治
中村 ひろ子
西 和夫
廣田 律子
前田 禎彦
山口 建治

第3回国際シンポジウム プログラム詳細	9
---------------------	---

特集 若手研究者からのレポート

① 日本非文字文化研究および保護の 実践に関する調査研究	10
—神奈川大学COEプログラムと小澤昔ばなし研究所を例に—	
西村 真志葉	
② 武士道をめぐる私の2週間	12
ベネシュ・オレグ	
③ 大学生の環境認識—自然地理学の講義現場から—	14
藤永 豪	
④ 煙突のなかの手紙	16
土田 拓	
⑤ 図像学研究の課題	17
佐々木 弘美	
⑥ 『旅行雑誌 (China Traveler)』について	18
王 京	
⑦ 浮世の麗しい影—浮世絵の美人絵略論—	19
衣 曉龍	
⑧ 香港における日本のテレビドラマ	20
王 志垣	
⑨ 上海で見た、“ものを運ぶ方法”	22
坂井 美香	
■実験展示開催報告	24
■主な研究活動	24
■受贈資料一覧	26
■彙報	27
■Information	28

第19号

2008年3月発行

ご挨拶

世界に、そして未来へ…………… 3

中島 三千男 (神奈川大学学長)

再びの幕開けに向けて…………… 4

池上 和夫
(神奈川大学副学長・神奈川大学21世紀COEプログラム
拠点形成委員会委員長)

REPORT 訪問・派遣研究員によるレポート

1 「ベルダーシュ」—異性装から「異装」研究へ— …… 5
國弘 暁子2 日中民俗学交流のひとこま…………… 6
—何思敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入—
王 京3 「日本国図」から見た鄭若曾の日本認識 …… 8
許 海華4 対照的な日本…………… 9
唐沢 ダニエラ5 心はウチナンチュ…………… 10
グラウジョール・カルロス6 龍動と地震…………… 11
蔣 明智

● COEメンバーリスト…………… 12

● COE刊行物リスト…………… 14

● 海外提携研究機関との若手研究者交流実績
派遣研究員…………… 17
訪問研究員…………… 17

● 若手研究者業績…………… 19

■ ホームページの更新について…………… 25

■ 2007年度 外部評価の実施…………… 26

我々文字資料研究
News Letter バックナンバー総目次…………… 27

■ 受贈資料一覧…………… 32

■ 主な研究活動…………… 32

■ 第3回 COE国際シンポジウム 開催報告…………… 33

■ 第3回 COE国際シンポジウム…………… 34
プレシンポジウム 若手研究者ワークショップ
「手段としての『非文字』—資料と方法のあいだ—」を終えて
王 京

■ 集報…………… 35

■ Information…………… 36

7. 研究成果

福田 アジオ FUKUTA Ajo

拠点リーダー（2003年度～2007年度）

1班課題2・3、5班、6班

【著書】

- 1 『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 『高度専門職学芸員養成—大学院における養成プログラムの提言—』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 3 『東アジア生活絵引 中国江南編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 4 『日本民俗学講演録』（中文）成都時代出版社、2008年2月
- 5 『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年1月
- 6 『日本近世生活絵引 東海道編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 7 『柳田国男の民俗学』（歴史文化セレクション）吉川弘文館、2007年9月
- 8 『結衆・結社の日本史』（結社の世界史1）編著、山川出版社、2006年7月
- 9 『歴史探索の手法—岩船地蔵を追って—』ちくま新書、筑摩書房、2006年5月
- 10 『精選日本民俗辞典』共編著、吉川弘文館、2006年3月
- 11 『松原の民俗—長野県南佐久郡小海町松原—』（神奈川大学歴民調査報告3）編、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006年3月
- 12 『寺・墓・先祖の民俗学』大河書房、2004年10月
- 13 『環境・地域・心性—民俗学の可能性』共編著、岩田書院、2004年9月
- 14 『民俗学案内』（講座日本の民俗学11）編著、雄山閣、2004年3月
- 15 『戦う村の民俗誌』（歴博ブックレット27）歴史民俗博物館振興会、2003年9月

【論文】

- 1 “How the Task of Studying Yanagita Kunio Has Developed”, H.D.Ölschleger ed. *THEORIES AND METHODS IN JAPANESE STUDIES: CURRENT STATE AND FUTURE DEVELOPMENTS* Bonn University Press, 2008年2月
- 2 「地域史研究と広域調査」地方史研究協議会編『東西交流の地域史—列島の境目・静岡』雄山閣、2007年10月
- 3 「民俗文化から見た日本海地方」武藤誠・北川フラム編『つながる日本海—新しい環日本海文明圏を築くために』現代企画室、2007年7月
- 4 「地方生活文化和古村落保護」王恬編『古村落の沈思—中国古村落保護（西塘）国際高峰论坛論文集』上海辞書出版社、2007年6月
- 5 「生活絵引編纂の世界的意義」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 6 「家族・親族と通過儀礼」『中国江南沿海村落民俗誌』「I 東門島民俗誌」、神奈川大学、2006年3月
- 7 「家族・親族と族譜」『中国江南沿海村落民俗誌』「II 箬山民俗誌」、神奈川大学、2006年3月

- 8 「民俗学と歴史学をつなぐもの—網野善彦の功績—」『神奈川大学評論』53号、神奈川大学広報委員会、2006年3月
- 9 「ニワバとジミョウ—和田正洲学説から学ぶ—」『民俗』194号・195号、相模民俗学会、2006年2月
- 10 「市町村合併と伝承母体—その歴史的概観—」『日本民俗学』245号、日本民俗学会、2006年2月
- 11 「村落領域論」『民間文化論壇』141号、中国民間文芸家協会、2005年2月
- 12 「図像資料としての素人絵—生活絵引き編さん資料としての可能性—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 13 「娘組と娘仲間」『環境・地域・心性—民俗学の可能性—』第2編、岩田書院、2004年9月
- 14 「生活図像資料と文献書誌データベースの作成」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「調査研究から情報発信へ—4年目を迎え大幅な組織改編—成果の公表、発信にむけて」『非文字資料研究』No.12、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 2 《対談》「図像資料から見た江戸のマチ」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 3 「プロジェクトの目的および研究計画」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月
- 4 「図像資料の体系化と情報発信」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

川田 順造 KAWADA Junzo

サブリーダー（2003年度～2005年度）事業推進担当者（2003年度～2005年度）共同研究員（2006年度・2007年度）

2班 課題1

【著書】

- 1 『もうひとつの日本への旅—モノとワザの原点を探る』中央公論新社、2008年3月
- 2 『文化人類学とわたし』青土社、2007年12月
- 3 『ヒトの全体像を求めて』編共著、藤原書房、2006年5月
- 4 『母の声、川の匂い—ある幼時と未生以前をめぐる断想—』筑摩書房、2006年1月
- 5 『人類の地平から—生きること死ぬこと—』ウェッジ、2004年7月
- 6 『人類学的認識論のために』岩波書店、2004年8月
- 7 『無文字社会の歴史—西アフリカ・モン族の事例を中心に』岩波書店、2004年6月（韓国語）
- 8 『コトバ・言葉・ことば—文字を日本語を考える—』青土社、2004年4月

【論文】

- 1 「非文字資料による人類文化研究のために—感性の諸領域と身体技法を中心に」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「一人類学徒にとっての網野善彦の思い出」『神奈川大学評論』第53号、神奈川大学広報委員会、2006年3月
- 3 「感性の人類学のための予備的覚え書き」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 4 「ヒトとしての見識を磨く人文科学のために」『学術月報』通巻第732号、日本学術振興会、2005年11月
- 5 「声と文字と歴史と」『第38回歴博フォーラム「古代日本—文字のある風景」』大修館書店、2005年3月
- 6 《調査報告》「メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告—人力運搬法と座法を中心に—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

- 7 「海と母のあいだ—ピエール・ロティの『永遠の郷愁』』『風の旅人』 8号、ユーラシア旅行社、2004年6月
- 8 「課題と方法」『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究』第1章、大妻女子大学人間生活科学研究所、2004年4月
- 9 「文化人類学的アプローチ」『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究』第7章、大妻女子大学人間生活科学研究所、2004年4月
- 10 「感性の諸領域、とくに匂いの文化についてのフランス南部と西アフリカ3カ国での初次的調査」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 11 「ブルターニュからブローニュへ—ある鬼才とのめぐり逢い—」『風の旅人』 6号、ユーラシア旅行社、2004年2月
- 12 “Réflexions sur les repports dynamiques entre les cultures sonores d'une part, et la cognition historique et sa représentation d'autre part: cas des sociétés de l'intérieur de l'Afrique occidentale.”
CULTURES SONORES D'AFRIQUE III. Hiroshima City University. January 2004

【その他】

- 1 「非文字資料から見る人類文化」『非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 2 《対談》「感性のモデル化—人類学の立場から—」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月
- 3 「人類学の立場からの問題提起」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月
- 4 「身体技法および感性の資料化と体系化」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

中村 政則 NAKAMURA Masanori

サブリーダー（2003年度～2006年度）事業推進担

当者（2003年度～2006年度）

共同研究員（2007年度）

4班

【著書】

- 1 『年表昭和史—増補版・1926—2003』岩波書店、2004年
- 2 『帝国を考える』双風社、2004年

【論文】

- 1 「文字資料と非文字資料のはざま—オーラル・ヒストリーの可能性」『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「戦後歴史学と現代歴史学」『日本歴史学協会』、2008年（発行予定）
- 3 「極限状況に置かれた者の語り—ナガサキの被爆者の場合」『オーラル・ヒストリー学会誌』第3号、日本オーラル・ヒストリー学会、2007年9月
- 4 「終わった戦後と終わらない戦後」『歴史学研究』2007年9月号、第831号、歴史学研究会、2007年9月
- 5 「グローバリゼーションと歴史学—21世紀歴史学の行方」『神奈川大学評論』第56号、神奈川大学広報委員会、2007年3月
- 6 「満州移民の戦後史」『歴史と民俗』21、平凡社、2005年3月
- 7 「日本における近代国家の建設」国際歴史学会、2004年4月
- 8 『歴史と民俗の交錯—記録すること・記憶すること』『歴史民俗資料学研究』『歴史学という学問、歴史民俗資料学研究科10周年記念公開シンポジウム』、2004年3月
- 9 「日本近現代史のなかの昭和天皇」『年報 日本現代史』、2004年3月
- 10 「オーラル・ヒストリーの可能性」『歴史と民俗』22、平凡社、2004年3月
- 11 「昭和恐慌と金解禁政策」『じっきょう』No.58、2004年2月
- 12 「20世紀・日本史学史の里程標」『歴史評論』、2004年2月
- 13 「自分史・地域史・国民史」『長野県飯田市地域

史研究所年報』、2004年

【その他】

- 1 「環境と民具—再び世界常民について」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 2 「歴史的事実とは何か—文字資料と非文字のあいだ—」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月
- 3 「中国雲南省麗江調査記—東巴文化の今昔—世界常民—雲南省で考える—」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月
- 4 「開港と日本近代」神奈川市民講座、2004年6月
- 5 「それは一枚の写真から始まった」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro

研究遂行責任者・事業推進担当者（2003年度～2007年度）

3班 課題1・課題2、6班

【論文】

- 1 「『環境認識』調査覚書」『「景観」と「環境」についての覚書』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「『澁澤写真』の活用に向けての一試行」『「景観」と「環境」についての覚書』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 3 「風景としての情報」『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 4 「語るという行為の表と陰」『地域の自立 シマの力』下、コモンズ、2006年10月
- 5 「海人のむらの民俗誌から／中」『歴史と民俗』21、平凡社、2005年3月
- 6 「磁場としてのフィールド・プロセスとしての情報」『環』2005年冬号、藤原書店、2005年1月
- 7 「集落景観分析への一試論」『環境と景観の資料化と体系化にむけて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

8 「海人のむらの民俗誌から（上）」『歴史と民俗』20、平凡社、2004年3月

9 「民俗学教育の具体例（4）」『神奈川大学』香月洋一郎編著、講座・日本の民俗学（11）『民俗学案内』、2004年3月

10 「なにからどのように始めるか」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

11 「フィールドでの記憶6—宮本常一の景観写真から—」『未来』446号、未来社刊、2003年11月

12 「フィールドでの記憶5—宮本常一の景観写真から—」『未来』445号、未来社刊、2003年10月

【その他】

1 「日本常民文化研究所」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

2 「環境と景観の資料化と体系化」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

佐野 賢治 SANO Kenji

研究遂行責任者・事業推進担当者（2003年度～2007年度）

4班

【論文】

1 「地域研究と情報学の連携—只見町インターネット・エコミュージアムの可能性」『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 「文化情報発信システムとしてのインターネット博物館—大学・地域博物館の連携を中心にして—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

3 「“遊び”からゲームへ—個別化する子供文化—」『野外文化教育』第5号、野外文化教育学会、2005年10月

4 「ナシ（納西）族文化の象徴・東巴文字」『アジ

ア遊学』No.63、勉誠出版、2004年5月

- 5 “Ethnical Acceptations of the Ksitiganbha Belief on the Afterlife Concepts of Asian Peoples.” *Cultural diversity and Common Values*. Korean National Commission for UNESCO. 2004年3月
- 6 「“非文字資料”と地域社会—福島県只見町の民具保存活用運動—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 7 「体験と経験—体と心の“ふるさと”—」『少年期に必要な体験活動と指導のあり方』国立高遠少年自然の家、2004年2月

【その他】

- 1 《対談》「第3回国際シンポジウムにむけて—場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平—」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「修験道と日本文化—その象徴する世界—」『非文字資料研究』No.9、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月
- 3 「中国雲南省麗江調査記—東巴文化の今昔—“観光”という情報発信」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月
- 5 「文化情報発信の新しい技術の開発」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

鈴木 陽一 SUZUKI Yoichi

研究遂行責任者（2003年度・2004年度）、事業推進担当者（2003年度～2007年度）

1班 課題3、6班

【著書】

- 1 『東アジア生活絵引 中国江南編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年1月
- 2 『金庸を語る—武侠小説の魅力』御茶の水書房、2004年5月
- 3 『歴史と文学の境界』頸草書房、2004年3月
- 4 『小説的読法』（中文）文聯出版社、2003年12月

- 5 『中国の英雄豪傑を読む』大修館書店、2003年12月

【論文】

- 1 「『姑蘇繁華図』と18世紀中国におけるリアリズムの曙光」『図像から読み解く東アジアの生活文化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 2 「物語の復権を目指して—『中国四大奇書の世界』を読む—」『學燈』5月号、丸善、2004年4月
- 3 「中国の図像についてのノート」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

- 4 「文学と歴史の境界」『人文学研究叢書』19、勁草書房、2003年3月

【その他】

- 1 「第一班公開研究会『図像から読み解く東アジアの生活文化』—開催の主旨—」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 2 「中国調査 中間レポート」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

橋川 俊忠 KITSUKAWA Toshitada

サブリーダー（2006年度・2007年度）事業推進担当者（2003年度～2007年度）

4班、6班

【論文】

- 1 「『非文字資料の体系化』についての理論的諸問題」『非文字資料研究の理論的諸問題』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「廟と村の関係」『中国江南沿海村落民俗誌』I、東門島民俗誌、神奈川大学、2006年3月

【その他】

- 1 《対談》「第3回国際シンポジウムにむけて—場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平—」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月

2 「プロジェクトの構想および研究組織」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

三鬼 清一郎 MIKI Seiichiro

事業推進担当者（2003年度～2005年度）共同研究員（2006年度・2007年度）

3班 課題3

【著書】

- 1 『愛知県史／資料編12／織豊2』（共著）愛知県、2006年3月
- 2 『稿本 豊臣秀吉文書（一）』科学研究費報告書「織豊期発給文書の史料学的研究」、2005年3月

【論文】

- 1 「蔚山城合戦図をめぐる」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「陳立書からみた秀吉家臣団の構成」藤田達生編『小牧・長久手の戦いの構造』岩田書院、2006年4月
- 3 「『惣無事』令について」『日本史の研究』212号、山川出版社、2006年3月
- 4 「国掟の成立をめぐる」『商経論叢』、2004年4月
- 5 「徳川家康と陰陽道」『朝尾直弘著作集』月報2、岩波書店、2004年1月

【その他】

- 1 「倭城・倭館・合戦図—文献史料との関わりをめぐる—」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月

西 和夫 NISHI Kazuo

サブリーダー（2006年度・2007年度）事業推進担当者（2003年度～2007年度）

1班 課題2

【著書】

- 1 『日本建築史図集 新訂第二版』彭国社、2007年2月
- 2 『壱岐勝本浦まちあるき読本』壱岐市、2006年2

月

- 3 『総覧 登録有形文化財建造物5000』（共著）海路書院、2005年11月、「登録文化財の現状と課題」執筆
- 4 『京都で建築に会う—見るおもしろさ、知る楽しみ』彭国社、2005年8月
- 5 『長崎出島 オランダ異国事情』角川叢書、2004年9月
- 6 『新しい松代が見えてくる—武家屋敷の庭園と町屋』（共著）NPO法人 夢空間松代のまちと心を育てる会、2004年3月「松代に残る文化遺産の保存と活用」執筆
- 7 『長崎出島ルネサンス復原オランダ商館』（共著）、戎光祥出版、2004年2月

【論文】

- 1 「明治6年の住宅建築絵解き」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「小豆島に劇場があった—池田劇場の再建」『歴史と民俗』24、平凡社、2008年3月
- 3 “Japan as seen from architecture (1) Let's Restore Lost Japanese Landscapes: Kaido & Syukubamachi.” *Japan SPOTLIGHT 153th*. June 2007
- 4 「建築史の社会貢献—学生よ、町へ出よう」『建築雑誌』No.1562、2007年5月
- 5 「軽妙、遊び心、自由。それが数奇屋」『てんとう虫』4、2007年4月
- 6 山形県長井市における歴史的建造物の調査検討—共同執筆『日本建築学会関東支部研究報告集2006年第77回』2007年3月
- 7 「明治期の木造郵便局建物の検討—旧鶴沼郵便局・旧江津郵便局・旧名護屋郵便局を中心に—」共同執筆『日本建築学会関東支部研究報告集2006年度第77回』、2007年3月
- 8 「中山道鶴沼宿の現状と復原—各務原の歴史的建造物 その3—」共同執筆『日本建築学会関東支部研究報告集2006年度第77回』、2007年3月
- 9 「棟札と絵図による加佐美神社の検討—各務原の歴史的建造物、その4—」共同執筆『日本建築学

- 会関東支部研究報告集2006年度第77回』、2007年3月
- 10 「非文字資料としての建築図面」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 11 「川上貞奴の菩提寺貞照寺と別荘萬松園—ひとりの女性先駆者の実績」『歴史と民俗』23、平凡社、2007年2月
- 12 「宿場町」『日本歴史』第704号、吉川弘文館、2007年1月
- 13 「壱岐勝本浦の町家・酒造店・石造物 町づくりに向けた建造物調査」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2006』日本建築学会、2006年9月
- 14 「川上貞奴の菩提寺貞照寺と別荘萬松園 各務原の歴史的建造物 その2」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2006』日本建築学会、2006年9月
- 15 「中山道鶴沼宿の復原考察 各務原の歴史的建造物その1」共著『日本建築学会大会学術講演梗概集2006』日本建築学会、2006年9月
- 16 「富士紡績豊門会館の移築・建設経過に関する文書による検討—駿河小山、富士紡の建築、その3」共同執筆『日本建築学会関東支部講演梗概集2005』日本建築学会、2006年3月
- 17 「中山道鶴沼宿の幕末期の様相—建物の復原検討を中心に」『歴史と民俗』22、平凡社、2006年3月
- 18 「日本住宅の通奏低音—書院造」『新建築2005年11月臨時増刊 日本の建築空間』、新建築社、2005年11月
- 19 「建築文化のスーパーバイブル—100の空間が語るもの」『新建築2005年11月臨時増刊 日本の建築空間』、新建築社、2005年11月
- 20 「豊門会館本館（旧和田豊治向島自邸）について—駿河小山、富士紡績の建築その2」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2005』日本建築学会、2005年9月
- 21 「豊門会館の設立と様相について—駿河小山、富士紡績の建築その1」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2005』日本建築学会、2005年9月
- 22 「日本建築の素晴らしい遺産—建築史無用論を吹き飛ばすために」『新建築』2005年8月号、新建築社、2005年8月
- 23 「目白文化村と会津八一」『新建築』2005年6月号、新建築社、2005年6月
- 24 「建築教育の悩み」『新建築』2005年4月号、新建築社、2005年4月
- 25 「文化財指定の問題点そして庶民文化財の試み」『歴史と民俗』21、平凡社、2005年3月
- 26 「究極の文化財—平戸の町並み調査」『新建築』2005年2月号、新建築社、2005年2月
- 27 「1枚の写真と23枚の絵—東京下落合の歴史を探る—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 28 「棟札・絵画史料などによる益富家住宅建設年代の検討 生月島（長崎県）鯨組関連施設の調査研究その2」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2004』日本建築学会、2004年9月
- 29 「益富家住宅と捕鯨関連施設 生月島（長崎県）鯨組関連施設の調査研究その1」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2004』日本建築学会、2004年9月
- 30 「平戸市志々伎町福田酒造元禄蔵の調査研究平戸町並み調査その8」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集2004』日本建築学会、2004年9月
- 31 「防空壕」『歴史と民俗』20、平凡社、2004年3月
- 32 「平戸旧城下町の武家屋敷—大曲公家住宅、大曲敦家住宅、内野茂樹家住宅を中心に、平戸町並み調査その7」共同執筆『日本建築学会九州支部研究報告』日本建築学会、2004年3月
- 33 「生月（長崎県）鯨組益富家住宅の調査」共同執筆『日本建築学会九州支部研究報告』日本建築学会、2004年3月
- 34 「古城は本当に工場だった」『日本歴史』668号、吉川弘文館、2004年1月

- 35 「江津市本町地区の町並み—江津町並み調査その1」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、2003年9月
- 36 「出島和蘭商館6棟の復原について」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、2003年9月
- 37 「現在建物に見る平戸旧城下町の都市構造とその変容—オランダ商館復原と合わせた町の活性化に向けて、平戸町並み調査その6」『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、2003年9月
- 38 「長野市松代町の町並み調査について—旧花之丸御殿の建物と町家」共同執筆『日本建築学会大会学術講演梗概集』日本建築学会、2003年4月

河野 通明 KONO Michiaki

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

2班 課題2、5班

【論文】

- 1 「非文字資料研究・身体技法研究の河野なりの受け止め方と調査の概要—神奈川県21世紀COEプログラムへの参加にあたっての基本姿勢」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「身体技法の違いにもとづく古代日本列島の民族分布の復原—東北地方の木摺白調査からの古代日本列島の民族分布の復原への見通し—」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 3 「民具という非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査—『民具からの歴史学』の有効性の追究と方法論確立の試み—」『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 4 「神奈川県21世紀COEプログラムにおける『非文字資料の体系化』とは何か」『非文字資料研究の理論的諸問題』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 5 「遣唐使を通じた長底犁導入時期の民具調査にも

- とづく特定」『遣唐使・遣唐使1400周年記念国際シンポジウム報告書』浙江工商大学日本文化研究所、2008年3月（発行予定）
- 6 「『農具便利論』の鋤の柄はなぜ短い」『民具マンスリー』39巻12号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 7 「『犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る』のねらい」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 8 「日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 9 「遣唐使将来唐代犁の復原と導入時期の特定」『歴史と民俗』23、平凡社、2007年2月
- 10 「万石通しの発明と伝播（二）—江戸での発明、大坂への伝播の詳細—」『民具マンスリー』39巻8号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年11月
- 11 「万石通しの発明と伝播（一）—近世農書・明治農具絵図から見た万石通し—」『民具マンスリー』39巻6号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月
- 12 「周防地方の民具から見た犁耕伝来の2つの波」『商経論叢』42巻2号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月
- 13 「千石通しの発明と伝播（二）」『民具マンスリー』38巻8号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年11月
- 14 「千石通しの成立と伝播（一）」『民具マンスリー』38巻7号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年10月
- 15 「滋賀県中畑遺跡出土平安時代犁の検討」『商経論叢』第40巻4号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 16 「在来農具の分布から見た東北地方」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

- 17 「民具の犁から四国の古代を復原する」『民具集積』10号、四国民具研究会、2004年12月
- 18 「7世紀出土—木犁へら長床犁についての総合的考察」『商経論叢』40巻2号、神奈川大学経済学会、2004年12月
- 19 「東北地方の引手なし馬鋤」『民具マンスリー』37巻1号、神奈川大学日本常民文化研究所、2004年4月
- 20 「滋賀県川田川原田遺跡出土犁の伝来事情とその後」『商経論叢』39巻4号、神奈川大学経済学会、2004年3月
- 21 「東北地方の木摺臼の全域調査—身体技法から日本列島の民族的多様性を検出する試み—」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 22 「長谷川雪旦筆『四季耕作図屏風』の基礎的検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』117集、国立歴史民俗博物館、2004年2月
- 23 「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」『ヒストリア』188号、大阪歴史学会、2004年1月
- 24 「絵引きはつくれぬものか—歴史への視点—」『民具研究』128号、日本民具学会、2003年9月
- 【その他】
- 1 「完形品だった千石通し登呂B」『民具マンスリー』39巻1号、神奈川大学日本常民文化研究所、2006年4月
- 2 「なぜ『道具』ではなく『民具』なのか」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「菅江真澄の挿絵に粉本があった？」『民具マンスリー』38巻10号、神奈川大学日本常民文化研究所、2006年1月
- 4 「民具が語る列島の歴史」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 5 「民具という非文字資料から日本列島の古代多民族社会を復原する試み」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進

議、2003年12月

小馬 徹 KOMMA Toru

事業推進担当者（2003年度～2006年度）

1班、6班

【著書】

- 1 『『渋江公昭家文書目録（二）』共著、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2007年3月
- 2 『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』共著「グローバル化の中のシェン語」「ケニア多言語状況の報告」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2005年5月
- 3 『渋江公昭家文書目録（一）』共編著、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2005年3月
- 4 『日向—光みちるく—toの生活誌』（日向市史民俗編）共編著、「光満つ夢のまにまに」、日向市史編さん委員会、2005年3月
- 5 『新しい文化のかたち』共著、「日本文化の『斜め嫌い』再考」小馬徹ほか執筆、お茶の水書房、2005年1月
- 6 『文化人類学文献事典』共著、弘文堂、2004年11月
- 7 『東アフリカにおけるグローバル化過程と国民形成に関する地域民族史的研究』共著、「小さな田舎町という場から見た民族と国家」国立民族学博物館、2004年6月
- 8 『新版文化人類学—文化的実践知の探究（放送大学教材）』共著、「第3章 人生儀礼の文化人類学—人間の一生と文化」「第7章 国家と民族—多文化の中の自他意識」放送大学教育振興会、2004年3月

【論文】

- 1 「『血液型信仰』批判再考—『人間』と『科学』の接続をめぐる試論」『人文研究』第160号、神奈川大学人文学会、2007年3月
- 2 「渋江家（菊地市）文書と柳田国男問—河童研究類例のない資料と“ニアミス”」『熊本日日新聞（2月17日）』、2007年2月
- 3 「『カネと人間』で扱いきれなかった諸側面」『資源人類学』第9号、東京外国語大学アジア・ア

- リカ言語文化研究所、2007年2月
- 4 「河童の異名、香亦坊・カワトンボをめぐる断章」『歴史と民俗』23、平凡社、2007年2月
 - 5 「鷹場な河童と謹厳なハイエナー超越的な時間とそれに抗する時間の物語、そのエージェントたち」『人文研究』第159号、神奈川大学人文学会、2006年9月
 - 6 「魔術を魔術と呼ぶ魔術と、鏡ならざる国の文化の技術」『神奈川大学評論』第54号、神奈川大学広報委員会、2006年7月
 - 7 「『河童信仰の歴史研究』序説—『氏は菅原』呪歌とヒョウスベ再考」『歴史民俗資料学研究』第11号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006年3月
 - 8 「渋江家文書に見る河童信仰」『河童伝承と水神』菊池市文化講演会・第18回熊本地名シンポジウム実行委員会、2005年10月
 - 9 「E-P後ブローデル—歴史人としての人類学とアフリカ」『神奈川大学評論』第51号、神奈川大学広報委員会、2005年8月
 - 10 「河童信仰広げた肥後渋江家」『熊本日々新聞（平成17年5月7日）』、2005年8月
 - 11 「大学という無駄を考える」『モナド』第27号、神奈川大学外国語学部基本科目部会、2005年3月
 - 12 「ケニアの勃興する都市混合言語、シェン語—仲間言葉から国民アイデンティティ・マーカヘー」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
 - 13 「川田順造『アフリカの声—〈歴史〉への問い直し』」『神奈川大学評論』第49号、神奈川大学広報委員会、2004年12月
 - 14 「ゆかしく年を重ねる雅のままに」『人文研究』第153巻、神奈川大学人文学会、2004年9月
 - 15 「maが差した話—スワヒリ語のレッスン」『月間言語』第33回第8号、大修館書店、2004年8月
 - 16 「川田順造『コトバ・言葉・ことば—文字と日本語を考える』」『神奈川大学評論』第48号、神奈川大学広報委員会、2004年7月
 - 17 「カネと人間の人類学のために」『月間みんぱく』

- 第28巻第6号、国立民族学博物館、2004年6月
- 18 「野村雅一著『しぐさの人間学』」『月間言語』第33巻第5号、大修館書店、2004年5月
 - 19 「『さかい』の論理と『あいだ』の論理—言語の人類学的側面」『歴史と民俗』20、平凡社、2004年3月
 - 20 「ケニヤッタの椅子—そして法科大学院」『神奈川大学評論』、第44号、神奈川大学広報委員会、2003年3月
 - 21 「フィールドワークと『私』」『モナド』第23号、神奈川大学外国語学部基本科目部会、2003年3月
 - 22 「クシャミの比較民俗学—キプシギス文化を中心に」『歴史と民俗』19、平凡社、2003年3月
 - 23 「論説 喜栄先生の遠近法」『人文研究』第148号、神奈川大学人文学会、2003年3月

【その他】

- 1 「Sex? Hapana, tume—chill—『非文字』の混合言語、シェン語のVサイン」『非文字資料研究』No. 9、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月
- 2 「2脚の椅子が跨ぐ空間と時間—ムテサー世のトーネット#14—」『非文字資料研究』No. 4 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月

中島 三千男 NAKAJIMA Michio

事業推進担当者（2003年度～2006年度）

3班 課題3

【著書】

- 1 『日中両国の視点から語る植民地期満州の宗教』共著、柏書房、「第2部／移民を追う諸宗教の満州進出—第1章／旧満州国における神社の設立について—」2007年9月
- 2 『山城国大山崎荘の総合的研究（第二次）』編著、2002年度～2004年度日本私立学校振興・共済事業団「学術研究振興資金」研究成果報告書、「まえがき」「第7章／近現代離宮八幡宮史覚書—歴代神職の事業を中心に—」、2005年3月
- 3 『歴史をよむ』共著、東京大学出版会、2004年11月

【論文】

- 1 「『海外神社』跡地に関するデータベース」構築について」津田良樹・中島三千男『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因」中島三千男、津田良樹ほか『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 3 「旧満州国の「満鉄附属地神社」跡地調査からみた神社の様相」津田良樹、中島三千男ほか「1章／満州国」「2章／満鉄附属地神社」を単独執筆『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 4 「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道、和順郡を中心に—」津田良樹、中島三千男ほか「はじめに」「1章/旧朝鮮における神社の創立について」「第2章/全羅南道及び和順郡における神社・神祠の創立について」を単独執筆『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 5 「近代の皇室儀式における英照皇太后大喪の位置と国民統合」小園優子、中島三千男『人文研究』157号、神奈川大学人文学会、2005年12月
- 6 「明治天皇の大喪と台湾一代替わり儀式と帝国の形成—」『歴史と民俗』21 神奈川大学日本常民文化研究所、2005年3月
- 7 「旧満州国における神社の設立について」『科学研究費補助金研究成果報告書／植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究』研究代表者木場明志、2005年3月
- 8 「旧南洋群島の神社跡地調査報告」富井正憲・中島三千男ほか共同執筆「はじめに」「1章委任統治領<南洋群島>」、「2章<南洋群島>における神社の創立」単独執筆『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年

12月

- 9 「海外神社跡地に見る景観の変容」『環境と景観の資料化と体系化に向けて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 10 「旧樺太（南サハリン）神社跡地調査報告」富井正憲、中島三千男ほか「図1 樺太における支庁別神社数『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「海外神社跡地データベースの構築」津田良樹、中島三千男ほか共同執筆『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「山城国大山崎荘の総合的研究」『日本歴史』693号、日本歴史学会（吉川弘文館）2006年2月
- 3 「『総合学術研究推進委員会』の発足」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月
- 4 「調査プロジェクト紹介『2003年度大山崎調査報告』」『常民研NEWS』22号、神奈川大学日本常民研究所、2003年12月

田上 繁 TAGAMI Shigeru

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

4班、5班

【著書】

- 1 『高度専門職学芸員養成—大学院における養成プログラムの提言—』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 『沼津市史 通史別編 漁村』（共著）、沼津市、2007年3月
- 3 『紀州小山家文書』日本評論社、2005年4月
- 4 『中世・近世土地所有史の再構築』（共著）、青木書店、2004年10月
- 5 『日本地域社会の歴史と民俗』（共著）、雄山閣、2003年9月

【論文等】

- 1 「『渋谷公昭家文書目録』（一）」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2007年3月

- 2 「『時国健太郎家文書目録』(二分冊の一・二分冊の二)」神奈川大学日本常民文化研究所編、2006年3月
- 3 「『疋田家文書目録』(二分冊の一・二分冊の二)」神奈川大学日本常民文化研究所編、2005年3月
- 4 「『渋谷公昭家文書目録』(一)」神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2005年3月
- 5 「大山崎離宮八幡宮領における神田管理と若衆中」2002年度～2004年度日本私立学校振興・共済事業団「学術研究振興資金」研究成果報告『山城国大山崎荘の総合的研究(第2次)』所収、2005年3月
- 6 「近世伊豆国伊東地域における山林利用について」『伊東市史研究』、2004年3月
- 7 「近世神社領の土地管理組織—大山崎離宮八幡宮領を事例として—」神奈川大学日本常民文化研究所論集『歴史と民俗』20、平凡社、2004年3月
- 8 「『石川県輪島市町野町牛尾・伏戸区有文書目録』輪島市教育委員会・神奈川大学日本常民文化研究所編、2004年3月

【その他】

- 1 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」『日本歴史』696号、38—41、2006年5月
- 2 「随想 古文書返却の旅に同行して」『神奈川大学評論』53、神奈川大学広報委員会、2006年3月
- 3 「非文字資料としての加賀藩検地絵図を読み解く」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月
- 4 「中国雲南省麗江調査記—東巴文化の今昔—東巴経典と現代に伝わる原初的な紙製法」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月
- 5 「歴史民俗資料学研究科」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

廣田 律子 HIROTA Ritsuko

事業推進担当者(2003年度～2007年度)

2班 課題1、4班

【著書】

- 1 『鬼之来路』(中文)中華書局、2005年10月

【論文】

- 1 「モーションキャプチャによる芸能の定量比較研究」廣田律子・海賀孝明・岡本浩一『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「中国湖南省のヤオ族の儀礼に見出す道教の影響—馮家実施の還家愿儀礼調査から—」『東方宗教』110号、日本道教学会、2007年11月
- 3 「研究ノート 鬼神について」『歴史と民俗』24、平凡社、2007年
- 4 「中国の祭りと仮面劇に來臨する神々の物語—將軍と神兵—」『日本人の異界観』せりか書房、2006年10月
- 5 「ヤオ族還家愿儀礼調査ノート—湖南省藍山県馮家の事例から—」『神話・象徴・文化/II』楽浪書院、2006年5月
- 6 「モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み」廣田律子・長瀬一男・海賀孝明・岡本浩一『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 7 「祭祀儀礼の中の神話」『神話・象徴・文化』楽浪書院、2005年8月
- 8 「充分利用三次元動力録像推進中国演技的比較」『中国江西国際儺文化学術研討会論文提要』中国江西国際儺文化芸術周組委員会、2005年6月
- 9 「来訪する鬼と翁」『折口信夫・釋道空—その人と学問』おうふう、2005年5月
- 10 「東のアジア来訪神」『東アジア比較文化研究』Vol.4、2005年5月
- 11 「鬼神假面的造形—從日本与中国的事例看呪眼的表現(中文)」『域外民俗学鑑要』寧夏人民出版社、2005年3月
- 12 「説唱と小説の間—鼓詞と『海遊記』—」『国際経営論集』第27号、2004年3月

【その他】

- 1 「「荒ぶる神」と日中の祭祀儀礼」『東方』322号、2007年12月
- 2 「鼓詞陳十四夫人伝描繪的地獄之行—血池地獄考

- (中文) 2007 中国靖江宝卷文化国際学術研討会、2007年8月
- 3 「日本伝統戯曲与中国民俗芸能之継承関係—与应用立体座標法解釈—」 戯曲教育回顧与展望国際学術研討会、2006年12月
- 4 「モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み」『韓・中・日無形文化遺産フォーラム』、2006年5月
- 5 「モーションキャプチャを使った日中芸能研究試論」『研究年報』第2号、お茶の水女子大学比較日本学研究センター、2006年3月
- 6 「身体表現としての芸能とその継承」『歴史と民俗』22、平凡社、2006年3月
- 7 「モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 8 《翻訳》「説唱芸能<唱南游>の語り 続編V」『麒麟』15号、神奈川大学経営学部、2006年3月
- 9 「デジタル技術による東アジア芸能比較研究試論」『18世紀東アジアの公演文化』、2006年2月
- 10 「民俗芸能のデジタル化の取り組み」『非文字資料研究』No.9、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月
- 11 「祭りに来訪する神—中国湖南省瑶族の祭りから—」『東アジア比較文化研究』4、2005年6月
- 12 《翻訳》「説唱芸能<唱南游>の語り 続編IV」『麒麟』14号、神奈川大学経営学部、2005年3月
- 13 「中国湖南省新寧県瑶族「盤王節」調査報告」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、2005年1月
- 14 「湖南省新寧県瑶族盤王節調査」湖南省新寧県、2004年10月
- 15 「翁の語りに見える中国と日本」『アジア遊学』63号、2004年5月
- 16 「仮面と民俗—中国江南の呪眼をもつ仮面から—」『よみがえる四川文明三星堆と金沙遺跡の秘宝展 図録』共同通信社、2004年5月
- 17 「三番叟と中国江南の土地神を繋ぐもの」『鼎』第7号、2004年5月
- 18 「中国石郵村の追儺行事に登場する鬼と翁の身体技法に関する調査」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 19 《翻訳》「海遊記1」『麒麟』13号、神奈川大学経営学部、2004年3月
- 20 「中国の善鬼—江南の仮面劇から—」『アジア遊学』59号、2004年1月
- 21 「鬼神の面」『非文字資料研究』No.2、2003年12月

田島 佳也 TAJIMA Yoshiya

事業推進担当者 (2003年度～2007年度)

1班 課題2、4班

【著書】

- 1 『日本近世生活絵引 北海道編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 『日本近世生活絵引 北陸編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

【論文】

- 1 「『近世生活絵引』作成に向けての試み—土屋又三郎『農業図絵』を題材にして—」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 2 『日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討』(総合地球環境学研究所)共著、2006年4月
- 3 「漁業と漁民習俗」『中国江南沿海村落民俗誌』、神奈川大学、2006年3月
- 4 「改革開放以前漁村漁業の展開過程」『中国江南沿海村落民俗誌』、2006年3月
- 5 「網野史学の「海民」論・「海村」論」『神奈川大学評論』第53号、神奈川大学広報委員会、2006年3月
- 6 「北海道における北前船主・右近家、中村家の活躍と残像など」『北前船から見た地域史像』(第6回「西回り」航路フォーラムの記録) 福井県河野

- 村、2004年12月
- 7 「蝦夷地の鯨漁業と文化財」『月刊文化財』493号、第一法規、2004年11月
- 8 「道南西海岸漁村の『場所請負制』試論—明治初期の爾志郡（乙部村・熊石村）を事例に—」『漁業経済研究』第49巻第1号、漁業経済学会、2004年6月
- 9 「漁撈研究のいま④ 近世期における蝦夷地の漁業」『Arctic Circle』第50号、2004年3月

【その他】

- 1 「日本近世生活絵引の作成をめざして—近世の北陸農村と松前地漁村の人びとの暮らしと生業—」『非文字資料研究』No.16、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月
- 2 「屏風絵を読むにあたって—『江差松山屏風』の読み取り体験から—」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「『鮭漁』図のあれこれ」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

山口 建治 YAMAGUCHI Kenji

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

2班 課題1

【論文】

- 1 「方相・傀儡・郭秃・鍾馗—『天籟』もう一つの身体技法—」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「『散楽』日本伝来についての覚え書き」『人文研究』第155集、神奈川大学人文学会、2005年3月
- 3 「『散楽』の語義の変容」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 4 「オコ（嗚呼）とサルガク（散楽）」『歴史と文学の境界』勁草書房、2003年5月

【その他】

- 1 「身体技法と祭祀芸能」『非文字資料とはなに

- か—人類文化の記憶と記録—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 2 「非文字資料としての日本語を考える—音訓、当て字、語源—」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月

孫 安石 SON An Suk

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

3班 課題3、4班

【著書】

- 1 『中国における日本租界』（共編著）御茶の水書房、2006年3月
- 2 『戦争・ラジオ・記憶』（共編著）勉誠出版社、2006年3月

【論文】

- 1 「戦前中国留学生の『実習』と『見学』について」『人文学研究所報』No.39、神奈川大学人文学研究所、2006年3月
- 2 「日中戦争時期における上海総領事館警察」御茶の水書房、2005年4月
- 3 「米国人宣教師と日中戦争、上海の敵国人集団生活所」『人文学研究所報』No.38、神奈川大学人文学研究所、2005年3月
- 4 「日中戦争時期における上海総領事館」『戦時上海』研文出版、2005年
- 5 「声音の歴史研究—日本所蔵の中国ラジオ放送関連資料について」『人文研究』No.155、神奈川大学人文学研究所、2005年
- 6 「声音の歴史研究—日本所蔵の中国ラジオ放送関連資料について」『人文研究』神奈川大学、2005年
- 7 「『明六雑誌』とその周辺」御茶の水書房、2004年3月
- 8 「1860年代の上海における日本情報」『明六雑誌とその周辺』、2004年
- 9 「米国国立公文書館（NARA）の資料調査報告」『界限』島根県立大学メディアセンター報、2003年12月
- 10 「精緻な歴史研究に会う喜び—中国人留学生と

- 五四運動』『東方』2003年12月号、2003年12月
- 11 「『ペストと近代中国—衛生の「制度化」と社会変容』」（飯島渉著、研文出版）『中国研究月報』2003年11月号、2003年11月
- 12 「上海市無線広播与日語大東広播電台」上海市档案馆編『租界里的上海』上海社会科学出版社、2003年10月
- 13 「漢口の都市発展と日本租界」『人文研究』No.149、神奈川大学人文学会、2003年
- 14 「1920年代の中国における無線電信・ラジオ講演会」『アジア遊学』第54号勉誠出版、2003年
- 【その他】
- 1 東アジア共通の歴史教科書—『自国主義』を超える一歩を期待』『京郷新聞2007年1月20日』韓国、2007年1月
- 2 「租界と居留地に刻印された人間活動の営み」『非文字資料研究』No.12、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 3 《書評》「佐藤卓己著『八月十五日の神話』—終戦記念日のメディア学（ちくま新書、2005年）」『神奈川大学評論』第54号、神奈川大学広報委員会、2006年
- 4 「漢口日本租界関係資料」『中国における日本租界』御茶の水書房、2006年3月
- 5 「防衛庁防衛研究所史料室所蔵の無線通信・ラジオ放送関連文書」『戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版社、2006年3月
- 6 「上海市档案馆 ラジオ関連資料と日中関係史」『戦争・ラジオ・記憶』勉誠出版社、2006年3月
- 7 「歴史研究と図像資料のデジタル化」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月
- 8 「上海史研究と『良友』画報について」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月

ジョン・ボチャラリ John BOCCELLARI

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

1班 課題1

【著書】

- 1 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.1, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.2, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月

【論文】

- 1 「『絵巻物による日本常民生活絵引』英訳の課題と問題点」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 《研究エッセイ》「『非文字資料』と国際交流日誌」『非文字資料研究』No.10、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年12月

北原 糸子 KITAHARA Itoko

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

3班 課題3

【著書】

- 1 『日本災害史』（編著）吉川弘文館、2006年9月
- 2 『善光寺地震に学ぶ』（編著）信濃毎日新聞社、2003年7月
- 3 『近世災害情報論』塙書房、2003年6月
- 4 『ドキュメント災害史』（編著）国立歴史民俗博物館展示図録、2003年6月

【論文】

- 1 「ティツィング『日本風俗図誌』掲載の二点の火山噴火図について」『歴史民俗資料学研究』第13号、神奈川大学、2008年3月
- 2 「災害メディアと景観変容」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』人類文化研究のための非文字資料の体系化研究成果報告書、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、

- 2007年12月
- 3 「歌川広重『名所江戸百景』と安政江戸地震」
日本地震学会広報紙『なるふる』第61号、2007年5月
 - 4 「関東大震災の行政対応策を生み出した大正6年東京湾台風」『歴史都市防災論文集』1、立命館大学、2007年
 - 5 「海外における災害研究の新しい傾向について」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
 - 6 「災害写真のデジタル化作業の憂鬱」『神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4・手段としての写真—「濫写写真」の追跡調査を中心に—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
 - 7 「関東大震災の写真（東京都慰霊堂保管）について」『歴史災害と都市—京都・東京を中心に—』立命館大学21世紀COEプログラム・神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議ジョイントワークショップ、2007年2月
 - 8 「メディアとしての災害写真—明治中期の災害を中心に」『神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウム プレシンポジウム報告1・版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
 - 9 「関東大震災のデータベースを作成」『救急医療ジャーナル』14(6)、プラネット、2006年12月
 - 10 「最近の災害史研究から—世界と日本—」『京都歴史災害研究』5、2006年
 - 11 「東京府における明治天皇聖蹟—指定と解除の歴史」『国立歴史民俗博物館研究報告』121、2005年
 - 12 「災害と写真メディア—1894年庄内地震のケーススタディー—」『環境と景観の資料化と体系化に向けて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
 - 13 「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」原信田實・北原糸子、『年報 人類文化研究のため

の非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議、2004年3月

齊藤 隆弘 SAITO Takahiro

事業推進担当者（2003年度～2007年度）

4班・6班

【論文】

- 1 “Total-variation approach and wavelet shrinkage for color-image denoising with inter-channel cross-correlations.” Proc. *The 3rd IEEE Int. Symposium on Communications, Control and Signal Processing*. (ISCCSP 2008) March 2008
(now printing)
- 2 「サンプリング定理の壁を打ち破る：一枚の画像からの超解像度オーバーサンプリング」『映像情報メディア学会誌／62(2)』、2008年2月
- 3 “High-quality image interpolation via nonlinear image decomposition.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2008) 6812, 681230:01-681230:12. January 2008
- 4 “Noise suppression approach with the BV-L1 nonlinear image decomposition.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2008) 6817, 681708:01-681706:12. January 2008
- 5 “Denoising method using the extended color total-variation regularization.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2008) 6817, 681711:01-181711:12. January 2008
- 6 「Total-Variation 正則化を用いたシャープニング—グーデモザイキング法」『映像情報メディア学会誌／61(11)』、2007年11月
- 7 “Denoising via nonlinear image decomposition for a digital color camera.” Proc. *2007 IEEE Int. Conf. on Image Processing*. (ICIP 2007) September 2007
- 8 “Interframe motion deblurring using spatio-temporal regularization.” Proc. *2007 IEEE Int. Conf. on Image Processing*. (ICIP 2007), IV-409～IV-412 September 2007
- 9 “A variational recovery method for virtual view

- synthesis.” Proc. *2007 IEEE Int. Conf. on Image Processing*. (ICIP 2007) September 2007
- 10 「実用化に向けた経年劣化シネマ映像のデジタル修復に関する検討」『画像電子学会誌』2007年7月
- 11 「乗算型骨格/テクスチャ画像分離の画像処理への応用」『電子情報通信学会論文誌』J90-D (7)、2007年7月
- 12 「TV正則化法を用いたJPEG圧縮画像の超解像デコーディング」『電子情報通信学会論文誌』J90-D (7)、2007年7月
- 13 “Nonlinear decomposition-and-denoising approach for removal of signal-dependent noise of a digital color camera.” Proc. *SPIE 4th Int. Symposium on Random Noise and Fluctuations*, 66031M-66031M:12,1. May 2007
- 14 “Suppression of time-varying motion blur caused by camera shake.” Proc. *2-nd International Workshop on Image Media Quality and Its Applications*. (IMQA2007) March 2007
- 15 “Super-resolution total-variation decoding of JPEG-compressed image data.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI2007) 6502, 650215: 1 - 650215:12 January 2007
- 16 “Removal of signal-dependent noise for a digital camera.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI2007) 6502, 650213: 1 -650213:12 January 2007
- 17 “CMOS color image sensor with silicon photodiode and overlaid organic photoconductive layer having narrow absorption band.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI2007) 6502, 65026: 1 -65026:12 January 2007
- 18 “Motion deblurring for suppression of breathing distortions caused by camera shake.” *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI2007) 6497, 649745: 1 - 649745:12 January 2007
- 19 “Color transformation and interpolation for a direct Imaging with a color filterArray.” Proc. *2006 IEEE Int. Conf. Image Process*. (ICIP 2006). October 2006
- 20 “Variational retinex algorithm with its application to a high-quality chroma Key.” Proc. *2006 IEEE Int. Conf. Image Process*. (ICIP 2006). October 2006
- 21 “Adaptable image interpolation with skeleton-texture separation.” Proc. *2006 IEEE Int. Conf. Image Process*. (ICIP2006) October 2006
- 22 “High-quality image interpolation based on multiplicative skeleton-texture Separation.” Proc. *14-th European Signal Process. Conf.* (EUSIPCO 2006), CD-ROM1568979711.pdf. September 2006
- 23 “Model-based robust variational method for motion de-blurring.” Proc. *14-th European Signal Process. Conf.* (EUSIPCO 2006), CD-ROM 1568979710.pdf. September 2006
- 24 “Image sharpening by coupled nonlinear-diffusion on the chromaticity-brightnesscolor representation.” Proc. *14-th European Signal Process. Conf.* (EUSIPCO 2006), CD-ROM1568979709.pdf. September 2006
- 25 「明滅による不快症状を防止するための映像変換手法」『電子情報通信学会論文誌』、J89-D (7)、2006年7月
- 26 「手ぶれ映像に含まれる映像酔いを引き起こしやすい振動成分の解析」『電子情報通信学会論文誌』J89-A (3)、2006年3月
- 27 「画像復元に基づいた自由視点画像の生成」『O plus E, 新技術コミュニケーションズ2006年3月号』、2006年3月
- 28 “Robust global motion estimation in video stabilization for reducing visually induced motion sickness.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2006)6077, 6077 1X:1-60771X:12. January 2006
- 29 “Spatially adaptive super-resolution sharpening-demosaicking for a single solid-state color image sensor, Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2006) 6069, 606908:1-606908:12. January 2006
- 30 “Image recovery for a direct color Imaging approach using a color filter Array.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2006) 6069, 606905:1-606905:12. January 2006

- 31 “Coupled nonlinear-diffusion color image sharpening based on the chromaticity-brightness model.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2006) 6077, 60771H:1-60771H:12. January 2006
- 32 “Separation of irradiance and reflectance from observed color images by logarithmical nonlinear diffusion process.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2006) 6805, 680511:1-680511:12. January 2006
- 33 「ぼけモデルを用いた動きぼけ補正」『映像情報メディア学会誌』vol.59 (11)、2005年11月
- 34 “Super-resolution sharpening-demosaicking with spatially adaptive total-variation Image regularization.” *Advances in Multimedia Information Processing, Lecture Notes in Computer Science*, Springer Verlag 3767, (Part I). November 2005
- 35 “An adaptive video stabilization method for reducing visually induced motion Sickness.” Proc. *2005 IEEE Int. Conf. Image Process. (ICIP 2005) I* September 2005
- 36 “Super-resolution sharpening-demosaicking method for removing image blurs caused by an optical low-pass filter.” Proc. *1-st Int. Workshop on Image Media Quality and its Applications*. September 2005
- 37 “Model-based PDE method and model-free PDE method for motion de-blurring.” Proc. *SPIE Visual Commun. & Image Processing (VCIP 2005)* 5960. July 2005
- 38 「光学的ローパスフィルタによるボケの復元機能を有するデモザイキング」『映像情報メディア学会誌／vol.59 (3)』、2005年3月
- 39 “Motion de-blurring by coupled nonlinear diffusion with discrete calculus adaptive to a motion direction.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2005) 5685. January 2005
- 40 “Sharpening-demosaicking method with a total-variation-based super-resolution Technique.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2005) 5678. January 2005
- 41 “Variational color transformation method for direct color Imaging.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2005) 5678. January 2005
- 42 「連立非線形拡散法の動きぼけ補正への拡張」『映像情報メディア学会誌』vol.58 (12)、2004年12月
- 43 “Selective image sharpening by simultaneous nonlinear-diffusion process with spatially varying parameter presetting.” *Advances in Multimedia Information Processing, Lecture Notes in Computer Science*, Speinger Verlag3332, (2). November 2004
- 44 「連立非線形拡散法によるカラー画像の選択的鮮鋭化」『映像情報メディア学会誌』vol.58、(11)、2004年11月
- 45 “Sharpening-demosaicking method for removal of image blurs caused by an optical low-pass filter.” Proc. *2004 IEEE Int. Conf. Image Process. (ICIP 2004)* October 2004
- 46 “Motion de-blurring by coupled nonlinear diffusion using an anisotropic peaking term.” Proc. *4-th IASTED Int. Conf. Visualization, Imaging, and Image Processing*. September 2004
- 47 「デジタル画像処理による古い映像フィルムの修復とデジタルフィルムアーカイブの構築」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化／第1号』、2004年3月
- 48 “Motion de-blurring based on time-evolution of simultaneous nonlinear reaction-diffusion.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2004) 5308. January 2004
- 49 “Demosaicking for a color image sensor with removal of blur due to an optical low-pass Filter.” Proc. *SPIE/IS&T Electronic Imaging* (EI 2004) 5301, 334-345. January 2004
- 【その他】
- 1 《特許出願》「画像処理装置」特願2007-166369、2007年6月
- 2 「報告書：超高品質デジタルシネマのためのヒ

- ューマンプロセッサ型撮像方式の研究」平成17年度～18年度科学研究費補助金 基盤研究 (C), 研究成果報告書、2007年6月
- 3 《特許出願》「固体撮像素子」特願2007-016453、2007年1月
- 4 《特許出願》「画像処理装置および撮像装置」特願2007-002655、2007年1月
- 5 《褒賞》「2006画像符号化シンポジウム (PCSJ2006) フロンティア賞」『TV正則化法による超解像JPEGデコーディング』、2006年11月
- 6 「特許取得：画像符号化方式」特許登録記事3772185、2006年2月
- 7 「報告書：不完全観測データからの高品質共有型リアル三次元映像空間表現の作成に関する研究」平成15年度～16年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C), 研究成果報告書、2005年3月
- 8 「報告書：デモザイキング技術を用いた高精細なマルチバンドカラー画像入力方式に関する研究」, 放送文化基金助成の援助金、2004年3月
- 9 「画像・動作情報のデジタル入力について」『非文字資料研究』No.1, 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、19、2003年10月

大里 浩秋 OSATO Hiroaki

研究遂行責任者 (2005年度～2007年度) 共同研究員 (2003年度・2004年度) 事業推進担当者 (2005年度～2007年度)

3班 課題3、4班

【著書】

- 1 『中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海』(共編著) 御茶の水書房、「杭州日本租界のたどった道」『浙江文化研究』初探「杭州日本租界関連資料」、2006年3月

【論文】

- 1 「宗方小太郎日記、明治26～29年」『人文学研究所報』No.41、神奈川大学人文学研究所、2008年3月
- 2 「在華紡の居住環境について—上海の事例」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会

議、2007年12月

- 3 「在華本邦補絵生、第一種から第三種まで」『中国研究月報』2007年9月号、社団法人中国研究所、2007年9月
- 4 「宗方小太郎日記、明治22～25年」『人文学研究所報』No.40、人文学研究所、2007年3月
- 5 「杭州日本租界のたどった道」神奈川大学人文学研究叢書22『中国における日本租界』お茶の水書房、2006年3月
- 6 「同仁会と『同仁』」『人文学研究所報』No.39、神奈川大学、人文学研究所、2006年3月
- 7 「戦前の横浜中華学校での教科書問題」『中国研究月報』2005年4月号、社団法人中国研究所、2005年4月
- 8 「漢口楽善堂の歴史 (上)」『人文研究』155号、神奈川大学人文学会、2005年3月
- 9 「上海歴史研究所所蔵宗方小太郎資料について」『人文学研究所報』No.37、神奈川大学人文学研究所、2004年3月
- 10 「歴史問題と日中関係の現在」『神奈川大学評論』46号、神奈川大学広報委員会、2003年11月
- 11 「杭州日本租界について」『人文研究』149号、神奈川大学人文学会、2003年6月
- 12 「『日華学報』目次」『人文学研究所報』No.38、神奈川大学人文学研究所、200

【その他】

- 1 「袁偉時『近代化と歴史教科書』を読む」『中国研究月報』1、2006年5月号、社団法人中国研究所、2006年5月
- 2 「杭州に関わる二つのテーマ」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月
- 3 「中国人の歴史認識」『神奈川大学評論』52号、神奈川大学広報委員会、2005年12月
- 4 《書評》「明治前期日中学術交流の研究」『日本歴史』、2004年12月
- 5 《書評》「黄土の村の性暴力—大娘たちの戦争は終わらない」『神奈川大学評論』48号、神奈川大学広報委員会、2004年7月
- 6 《書評》「反逆の獅子 浅原健三の生涯」『神奈川

大学評論』45号、神奈川大学広報委員会、2003年7月

- 7 「上海の片隅に暮らして」『中国研究月報』2003年6月号、社団法人中国研究所、2003年6月
- 8 「中日間の近代歴史を愛でる人」『上海ウォーカー』No.45、2003年3月

芦澤 玖美 ASHIZAWA Kumi

共同研究員（2003年度～2005年度）

2班

【論文】

- 1 K.Ashizawa, N.Tanamachi, S.Kato, C.Kumakura, X.Zhou, F.Jin, Y.Li and S.Lu. "Growth of height and leg length of children in Beijing and Xilinhot, China." *Anthropological Science*, 116. 2007.
- 2 N.Rahmawati, S.Budiharjo and K.Ashizawa. "Somatotypes of young male athletes and non-athlete students in Yogyakarta, Indonesia." *Anthropological Science*, 115. 2007
- 3 「CASMASを用いた日本人と中国人の骨成熟パターンの比較」松浦路子、佐藤亨至、芦澤玖美、劉琳、山本照子共著『日本成長学会雑誌』12巻2号、日本成長学会、2007年
- 4 M.A.Ali, K.Ashizawa, S.Kato, M.Kouchi, C.Koyama and H.Hoshi. "Biological variables in height growth of Japanese twins: A comparison with those of singletons." *Annals of Human Biology*, 34. 2007
- 5 「日本人高齢者の生業とソマトタイプ」芦澤玖美、加藤純代、熊倉千代子、楠本綾乃、河原雅典、川田順造、佐藤陽彦 *Anthropological Science* (和文誌号), 114, 2006年
- 6 「戦時下の東京の小学生の成長」芦澤玖美、棚町徳子、尾花美恵子『日本成長学会雑誌』12巻2号日本成長学会、2006年
- 7 「中国内蒙古の若者の身体形状の特性」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 8 K.Ashizawa, C.Kumakura, S.Kato, T.Kawabe and

R.C.Hauspie. "Adolescent height growth of girls in Tokyo." *Anthropological Science*, 113. 2005

- 9 J.A.M.S.Rahman, M.Sli, K.Ashizawa, and F. Ohtsuki. "Prediction of Adult Stature for Japanese Population: An improvement of Ali-Ohtsuki Equations." *Anthropological Science*, 112. 2005
- 10 K.Ashizawa, C.Kumajura, X.Zhou, F.Jin and J.Cao. "RUS skeletal maturity of children Beijing." *Annals of Human Biology*, 32. 2005
- 11 N.T.Rahmawati, J.Hstuti and K.Ashizawa. "Growth and somatotype of urban and rural Javanese children in Yogyakarta and Bantul, Indonesia." *Anthropological Science*, 112. 2004
- 12 「調査地の人々の生活背景」『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究 第2章』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書、2004年
- 13 「ソマトタイプと生業」『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究 第4章』大妻女子大学、2004年
- 14 「身体サイズの特性と体の柔軟性」芦澤玖美、熊倉千代子『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究 第3章』平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書、2004年

【その他】

- 1 「長くなった日本人の脚？」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月

宇佐見 義之 USAMI Yoshiyuki

共同研究員（2003年度～2005年度）

4班

【著書】

- 1 『リングと地球の間にはたらく力とは何か?』宇佐見義之ほか共著、森北出版、2005年6月
- 2 Y.Usami, K.Kamono and K.Kawamura. "How Anomalocaris Swam in the Cambrian Sea; A Theoretical Study Based on Hydrodynamics." In T.Sekimura et. al. eds., *Morphogenesis and Pattern Formation in Biological Systems*. Springer, 2003

【論文】

- 1 “Theoretical study on the body form and swimming pattern of Anomalocaris based on hydrodynamic simulation.” J.Theor.Bio.

梅野 光興 UMENO Mitsuoki

共同研究員（2003年度）

2班

【著書】

- 1 『高知県の不思議事典』共著、新人物往来社、2006年8月
2 『呪術の知とテクネー』共著、斎藤英喜編、森話社、2003年5月

【論文】

- 1 「門松小考」『高知県立歴史民俗資料館紀要』第15号、高知県立歴史民俗資料館、2007年3月

【その他】

- 1 「書誌紹介 大本敬久『民俗の知恵 愛媛八幡浜民俗誌』〈愛媛民俗叢書①〉」『日本民俗学』249号、日本民俗学会、2007年2月
2 『鬼—展示解説資料集—』「鬼あらわる」「神楽の鬼」梅野光興、池田光穂共同執筆、「神楽探訪」「鬼神問答資料集」高知県立歴史資料館、2005年12月
3 『鬼図鑑 in 土佐—企画展「鬼」より—7回』高知新聞、2005年9月
4 「資料見聞 安居神楽の山主と神戸市近江寺の鬼面」「土佐の鬼の東と西」『岡豊風日』第54号、高知県立歴史民俗資料館、2005年7月
5 「四国妖怪談義」『四国民俗』36号・37号合併号、四国民俗学会、2004年7月
6 「紙の造形—いざなぎ流の御幣—」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
7 「お化けポスト便から—妖怪・幽霊アンケート資料集—」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第13号、高知県立歴史民俗資料館、2004年3月
8 「高知県の神楽における鬼と翁の身体技法の調査」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラ

ム研究推進会議、2004年3月

- 9 「仮面—神と人をつなぐもの—」『ライト&ライフ』No.517、四国電力株式会社、2004年1月
10 『あの世・妖怪・陰陽師〈異界万華鏡・高知編〉—展示開設資料集—』高知県立歴史資料館、2003年7月

落合 一泰 OCHIAI Kazuyasu

共同研究員（2003年度～2005年度）

2班

【著書】

- 1 『性的支配と歴史—植民地主義から民族浄化まで』落合一泰ほか共著、大月書店、「被征服男性の〈受忍〉—現代メキシコのカレンダーアートに見る性的支配の表象」2008年2月
2 『観光文化学』落合一泰ほか共著、新曜社、「情報資本主義と近代観光—『アラウンド・ザ・ワールド』から『エキゾチック・ジャパン』へ」2007年12月
3 De la Mano de lo Sacro:Santos y Demonios en el Mundo Maya, 共著、Universidad Nacional Autónoma de México (México, D.F.)、 “Visitas de santos den San Andrés Larráinzar”, 2006年12月
4 El Mundo Maya:Miradas Japonesa, 共編著、Universidad Nacional Autónoma de México (Mérida)、序章 “Introducción”、第10章 “El ser y el tiempo entre los mayas: ‘Un trompo no se cae mientras siga girando’ ” を執筆、2006年8月
5 Conflict and Settlement in Europe, Susumu Yamauchi, Ryo Oshiba & Kazuyasu Ochiai, Centre for New European Studies, Hitotsubashi University、2006年3月
6 『講座世界の先住民族 フェースト・ピープルズの現在08中米・カリブ海、南米』共著、「ツォツィルー『やわらかな文化』の継承と更新」、明石書店、2006年1月
7 Kóten: Lecturas cruzadas Japón-América Latina, 共著、Editorial Pontificia Universidad Javeriana (Bogotá)、第12章 “Livin’ la vida glocal: Los japoneses y el mundo occidentalizado” 2005年12

月

8 Il Sacro e il paesaggio nell' America indigena, 共著、CLUEB (Bologna)、第8章“Los maya spaisajistas: Transmisión de 'la cultura de lo perecedero' a través de los siglos”、2003年10月

【論文】

- 1 “'Non ho nulla di speciali da dire' La violenza invisibile del cogitas ergo es neldialogo interculturale.”, Quaderni Asiatici 79号、2007年9月
- 2 “'I have Nothing Special to Say': On invisible violence of cogitas ergo es in intercultural dialogue.”, Social Identities 12巻1号、2006年1月
- 3 “When the Saints Go Marching in the Chiapas Highlands.”, Voices of Mexico 73号、2005年8月
- 4 “La forma de la historia profunda: una revisión de algunos estudios etnohistóricos en Mesoamérica.”, Cuicuilco 9巻26号、2003年8月

【その他】

- 1 “Imágenes de la nación a través de los álbumes fotográficos a comienzos del siglo XX.” Taller *Imágenes, educación y nación: un diálogo japonés-mexicano en torno al día de la independencia mexicana*, El Colegio de México, 2007.11.
- 2 「不屈と孤独—人類学者ゼリア・ナトルのトランス・アトランティック物語」『Aguila y Sol』21号、2007年1月
- 3 「不屈と孤独—人類学者ゼリア・ナトルのトランス・アトランティック物語」日墨交流会第12回メキシコセミナー、2006年11月
- 4 「マヤ人と酌み交わす—現代インディオ社会の酒文化」たばこと塩の博物館新大陸講座第54回、2006年11月
- 5 《エッセイ》「柔らかい生命へのオマージュ—弧をなす三詩人の対話から」『現代詩手帖特集版ル・クレジオ地球上の夢』、2006年10月
- 6 「近代メキシコの先住民主義をめぐって—もうひとつの “The only good Indian is a dead Indian”」国立民族学博物館共同研究会「『先住民』とはだ

れか?」、2006年7月

- 7 “Similitudes y diferencias entre México y Japón: Sobre la política cultural de dos países occidentalizados fuera de Occidente.” Segunda Cumbre Cultural Japón-México, Nakamura Museum, Kanazawa, 2006.7.
- 8 《資料紹介》「著者自身による新刊紹介 EL mundo maya: miradas japonesas」『ラテンアメリカ・カリブ研究』14号、2007年6月
- 9 「マヤ文化の翻訳—「硬い文化」と「軟らかい文化」のあいだで」『えるふ』13号、2006年1月
- 10 「トランス・アトランティック物語—ヨーロッパ・コレクションのなかの古代メキシコ工芸」『非文字資料研究』No.6、2004年12月

金子 隆一 KANEKO Ryuichi

共同研究員 (2003年度～2007年度)

3班 課題3、4班

【論文】

- 1 「西洋人写真家の眼差しがもたらしたもの—セバスチャン・ドブソン氏の報告をめぐって—」『非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 2 「内田九一の『西国・九州巡幸写真』の位置」『版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

【その他】

- 1 《研究エッセイ》「『横浜写真』の位置」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

菊池 勇夫 KIKUCHI Isao

共同研究員 (2003年度～2007年度)

1班 課題2

【著書】

- 1 『日本近世生活絵引 北海道編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月

- 2 『菅江真澄』（人物業書）吉川弘文館、2007年
 3 『蝦夷島と北方世界』（日本の時代史19）編著、
 吉川弘文館、2003年12月
 4 『飢餓から読む近世社会』校倉書房、2003年10
 月

【論文】

- 1 「丸小屋と移動する人々」『非文字資料から人類
 文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世
 紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
 2 「松前 近蝦夷地の社会相—央斉『模地数理』か
 ら—」『日本近世生活絵引 北海道編』神奈川大学
 21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3
 月
 3 「『絵引』をする菅江真澄」『年報 人類文化研究
 のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川
 大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
 2007年3月
 4 「『模地数里』に描かれた松前—長春丸・女商
 人・馬—」『年報 人類文化研究のための非文字
 資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀CO
 Eプログラム研究推進会議、2006年3月
 5 「鷹の獲得技術について—江戸時代の北日本を中
 心に—」『年報 人類文化研究のための非文字資
 料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COE
 プログラム研究推進会議、2004年12月
 6 「蝦夷『迺布利』の成立年をめぐって」『真澄学』
 2、東北芸術工科大学東北文化研究センター、
 2005年11月
 7 「荷を負うアイヌの姿—菅江真澄の絵から—」
 『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系
 化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラ
 ム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「生活絵引と菅江真澄」『非文字資料研究』No.16、
 神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会
 議、2007年6月
 2 「カモカモ（鴨々）について—コトからモノへの
 関心—」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21
 世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月

木下 宏揚 KINOSHITA Hirotsugu

共同研究員（2003年度～2007年度）

4班

【論文】

- 1 「民俗学研究のための情報発信」『地域情報学の
 構築—新しい知のイノベーションへの道』木下宏
 揚、能登正人、神奈川大学21世紀COEプログ
 ラム研究推進会議、2008年3月
 2 「オントロジー理論に基づく非文字資料のデー
 タ化可能性の検討」木下宏揚、能登正人『非文字資
 料とはなにか—人類文化の記憶と記録—』神奈川
 大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
 2006年6月
 3 「民俗学研究のための情報発信」『年報 人類文化
 研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈
 川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
 2006年3月
 4 「電子図書館と情報セキュリティ」『年報 人類文
 化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神
 奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
 2004年3月

【その他】

- 1 《研究エッセイ》「WWWのセキュリティ」『非
 文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COE
 プログラム研究推進会議、2003年12月

君 康道 KIMI Yasumichi

共同研究員（2003年度～2007年度）

1班 課題1

【著書】

- 1 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life
 in Medieval Japan compiled from picture scrolls,*
 vol.1, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活
 絵引』第1巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈
 川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
 2008年3月
 2 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life
 in Medieval Japan compiled from picture scrolls,*
 vol.2, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活
 絵引』第2巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈

川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、
2007年6月

【その他】

- 1 「『絵巻物による日本常民生活絵引』 マルチ言語版編纂における問題」『非文字資料研究』No.15、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 2 「『絵巻物による日本常民生活絵引』がこだわるもの—あるいはマルチ言語版が伝えていかなければならないもの—」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月

金 貞我 KIM Jeong Ah

共同研究員（2003年度～2005年度）COE教員
（非常勤講師）（2006年度・2007年度）

1班 課題1・課題3

【著書】

- 1 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.1, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 『東アジア生活絵引 中国江南編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 3 『東アジア生活絵引 朝鮮風俗画編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 4 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.2, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月

【論文】

- 1 「韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料—『平壤監司饗宴図』を例にして—」『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

- 2 「都市図における風俗表現の機能（概要）」『図像から読み解く東アジアの生活文化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 3 「風俗表現における図様の伝統と創造—東アジア風俗画資料の作例から—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 4 「申潤福筆『蕙園傳神帖』について—朝鮮時代の風俗画にみる女性像—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

【その他】

- 1 《対談》「第2回国際シンポジウムにむけて—図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」『非文字資料研究』No.13、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月
- 2 「第1班公開研究会『図像から読み解く東アジアの生活文化』—都市図における風俗表現の機能」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「都市における風俗表現の機能」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 4 「ソウル世界博物館大会の参加報告」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 5 「朝鮮時代の図像資料と風俗画—女性をめぐる眼差し—」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月

佐々木 睦 SASAKI Makoto

共同研究員（2003年度～2007年度）

1班 課題3

【著書】

- 1 『東アジア生活絵引 中国江南編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、

2008年2月

【論文】

- 1 「潮州開元寺大雄宝殿石欄浮彫初探—初期西遊記物語関連図像を中心に—」『人文学報』363、東京都立大学人文学部、2005年3月
- 2 「火龍太子考」『饗饗』12、中国人文学会、2004年9月

【その他】

- 1 「楊貴妃になりたかった男たち—『点石齋画報』に見る〈女装くん〉」『非文字資料研究』No.13、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月
- 2 「『姑蘇繁華図』をめぐる旅—研究会開催にいたる経緯—」『図像から読み解く東アジアの生活文化』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 3 「中国図像学という迷宮」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月

須山 聡 SUYAMA Satoshi

共同研究員（2003年度・2005年度）

3班

【論文】

- 1 「韓国におけるコロニアルタウンの景観—同化と異化、保存・利用・破壊—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 2 「渋沢フィルムの現地比定—奄美大島を事例として—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「風景印にみる地域の提示」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

富井 正憲 TOMII Masanori

共同研究員（2003年度～2007年度）

3班 課題1・課題3

【論文】

- 1 「在華紡の居住環境について—上海の事例—」大里浩秋、富井正憲『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因」中島三千男、津田良樹、富井正憲『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 3 「漢口日本租界の都市空間史」神奈川大学人文学研究叢書22『中国における日本租界』御茶の水書房、2006年3月
- 4 「旧南洋郡島の神社跡地調査報告」富井正憲・中島三千男・大坪潤子・サイモン ジョン『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 5 「旧樺太（南サハリン）神社跡地調査報告」藤田庄一、中島三千男、富井正憲『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 6 「アジアの住空間～韓国の空間構成について」日本建築学会空間小委員会、2003年12月
- 7 『新住宅I』市ヶ谷出版、2003年10月

【その他】

- 1 「都市景観『いにしえのソウル』の復元」『非文字資料研究』No.17、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年9月
- 2 「サハリン調査ノート」『非文字資料研究』No.1、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年10月

長瀬 一男 NAGASE Kazuo

共同研究員（2003年度、2005年度～2007年度）調査研究協力者（2004年度）

4班

【論文】

- 1 「モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み」 廣田律子・長瀬一男・海賀孝明・岡本浩一『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

【その他】

- 1 「伝統芸能とデジタル技術の出会い」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

八久保 厚志 HACHIKUBO Koshi

共同研究員（2003年度～2007年度）

3班 課題1・課題2、4班

【著書】

- 1 Joint authorship, Chapter 9 “Transformation of an Industry Stimulated by Local Economic Growth Policy: The Case of the SHOCHU Industry in Japan.” In Peter W.Daniels & James W. Harrington, eds., *Services and Economic Development in the Asia-Pacific*. UK: Ashgate Publishing Limited. March 2007
- 2 『地域の構造・地域の計画』ミネルバ書房、2006年4月
- 3 『経済のグローバル化と産業地域』原書房、2005年4月
- 4 『日本経済地理読本』第7版、2004年4月
- 5 『環境変化と工業地域』原書房、2004年3月

【論文】

- 1 「近代地主酒造業の形成と展開—本格焼酎地域からの視点（1）—」『人文研究』162号、神奈川大学人文学会、2007年9月
- 2 「景観地理学の一断面—産業景観から読みとれること—」『人間科学研究年報』No.1、神奈川大学人間科学部、2007年3月
- 3 「酒造業における経営近代化の嚆矢とその帰結—会津若松産地における会津酒造株式会社の事例—」『人文学研究所報』No.40、神奈川大学人文学研究所、2007年3月
- 4 「『澁澤写真』の類型化について—景観写真の体系化と空間編成—」『年報 人類文化研究のための

- 非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 5 「『澁澤写真』撮影地再訪に関する覚え書き」『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—」神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 6 「『澁澤写真』の類型化について—景観写真の体系化と空間編成—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 7 「酒造業における経営近代化の嚆矢とその帰結—会津若松産地における会津酒造株式会社の事例—」『人文学研究所報』No.40、神奈川大学人文学研究所、2007年3月
- 8 「景観地理学の一断面—産業景観から読みとれること—」『人間科学研究年報』第1巻、神奈川大学人間科学部、2007年3月
- 9 「澁澤写真の体系的な研究と課題—地理学的視座からの経験—」八久保厚志・平井誠・鄭美愛・藤永豪『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 10 「景観分析のための郵便資料とその可能性—日本・韓国における非文字資料としての景観切手を中心に—」『人文研究』No.159、神奈川大学人文学会、2006年9月
- 11 「台湾における専売酒造業の成立と展開」『酒文化』第15巻第8号、酒文化研究所、2005年9月
- 12 「写真資料と景観変容—澁澤フィルムの分析にむけて—」『環境と景観の資料化と体系化にむけて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 13 「わが国における伝統的酒造業の革新と持続的成長」『人文学研究所報』No.37、神奈川大学人文学研究所、2004年4月
- 14 「渋沢コレクションの図像解析とその応用案」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 15 「戦前期朝鮮半島における邦人酒造業の地域的展

開と特質』『「酒文化」2日号 2004 酒文化研究所』、2004年2月

- 16 “Transformation of an Industry Stimulated by Local Economic Growth Policy: a case of the shochu (liquor) industry in Kyushu, Japan.”
Report of Researches Nippon Institute of Technology.
2004

【その他】

- 1 「『濫澤写真』撮影地再訪に関する覚え書き」『手段としての写真—「濫澤写真」の追跡調査を中心に—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 2 「非文字資料としての景観」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月
- 3 「景色（景観）が変わるといふこと」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

原信田 實 HARASHIDA Minoru

共同研究員（2003年度）調査研究協力者（2005年度）
3班

【著書】

- 1 『謎解き広重「江戸百」』集英社新書、集英社、2007年4月

【論文】

- 1 「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」原信田實・北原糸子、『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議、2004年

的場 昭弘 MATOBA Akihiro

共同研究員（2003年度～2005年度）事業推進担当者（2006年度・2007年度）

4班、6班

【著書】

- 1 『哲学の歴史—マルクス、ニーチェ、フロイト』共著、中央公論新社、2007年8月
- 2 『マルクスからみたロシア、ロシアから見たマルクス』編著、五月書房、2007年4月

3 『ネオ共産主義論』光文社新書、2006年2月

4 『マルクスに誘われて』垂紀書房、2006年2月

5 『〈近代〉と〈反近代〉の相剋—社会思想史入門』御茶の水書房、2006年1月

6 『戦後六〇年を問い直す』共著、岩波書店、2005年12月

7 *Marx for the 21st Century*、共著、Routledge、2005年10月

8 『マルクスだったらこう考える』光文社、2004年12月

9 《監訳》『メーサロシュ「社会主義か野蛮か」』こぶし書房、177、2004年7月

10 『マルクスを再読する』五月書房、2004年6月

11 『〈帝国〉を考える』編著、双風舎、2004年6月

12 『メガ帝国主義の出現とイスラム・グローバル現象』共著、世界書院、2004年5月

13 『山之内靖対談集「再魔術化する世界」』共著、御茶の水書房、2004年3月

【論文】

1 『非文字研究の理論的諸問題』共著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 第2回COE国際シンポジウム報告書『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

3 第1回COE国際シンポジウム報告書『非文字資料とは何か』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月

【報告】

1 「プロジェクトの総括に向けて」『非文字資料研究』No.17、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年9月

2 「第二回国際シンポジウム 座談会」『非文字資料研究』No.13、2006年7月

3 「中国雲南省麗江調査記—東巴文化の今昔—麗江と大理の狭間で考えたこと」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月

4 「随筆『非文字資料』と歴史学」『非文字資料研

究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム
研究推進会議、2004年3月

丸山 宏 MARUYAMA Hiroshi

共同研究員（2003年度～2005年度）

4班

【論文】

- 1 「台南道教の符篆について—放赦科儀の九龍符命とその歴史を中心に—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 2 「納西東巴古籍訳注全集の資料的価値について」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

【その他】

- 1 「道教の符呪—道教儀礼史における非文字資料研究の可能性をめぐって—」『非文字資料研究』No.8、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月

楠本 彩乃 KUSUMOTO Ayano

共同研究員（2004年度）

2班

【著書】

- 1 『シューフィッター・パッチャー（上級）コース養成講座テキスト』足と靴と健康協議会、「第3章／フットプリント」2006年3月

【論文】

- 1 Ayano Kusumoto, Takao Suzuki, Hideyo Yoshida and Jinhee Kwon. "Intervention Study to Improve Quality of Life and Health Problems of Community-Living Elderly Women in Japan by Shoe Fitting and Custom-Made Insoles." *Gerontology*. Tokyo, Japan: Research Team for Promoting Independence of the Elderly, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology, March 2007
- 2 「第5章／足の形状特性」楠本彩乃ほか共同執筆『平成12年度～15年度科学研究費補助金（基盤研究(A)(1)）研究成果報告書 生業活動に伴う身

体技法と体形の関連性に関する研究(12304051)』、
2007年3月

- 3 「日本人高齢者の生業とソマトタイプ」共同執筆『Anthropological Sciences』2006年3月
- 4 「高齢女性の下肢痛や歩行不安の改善に向けた無作為割付け比較介入研究—シューフィッティング指導と足底挿板の効果—」『靴の医学』20、日本靴医学会、2006年3月
- 5 足の形状特性「生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究」第5章(p63-p70)、2004年4月
- 6 「高齢期における足と歩行トラブルに対する介入プログラムの作成—特にインソール調節による対応について—」共同執筆、『厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「寝たきり予防を目的とした老年症候群発生予防の検診（お達者検診）の実施と評価に関する研究」平成15年度 総括研究報告書』、2004年3月

【その他】

《メディア/雑誌》

- 1 「中高年の靴選び」、『明日の友』婦人之友社、2007年8-9月号
- 《メディア/TV》
- 1 NHK総合テレビ、「靴の中敷に新機能」、おはよう日本、まちかど情報局2004.2.26
- 2 USEN インターネットTV=Gyao、ビューティー&ヘルス・チャンネル「美人主義#21美脚」、2006年2月

田口 洋美 TAGUCHI Hiromi

共同研究員（2004年度）調査研究協力者（2007年度）

【論文】

- 1 「持続的な狩猟システムの構築に向けて」『狩猟文化シンポジウム報告書：今後の野生動物保護管理のあり方について』、富山県自然保護課、2008年6月
- 2 「『食べて保全』生物多様性の時代を生きる」『季刊東北学』vol.13、東北芸術工科大学東北文化環境センター、2007年11月
- 3 シンポジウム抄録「なぜクマは里に下りるか—

- マタギの本音ー」第18回『ブナ林と狩人の会：マタギサミット』三浦慎吾・佐藤宏之・田口洋美・神崎伸夫ほか『東北文化友の会会報 まんだら』33号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2007年11月
- 4 「撤退のシナリオ」『東北文化友の会会報 まんだら』33号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2007年11月
- 5 研究発表要旨「絵はがき・古写真・ビジュアル資料の映像民俗学的利用と展開：東北芸術工科大学東北文化研究センターの試み」『第22回北方民族文化シンポジウム（国際シンポジウム）北太平洋の文化：北方地方の博物館と民族文化Ⅱ 発表要旨集』北方民族博物館、2007年11月
- 6 「列島の崩れゆくバランスと撤退のシナリオ」『農林経済』時事通信社、2007年11月
- 7 研究発表要旨「春グマ猟の意義と可能性」『第14回日本ツキノワグマ集会 クマを語る集いin山形要旨集』第14回クマを語る集いin山形実行委員会、2007年10月
- 8 「書評『5万キロの壮大な旅の舞台裏』」『山形新聞（朝刊）』山形新聞社、2007年9月
- 9 研究発表要旨「列島開拓と狩猟のあゆみ」『第13回日本野生動物医学会大会プログラム・講演要旨集』日本野生動物医学会、2007年9月
- 10 研究発表要旨「罾の民族誌：東アジアの事例から」『日本民具学会第32回大会研究発表要旨集』日本民具学会第32回大会実行委員会、福島県立博物館、2007年9月
- 11 「『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』の目的と到達点」『東北文化友の会会報 まんだら』32号、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2007年8月
- 12 「ウサギのいる風景」『月間みんぱく』5、国立民族学博物館、2007年5月
- 13 「マタギ文化を援用した保全型狩猟の可能性」『野生動物との共生に関する研究会報告書：県北地方における野生動物による被害の軽減を目指して』野生動物との共生に関する研究会（福島県県北地方振興局地域連携室）、2007年3月
- 14 「書評『民俗学は元気ですか』」『季刊東北学』vol.10、東北芸術工科大学東北文化センター、2007年2月
- 15 「近代における野生動物資源の開発とそのインパクトー東北日本におけるマタギ集落の事例を中心にー」『国立民族学博物館報告：国際シンポジウム「北東アジアにおける森林 資源の商業的利用と先住民族」報告書』佐々木史郎（編）国立民族学博物館、2006年12月
- 16 「狩人の訓」『岳人』11月（713）号、東京新聞出版局、2006年11月
- 17 Public Event:1. “History of Relationships between Human and Bears in Japan.” 1) The History Traditional Hunting and Expansion of Agricultural Land-Use on The Japanese Archipelago. “17th International Association for bear Research and Management.” Program, Abstracts and Information., Regime in Japan. “17th International Association for bear Research and Management.” Nagano Japan. 2006年10月
- 18 Public Event:1. “History of Relationships between Human and Bears in Japan.” 2) Transformation of the Military Fur Procurement and Traditional Hunting under The Imperial Military. “17th International Association for bear Research and Management.” Program, Abstracts and Information., Regime in Japan. “17th International Association for bear Research and Management.” Nagano Japan. 2006年10月
- 19 Public Event:2. “Japanese Traditional Hunting in Documentary Film.” Traditional Bears Hunting in Akiyamago. “17th International Association for bear Research and Management..” Program, Abstracts and Information.,Regime in Japan. “17th International Association for bear Research and Management.” Nagano Japan. 2006年10月
- 20 Public Event:3. “Bears and Hunting in Japanese Lifestyle.” [Interview: Questions and Answers.] “17th International Association for bear Research and Management.” Program, Abstracts and

- Information., Regime in Japan. “17th International Association for bear Research and Management.” Nagano Japan. 2006年10月
- 21 The people worship bears, and then hunt bears. “Understanding Asian Bears to Secure Their Future: Compiled by Japan Bear Network.” Japan Bear Network. 2006年10月
- 22 「狩猟活動の民族誌：重力式罾の復元を通して」『(日本旧石器学会第4回講演・研究発表シンポジウム予稿集) 旧石器時代の狩猟を考える』日本旧石器学会、2006年6月
- 23 「山の絆」『大法輪』5月号、大法輪閣、2006年5月
- 24 「クマを崇め、クマを狩る者」『ビオストーリー』5、生き物文化誌学会、2006年5月
- 25 「変わりつづける日常の風景とところ」『ライブラリー通信』17、東北芸術工科大学図書館、2006年4月
- 26 「映像民俗学の可能性と課題」『東北文化研究センター研究紀要』5、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2006年3月
- 27 「宮本常一の膨大な仕事の再評価」『季刊東北学』vol. 6、東北芸術工科大学東北文化センター、2006年2月
- 28 「近代における市場経済化と生業の変化—信濃秋山郷に見られる人為的圧力の後退を中心に—」『季刊東北学』vol. 5、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年11月
- 29 書評：「世界史的視野から見た見本の『発見』者たち」ヘルベルト・ブルジョウ著『徳川啓蒙期』の博物学者たち『季刊東北学』vol. 5、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年11月
- 30 「映像民俗学の可能性」『季刊東北学』vol.4、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年8月
- 31 「自然と人間、その関係の変移」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 32 『シンポジウム報告書：ツキノワグマとの共存を考える』（共著）長野県松本地方事務所・長野県北安曇地方事務所・中部山岳流域林業活性化センター・長野県林政協議会中部山岳部会、2005年3月
- 33 「アムール川流域少数民族の狩猟漁撈活動」大貫静夫・佐藤宏之（編）『温帯森林狩猟漁民の居住と生業—ロシア極東の民族考古学—』六一書房、2005年2月
- 34 「ウデへ民族の狩猟活動と季節的変移」大貫静夫・佐藤宏之（編）『温帯森林狩猟漁民の居住と生業—ロシア極東の民族考古学—』六一書房、2005年2月
- 35 「極東アジアにおける狩猟文化の構造と適応」東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻社会文化環境コース学位請求論文、2004年12月
- 36 「ロシア極東少数民族と東北日本のマタギに見られる狩猟の手続き」『動物と儀礼—東アジアの中の日本—國學院大學21世紀COEプログラム国際シンポジウム予稿集』國學院大學21世紀COEプログラム考古学国際シンポジウム実行委員会（編）、2004年11月
- 37 「マタギの現在、そして明日」『Out Rider』vol. 8、学習研究社、2004年10月
- 38 『現代民俗誌の地平 2 権力』赤坂憲雄（編）朝倉書店、2004年7月
- 39 「山の民のまなざし—マタギに学ぶもの—」国際山岳年日本委員会（編）『我ら皆、山の民—国際山岳年から「YAMA NET JAPAN」へ—』国際山岳年日本委員会、2004年4月
- 40 「マタギの信仰と狩猟習俗」『東北学（京都造形芸術大学通信教育部テキスト）』京都造形芸術大学、2004年4月
- 41 「マタギ：日本列島における農業の拡大と狩猟の歩み」『地学雑誌／113-(2)（特集号「山岳環境の現状と課題」）』東京地学協会、2004年4月
- 42 「マタギの信仰と狩猟習俗」『東北学への招待』東京造詣芸術大学（編）、角川書店、2004年4月
- 43 「第4章 伝統的クマ猟は持続的に継続することが可能か—山形県小国町の春季マタギ猟の場合—」花井正光・田口洋美・栗城幸介（共著）、

佐藤宏之（編）『小国マタギ 共生の民俗知』農山漁村文化協会、2004年3月

44 「第5章 小国マタギの過去と現在」佐藤宏之編『小国マタギ 共生の民俗知』農山漁村文化協会、2004年3月

45 「日本列島における狩猟の歴史的展開と技術適応」佐藤宏之（編）『シカ・イノシシ資源の持続的利用に関する歴史動態論的研究報告書』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書、東京大学大学院人文社会系研究科、2004年3月

46 「少数民族ウデへにおける狩猟活動の季節的変移—沿海地方クラスヌィ・ヤール村ハバゴの事例を中心に—」大貫静夫（編）『ロシア極東少数民族の伝統的生業と居住形態に関する民族考古学的研究報告書』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書、東京大学大学院人文社会系研究科、2004年3月

47 「付編 アムール川中下流域の狩猟漁撈用具」大貫静夫（編）『ロシア極東少数民族の伝統的生業と居住形態に関する民族考古学的研究報告書』平成13年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書、東京大学大学院人文社会系研究科、2004年3月

夏宇継 XIA Yuji

共同研究員（2004年度～2007年度）

2班 課題1

【著書】

1 《翻訳》『“鬼”之来路—中国的仮面與祭儀』廣田律子著、中華書局、2005年10月

2 『大学生の中国語—基礎からステップアップ』共著、金星堂、2005年10月

3 『日中辞典』共著、講談社、2004年3月

【論文】

1 「東巴教『求寿』儀式に見る東巴經典および東巴舞編」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 「恢復納西族東巴教求寿儀式的調査」『民間文化

論壇／2006年／第2期／総第148期』中国文学芸術界联合会、2006年4月

3 「蘇った納西族東巴教『求寿』儀式」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

4 《翻訳》「鬼神仮面的造型—從日本與中国的事例看咒眼的表現」廣田律子著『域外民俗学鑑要』寧夏人民出版社、2005年3月

【その他】

1 「納西族東巴教『求寿』儀式調査」『非文字資料研究』No.8、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年6月

能登 正人 NOTO Masato

共同研究員（2004年度～2007年度）

4班, 6班

【論文】

1 「民俗学研究のための情報発信」『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道』能登正人、木下宏揚、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 Joint authorship (M.Noto, D.Hashimoto, etc.). “A Search Method for Reducing Local Cost in Distributed Constraint Optimization Problem.” Proc. of *The Third IASTED International Conference on Advances in Computer Science and Technology* (ACST2007). April 2007

3 「DSRのキャッシュ機能を活かした省電力フラッシング手法」有川隼、能登正人、電子情報通信学会技術研究報告、2007年3月

4 「周波数割り当て問題における制約違反の分散を考慮した非同期分散最適化アルゴリズム」橋本大樹、能登正人、電子情報通信学会技術研究報告、2007年3月

5 Joint authorship (M.Noto, D.Hashimoto, etc). “Asynchronous Search Algorithm Considering Local Load in Distributed Constraint Optimization Problem.” Proc. of *The 2006 International Technical Conference on Circuits/Systems*,

- Computers and Communications*. July 2006
- 6 J.Arikawa and M.Noto. "Optimization Method for Low-power Flooding of Route Request in Ad-hoc Networks." Proc. of *The 2006 International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications*, 3. July 2006
- 7 「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」能登正人、木下宏揚『非文字資料とはなにかー人類文化の記憶と記録』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月
- 8 「マルチホップ無線ネットワークにおける階層化通信モデルの構築」永松大和、能登正人、電子情報通信学会技術研究報告、2006年3月
- 9 M.Noto and M.Kurihara. "Experimental Study of Hybrid-Type Distributed Maximal Constraint Satisfaction Algorithm." Proc. of *The Second IASTED International Conference on Advances in Computer Science and Technology* (ACST2006). January 2006
- 10 Y.Nagamatsu and M.Noto. "Performance Evaluations for Clustered Wireless Ad-Hoc Networks." Proc. of *The 2005 International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications* (ITC-CSCC2005). July 2005
- 11 J.Arikawa and M.Noto. "Communicability Experiments for Different Node Densities in Mobile Ad-Hoc Networks." Proc. of *The 2005 International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications* (ITC-CSCC2005). July 2005
- 12 H.Endo and M.Noto. "Quantitative Evaluation of Communication Traffic of Mobile Agents in Distributed Constraint Satisfaction Model" CD-ROM. Proc. of *2004 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics* (SMC2004). October 2004
- 13 「エージェントの移動性を考慮したエージェント間通信のトラフィック量に関する実験と評価」能登正人、沼澤政信『電気学会論文誌C』124、(3)、2004年3月
- 14 Joint authorship (M.Ando, M.Noto, etc.). "Empirical Evaluation of Distributed Maximal Constraint Satisfaction Method" CD-ROM. Proc. of *2003 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics* (SMC2003). October 2003
- 15 H.Endo and M.Noto. "A Word-of-Mouth Information Recommender System Considering Information Reliability and User Preferences" CD-ROM. Proc. of *2003 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics* (SMC2003). October 2003
- 【その他】
- 1 「モバイルエージェント間通信のトラフィック」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月

彭 国躍 PENG Guoyue

共同研究員 (2004年度)

2 班

【論文】

- 1 「中国語の謝罪発話行為のコンテキスト制約—大学生の言語意識調査に基づいて」『中国語学研究・開篇』vol.24、好文出版、2005年6月
- 2 「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」『日本語学』4月号、明治書院、2005年4月
- 3 「中国の言語政策とイデオロギー—文字革命の発生と挫折」『月間言語』2005年3月号、大修館書店、2005年3月
- 4 「中国語の謝罪発話行為の研究—『道歉』のプロトタイプ」『語用論研究』第5号、日本語用論学会、2003年12月

【その他】

- 1 「色彩意味論研究の社会言語学的アプローチ」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月

増野 恵子 MASHINO keiko

共同研究員 (2004年度) 調査研究協力者 (2005年度)

3班

【論文】

- 1 「志賀重昂『日本風景論』挿図に関する報告」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「見える民族・見えない民族—『輿地誌略』の世界観」『版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「Eruption of Bandai-san—図版に関するノート」『1888磐梯山噴火報告書』中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会、2005年3月
- 4 「明治中期の災害画像を考える—メディア史の視点から—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

【その他】

- 1 《研究発表要約》「『輿地誌略』のイメージ・ソースについて」『近代画説』16号、明治美術学会、2007年12月
- 2 《項目解説》「学校絵葉書」「博覧会絵葉書」「百貨店絵葉書」ほか『彷彿月刊／2007年6月号「特集：絵葉書国人物誌[大正・昭和初期編]」』彷彿舎、2007年5月
- 3 「メディアイベントと絵はがき」『京都精華大学情報館特別展示企画「掌の上の芸術～明治・大正の絵葉書世界」展パンフレット』、2006年11月
- 4 《項目解説》「梨本宮伊都子」「浅井忠」「藤島武二」「宮武外骨と滑稽新聞社『絵葉書世界』」ほか『彷彿月刊／2006年6月号「特集：絵葉書国人物誌[明治編]」』彷彿舎、2006年5月
- 5 「近代天皇のイメージ形成—視覚情報分析の可能性について—」『非文字資料研究』No.5、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年9月

鈴木 廣之 SUZUKI Hiroyuki

共同研究員（2005年度）

3班

【著書】

- 1 『名所風俗画』491、至文堂（『日本の美術』491冊）、2007年4月
- 2 『好古家たちの19世紀—幕末明治における《物》のアルケオロジー』吉川弘文館、2003年10月

【論文】

- 1 「変貌する明治の図録」『版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—』神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 2 「明治期における物の価値と蝮川式胤」『明治聖徳記念学会紀要』41号、明治聖徳記念学会、2005年6月
- 3 「文化財保護と博物館」『美術フォーラム21』11号、醍醐書房、2005年2月
- 4 「1879年のW・アンダーソン『日本美術の歴史』」『美術研究』383号、東京文化財研究所、2004年8月

前田 禎彦 MAEDA Yoshihiko

共同研究員（2005年度）事業推進担当者（2006年度・2007年度）

1班 課題1

【著書】

- 1 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.1, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活 絵引』第1巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls*, vol.2, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活 絵引』第2巻（本文編）（語彙編）共編著、神奈川県21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月

【論文】

- 1 「看督長小考—撰関期の官司と社会集団—」『国史学』第191号、国史学会、2007年3月
- 2 「平安時代の社会と氷見」『氷見市史』1 通史

編 古代・中世・近世 第四章第一節、氷見市史
編さん委員会、2006年3月

- 3 『『看督長見不注進状』(九条家本『延喜式』紙背文書)に関する基礎的検討』『人文研究』157号、
神奈川大学人文学会、2005年12月

【その他】

- 1 《対談》「第3回国際シンポジウムにむけて一場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新天地」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 《書評》「長谷山彰著『日本古代の法と裁判』」『法制史研究』55、法制史学会、2006年3月
- 3 「古代地域史研究と出土史料—『加賀郡勝示札』の史料的性格—」『非文字資料研究』No.9、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月
- 4 「2004年度日本史研究会大会報告批判 古代支部会吉川聡報告に関する覚書」『日本史研究』512号、日本史研究会、2005年4月
- 5 《書評》「佐藤全敏著『東大寺別当の成立』」『法制史研究』54、法制史学会、2005年3月

刈田 均 KARITA Hitoshi

共同研究員 (2006年度・2007年度)

5班

【その他】

- 1 《コラム》「私の試みた、つたない『実験』」『非文字資料研究』No.12、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月

河野 眞知郎 KAWANO Shinjiro

調査研究協力者 (2005年度) 共同研究員 (2006年度)

3班 課題2

【著書】

- 1 『暮らしの考古学シリーズ②食べ物の考古学』共著、学生社、2007年10月

【論文】

- 1 「中世都市鎌倉の環境—地形改変と都市化を考える—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプロ

グラム研究推進会議、2007年3月

【その他】

- 1 「都市鎌倉・道沿いの町屋跡荒井猫田遺跡と比較」『中世の宿と町』高志書院、2007年7月
- 2 「元八幡と鎌倉の浜辺」『源氏・武門の覇者 (別冊歴史読本)』新人物往来社、2007年7月
- 3 「鎌倉武士の鎌倉ぐらし」『三浦一族研究』第11号、三浦一族研究会、2007年3月
- 4 「政権都市『鎌倉』—考古学的研究この十年—」『政権都市／中世都市研究』9、新人物往来社、2004年9月
- 5 「鎌倉における武士の生活」『鎌倉幕府と葛西氏』名著出版、2004年5月

佐々木 長生 SASAKI Takeo

共同研究員 (2006年度・2007年度)

4班

【論文】

- 1 「非文字資料としての農書・風俗帳—『会津農書』を中心に—」『地域情報学の構築—新しい知のインベションへの道』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「『会津農書』にみる焼畑と火耕」『季刊東北学』東北芸術工科大学東北文化研究センター、2007年4月
- 3 「菅江真澄と民具学—東北地方の民具研究の一方—」『真澄学』2、東北芸術工科大学東北文化研究センター、2005年11月
- 4 「満州開元寺大雄宝殿石欄浮彫初探」『人文学報』363、東京都立大学人文学部、2005年3月

【その他】

- 1 「只見町の生業と民具—雪・山・川をつくる世界—」『非文字資料研究』No.14、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年12月
- 2 「博物館と体験学習」『非文字資料研究』No.14、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年12月

榎 美香 ENOKI Mika

共同研究員 (2006年度・2007年度)

5 班

【著書】

- 『民俗文化財—保護行政の現場から—』、鹿谷勲・長谷川嘉和・樋口昭編（共著）、岩田書院、2007年10月

【論文】

- 「屋敷内に納める絵馬～房総東部の小絵馬習俗（1）」『民具マンスリー』39巻5号、神奈川大学日本常民研究所、2006年8月
- 「安房地方の郷土芸能」『千葉県立安房博物館企画展図録「安房の郷土芸能」』千葉県立安房博物館、2006年7月
- 「我孫子市中峠の『四季耕作図』について」『千葉県立関宿城博物館研究報告』8、千葉県立関宿城博物館、2004年3月
- 「民俗学を重視している博物館④『千葉県立房総のむら』」『講座 日本の民俗学11 民俗学案内』雄山閣、2004年3月
- 「将門伝説の系譜～くり返す集約と流布～」『千葉県立大利根博物館・千葉県立関宿城博物館共同企画展図録「英雄・怨霊 平将門」』千葉県立関宿城博物館、2003年5月

【その他】

- 《書評》「天野正子・桜井厚著『モノと女』の戦後史」『民具研究』128号、日本民具学会、2003年9月

津田 良樹 TSUDA Yoshiki

調査研究協力者（2005年度）共同研究員（2006年度・2007年度）

3 班 課題 3

【著書】

- 『建築のすべてがわかる本』（共著）成美堂、2007年1月
- 『空間デザイン事典』（分担執筆）、日本建築学会編、井上書院、2006年7月
- 『写真でみる民家大事典』（分担執筆）、日本民俗建築学会編、柏書房、2005年4月

【論文】

- 「中国江南沿海村落の民家について—浙江省寧波

象山県東門島の民家を中心に」『日本建築学会計画系論文集』第625号、2008年3月

- 「『満洲国』建国忠霊廟と建国神廟の建築について—両廟の造営決定から竣工にいたる経過とその様相—」『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 「仏導寺所蔵『木造徳川家康座像』を安置する厨子について」『大和市研究』33、大和市役所、2008年1月
- 「『海外神社』跡地に関するデータベース」構築について」津田良樹、中島三千男ほか、『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 「『海外神社』跡地に見る景観の変容とその要因」中島三千男、津田良樹ほか『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 「明治34-35年の神奈川県下の農村における住環境と家財道具—神奈川県農会による村是調査を中心に—」『日本建築学会計画系論文集』第621号、2007年11月
- 「幻の『満洲国』建国神廟を復原する」『非文字資料研究』No.16、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月
- 《調査報告》「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」津田良樹、中島三千男ほか『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 「二神島に現存する民家と文献資料とを総合すれば」『海の民 ふたがみ』（9）、二神系譜研究会、2006年11月
- 《調査報告》「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討—全羅南道、和順郡を中心に—」津田良樹、中島三千男ほか『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 「漁村集落の民家と大工道具」『中国江南沿海村

落民俗誌』Ⅰ、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006年3月

12 「漁村集落の民家」『中国江南沿海村落民俗誌』Ⅱ、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006年3月

13 「明治八年の『家券下図簿』からみた西国街道大山崎の民家と町並みについて」『生活文化史』48号、日本生活文化史学会、2005年9月

14 「家作—幕末の文書にみる家作の—様相—」『近世鳩山図誌』、鳩山町、2005年3月

【その他】

1 『大本山総持寺祖院建物調査報告書』大本山総持寺祖院、2007年3月

2 「漁村集落の民家（若山民俗誌）」『中国江南沿海村落の民俗誌的研究』、平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書（研究代表者：福田アジオ）、2006年3月

3 「漁村集落の民家と大工道具（東門島民俗誌）」『中国江南沿海村落の民俗誌的研究』、平成14年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究(A)）研究成果報告書、2006年3月

4 「鳩山の民家」『近世鳩山図誌』を執筆、鳩山町、2005年3月

5 旧小倉家住宅復原整備工事の監修、大和市、2004年4月

6 旧小倉家住宅復原整備工事実施設計の監修、大和市、2003年4月～2004年3月

平井 誠 HIRAI Makoto

共同研究員（2006年度・2007年度）

4班

【著書】

1 『人口減少と地域—地理学的アプローチ』石川義孝編、「高齢者による都道府県間移動の地域性」京都大学学術出版会、2007年9月

2 『地域の構造と地域の計画』宮川泰夫、山下潤編著、「人口からみた日本の地域構造」ミネルヴァ書房、2006年4月

【論文】

1 「澁澤写真の体系的な研究と課題—地理学的視座から

の経験—」八久保厚志・平井誠・鄭美愛・藤永豪共著『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 「1990年代後半における高齢者の都道府県間移動の特性」『人間科学研究年報』神奈川大学人間科学部、2007年3月

3 「American Fact Finderを用いた統計データの利用」『統計』第57巻第2号、日本統計協会、2006年8月

【その他】

1 「写真から人口現象を読み解く」『非文字資料研究』No.15、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

鄭 美愛 JUNG Mee Ae

共同研究員（2007年度）

3班 課題1

【論文】

1 「澁澤写真の体系的な研究と課題—地理学的視座からの経験—」八久保厚志、平井誠、鄭美愛、藤永豪『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

青木 俊也 AOKI Toshiya

COE教員（非常勤講師）（2004年度～2007年度）

4班、5班

【著書】

1 『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

【論文】

1 「生活再現展示の思考」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

2 「現代・生活を展示する—団地2DK生活再現展示のその後」国立歴史民俗博物館編『歴史展示とは何か』アム・プロモーション、2003年11月

- 3 「生活再現展示をつくる思考—展示利用者調査の試行—」『松戸市立博物館紀要』第10号、松戸市立博物館、2003年9月

【その他】

- 1 「戦後松戸の生活革新」『全国地域博物館図録総覧』地方史研究協議会編、2007年10月
- 2 「戦後生活再現展示の思考」『武蔵大学人文学会雑誌』第39巻第1号、2007年7月
- 3 「『昔の暮らし』の展示すること」『非文字資料研究』No.14、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年12月
- 4 「家族生活と住まい」『民俗学講義—生活文化へのアプローチ』谷口頁・松崎憲三編著、八千代出版、2006年10月
- 5 「戦後生活におけるテレビの記憶と記録」、『季刊道具学』12号「特集 みる道具」、道具学会、2005年11月
- 6 「松戸市立博物館における2DK生活再現展示」、『住宅』「特集 住まいの記憶と継承」、日本住宅協会、2005年5月
- 7 「展示における昔を考える」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

中村 ひろ子 NAKAMURA Hiroko

COE教員（特任教授）（2004年度～2007年度）

1班 課題2、5班

【著書】

- 1 『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 『日本近世生活絵引 東海道編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月

【論文】

- 1 「博物館資料の現在」『歴史民俗資料学研究』第10号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2005年3月
- 2 「喪服の近代—死にかかわる衣服をめぐって」『衣と風俗の100年』ドメス出版、2003年10月

【その他】

- 1 《対談》「第3回国際シンポジウムにむけて—場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平—」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「実験展示班の企て『あるく—身体の記憶—』について」『非文字資料研究』No.17、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年9月
- 3 「博物館資料は誰のもの」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

浜田 弘明 HAMADA Hiroaki

COE教員（非常勤講師）（2004年度～2007年度）

3班 課題1、5班

【著書】

- 1 『相模原市史現代資料編』（共著）「第三章・第五章・第六章」執筆、相模原市、2008年3月
- 2 『高度専門職学芸員養成—大学院における養成プログラムの提言—』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月
- 3 『郷土史大辞典』項目分担執筆、朝倉書店、2005年6月
- 4 『大和市の地名』（共著）、大和市教育委員会、2005年3月
- 5 『相模原市史現代図録編』（共著）、相模原市総務部総務課市史編さん室、2004年11月

【論文】

- 1 「学校博物館の現状と今後の可能性～学芸教諭の誕生に向けて～」鷹野光明・青木豊・浜田弘明『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第10号、全国大学博物館学講座、2008年3月
- 2 「相模の道と石仏～石仏で地名を確かめる～」『藤沢地名の会会報』第65号、藤沢地名の会、2007年9月
- 3 「博物館学芸員課程における実践的教育と今後の展望」『Obirin Today』7号、桜美林大学教育センター群、2007年3月
- 4 「学生と手がけた記念展～博物館実習『みんなでつくる60周年記念展』～」『博物館学芸員課程年

- 報』第8号、桜美林大学、2007年3月
- 5 「指定管理者制度導入に伴う学芸活動の諸問題」『地方史研究』56巻3号、地方史研究協議会、2006年12月
- 6 「少人数教育による桜美林方式の博物館学芸員養成」『Obirin Today』7号、桜美林大学教育センター群、2006年12月
- 7 「景観研究資料としての「渋沢フィルム」の今日的意義—韓国南部を例に—『図像・民具・景観非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 8 「『渋沢フィルム』撮影地の景観変貌—韓国・蔚山を事例として—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 9 「市史としての図録～相模原市史『現代図録編』の編さんから～」『相模原市史ノート』第2号、相模原市、2005年3月
- 10 「相模・南多摩の撚糸水車～半原撚糸を中心に～」『多摩のあゆみ』第115号、たましん地域文化財団、2004年12月
- 11 「『渋沢フィルム』の景観分析とその課題—朝鮮半島多島海を事例として—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 12 「写真資料と景観変容—澁澤フィルムの分析にむけて—」浜田弘明・八久保厚志『環境と景観の資料化と体系化に向けて』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 13 「桜美林大学における博物館学芸員課程の現在」『博物館学芸員課程年報』第5号、桜美林大学、2004年3月

【その他】

- 1 「観覧料という心的バリア」『非文字資料研究』No.13、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月
- 2 《ニュース》「桜美林大学所蔵『鶴田文庫』について」『学会ニュース』80号、全日本博物館学会、

2006年9月

- 3 「鶴田博物館学の文献コレクション」『Museum Management Today』8、内田洋行知的生産性技術研究所、2006年2月
- 4 「博物館空間に広がる景観的世界」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

網野 暁 AMINO Satoru

COE研究員（PD）（2003年度・2004年度）

【論文】

- 1 「非文字の資料と資料化」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 2 「非文字資料研究についての一考察」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「韓国ソウルをたずねて…」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2003年12月

富澤 達三 TOMIZAWA Tatsuzo

COE研究員（PD）（2003年度・2004年度）調査研究協力者（2005年度～2007年度）

【著書】

- 1 『文明開化の錦絵新聞—東京日々新聞・郵便報知新聞全作品—』国書刊行会、2008年1月
- 2 『日本近世生活絵引 東海道編』共編著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 3 『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』文生書院、2004年2月
- 4 『NHK学園通信講座・はじめての古文書 サブテキスト「古文書の世界」』共著「第2章 都市・流通の文書」三省堂、2003年8月

【論文】

- 1 「非文字資料のデジタル化と歴史研究 近世画像

資料を例として」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

- 2 「黒船かわら版とそれ以前」『東京大学アメリカ太平洋研究』vol.5、東京大学大学院総合文化研究所附属アメリカ太平洋地域研究センター、2005年3月
- 3 「『黒船かわら版』の情報」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 4 「歴史資料のデジタル化 画像資料を例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集、2004年3月

【その他】

- 1 「文久2年の『はしか絵』」『非文字資料研究』No.17、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年9月
- 2 《新刊紹介》『絵で見る歴史シリーズ・明治ものはじまり事典』『絵で見る歴史シリーズ・明治ものの流行事典』『地方史研究』323号、2006年10月
- 3 「米国博物館事情 美術館・大学図書館・暴力のあと」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 4 「自著をかたる『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』」『非文字資料研究』No.5、神奈川大学21世紀プログラム研究推進会議、2004年9月
- 5 「東京都写真美術館を訪れて…」『非文字資料研究』No.2、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2003年12月

藤永 豪 FUJINAGA Go

COE研究員（PD）（2003年度～2005年度）調査研究協力者（2006年度）

【論文】

- 1 「高等学校地歴科地理分野における自然地理領域の学習内容について」『佐賀大学教育実践研究』No.23、2007年3月
- 2 「濫澤写真の体系的な研究と課題—地理学的視座か

らの経験—」八久保厚志・平井誠・鄭美愛・藤永豪『非文字資料から人類文化へ—研究参画者論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

- 3 「北京市都心部および郊外農山村の景観変容」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 4 「変貌する北京の農山村」『地理』9月号通巻602号、古今書院、2005年9月
- 5 「中山間地域における住民の環境利用と生活空間の変化—写真にみる景観の変遷をとおして—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 6 「写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論—佐賀平野における村落景観を事例に—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

【その他】

- 1 「景観資料としての写真をめぐって」『「景観」と「環境」についての覚書』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 2 「大学生の環境認識—自然地理学の講義現場から—」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月
- 3 「『濫澤写真』の現場を歩いて」『手段としての写真—「濫澤写真」の追跡調査を中心に—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 4 「景観分析における資料としての写真の可能性」『神奈川大学21世紀COEプログラムシンポジウム報告4 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 5 「むらの風景が語るもの—世界遺産白川郷を訪ねて—」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

- 6 「変貌する北京の農山村」『地理』vol.50 No.9、古今書院、2005年9月
- 7 『図像文献書誌情報目録』共編、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 8 「北京—改革開放が生み出す景観—」『非文字資料研究』No.7、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年3月
- 9 「佐賀平野の干拓集落の景観を観察して」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

大西 万知子 ONISHI Machiko

COE研究員（RA）（2003年度・2004年度）

【論文】

- 1 「視覚に障害を持つ人に配慮された触れる展示のための展示解説の可能性」『人文科学／第10巻2号』千葉県立中央博物館、2008年3月
- 2 「人類の記憶、ヒロシマ」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 3 「広島における記憶と身体のかかわりについての—考察—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 4 「博物館におけるモノとヒトのかかわりについての—考察—広島平和記念資料館の事例から—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議2004年3月

【その他】

- 1 「国際シンポジウム参加報告・国際シンポジウムを終えて」『非文字資料研究』No.14、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年11月
- 2 「アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信（展示）の発達比較—日本から一番遠い国、ブラジルでは—」『非文字資料研究』No.13、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年9月

- 3 「海外博物館事情・威厳と挑戦—大英博物館の非文字資料から広がる風景—」『非文字資料研究』No.4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年6月

中町 泰子 NAKAMACHI Yasuko

COE研究員（RA）（2003年度・2004年度）調査研究協力者（2005年度）

【論文】

- 1 「菓子製法書『意地喜多那誌』を中心とした江戸時代の菓子作り道具」『和菓子』15号、株式会社虎屋虎屋文庫、2008年3月
- 2 「諸職風俗図像と『新撰百工図』」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月
- 3 「図像から考えるモノと技術—伏見の煎餅職人の道具と技術から—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月
- 4 「辻占菓子についての—考察—運をひらく・縁をむすぶ—」『和菓子』11号、株式会社虎屋虎屋文庫、2004年3月

【その他】

- 1 《研究紹介記事》Jennifer Lee. “Solving a Riddle Wrapped in a Mystery Inside a Cookie.” *The New York Times*. January 16, 2008
- 2 「狐がくわえた辻占—移動と芸による占紙販売」『見世物』4号、見世物学会、2007年11月
- 3 《翻刻》「意地喜多那誌」『歴史民俗資料学研究』第12号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2007年3月
- 4 《研究紹介記事》Eric Prideaux. “What's really ‘Chinese’ about Fortune Cookies.” *The Japan Times*. April 16, 2006
- 5 「煎餅のつやと道具のつや」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年3月

フレデリック・ルシーニュ Frédéric LESIGNE

COE 研究員 (RA) (2003 年度・2006 年度) 調査
研究協力者 (2005 年度・2007 年度)

6 班

【論文】

- 1 「フランスにおける柳田国男の紹介と評価」『歴史民俗資料学研究』第 11 号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006 年 3 月

【その他】

- 1 「野外民族博物館リトルワールドにおける『民族』概念についての初歩的レポート」『非文字資料研究』No.15、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2007 年 3 月
- 2 《書評》「鳥越皓之著『柳田民俗学のフィロソフィー』」『比較民俗研究』20 号、筑波大学比較民俗研究、2005 年 10 月
- 3 《仏訳》“*Pardons et tromenies de Bretagne*, Sekizawa Mayumi et Shintani Takanori”『国立歴史民俗博物館研究報告』第 108 集、国立歴史民俗博物館、2005 年 7 月
- 4 《仏訳》“*Musashino et les debats autour de la recherche sur les terroirs*”、Iketani Takumi『EBISU』34 号、日仏会館、2004 年 10 月
- 5 「フランス博物館の情報戦略」『非文字資料研究』No.3、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2004 年 3 月

大坪 潤子 OTSUBO Junko

COE 研究員 (RA) (2004 年度)

【論文】

- 1 「騎馬像の居場所」『非文字資料研究の可能性—若手研究者成果論文集—』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2008 年 3 月
- 2 「高橋是清関連資料をめぐって—テーマ展『高橋是清—ダルマ宰相と港区』展示資料より」『研究紀要』8 号、港区立港郷土資料館、2005 年 3 月
- 3 「銅像の建つ場についての考察」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 2 号、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2004 年 12 月

【その他】

- 1 「港区人物誌 三 高橋是清」共編著、港区教育委員会、2007 年 3 月
- 2 《書評》「富澤達三『錦絵のちから幕末の時事的錦絵とかわら版』」『歴史民俗資料学研究』第 10 号、神奈川大学歴史民俗資料学研究科、2005 年 3 月
- 3 「南洋群島に神社をたずねて」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2004 年 12 月
- 4 《調査報告》「旧南洋群島の神社跡地調査報告」富井正憲・中島三千男・大坪潤子・サイモン ジョン『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 2 号、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2004 年 12 月
- 5 「戦前の文献にもとづく作品台帳作成と所在調査 (全国調査) 報告」共著、調査・編集を担当『屋外彫刻調査保存研究会会報』3 号、屋外彫刻調査保存研究会、2004 年 11 月

檜村 賢二 KASHIMURA Kenji

COE 研究員 (RA) (2004 年度) COE 研究員 (PD) (2005 年度・2006 年度)

3 班 課題 1

【著書】

- 1 『図像研究文献目録』共編、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2005 年 9 月

【論文】

- 1 「オートバイ宅配便 (クイックサービス) にみる韓国社会」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2008 年 3 月
- 2 「ユニバーシティ・ミュージアムと学芸員養成課程」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第 4 号、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議、2007 年 3 月
- 3 「大名佐竹氏の国替えと民俗文化の伝播—鹿島信仰と『さらら』の秋田への伝播伝承—」『茨城の民俗』44 号、茨城民俗学会、2005 年 11 月
- 4 「近津神社の『お耕廻し』に見る穀霊」『日本民

俗学』244号、日本民俗学会、2005年11月

【その他】

- 1 「鳥取県における民具調査の取組み」『民具マンスリー』40巻5号、神奈川大学日本常民文化研究所、2007年8月
- 2 「韓国を少し知るヒント—自転車とオートバイ—」『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「周期祭の背景」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

彭偉文 PENG Weiwēn

COE研究員（RA）（2004年度～2007年度）

1班 課題3

【著書】

- 1 『東アジア生活絵引 中国江南編』共著、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年2月

【論文】

- 1 「『姑蘇繁華図』における女性の世界」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「中国における獅子舞の娯楽性について—日本の獅子舞に照らして—」『季刊 東北学』第12号、2007年7月
- 3 「中国の獅子舞と日本の獅子舞の比較考察—中国における獅子舞の娯楽性を中心に—」『東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究 平成14年度～平成18年度私立大学学術研究高度化推進事業「オープンリサーチセンター整備事業」研究成果報告書』I、2007年3月
- 4 「広州における『私夥局』の源流」『比較民俗研究』21号、2007年3月
- 5 「『姑蘇繁華図』に見る清代前期の江南地域における紡織業及びその流通—地方文献に照らして—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月

- 6 「広州周辺の『遊龍深親』慣行と地域社会—狹徳村の事例を通して—」『比較民俗研究』20号、2005年10月

【その他】

- 1 《共訳》*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.1*, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻（語彙編）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 《共訳》*Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.2*, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻（語彙編）、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月
- 3 「変化しつつある文化遺産—広東醒獅の現状について—」『非文字資料研究』No.15、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 4 「獅子で付き合う、獅子で競う—広東の醒獅—」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

丸山 泰明 MARUYAMA Yasuaki

COE研究員（PD）（2005年度・2006年度）

5班

【著書】

- 1 『都市の暮らしの民俗学2—都市の光と闇』新谷尚紀・岩本通弥編 吉川弘文館、「モニュメントを眼ざしの近代—遊就館をめぐる—」、2006年11月
- 2 『戦死者のゆくえ—語りと表象から』川村邦光編著、青弓社、「八甲田山雪中行軍遭難事件と靖国神社合祀のフォークロア」、2003年11月

【論文】

- 1 「文化遺産化する『景観』—観光旅行、博覧会、博物館の19-20世紀」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「兵士の死をめぐる展示—遊就館における死者の

展示の誕生と展開」『日本学報』第26号、大阪大学文学部日本学研究室、2007年3月

- 3 「文化政策としての民俗博物館—国民国家日本の形成と『国立民俗博物館』構想」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、2006年3月
- 4 「民俗展示の史的展開—国立民俗博物館計画史における野外博物館構想の系譜」『近代日本における宗教とナショナリズム、国家をめぐる総合的研究』大阪大学、2006年3月
- 5 「モニュメントを記憶—八甲田山雪中行軍遭難事件をめぐる記憶の編成」『日本民俗学』第238号、日本民俗学会、2004年5月
- 6 「八甲田山雪中行軍遭難事件と「勇士」の表象」『日本学報』第23号、大阪大学文学部日本学研究室、2004年3月

【その他】

- 1 「デンマークの野外博物館」『非文字資料研究』No.12、2006年6月
- 2 「同時代を見る眼と博物館」『非文字資料研究』No.9、26、2005年9月

王 京 WANG Jing

C O E 研究員 (R A) (2005 年度 ・ 2006 年度) C O E 研究員 (P D) (2007 年度)

1 班 課題 3

【著書】

- 1 『1930、40年代の日本民俗学と中国』神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 『東アジア生活絵引 中国江南編』(共著)、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2008年2月
- 3 『小川島の民俗—群馬県利根郡月夜野町下津小川島』(共著)、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2004年3月

【論文】

- 1 「関東大震災と航空写真」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2007年12月

2 「『関東大震災・地図と写真のデータベース化』の作業手順」『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読』神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2007年12月

- 3 「『良友』の旅行関連記事—1920～1940年代の旅行と近代国家」『アジア遊学』第103号、勉誠出版、2007年9月
- 4 「戦時下の中国民俗研究—永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2007年3月

5 「太田陸郎とその中国研究—戦時下の民俗学者」『日本民俗学』248号、日本民俗学会、2006年11月

- 6 「教会大学と日中戦争—『北平私立輔仁大学档案』(1925-1952年)から見た戦時下の学生収容—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2006年3月

【その他】

- 1 《共訳》 *Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol.1*, 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻(語彙編)、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「第3回神奈川大学C O E 国際シンポジウムプレシンポジウム若手研究者ワークショップ『手段としての「非文字」—資料と方法のあいだ』を終えて」『非文字資料研究』No.19、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2008年3月
- 3 「日中民俗学交流のひとこま—何恩敬とThe Handbook of Folkloreの中国導入—」『非文字資料研究』No.19、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2008年3月
- 4 「『旅行雑誌 (China Traveler)』について」『非文字資料研究』No.18、神奈川大学21世紀C O E プログラム研究推進会議、2007年12月
- 5 「『良友』と戦時報道」『アジア遊学』第10号、

勉誠出版、2007年9月

- 6 《翻訳》「熊月之『日本が上海に租界をつくろうとした件の資料』」『中国における日本租界—重慶・漢口・杭州・上海』御茶の水書房、2006年4月
- 7 『『民俗学誌』(Folklore Studies) について』『非文字資料研究』No.11、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 8 《コラム》「中国・国家主導の博物館事業」『非文字資料研究』No.6、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2004年12月

小林 光一郎 KOBAYASHI Koichiro

COE研究員 (RA) (2005年度)

【論文】

- 1 「『踊り歌う猫の話』に歌が組み込まれた背景—『猫じゃ猫じゃ』の歌を事例に—」『非文字資料研究の可能性—若手研究者成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「二つの湖にまつわる土地観念—猪名湖と長湖にまつわる伝承の背景にある歴史—」『松原の民俗』神奈川大学歴史民俗資料学研究科、2006年3月
- 3 「『踊る猫の話』伝承の背景—林恵太郎家の伝承をもとに—」『小川島の民俗』神奈川大学歴史民俗資料学研究科、2004年3月

土田 拓 TSUCHIDA Taku

COE研究員 (RA) (2005年度～2007年度)

3班 課題1

【論文】

- 1 「アルバムの中の戦後開拓」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「住みつづける意志—紋別市内陸部における畜舎景観の成りたち—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年3月
- 3 「北海道非稲作地域の暮らしと民俗—紋別市内陸

部における麦の稈利用と脱穀をめぐる営み—」『北海道東北史研究』2号、北海道東北史研究会、2005年12月

- 4 「離農家を継ぐ—北海道紋別市のカヨイサクとカヨイサク地への安住」『歴史民俗資料学研究』第10号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2005年3月

【その他】

- 1 「『開拓定住』を問う場としての北海道」『非文字資料研究』No.10、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年12月
- 2 「北海道の水稲直播き—雨竜郡幌加内町のタコアシをめぐる—」『民具マンスリー』第37巻9号、神奈川大学日本常民文化研究所、2004年12月

宮本 大輔 MIYAMOTO Daisuke

COE研究員 (RA) (2005年度)

日本学術振興会特別研究員 (21COE) 2006.4.1～2008.3.31

【論文】

- 1 「北京における言語評価」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「日本人の言語評価—神奈川大学で行った予備調査に基づいて—」『言語と文化論集』14号、神奈川大学大学院外国語学研究科、2008年2月
- 3 「中国における言語評価—浙江省の大学生を例にして—」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 4 「雲南省都市部における民族語使用状況—少数民族出身大学生の予備調査に基づいて—」『言語と文化論集』12号、神奈川大学大学院外国語学研究科、2005年12月
- 5 「言語危機からみる中国の共通語政策」『人文研究』No.156、神奈川大学人文学会、2005年9月
- 6 「中国における危機言語問題—言語転用が招く言語の死」『言語と文化論集』11号、神奈川大学大学院外国語学研究科、2004年12月

【その他】

- 1 「『Ethnologue から見る言語危機の拡大』『非文字資料研究』No.9、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2005年9月

國弘 暁子 KUNIHURO Akiko

COE研究員（PD）（2006年度～2007年度）

2班 課題1

【論文】

- 1 「『異装』が意味するもの—インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に関する考察—」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「ヒジュラ：ジェンダーと宗教の境界域」『ジェンダー研究』第8号、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報、2005年3月、富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ2004年度研究助成論文、『ジェンダー研究』第8号の転載、2006年1月

【その他】

- 1 「性とジェンダーをどうとらえるか—人類文化における普遍性と特殊性の一事例研究」『非文字資料研究』No.15、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月
- 2 「インドにおけるフィールドワークの実践」『非文字資料研究』No.13、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、30、2006年9月

本田 佳奈 HONDA Kana

COE研究員（PD）（2006年度）

3班 課題1

【論文】

- 1 「西米良村の山で働く人々と狩人の記録」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

【その他】

- 1 《調査報告》「日系カナダ人の持つ地名の記憶—バンクーバーにおける初歩的調査レポート—」

『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年3月

- 2 《コラム》「手のひらが受け継ぐもの」『非文字資料研究』No.12、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年6月

劉 渴水 LIU Kebing

COE研究員（RA）（2006年度・2007年度）

3班 課題3

【論文】

- 1 「『詩経』から見た色彩語」『言語と文化論集』12号、神奈川大学大学院外国語学研究科、2005年12月
- 2 「『了』の文法的機能—対外教学におく『了』の教育法」『漢語教育研究』2004、2005年号（総第6号）、2005年11月
- 3 「中国語色彩語の象徴化」『人文研究』156号、神奈川大学人文学会、2005年9月

【その他】

- 1 「色彩認識の象徴化—京劇臉譜の表すもの」『非文字資料研究』No.14、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2006年12月

小野地 健 ONOCHI Takeru

COE研究員（PD）（2007年度）

4班

【論文】

- 1 「クシャミと人類文化—身体音からの人類文化研究の体系化のための試論—」『非文字資料研究の可能性—若手研究者研究成果論文集—』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月
- 2 「虹と市—境界と交換のシンボリズム」『人文研究』160号、神奈川大学人文学会、2007年3月
- 3 「『日招き伝承』考」『人文研究』158号、神奈川大学人文学会、2006年3月
- 4 「八百比丘尼伝承の死生観」『人文研究』155号、神奈川大学人文学会、2005年3月

【その他】

1 「『虹』と『市』」『非文字資料研究』No.16、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年6月

佐々木 弘美 SASAKI Hiromi

COE研究員（RA）（2007年度）

1班 課題2

【論文】

1 「熊野と律僧と市女笠——遍聖絵を読む——」『非文字資料研究の可能性——若手研究者研究成果論文集——』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2008年3月

2 「『朝鮮軍陣図屏風』を読み解く」『歴史民俗資料学研究』第12号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2007年3月

高野 宏康 TAKANO Hiroyasu

日本学術振興会特別研究員（21COE）（2003.10.1～2006.3.31）

【論文】

1 「雄弁家としての永井柳太郎——四つの演論の分析

を中心に——」『歴史民俗資料学研究』第13号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2008年3月

2 「演説のちから——戦前期の金沢における永井柳太郎の政治活動——」『歴史民俗資料学研究』第12号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2007年3月

3 「銭屋五兵衛をめぐる歴史叙述と歴史意識——地域の記憶と共同性についての考察——」『歴史民俗資料学研究』第11号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2006年3月

【その他】

1 《書評》「『財界人の戦争認識——村田省蔵の大東亜戦争——」（半澤健市著、歴史民俗資料学叢書2、2007年）」『歴史民俗資料学研究』第13号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2008年3月

2 《書評》「『陰陽師と貴族社会』（繁田信一著、吉川弘文館、2004年）」『歴史民俗資料学研究』第10号、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2005年3月

8 予算

I 21世紀COEプログラム補助金一覧

単位:円

年度	研究拠点形成費補助金			申請時予算
	直接経費	間接経費	合計	
15年度	61,000,000		61,000,000	93,250,000
16年度	75,000,000		75,000,000	125,110,000
17年度	95,000,000		95,000,000	157,000,000
18年度	88,940,000	8,894,000	97,834,000	162,000,000
19年度	87,000,000	8,700,000	95,700,000	89,000,000
合計	406,940,000	17,594,000	424,534,000	626,360,000

II 大学支援金一覧

単位:円

年度	大学支援額	
	予算	実績
15年度	0	0
16年度	20,000,000	15,990,576
17年度	30,000,000	21,218,615
18年度	30,000,000	19,162,785
19年度	28,000,000	26,112,195
合計	108,000,000	82,484,171

Ⅲ 各年度執行状況

2003年度

費目別収支決算表(直接経費)

経費区分	交付決算額		実支出額		備考
	金額(千円)	積算内訳	金額(千円)	積算内訳	
設備品費	17,222	カメラ複写機 (2,750千円) デジタルカメラ撮影用品一式 (3,284千円) 光学カメラ台 (144千円) デジタルビデオカメラ1台 (349千円) 参考図書・資料文献代 (10,695千円)	24,329	カメラコンピュータ機 (1,517千円) モノクロコンピュータ機 (1,226千円) デジタルハイビジョンブラスマテレビ (515千円) マルチプロシエクター (998千円) その他(50万円以下の物品) (5,721千円) 参考図書・資料文献代 (14,352千円)	・拠点形成費補助金から生じた預金利息額(平成16年2月15日まで): 61円
補助	15,911	国内旅費 (5,763千円) 外国旅費 (9,142千円) 外国人招へい等旅費 (1,006千円)	11,549	国内旅費 (4,315千円) 外国旅費 (7,234千円)	・自己負担額:0
対	15,101	RA経費 (2,340千円) PD研究員 (6,768千円) 謝金 (5,993千円)	11,682	RA経費 (1,139千円) PD研究員 (6,768千円) 謝金 (3,775千円)	・(交付決定額): 61,000,000円 +預金利息額: 61円)
象	12,766	消耗品費 (2,089千円) 複写費 (3,000千円) 印刷製本費 (3,100千円) 通信運搬費 (777千円) 雑役務費 (2,800千円) 委託費 (1,000千円)	13,390	消耗品費 (4,785千円) 借料・損料 (610千円) 印刷製本費 (4,694千円) 通信運搬費 (527千円) 光熱水料 (35千円) 雑役務費 (1,228千円) 委託費 (1,511千円)	-自己負担額: 0円) =0
経費	0		50	勤務地域内交通費 (50千円)	
その他					
合計	61,000		61,000		

費目別収支決算表(直接経費)

経費区分	交付決定額		実支出額		備考
	金額(千円)	積算内訳	金額(千円)	積算内訳	
設備品費	1,490	ノートパソコン 参考図書・資料文献代 (387千円) (1,103千円)	10,691	ノートパソコン その他の物品 参考図書・資料文献代 (321千円) (569千円) (9,801千円)	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点形成費補助金から生じた預金利息額：101円 ・自己負担額：15,990,576円 ・(交付決定額：75,000,000円+預金利息額：101円)-(美支出額：75,000,101円-自己負担額：15,990,576円)= -15,990,576円
	27,420	国内旅費 外国旅費 外国人招へい等旅費 (7,194千円) (17,549千円) (2,677千円)	19,622	国内旅費 外国旅費 外国人招へい等旅費 (5,337千円) (11,872千円) (2,413千円)	
	31,294	COE教員 RA経費 PD研究員 謝金 (5,282千円) (4,680千円) (13,536千円) (7,796千円)	28,601	COE教員 RA経費 PD研究員 謝金 (4,322千円) (3,177千円) (13,536千円) (7,566千円)	
事業推進費	14,796	消耗品費 借料・損料 複写費 印刷製本費 通信運搬費 (4,023千円) (1,795千円) (880千円) (6,213千円) (1,000千円)	16,086	消耗品費 借料・損料 印刷製本費 通信運搬費 光熱水料 雑役務費 委託費 交通費 (3,072千円) (1,236千円) (9,763千円) (750千円) (76千円) (428千円) (735千円) (26千円)	
	0		0		
合計	75,000		75,000		

2005年度

費目別収支決算表(直接経費)

経費区分	交付決定額(直接経費)		支出積算内訳		備考
	金額(千円)	積算内訳	金額(千円)	積算内訳	
設備品費	2,961	ノートパソコン (630千円) 参考図書・資料文献代 (2,231千円) その他 (100千円)	14,772	ノートパソコン(IBM T43P2688-G2J) (469千円) インクジェット製本機 (578千円) その他の物品 (2,431千円) 参考図書・資料文献代 (11,294千円)	・拠点形成費補助 金から生じた預 金利息額: 0円
旅費	26,773	国内旅費 (7,192千円) 外国旅費 (13,704千円) 外国人招へい等旅費 (5,877千円)	18,260	国内旅費 (4,463千円) 外国旅費 (8,146千円) 外国人招へい等旅費 (5,651千円)	・自己負担額: 21,218,615円
人件費	45,600	COE教員 (5,290千円) PD研究員 (18,048千円) RA経費 (4,680千円) 謝金 (17,582千円)	37,572	COE教員 (4,890千円) PD研究員 (13,536千円) RA経費 (3,005千円) IT技術者 (3,888千円) 謝金 (12,253千円)	・(交付決定額: 95,000,000円 +預金利息額: 0円) -(実支出額: 116,218,615円 -自己負担額: 21,218,615円)=0円
事業推進費	19,666	消耗品費 (2,929千円) 借料・損料 (2,278千円) 印刷製本費 (10,549千円) 通信運搬費 (2,230千円) 光熱水料 (50千円) 雑役務費 (100千円) 会議費 (480千円) 委託費 (1,050千円)	24,396	消耗品費 (4,739千円) 借料・損料 (2,230千円) 印刷製本費 (9,046千円) 通信運搬費 (1,409千円) 光熱水料 (66千円) 雑役務費 (4,538千円) 会議費 (330千円) 委託費 (1,995千円) 交通費 (43千円)	
その他	0		0		
合計	95,000		95,000		

費目別収支決算表(直接経費)

経費区分	交付決定額(直接経費)		支出額(直接経費)		備考
	金額(千円)	積算内訳	金額(千円)	積算内訳	
設備品費	1,704	参考図書・資料文献代 (1,704千円)	6,122	エプソン® リンカー(PX-9500) (516千円)	・拠点形成費補助 金から生じた預 金利息額: 0円
旅費	17,427	国内旅費 (6,416千円) 外国旅費 (6,195千円) 外国人招へい等旅費 (4,816千円)	13,955	参考図書・資料文献代 (5,606千円) 国内旅費 (3,150千円) 外国旅費 (4,977千円) 外国人招へい等旅費 (5,828千円)	・自己負担額: 19,162,785円
人件費	53,550	COE教員 (5,877千円) PD研究員 (18,048千円) RA経費 (4,680千円) IT技術者 (6,000千円) 謝金 (18,945千円)	44,917	COE教員 (5,358千円) PD研究員 (17,296千円) RA経費 (3,759千円) IT技術者 (5,742千円) 謝金 (12,762千円)	・(交付決定額): 88,940,000円 +預金利息額: 0円
事業推進費	16,259	消耗品費 (1,714千円) 借料・損料 (423千円) 印刷製本費 (11,565千円) 通信運搬費 (1,520千円) 光熱水料 (59千円) 雑役務費 (408千円) 会議費 (480千円) 交通費 (90千円)	23,946	消耗品費 (1,909千円) 借料・損料 (155千円) 印刷製本費 (14,474千円) 通信運搬費 (1,685千円) 光熱水料 (10千円) 雑役務費 (1,314千円) 会議費 (480千円) 委託費 (3,865千円) 交通費 (54千円)	・(実支出額): 108,102,785円 -自己負担額: 19,162,785円)=0円
その他	0		0		
合計	88,940		88,940		

費目別収支決算表(直接経費)

経費区分	交付決定額(直接経費)		支出額(直接経費)		備考
	金額(千円)	積算内訳	金額(円)	積算内訳	
設備品費	1,115	参考図書・資料文献代 (1,115千円)	875,861	HDD, ビデオプレーヤー (341,902円)	・拠点形成費補助 金から生じた預 金利息額: 0円
旅費	7,401	国内旅費 (1,431千円) 外国旅費 (1,660千円) 外国人招へい等旅費 (4,310千円)	6,945,766	参考図書・資料文献代 (533,959円) 国内旅費 (549,550円) 外国旅費 (1,188,380円) 外国人招へい等旅費 (5,207,836円)	・自己負担額: 26,112,195円
人件費	43,217	COE教員 (5,698千円) PD研究員 (13,536千円) RA経費 (3,744千円) IT技術者 (6,000千円) 謝金 (14,239千円)	37,124,497	COE教員 (5,340,420円) PD研究員 (13,536,000円) RA経費 (2,446,500円) IT技術者 (5,770,373円) 謝金 (10,031,204円)	・(交付決定額): 87,000,000円 +預金利息額: 0円 -(実支出額): 113,112,195円 -自己負担額: 26,112,195円)=0円
事業推進費	35,267	消耗品費 (1,175千円) 借料・損料 (92千円) 印刷製本費 (26,569千円) 通信運搬費 (5,230千円) 雑役務費 (600千円) 委託費 (1,500千円) 交通費 (101千円)	42,053,876	消耗品費 (2,558,480円) 借料・損料 (273,000円) 印刷製本費 (19,449,095円) 通信運搬費 (1,921,991円) 雑役務費 (610,825円) 委託費 (17,155,525円) 交通費 (84,960円)	
その他	0		0		
合計	87,000		87,000,000		

IV 設備・備品

年度	品名	台数	取得価格
2003年度	カラーコピー機 DCC500CPDA	1台	¥1,516,830
	マルチプロジェクター 日本アビオニクス MP-700	1台	¥997,500
	モノクロコピー機 DOCUCENTRE352MDD	2台	計¥1,226,400
	デジタルハイビジョンプラズマテレビ TH-37PX20	1台	¥514,500
	その他単価 50 万円以下の備品		
	デスクトップパソコン	5台	
	ノートパソコン	12台	
	デジタル一眼レフカメラニコン D2H	1台	
	デジタルビデオカメラ	2台	
	液晶プロジェクター	1台	
	プロジェクター(スライド用)	1台	¥5,721,483
バッテリーライト	1セット		
ビデオレコーダー	1台		
プリンタ	1台		
フロアタイプスクリーン	1台		
メモリースティック	1個		
その他			
2004年度	その他 50 万円以下の備品		
	望遠レンズ	1個	
	ノートパソコン	2台	
	マップケース	1台	¥889,540
	スライドプロジェクター	1台	
	DVDカメラ	1台	
フォトファインプレーヤー	1台		
2005年度	インターコム製本機 FASTBACK MODEL15XSJ	1台	¥577,500
	その他 50 万円以下の備品		
	A3カラーキャナー	1台	
	ハードディスク	1個	
	カメラ用フラッシュライト	1台	
	デジタルカメラ	1台	¥2,900,093
	ノートパソコン	11台	
デスクトップパソコン	2台		
ディスプレイ	1台		
2006年度	大判プリンタ EPSON PX-9500	1台	¥345,345
	その他 50 万円以下の備品 映写台	2台	¥170,100
2007年度	その他 50 万円以下の備品 ハードディスク	1台	¥151,798

V 貴重資料リスト

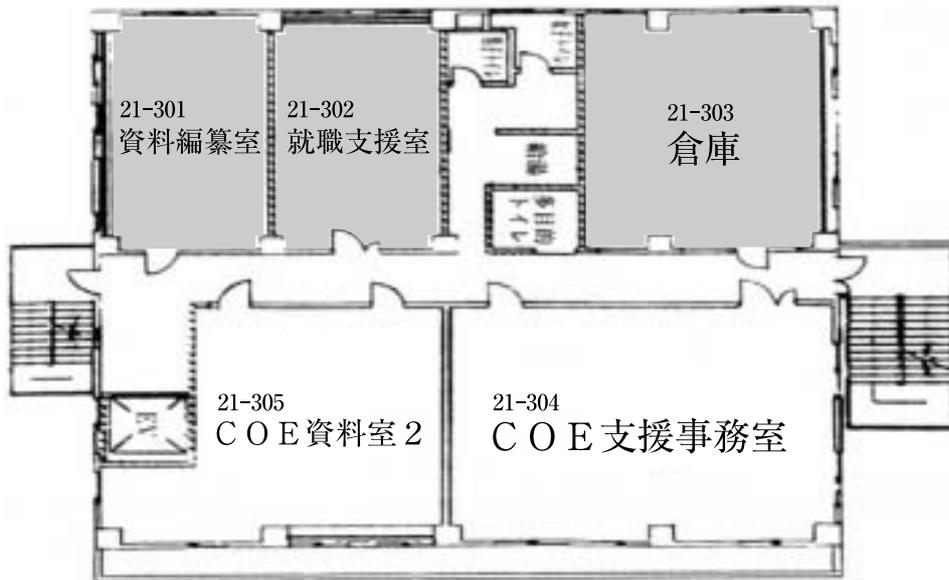
タイトル	著者	発行年・時代	出版社(者)	資料種類
東海道名所圖會(全6冊)	秋里籬鳴著	1797年の後刷り	柳原喜兵衛他	和装本
横浜と近郊の風景写真(全6点)	鈴木真一, F. ベアト他	主に明治8年頃撮影	不詳	写真
ALBUM von OST-ASIEN「極東アハム」	Fr. Wolff著	1864年	Ad. Spaarmann	絵葉書(中国・台湾、他)
中国絵葉書コレクション	不詳	昭和初期～戦中	不詳	不詳
日本縮図絵集第3版	N. McLeod著	1879年	N. McLeod	不詳
日本研究	H. G. Ponting撮影	1906年	小川一真出版社	写真集
朝鮮神宮寫真帖	朝鮮神宮社務所編	1930年	朝鮮神宮社務所	写真集
Japan. The Place the People(日本—国土と人々)	G. Waldo Broune著	1904年	Dana Estes	不詳
Mysterious Japan(不思議な日本)	Julian Street著	1921年	Doubleday, Page	不詳
Japan a record in colour(日本カラー図絵)	Mortimer Menpes著	1901年	A.&C.Black	写真集
JAPAN a Pictorial Record(日本写真帖)	Mrs. Lasenby Liberty著	1910年	Adam and Charles Black	写真集
The Soshi Bushi	Suzuki Yonejiro著	1898年	十字屋	縮細本
Japanese Exhibition Catalogue	Williams Louis著	1897年	山本富藏	縮細本
Illustrations of Japanese Life	高橋捨太	1896年	小川一真	縮細本
Japanese Customs・From Ancient till Modern, vol1	河浦謙一編集	1895年	吉沢商店	縮細本
近世・近代風俗史料貼込帖	雄松堂出版製作	2001年	雄松堂	マイワフィルム
伴大納言絵詞	秋山光和監修・藤原光長画	2003年	丸善	卷子本, 出光美術館所蔵復刻
信貴山縁起絵巻	秋山光和監修・鳥羽僧正画	2003年	丸善	卷子本, 信貴山朝護孫子寺所蔵復刻
國華	國華社編	2003年	朝日新聞社	DVD-ROM(2枚組)
Le Costume Historique 全6冊	M. A. Racinet著	1888年	Firmir-Didot	復刻木版画
歌川麿重「名所江戸百景」	奥山義人復刻監修	2005年	東京伝統木版画工芸協会	石版色摺
大海嘯極惨状之図	松谷画	明治29年7月刊	貫井吉三	石版色摺
大海嘯極惨状之図	藻齋画	明治29年7月刊	貫井吉三	石版色摺
奈良県下土津川地方変災実況之図	不詳	明治期	大阪朝日新聞社	木口木版
Japanese Homes and Their Surroundings	Edward S. Morse著	1886年	Tickenor	不詳
The Ainu and Their Folk-Lore	John. Batchelor著	1901年	Religious Tract Society	不詳
An English Girl in Japan	Ella M. Hart Benett著	1904年	Welles Gardner, Darton & Co.	不詳
長崎土産	磯野信春(文斎)著画	1847年	大和屋	和装本, 木版摺
旅行用心集	八陣蘆菴(景山)著	1810年	東都書肆	和装本, 木版摺
地震津波の奇談	不詳	江戸後期刊	不詳	和装本, 一部色彩刷絵入り
大地震津波の奇談	不詳	江戸末期刊	不詳	和装本, 一部色彩刷絵入り
北越雪譜(全7冊)	鈴木牧之著・京水百鶴画	明治期刊	江崎喜兵衛	和装本
福富翁草紙	土佐光信筆	江戸中期頃写	不詳	卷子装
大連神社創立誌 全、大連神社誌要 全	松山理三編	1920年、1917年	大連神社社務所	和綴じ本
Die Architektur der Kultbauten Japans	F. Baltzer著	1907年	Wilhelm Ernst & Shon	不詳
Scenes from open air life in Japan	W. K. Burton撮影・J. Murdoch著	1893年	不詳	不詳
絵はがき24枚セット	不詳	昭和初期	不詳	折畳式時絵ケース入り
摂津名所図会(全12冊)	秋里籬鳴著	1796年	小川太左衛門	和装本
郡名所図会(全6冊)	秋里相夕著	1780年	吉野屋爲八	和装本
日本山海名物図会(全5冊)	平瀬齋編	1797年	堀屋卯兵衛他	和装本
宮本馨太郎映像作品(全17巻)	宮本馨太郎撮影	昭和初期	マイワフィルム・コロア	ビデオテープ
日本歳時記(全7冊)	貝原益軒著	1688年	日新堂	和装本

9 支援組織

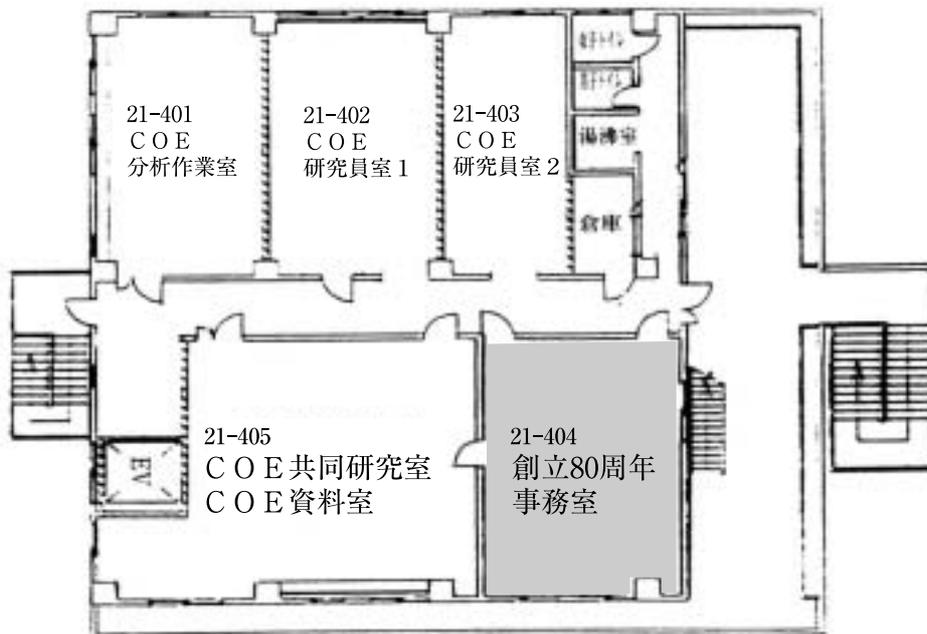
I 研究施設等

21世紀COEプログラム研究拠点（21号館）

(1) 3階平面図



(2) 4階平面図





- | | |
|--|------------|
| ① 分析作業室 (35.55 m ²) | 21号館 401号室 |
| ② COE 研究員 (PD)・共同研究員研究室 (35.55 m ²) | 21号館 402号室 |
| ③ COE 研究員 (RA) 研究室 (26.89 m ²) | 21号館 403号室 |
| ④ 共同研究室・資料室 (66.33 m ²) | 21号館 405号室 |
| ⑤ 実験展示・総合情報発信準備室 (54.43 m ²) | 21号館 305号室 |
| ⑥ 収蔵展示室 (260.89 m ²) | 3号館 106号室 |
| ⑦ COE 支援事務局 (41.87 m ²) 2005年3月31日まで | 21号館 404号室 |
| ⑧ COE 支援事務局 (78.21 m ²) 2005年4月1日から | 21号館 304号室 |



II COE支援事務業務

21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の採択に伴い、拠点形成計画を確実に実施するための支援事務組織として学長室にCOE支援事務担当が配属され、COE支援事務を担うこととなった。

その主な業務は、

- ① COE予算の管理・執行に関すること
- ② COE刊行物の編集業務に関すること
- ③ 消耗品・機器備品の調達に関すること
- ④ 国内出張・外国出張に関すること
- ⑤ 外国研究員等の招聘に関すること
- ⑥ 図書・資料の整理に関すること
- ⑦ ホームページ等広報に関すること
- ⑧ 会議・研究会に関すること
- ⑨ アルバイトの管理に関すること

等であった。

21世紀COEプログラム拠点形成費補助金との係わりでCOE支援事務が担当する業務は、経理業務、調達業務、司書業務、国際交流業務、広報業務、編集業務、図書・機器備品などの資産管理業務、庶務業務等多岐にわたった。業務の守備範囲があまりにも広いため支援事務担当者に過度の負担がかかった。

21世紀COEプログラム拠点形成費補助金は、学長の個人口座に補助金が振り込まれること、四半期毎の予算執行という、教員・事務職員とも不慣れな予算執行方式であった。

そのため、予算執行にあたって研究担当者には多少の戸惑いや不便をかけたと思料するが、「拠点形成費補助金取扱要項」に定められた様々な条件下での予算の執行に協力してもらった。

Ⅲ COE支援事務スタッフ

- ① 古閑安明（2003年7月25日～2008年3月31日）
- ② 寺島剛真（2003年10月1日～2008年3月31日）
- ③ 吉野進（2006年4月1日～2007年3月31日）
- ④ 長谷川千穂（2003年10月1日～2008年3月31日）
- ⑤ 関ひかる（2003年9月1日～2007年10月5日）
- ⑥ 千秋順子（2003年9月12日～2006年9月30日）
- ⑦ 坂野純子（2004年1月23日～2006年6月30日）
- ⑧ 神原朋之（2005年7月19日～2008年3月31日）
- ⑨ 小野桂子（2006年6月16日～2006年12月31日）
- ⑩ 小島ちえみ（2006年9月21日～2008年3月31日）
- ⑪ 須永明美（2006年12月8日～2007年12月31日）
- ⑫ 藤本真由海（2007年1月29日～2008年3月31日）
- ⑬ 関屋彩子（2007年10月1日～2008年3月31日）
- ⑭ 七澤裕美子（2007年10月10日～2008年3月31日）
- ⑮ 佐藤留実子（2007年12月13日～2008年3月31日）

以上

10 規程・規則

I 規程

2003年10月1日

21世紀COEプログラム拠点形成に係る関係規程の制定について

1. 規程制定の趣旨：

本年7月、本学は、世界最高水準の研究教育拠点を学問分野ごとに形成し、国際競争力のある個性輝く大学づくりを目的とする「文部科学省21世紀COEプログラム（研究拠点形成費補助金）」（以下「COEプログラム」という。）に採択された。

本補助金は、大学院研究科専攻（博士課程レベル）の研究組織等を対象として、主として研究面においてポテンシャルの高い専攻等が世界最高水準の研究教育拠点を形成するために必要とする経費を専攻等の研究者からなる研究グループに対して補助を行うもので、

- ①当該分野における研究上、優れた成果を挙げ、将来の発展性もあり、高度な研究能力を有する人材育成機能を持つ研究教育拠点の形成が期待できるもの
- ②学長を中心としたマネジメント体制による指導力の下、個性的な将来計画と強い実行力により、世界的な研究教育拠点形成が期待できるもの
- ③特色ある学問分野の開拓を通じて創造的、画期的な成果が期待できるもの
- ④COEプログラムで行う事業が終了した後も、世界的な研究教育拠点としての継続的な研究教育活動が期待できるもの

に対し、重点的支援を行うものである。

については本事業の円滑な運営を図るために、「当該拠点の研究計画推進に係る学長を中心としたマネジメント体制(大学の組織的取組み)」、「拠点形成上必要な研究活動を支援するための人材の受入れ」、「研究拠点形成補助金の公正・適切な使用管理」に関する学内規程を整備する。

2. 制定規程の種類：

- (1) 神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会規程
- (2) 神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程
- (3) 神奈川大学COEプログラム研究協力者に関する取扱規程
- (4) 神奈川大学研究拠点形成費補助金取扱規程

3. 規程制定の時期：

平成15年9月29日（理事会承認日）から施行し、平成15年7月25日から適用する。

4. 制定規程：

別紙のとおり

神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会規程

平成 15 年 9 月 29 日
規程第 627 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、神奈川大学において実施される「文部科学省 21 世紀 COE プログラム (研究拠点形成費補助金)」(以下「COE プログラム」という。)の円滑な実行と継続的な推進を図り、世界的な研究教育拠点の形成を目的として設置する神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会 (以下「委員会」という。)の運営について必要な事項を定める。

(構成)

第 2 条 委員会は、次に掲げる者によって構成する。

(1) 委員長

(2) 副委員長

(3) 委員

ア COE プログラムの基盤となる大学院研究科専攻等から選出された者 各 1 名

イ COE プログラム拠点リーダーが指名する者 各 1 名

ウ 事務局長

(委員長)

第 3 条 委員長は、学長が指名する。

2 委員長は、学長の命を受けて、各拠点における研究教育計画の進行状況を把握し、COE プログラム遂行に伴う業務を統括する。

(副委員長)

第 4 条 副委員長は、委員長が COE プログラム拠点リーダーの中から指名する。

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときはその任務を代行する。

(任期)

第 5 条 委員 (職務上の委員を除く。)の任期は、COE プログラム補助事業の継続期間とする。

2 委員 (職務上の委員を除く。)が欠けた場合における欠員補充による委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第 6 条 委員会は、文部科学省 21 世紀 COE プログラム委員会にて審査を受けた「将来構想等調書」等及び採択後に提出した「交付申請書」等に沿った COE プログラムの推進と拠点形成の達成のために、次に掲げる事項を審議する。

(1) COE プログラムに係る諸規程等の整備に関すること。

(2) COE プログラムに係る所轄官庁への諸届に関すること。

(3) COE プログラムに係る研究支援者等の選考に関すること。

(4) その他 COE プログラムの実施に係る重要事項。

(研究推進組織)

第 7 条 委員会のもとに、COE プログラムの円滑な推進を図るために、当該拠点に係る研究推進組織を置く。

(事務の所管)

第 8 条 委員会に関する事務は、学長室 (COE 支援事務担当) が所管する。

(改廃)

第 9 条 この規程の改廃は、大学院委員会の議を経て行う。

附 則

1 この規程は、平成 15 年 9 月 29 日から施行し、平成 15 年 7 月 25 日から適用する。

2 委員会は、COE プログラム補助事業完了後に行われる事後評価の結果を俟って、必要な改組を行うものとする。

神奈川大学COEプログラム研究支援者に関する取扱規程

平成 15 年 9 月 29 日

規程第 628 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、神奈川大学（以下「本学」という。）における COE プログラム事業を一層推進するために、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会規程第 6 条第 3 号に基づき本学が任用する研究支援者の取扱いについて必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規程において「研究支援者」とは、本学における COE プログラムの研究教育事業に従事する教員、研究員、学生、技術者等をいう。

2 研究支援者の名称は、次の各号のとおりとする。

- (1) COE 教員 (COE 特任教員又は COE 非常勤講師)
- (2) COE 研究員 (PD)
- (3) COE 研究員 (RA)
- (4) COE 支援者 (TA)
- (5) COE 技術者

(資格)

第 3 条 研究支援者は、次の各号の要件を満たしている者でなければならない。

- (1) COE プログラム事業の遂行上必要な能力を有すること。
- (2) 日本学術振興会特別研究員その他のフェローシップ等類似の助成を受けていないこと。
- 2 COE 教員を任用する場合にあっては、前項に定める者のほか、神奈川大学特任教員規程又は神奈川大学非常勤講師任用規程に準ずる。
- 3 COE 研究員 (RA) 及び COE 支援者 (TA) として学生を任用する場合にあっては、第 1 項に定める者のほか、本学大学院博士後期課程に在籍する者に限る。

(任期)

第 4 条 研究支援者の任期は、12 月の範囲内とし、その終期は、採用日の属する会計年度を超えることができない。ただし、当該研究拠点形成費補助金による事業が継続している場合には、その期間を限度として任期を更新することができる。

(申請)

第 5 条 研究拠点形成費補助金の拠点リーダーが研究支援者の任用を希望する場合は、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会の議を経て、学長に申請しなければならない。

2 学長は、前項の申請があったときは、研究拠点形成費補助金による事業の遂行上必要な能力を有すると認めた場合に任用するものとする。

(待遇等)

第 6 条 研究支援者の待遇等は、次の各号に掲げる基準によるものとし、その給与については予算の範囲内で学長の定めるところによる。

- (1) COE 教員については、神奈川大学特任教員の給与に関する細則又は非常勤講師給規程に準ずる。
- (2) COE 研究員 (PD) については、神奈川大学ポスト・ドクター規程に準じる。
- (3) COE 研究員 (RA) については、神奈川大学リサーチ・アシスタント規程に準じる。
- (4) COE 支援者 (TA) については、神奈川大学ティーチング・アシスタント規程に準じる。
- (5) COE 技術者については、1 日につき 8 時間を超えない範囲内で日々雇い入れられ

る常勤職員の1週間当たりの勤務時間の4分の3を超えない範囲内で勤務する非常勤職員とし、その給与は、神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会で定める。

(研究費)

第7条 研究支援者は、研究拠点形成費補助金による事業に係る経費を使用することができる。

2 前項のほかCOE研究員(PD)及びCOE研究員(RA)については、別に定める規程により、若手研究者育成を目的として自発的研究活動に必要な経費を支出することができる。

(特許等の取扱い)

第8条 研究拠点形成費補助金の事業で得られた成果に係る特許等の取扱いについては、別に定める。

(その他)

第9条 この規程に定めるもののほか、研究支援者の取扱いに関し必要な事項は、別に定める。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会の議を経て大学院委員会において行う。

附 則

この規程は、平成15年9月29日から施行し、平成15年7月25日から適用する。

神奈川大学COEプログラム研究協力者に関する取扱規程

平成 15 年 9 月 29 日

規程第 629 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、神奈川大学（以下「本学」という。）における COE プログラム事業を一層推進するために、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会規程第 6 条第 3 号に基づき本学が委嘱する研究協力者の取扱いについて必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規程において「研究協力者」とは、本学の COE プログラムの研究事業に共同して従事する教員（本学を含む。）研究者等をいう。

2 研究協力者の名称は、COE 共同研究員とする。

(資格)

第 3 条 COE 共同研究員は、次の各号の要件を満たしている者でなければならない。

(1) COE プログラム事業の遂行上必要な能力を有すること。

(2) 神奈川大学 COE プログラム研究支援者に関する取扱規程に定める研究支援者でないこと。

(任期)

第 4 条 COE 共同研究員の委嘱期間は、12 月の範囲内とし、その終期は、委嘱日の属する会計年度を超えることができない。ただし、当該研究拠点形成費補助金による事業が継続している場合には、その期間を限度として委嘱期間を更新することができる。

(申請)

第 5 条 研究拠点形成費補助金の拠点リーダーが COE 共同研究員の委嘱を希望する場合は、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会の議を経て学長に申請しなければならない。

2 学長は、前項の申請があったときは、研究拠点形成費補助金による事業の遂行上必要な能力を有すると認めた場合に委嘱するものとする。

(研究費等)

第 6 条 COE 共同研究員には給与は支給しない。

2 COE 共同研究員は、研究拠点形成費補助金による事業に係る経費を使用することができる。

(特許等の取扱い)

第 7 条 研究拠点形成費補助金の事業で得られた成果に係る特許等の取扱いについては、別に定める。

(その他)

第 8 条 この規程に定めるもののほか、COE 共同研究員の取扱いに関し必要な事項は、別に定める。

(改廃)

第 9 条 この規程の改廃は、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会の議を経て大学院委員会において行う。

附 則

この規程は、平成 15 年 9 月 29 日から施行し、平成 15 年 7 月 25 日から適用する。

神奈川大学研究拠点形成費補助金取扱規程

平成 15 年 9 月 29 日

規程第 630 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、神奈川大学において実施される COE プログラムの経理事務の取扱いについて必要な事項を定める。

(定義)

第 2 条 この規程において、「COE プログラムの経理事務」とは、学長に交付された研究拠点形成費補助金（以下「研究拠点形成費」という。）に係る申請、報告、会計経理等の業務をいう。

(適用範囲)

第 3 条 研究拠点形成費の経理事務に関することは、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律（昭和 30 年法律第 179 号）、補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律施行令（昭和 30 年政令第 255 号）、研究拠点形成費補助金交付要綱（平成 14 年 4 月 1 日 文部科学大臣決定）及び研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）取扱要領（平成 15 年 7 月 25 日 文部科学省 高等教育局長通知）その他法令等に定めるもののほか、すべてこの規程の定めるところによる。

(申請等の事務)

第 4 条 文部科学省に対する研究拠点形成費に係る申請、事業内容の変更、報告等に関する事務は、事務局長が統括し、学長室（COE 支援事務担当）において行う。

(会計経理事務)

第 5 条 学長に交付された研究拠点形成費の会計経理事務は、学長室（COE 支援事務担当）に委任する。

2 学長室（COE 支援事務担当）は、研究拠点形成費の適正な事務を確保するため、学長名義の銀行預金及び収支簿を保管管理する。

3 前 2 項にかかわらず、資金の支払いについては財務部経理課に委任し、研究支援者等の雇用に係る事項については人事室に委任する。

4 預金により生じた利子は、当該研究拠点形成費の目的に使用しなければならない。

(会計監査)

第 6 条 学長室（COE 支援事務担当）は、毎年度末までに、法令等に基づきすみやかに計算書類を作成し、証拠書類等関係書類を添付して、内部監査室の監査を受けなければならない。

(その他)

第 7 条 この規程に定めるもののほか、研究拠点形成費の事務の取扱いについて必要な事項は、別に定める。

(改廃)

第 8 条 この規程の改廃は、神奈川大学 21 世紀 COE 拠点形成委員会の議を経て大学院委員会において行う。

附 則

この規程は、平成 15 年 9 月 29 日から施行し、平成 15 年 7 月 25 日から適用する。

Ⅱ 研究推進会議決定事項・申し合わせ

COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議内規

(目的)

第1条 この内規は、神奈川大学 21 世紀COE拠点形成委員会規程第7条に基づき、COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議（以下「推進会議」という。）の運営について必要な事項を定める。

(構成)

第2条 推進会議は、次に掲げるものによって構成する。

- (1) COEプログラム拠点リーダー
 - (2) COEプログラムサブリーダー
 - (3) COEプログラム研究遂行責任者
 - (4) 第4条に定めるCOEプログラム事務局長（以下「事務局長」という。）
- 2 推進会議の委員長は、前項第1号のものが務める。
- 3 推進会議の副委員長は、委員長が第1項第2号の委員の中から指名する。

(任務)

第3条 推進会議は、COEプログラムの円滑な推進を図るために、次に掲げる事項を実施することを任務とする。

- (1) COEプログラムに係る研究教育計画の企画・立案及び連絡・調整に関すること
- (2) COEプログラムに係る補助金の経理管理に関すること
- (3) COE研究支援者及びCOE共同研究者の推薦に関すること
- (4) COEプログラムに係る成果報告及び情報発信に関すること
- (5) その他COEプログラムの実施に関して必要な事項

(事務局長)

第4条 推進会議に、事務局長を置く。

- 2 事務局長は、拠点リーダーの指示のもとに前条に定める推進会議の実務を統轄する。
- 3 事務局長は、文部科学省 21 世紀COEプログラム「研究拠点形成費補助金（研究拠点形成費）取扱要領」および学内関連規程等に基づき、必要書類を作成し、厳重に保管するものとする。

(事務の所管)

第5条 推進会議に関する事務は、学長室（COE支援事務担当）が所管する。

(改廃)

第6条 この内規の改廃は、推進会議の議を経て神奈川大学 21 世紀COE拠点形成委員会において行う。

附 則

この内規は、平成 15 年 10 月 1 日から施行し、平成 15 年 7 月 25 日から適用する。

神奈川大学COE調査研究協力者について

2003年10月29日

第3回研究推進会議決定

- 1 神奈川大学21世紀COEプログラムの調査研究活動に際して、情報提供その他の支援を継続的に受けることになる人物を神奈川大学COE調査研究協力者（以下調査研究協力者）として依頼することができる。
- 2 調査研究協力者は、各班で協議の上、依頼が必要な理由を付して、推進会議に提出し、その承認を得て、拠点リーダーが依頼する。
- 3 調査研究協力者の任期は年度内とする。ただし、必要であれば更新することができる。また調査研究協力者として協力を仰ぐ必要がなくなった場合は依頼を取り消すことができる。
- 4 調査研究協力者に依頼できる人数は、各班10名以内とする。
- 5 調査研究協力者については特別な予算措置はせず、謝金などは支払わない。謝金などの支払いが必要な場合は、別途、アルバイトあるいは専門的知識の提供に伴う謝金支払いの手続きをとるものとする。

Ⅲ 提携機関交換覚書

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムと _____ の
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に係る学術交流
についての覚書

日本国神奈川大学 21 世紀 COE プログラムと _____ は、「人類文化研究の
ための非文字資料の体系化」における交流を促進するために、以下の合意事項について覚
書を締結する。

1. 情報の交換

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」に関する研究成果および研究動向な
ど各種の情報を交換する。

2. 資料の交換

双方の印刷刊行物の交換および関連資料の提供を行う。

3. 研究者の交流

① 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム主催の研究集会・シンポジウムなどへの研
究者の招聘

② 若手研究者の招聘及び派遣、互いに受け入れた研究者の調査研究についての便宜
供与

4. 調査研究協力

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムが実施する調査活動について、必要な場合は
招聘状の発行など各種の便宜供与及び可能であれば調査への参加

5. 経費の負担

研究者の交流及び調査研究協りに伴う双方の経費は、原則として神奈川大学 21 世
紀 COE プログラムが負担する。

情報の交換、資料の交換に伴う経費は、原則としてそれぞれ提供する側が負担する。

本覚書の有効期間は、神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの継続期間とする。

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム _____ を代表して

拠点リーダー 福田 アジオ

200 年 月 日

200 年 月 日

神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 神奈川大学 21 世紀 COE プログラムと只見町の学術交流に関する覚書

只見町と神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、学術交流を通して双方の学術・文化の向上に資するために以下の覚書を交わし、できうる限りの互恵的な協力を行い、只見町及び神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの研究事業の発展の一翼を担うものとする。

(調査・研究の協力)

1. 双方は、上記の目的を達成するため資材や人材及び関係する情報をできる範囲で提供するものとする。

(資料の活用)

2. 双方は、収集・所蔵・管理する資料の相互活用に便宜をはかる。なお、利用にあたっては諸権利関係に十分に配慮をする。

(映像資料の活用)

3. 双方は、映像資料のウェブ上での配信公開については、双方及び関係者の諸権利に配慮する。

(人材交流)

4. 双方は、大学教員の専門性、町民の職能技芸に基づいた学術・文化方面での人材交流については格別の配慮をする。

(講演会・研究会・展示会など)

5. 双方は、学術・文化に関係する集会・催事の開催に関し、求めに応じて計画立案、講師派遣などについてできる範囲での便宜をはかる。

(その他)

6. 以上の合意に基づき必要に応じて別に覚書を交わし、実行をはかる。

本覚書の証として、本書を 2 通作成し、双方捺印の上、各自 1 通を保有する。

2007 年 5 月 / 日

神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム

拠点リーダー 福田 アジオ



福島県南会津郡只見町大字只見字雨堤 1039

只見町長 小沼



映像資料及び写真資料の活用に関する覚書

神奈川県 21 世紀 COE プログラム（以下「甲」という。）と只見町（以下「乙」という。）は、映像資料及び写真資料の活用に関して、以下の合意事項について覚書を締結する。

1（資料の提供）

甲は映像資料制作及び写真資料の活用について乙の資料の提供を受ける。

2（出演者の情報）

甲は映像資料作成にあたり乙に映像出演者に関する情報提供を受ける。

3（利用の許諾）

甲は乙の協力により制作した映像資料を乙が乙の公式ホームページ掲載し、配信することを許諾する。

4（ホームページのリンク）

甲と乙は互いの公式ホームページにリンクする。

5（協力関係の表示）

甲は映像資料制作にあたり甲と乙の協力関係を明示するため「神奈川県 COE・只見町」と表示する。

6（掲載許諾）

甲と乙は、映像資料の制作及びインターネットでの配信にあたり、別紙様式により予め出演者の許諾を得ておくものとする。

7（保証）

甲と乙は、映像資料の制作にあたり第三者の著作権及びその他第三者の権利を侵害しないように配慮する。

8（複製・譲渡・貸与の禁止）

甲と乙は双方の了解を得ないで、映像資料の第三者への複製、譲渡、貸与をすることを禁止する。

9（その他）

本覚書に定めのない活用形態については、別途協議するものとする。

本覚書の証として、本書 2 通を作成し、双方捺印の上、各自 1 通を保有する。

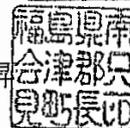
2007 年 7 月 3 日

神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

神奈川県 21 世紀 COE プログラム拠点リーダー 福田アジオ

福島県南会津郡只見町大字只見字雨堤 1039

只見町長 小沼 昇



11. 新聞掲載記事

1. 「非文字資料を体系化へ」(2003年7月29日 神奈川新聞)
2. 「世界トップレベルの研究拠点目指す魅力ある大学作りの切り札」(2003年9月27日 日本経済新聞)
3. 「神奈川大学が新しい学問をつくります」(2003年12月10日 朝日新聞広告)
4. 「採択大学のとり組み『古今東西の非文字資料の体系化』」(2003年12月20日 朝日新聞広告)
5. 「わらび座で踊り収録」(2004年6月18日 秋田さきがけ)
6. 「只見で国重文の民具調査」(2004年6月18日 福島民友)
7. 「電源開発の歴史学ぶ」(2005年3月29日 福島民友)
8. 「広重はニュース絵師？」(2005年4月13日 日本経済新聞)
9. 「宮本常一の発想どう活用」(2004年5月3日 中國新聞)
10. 旅遊「郷間儺劇儺舞魅力迷人」(2005年7月7日 人民日報海外版)
11. 「歴史を語る」(2005年9月8日 読売新聞夕刊)
12. 「広重『江戸百景』常識破る浮世絵展」(2005年11月3日 タウンニュース No.36 神奈川区版)
13. 「『非文字資料』で広がる人間活動研究の可能性」(2007年11月7日 神奈川新聞)
14. 「歌川広重『名所江戸百景』－『大地震から復興』宣伝か」(2005年11月21日 朝日新聞夕刊)
15. 「『絵になる風景』江戸に原点－広重『名所江戸百景』150年－」(2006年1月1日 日本経済新聞)
16. 「『名所江戸百景』と安政江戸地震」(2006年1月10日 神戸新聞夕刊)
17. 「人間中心主義を問い直す」(2006年3月25日 日本経済新聞)
18. “What’s Really ‘Chinese’ About Fortune Cookies?”(2006年4月16日 ジャパンタイムズ)
19. 「靖国参拝批判の底流」(2006年8月12日 神奈川新聞)
20. 「物を大事に使った時代」(2006年8月20日 読売新聞)
21. 「歴史災害と都市でセミナー」(2006年8月25日 日刊工業新聞)
22. 「立命館大学・神奈川大学 21世紀COEプログラムジョイントワークショップ」
(2006年8月25日 日本経済新聞)
23. 「目に訴える関東大震災」(2006年8月26日 朝日新聞夕刊)
24. 「災害史で読む日本人」(2006年12月8日 読売新聞)
25. 「舞踊をデジタル記録」(2007年5月19日 朝日新聞)
26. 「歌川広重『名所江戸百景』と安政江戸地震」(2007年5月 日本地震学会広報紙 No.61)
27. 「歩き方の変遷探る」(2007年11月10日 毎日新聞)
28. 「非文字資料の研究報告」(2008年2月24日 神奈川新聞)

事項索引

本文中に記載された事項を五十音順とアルファベット順に分けて配列した。
 なお、五十音順索引の中国事項は日本語の音読み、韓国語事項は韓国語読みで配列した。

あ

- アーキビスト……………64
 挨拶回り……………179
 会津農書……………168、185
 愛知県農業総合試験場……………134
 愛知県立図書館……………126
 アイヌ ……10、122、123、130、162、177、178、189
 アイヌ絵……………128
 アイヌ文化文献情報……………122
 アイヌ民俗図資料……………209
 青花紙……………176
 青森県立郷土館……………122、129
 赤塗り……………178
 秋田県立図書館……………135
 秋田県立農業科学館……………125
 秋田県立博物館……………125
 秋葉山中……………176
 揚げ羽根……………179
 浅野川大橋……………179
 旭川市博物館……………130
 アジア……………208
 アジア研究所……………40
 アジアデータベース……………160
 梓川村資料館……………129
 アチック・ミュージアム……………166、195
 厚沢部川……………178
 厚沢部町郷土資料館……………126
 アナール学派……………61、62
 アナログ……………101、103
 虻田町立郷土資料館……………133
 安倍川……………176
 海女……………166
 奄美大島……………189
 有松絞……………176
 「あるくー身体の記憶ー」……………91、107、112、158、
 187、210
 アルバム……………188
 阿波手の社……………177
 アワビ……………166
 安政内裏造営……………200
 飯豊山信仰展示……………159
 家……………195
 家造り……………195
 筏……………180
 筏組み……………178
 伊賀町歴史資料館……………131
 いざなぎ流……………203
 石川県立図書館……………134
 石川県立歴史博物館……………134
 石山……………177
 衣装……………188
 椅子……………203
 異性装……………211
 異装……………188、211
 市……………209
 一関市博物館……………132
 市女笠……………188
 巖島神社……………131
 一国民俗学……………7、113、117
 『一遍聖絵』……………127、157、188
 糸紡ぎ……………182
 井戸端……………182
 稲蔵入り……………179
 稲作……………168
 稲束……………182
 因幡堂……………127
 梨花女子大学博物館……………132

イリコ (煎海鼠)	166	雲仙岳災害記念館	123
イルカ猟	178	雲南省	167
岩国市民具収蔵庫	128	運搬	16、177
岩手県立博物館	122	絵	190
岩屋寺	131	英語版『絵巻物による日本常民生活絵引』.....	161
印刷刊行物.....	45	映像	16
印刷物	186	映像資料	4、62、80
麟蹄山村民俗博物館	133	映像資料及び写真資料の活用に関する覚書	281
因子分析	185	映像データ.....	16
インターネット	89、93、102、108、199	映像展示	186
インターネット・エコミュージアム	25、26、91、 154、160、185	映像フィルム	189
インターネット・エコミュージアムへの道.....	91	英訳	189
インターネット博物館	5、6、191	エコミュージアム.....	26
インド.....	188、208	江差浜.....	164、178
ウィーン民俗学博物館	126	「江差浜鯺漁之図」.....	163、164
ういろう	177	江差檜山	178
上杉博物館	135	「江差檜山屏風」	207
ウェブサイト	112	江差町	178
魚津市歴史民俗博物館	130	絵図	202
浮世絵.....	42、43、155、158、196、210	蝦夷	161
牛	195	蝦夷地	178
有珠郷土館	133	越前万歳師	179
有珠善光寺	133	江戸	176、204
ウチナンチュ	211	絵解き	187
内蒙古	190	江戸地震データベース.....	91
内蒙古智力引進外語専修学院	126	江戸時代史	116
姥神神社	178	江戸凶屏風原本	128
姥ヶ餅	177	江戸東京博物館.....	122、134
馬	184、191、195	「江戸風俗絵巻展」	125
馬市	176	「江戸名所凶屏風」	161
馬方	182	江戸湾	176
馬犁 (鋤) 耕	179	絵葉書	24、111
海	166	絵引	7～9、112、116、192、203、210
海人	22	絵引検索	8、12
梅木和中散	177	絵引データベース.....	12、14
浦安市郷土博物館	127	絵引編纂	5、181、183
蔚山	191	愛媛県立歴史民俗資料館	127
「蔚山城合戦図」	184	絵巻	161
運河	180	『絵巻物による日本常民生活絵引』.....	4、7、9、10、 60～62、70、77、79、97、101、106、107、

- 110、112、160～163、189、205、208、209
- 魷 ……182
- 宴会 ……181
- 演技 ……166
- 煙突 ……210
- 追鯿漁者 ……178
- 青梅市役所 ……127
- お江戸日本橋 ……176
- 大井川 ……176
- 大垣市立図書館 ……125
- 大阪洪水 ……131
- 大阪市史編纂所 ……131
- 大阪城天守閣 ……129
- 大阪市立すまいのミュージアム ……129
- 大阪市立中央図書館 ……131
- 大阪市立東洋陶磁美術館 ……132
- 大阪府公文書館 ……127
- 大阪歴史博物館 ……125
- 大津 ……176
- 大津絵 ……177
- オートバイ宅配便 ……157、188
- 大宮 ……200
- 大森 ……176
- オーラル・ヒストリー ……185
- 岡崎宿 ……176
- 置賜民俗資料館 ……125
- 翁 ……189
- 沖永良部島 ……195
- 沖の口番所 ……178
- 屋内 ……195
- 奥三河 ……16
- おさかな資料館 ……126
- 長田神社 ……134
- 小澤昔ばなし研究所 ……210
- お田打ち ……177
- 小田原 ……177
- 音 ……159、167
- 「踊り歌う猫の話」 ……188
- 鬼 ……189
- 鬼追行司 ……134
- 帯広百年記念館 ……130
- 小布施町歴史民俗資料館 ……128
- お水送り ……135
- 御目見 ……178
- 織物生産 ……180
- オルセー美術館 ……126
- 音声言語 ……16
- 温泉宿 ……177
- オントロジー理論 ……150、197
- 女商人 ……178、191
- か
- 絵画 ……157、159、201
- 海外 ……192
- 海外研究機関 ……204
- 海外出張 ……89
- 海外神社 ……23、111
- 海外神社跡地 ……20、23、24、129、160、184、193
- 『『海外神社』跡地に関するデータベース』 ……47
- 海外神社及びその跡地に関するデータベース ……91
- 海外提携研究機関 ……33、39、40、42、70、73、81、
88、141～143、206、211
- 海外提携研究機関派遣研究員 ……35
- 改革開放 ……205
- 絵画資料 ……167、183、207
- 絵画史料 ……203
- 絵画を読み解く ……157
- 海岸集落 ……122、123、124
- 外国語学研究科中国言語文化専攻 ……3、57、58、83、
88、202
- 外国語学部 ……93
- 外国人研究員 ……57、64
- 外国人留学生 ……64
- 海賊 ……43
- 開拓定住 ……206
- 回転道具 ……165
- 街道 ……176
- 外部研究者 ……93
- 外部評価 ……139、204、206、208、210

外部評価実施	51～54、93	華東師範大学	33、34、39、62、73、125、128
概要	70	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター	35、36、42、43、52、205
画家	197	門付け	178、179
「加賀郡勝示札」	206	神奈川県立生命の星・地球博物館	134
加賀藩検地絵図	205	神奈川大学	209
香川県歴史博物館	124	神奈川大学研究拠点形成費補助金取扱規程	276
河岸	181	神奈川大学COEプログラム	
科挙	182	研究協力者に関する取扱規程	275
学位取得者	88	神奈川大学COEプログラム	
学芸員	3、27、28、36、64、83、169、186	研究支援者に関する取扱規程	273
学芸員課程	64	神奈川大学大学院	8
学芸員教育	186	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科	186
学芸員養成	185	神奈川大学ティーチング・アシスタント規程	273
学芸員養成課程	27、192	神奈川大学特任教員規程	273
角材	178	神奈川大学21世紀COE拠点形成委員会規程	272
郭禿	187	神奈川大学21世紀COEプログラムと只見町の学術交流に関する覚書	280
学術交流	279	神奈川大学非常勤講師任用規程	273
学術審議会	114	神奈川大学ポスト・ドクター規程	273
拡大ホームページ委員会	138、147	神奈川大学リサーチ・アシスタント規程	273
学長室	272、276	金沢	164
各年執行状況	260	金沢城下	12、179
各班・課題研究会	161	金沢21世紀美術館	131、132、134
学部	186	画報	204
学問分野	56	鎌倉	20、22、167
神楽	189	紙	203
鹿児島県大島郡喜界町	21	上五島	166
鹿児島県立図書館	124	上郷岡原遺跡	131
火災	156、200	仮面劇	197
火災被害	160、184	カモカモ（鴨々）	205
笠利町歴史民俗資料館	126	鷗島	178
鹿島建設株式会社		碓	182
「関東大震災写真データベース」	135	からだの記憶	153
鍛冶屋	180、182	狩り	188
画像修復技術	187	瓦屋根	182
画像資料	43、159	江原道	21
画像データ作成	94	還願祭祀	197
家族	182、210	環境	3～5、61、78～81、116、189、205
片町	179	環境学	60、116
合戦図	24、166、205		
課程博士	82、88		

- 環境史 ……116
 環境データ ……127
 環境と景観 ……202
 環境と景観の資料化と体系化 ……4、20、58
 『環境と景観の資料化と体系化にむけて』…90、159、193
 環境に刻印された人間活動…91
 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説
 ……20、184
 環境認識 ……4、20、22、60、62、80、81、167、185、210
 環境認識とその変遷の研究…20
 環境認識の歴史の変遷 ……116
 環境利用 ……190
 環境論 ……116
 観劇 ……181
 観光 ……203
 漢口日本租界 ……153
 観光旅行 ……188
 韓国 ……12、14、149、151、152、166、167、188、191、197、199、204、207、208
 韓国近現代美術史…42
 韓国語…13、14
 韓国国立中央博物館 ……125
 韓国犁 ……152
 韓国・朝鮮…14
 韓国・朝鮮編 ……199
 韓国全羅南道 ……206
 韓国南部 ……200
 韓国版「常民生活絵引」…161
 韓国民俗村 ……154
 感性 ……4、15、16、62、77、79～81、110、130、154、157、159、165、166、183、189、191、202、203
 潤松美術館 ……124
 干拓集落 ……203
 関東地震 ……201
 関東大震災 ……20、23、24、111、133、135、157、160、184、201
 「関東大震災・地図と写真のデータベース」…47
 関東大震災写真データベース…91
 広東 ……204
 広東醒獅 ……209
 韓半島…150、197
 観覧者…27
 観覧料 ……208
 官吏 ……182
 官僚 ……180
 「甘露幀」…207
 生糸作り ……180
 キーワード ……105
 記憶 ……149、154、158、188、190、205
 『記憶・歴史・忘却』…160
 祇園 ……176
 喜界島…22、184、195
 喜界町教育委員会 ……134
 義学 ……181
 企画展示 ……53、158
 企画展示「西のみやこ・東のみやこ」…135
 木偶祭祀 ……133
 記号 ……149、196、206
 喜捨 ……183
 技術移転…152、199
 鬼神 ……202
 木摺臼 ……15、17、18、122、123、189
 「熙代勝覧」…122
 貴重資料リスト ……266
 喫煙 ……209
 吉祥図案 ……208
 規程 ……271
 騎馬像 ……188
 岐阜県図書館 ……125
 岐阜県美術館 ……125
 岐阜市立女子短期大学…73
 岐阜地方气象台 ……126
 客員研究員…57、64
 キャプション ……8、10～14、186
 旧アイヌ居住地区 ……126
 救援 ……201
 嗅覚 ……16、130

旧樺太	189	漁業史料	107
旧官幣社南洋神社	125	極東アルバム	266
救済	157	居住環境	153
旧在華企業	153	漁村景観	131
九州国立博物館	100、130、134、135	拠点形成委員会	70、137、139、273～275
九州産業大学	132	拠点形成委員会委員	140
求寿儀式	128、187、191、205	拠点形成委員会規程	202
旧正月	123	拠点形成計画調書	51、59
旧神社跡地	206、208	拠点形成費補助金	269
旧朝鮮	191	拠点リーダー	79、89、90、137、213、273、275、 277、278
旧豊頃町立二宮小学校	127	拠点リーダー・研究遂行責任者担当授業時間数軽減	139
旧内外棉工場	133	居留地	159、207
旧南洋群島	190	漁撈	179
旧日本人居住区	135	慶尚北道	21
旧日本租界	23、135	慶熙大学校博物館	127
旧満州	153、208	キリスト教	209
旧満州国	192	基督教信仰	43
旧満鉄	133	記録	149
九龍符命	191	記録写真	186
キューレーター	64	近郊	164
教育	197	近郊農村	179
教会大学	191	近世	199、209
教科書	42	近世画像資料	188
京劇	208	近世京都	200
行事	177	近世・近代生活絵引	161、170
京都	156、200	『近世・近代風俗史料貼込帖』	266
共同研究	7、71、89	近世城郭	153
共同研究員	4、71、95、119、142、214、215、 218、231～240、243～248	近世初期風俗画	161
共同研究室	268	近世史料館	134
共同研究者	277	近世生活絵引	10、151、199
共同研究助成金	71	金台寺	129
共同作業	95	近代生活絵引	10
共同調査	95	近代天皇	204
京都国立博物館	128、132	クイックサービス	188
京都市歴史資料館	128	空間編成	152、200
京都大学	132	久賀町役場	122
京都府立図書館	130	傀儡	187
京橋	176	公家町	156、200
漁業	176		

- 草津 ……176、177
 草津追分 ……176
 草の根 ……177
 草分け ……178
 クシャミ ……160、188
 グジャラート州 ……188
 管流し材 ……178
 口琵琶 ……178
 熊石町歴史記念館 ……126
 熊野 ……188
 グラフィックス ……94
 樽木 ……178
 「黒船かわら版」 ……190
 鍬 ……125
 桑名 ……176
 「蕙園傳神帖」 ……182、190
 景観 ……3、5、62、77～81、151、152、156、157、
 159、164、166、167、184、188～191、193、
 200、202～205、209
 景観写真 ……192
 景観資料 ……184
 景観データ ……127
 『「景観」と「環境」についての覚書』 ……184
 景観認識とその変遷の研究 ……91
 景観の経年変化解析 ……108
 景観の時系列的研究 ……20、81、113
 景観分析 ……152、189、190、200
 景観変化 ……70、122、124、125、166
 景観変貌 ……191
 景観変容 ……184、193
 傾斜配分方式 ……87
 芸術 ……199
 京城 ……166
 研究拠点形成費補助金 ……259
 芸能 ……15、16、79、110、116、160、170、179、
 183、184、191
 芸能研究 ……15
 「芸能にみる身体技法」 ……81
 芸能分析 ……116
 景色 ……202
 結婚60年 ……182
 ケニア ……190
 ケニア国立博物館 ……123
 ケニア国立文書館 ……123
 喧嘩 ……182
 研究員 ……81
 研究員（R A）研究室 ……268
 研究員（P D）・共同研究員研究室 ……268
 研究会 ……138
 研究協力者 ……202、275
 研究拠点形成推進会議 ……62
 研究拠点形成費 ……140、276
 研究拠点形成費補助金 ……139、141、142、275
 研究計画 ……202
 研究参画者 ……119
 研究参画者研究成果論文集 ……91
 研究支援 ……102
 研究支援者 ……202、273、274
 研究施設 ……267
 研究所 ……114
 研究遂行責任者 ……23、137、216、217、231、277
 研究推進会議 ……70、90、94、137、141、202
 研究推進会議委員 ……139
 研究推進会議内規 ……277
 研究成果 ……213
 研究成果報告書 ……5、45、81、89、171
 研究組織 ……202
 研究組織図 ……202
 研究ネットワーク ……56
 研究年報 ……81
 研究方法論 ……56
 言語 ……157
 言語イメージ ……157
 言語危機 ……206
 建国神廟 ……187、209
 建国忠霊廟 ……187
 言語評価 ……188、192
 検索システム ……101
 現代 ……105
 建築史 ……60

建築図面	192	肥汲み	179
現地調査	11、12、52、94、142	呉越神歌	206
現地比定	12、189	粉河寺	130
臉譜	208	虎丘	181
語彙編	9、171、173	故宮博物院	133
小祝い	179	故郷	210
交易	179	国学研究院	40
航海	149	国際環境	166
公開研究会	7、45、155、162～165、169、198、 207	国際研究集会	81
こうがいつき	178	国際シンポジウム	5、44、45、77、81、82、101、 108、117、142、143、145、149
公開ワークショップ	7	国際シンポジウム実施委員会	138
航空写真	160、184	国際シンポジウムプレシンポジウム	53
工芸	204	国際博物館協議会	127
杭州	205	国史館	131
「耕織風俗図屏風」	181	国史編纂委員会	125
江西国際灘文化芸術祭	128	国民国家	191
高精度デジタル画像	168	国民的アイデンティティ・マーカ	190
江蘇省蘇州	12	国立科学博物館新宿分館	125
公大紡績住宅	153	国立中央図書館	130
高知県	189	国立中央博物館	100、123、132、133
高知県長岡郡大豊町立川上名仁尾ヶ内	22	国立民族学博物館	122、131、132、134
高知県立図書館	124	国立民俗博物館	100、124、132
交通交易	195	「国立民俗博物館」構想	191
口頭伝承	22	国立歴史民俗博物館	122、128、135
高度専門職	25	御座船	182
高度専門職学芸員	4、83、103	御所	200
高度専門職学芸員の養成	5、27、28	小正月	182
『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラム』の提言—	185	瞽女	178
高度専門職学芸員養成策	27、185	「虎勢道中記」	192
高度専門職学芸員養成システム	69、77	「姑蘇繁華図」	12、101、156、157、161～163、 181、188、191、198、207
高度専門職学芸員養成プログラム	134、169、185、 186	古代	159、183、206
高度専門職学芸員養成方法	81	古代史	17
江南	191	古代メキシコ	204
興福寺	128	コタン	164、177
神戸女子大学古典芸能研究センター	134	國華	266
広報委員会	138、146	子供	179、181
肥担桶	179	ゴヌ遊び	182
		古墳時代	15

- 御幣203
 米問屋180
 小者179
 御用船178
 娯楽177
 小料理屋182
 コロニアルタウン191
 コンクリートブロック157
 混血型199
 混合言語206
 コンゴ国立美術館研究所 (I M N C)206
 混成語128
 痕跡159、201、202
 金勝山177
 昆布178
 梱包鯨製品178
 婚礼181
- さ
- 座位18
 災害5、60、80、156、184、192、193、196、
 200、201
 災害画像190
 災害痕跡23、157
 災害史60、116
 災害写真132、194、196
 災害像207
 災害展示202
 災害認識157、201
 災害メディア24、184
 在華紡184
 犀川179
 犀川大橋179
 再現展示162、168
 「西国・九州巡幸写真」196
 祭祀芸能149、197、206
 祭祀者149、197
 財団法人日本常民文化研究所7
 採訪民具107
- 在来犁17、18
 在来農具124、125～134、183、190
 宰領人178
 祭礼156、200
 早乙女踊り185
 坂下宿176
 酒田市立光丘文庫126
 佐賀平野189、203
 坂本177
 作業姿勢15～17
 酒177
 鎖国政策43
 刺網178
 挿絵42、43
 砂糖195
 座頭178
 佐渡島開発総合センター130
 サバイバル文化208
 サハリン202
 サブリーダー137、214、215、217、218、277
 座法190
 散楽190
 三角測量16
 生業178
 3次元156
 山村民具123
 山塘橋181
 山王祭177
 サンパウロ市207
 サンパウロ大学34、40、73
 サンパウロ大学大学院43
 サンパウロ大学日本文化研究所35、42、52
 試案本80、162
 G I S94
 C O E 概要146
 C O E 技術者273
 C O E 教員4、52、53、71、81、82、95、
 119、139～144、273
 C O E 教員 (特任教授)36、249
 C O E 教員 (非常勤講師)36、236、248、249

COE共同研究員	68、139、144、275	時系列	184
COE研究員	64、68、139～141、144	試験官	181
COE研究員（RA）	33、68、70、73、82、111、 119、252～258、273、274	試験場	181
COE研究員（PD）	33、68、70、73、82、119、 250、251、253～255、257、273、274	試作本	162
COE研究員（PD・RA）	8、33、51	獅子	204
COE研究員制度	88	地震	159、189、202、211
COE研究員制度（PD・RA）	6	『地震津波 末代嘯之種』	266
COE支援事務業務	269	静岡市立登呂博物館	124
COE支援事務室	68、267、268	自然	205
COE支援事務スタッフ	270	自然地理学	210
COE支援事務担当	269	質屋	180
COE支援者（TA）	111、273	七里の渡し	176
COE将来検討会議	103、108	実験的展示	80、81
COE資料室	267	実験展示	5、6、27、54、77、78、81、87～89、 91、102、107、111、112、117、143、158、 168、186、187、210
COE全体会議	51	『実験展示「あるくー身体の記憶ー」をつくる』	186
COE特任教員	68	実験展示巡回展	144
COE特任教授	73	実施記録	186
COE非常勤講師	73	実習科目	36
COEプログラム	272	四天王寺	132
CG	79、202	品川御殿山	177
CG映像	184	『支那民俗誌』	192
寺院	180	シニアキュレーター	25、126
シェン語	128、130、190、206	老舗	180
支援組織	267	十念寺	129
ジェンダー	209	字引	7、112
塩尻市民具収蔵庫	129	地曳網漁	176
視覚情報分析	204	字引検索	12
仕掛け弓	178	祠廟	126、129
滋賀県立琵琶湖博物館	134	澁澤映像資料	81、111
四季耕作図	124	澁澤敬三映像資料	80
色彩	205、208	澁澤コレクション	189
色彩意味論	125、128	澁澤写真	20～22、107、108、113、116、122、 123、134、167、184、187、192、194、208
『信貴山縁起絵巻』	266	『「澁澤写真」に見る1935-1936年の喜界島』	195
磁気式モーションキャプチャ	15	「澁澤写真」リスト	194
直訴	183	澁澤フィルム	129、152、169、189、190、191、 193、200
「四季風俗図屏風」	183		
事業推進担当者	3、119、142、214～218、 220～228、231、239、245		

- 島田市博物館 ……………128
 事務局長……………137、277
 下肥 ……………179
 下関市立長府博物館 ……………131
 社会科学高等研究院E H E S S ……………127
 社会言語学 ……………205
 社会貢献 ……………101
 社会史 ……………61、107
 写真 ……………149、196、206
 写真 ……………149、152、155、157、159、160、167、
 184、190、196、200～202、207、209
 写真映像 ……………184
 写真絵葉書……………23
 写真家 ……………197
 写真集……………21
 写真資料……………189、193
 写真メディア……………193
 上海 ……………184、204、210
 上海市档案馆……………130、133
 上海市図書館 ……………133
 上海師範大学 ……………122
 上海市文化局 ……………126
 収穫 ……………195
 周期祭 ……………204
 19世紀後半メディア ……………149
 舟山島……………150、197
 収蔵展示室 ……………268
 周東町祖生民俗資料館 ……………129
 修復 ……………189
 集落景観 ……………193
 塾 ……………180
 宿場 ……………176
 受験生 ……………181
 修験道 ……………206
 呪術 ……………206
 手段としての「非文字」－資料と方法のあいだ－
 ……………54、157
 『手段としての写真』……………90
 『手段としての写真－「澁澤写真」の追跡調査を中
 心に－』……………194
 出張記録 ……………122
 出土史料 ……………206
 狩猟 ……………159、178
 順正寺 ……………178
 ジョイントワークショップ ……23、143、207、208
 上越市総合博物館 ……………129
 城下 ……………164、179
 正月 ……………179
 城下町 ……………179
 鍾馗 ……………187
 上級学芸員……………28
 商業民俗研究 ……………206
 象形文字……………25
 常識 ……………158
 少女 ……………208
 肖像画 ……………162
 商店街 ……………206
 城内 ……………180、182
 庄内地震……………126、193
 商人 ……………178
 招福 ……………182
 招聘若手研究者 ……………143
 情報 ……………194
 情報化 ……………197
 情報科学……………56、67
 情報学 ……………60、117、154、185
 情報資源 ……………168
 情報システム ……………107
 情報セキュリティ ……………189
 情報発信 ……………98、100、185、189、191、198
 情報流通 ……………168
 常民 ……………7
 常民参考室……………27、56、71
 常民生活絵引 ……………163
 常民生活絵引マルチ言語対照データベース……………91
 常民文化研究講座……………73
 常民文化研究所 ……………115
 城門 ……………181
 縄文系住民……………18
 縄文人……………18

将来構想等調書	55	身体技法および感性の資料化と体系化	15、58
常楽寺	129	『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』	183
昭和町歴史民俗資料館	125	身体技法の比較研究	15
書画売り	181	身体技法の比較と人類文化	91
職業専門家	197	身体技法論	116
職能民	167	身体形状	191
植民地支配	5	身体工学	111
諸職風俗図像	190	身体動作	60
女性	157、179～182、188、190、204	身体の記憶	27、168
女性民俗	42	進捗状況報告書（中間評価後修正版）	87～90
女装くん	208	進捗状況報告書（中間評価後修正変更版）	77、140
書堂	182	進捗状況報告書（中間評価用）	68、69
庶民生活	161、164	心的バリア	208
徐揚	161	新橋	176
白川郷	207	新版『日本常民生活絵引』	161
市立市川歴史博物館	127	新聞掲載記事	283
尻繋ぎ	178	シンポジウム	45、81
市立函館図書館	123	シンポジウム「誰にもやさしい博物館づくり」	134
資料館	64、83、159	シンポジウム「民具は世界を結ぶ」	134
資料室	267、268	シンポジウム報告	90
シルム	182	清末絵入り新聞	161
素人絵	190	清末民国初期	164
地割資料	127	『清末民初報刊図画集成』	43
地割図	122	新湊市博物館	130
神宮寺	135	人力運搬	165
信仰	195	人力運搬法	190
人口現象	209	人類学	113、116、117、159、202、203
真光寺	127	人類史	15、16
震災記念堂	132	人類文化	77、113、149、151、160
審査結果表	67	人類文化研究のための非文字資料の体系化・総括編	91
神社	153、192、204	水上生活	180
神社跡地	70、111、126、133、159、189、191	推進会議	278
申請書	55	吹田市立博物館	132
「新撰百工図」	190	水田	168、182
身体	105、158、190	周防大島文化交流センター	127、131
身体音	188	菅江真澄日記	126
身体技法	3～5、15、16、18、27、61、62、70、 77～80、110、149、154、159、165、183、 187、189、197、202、206	犁	110、152、197、199、208
身体技法及び感性の資料化	4	鋤	181
		頭上運搬	181

- 凶像 ……3、7、60、77～79、151、156、159、189、
 199
 凶像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み
 解く ……44、53、90、199
 凶像解析 ……189
 凶像学研究 ……210
 『凶像から読み解く東アジアの生活文化』 ……90、198
 『凶像研究文献目録』 ……90、194
 「凶像研究文献目録データベース」 ……47、90
 凶像資料 ……79、151、161、165、189、190、198、
 199、202、204、205
 凶像資料データベース ……81
 凶像資料の体系化 ……4
 凶像資料の体系化と情報発信 ……58、112
 凶像制作編年目録 ……193
 凶像データベース ……89、108
 凶像・動作情報 ……202
 凶像内容分類目録 ……193
 「凶像文献書誌情報データベース」 ……47、79、80、90
 『凶像文献書誌情報目録』 ……90、193
 凶像名称五十音順目録 ……193
 スミソニアン博物館 ……123
 角力興行 ……178
 素潜り漁法 ……166
 凶様 ……191
 駿河 ……176
 凶録 ……155、196
 性 ……209
 生活 ……176～178、198
 生活絵引 ……7、153、177、209
 生活絵引編纂 ……151、199
 生活絵引き編さん資料 ……190
 生活空間 ……190
 生活再現展示 ……192
 生活凶像資料 ……189
 生活文化 ……156、162、165、207
 税銀 ……181
 『西国・九州巡幸写真』 ……156
 『清俗紀聞』 ……131
 生物進化史 ……167
 「清明上河図」 ……156、162、198、207
 西洋人 ……197
 背負い運搬 ……181
 世界遺産 ……101、105、207
 世界常民 ……203、205
 世界博物館大会 ……204
 世界文明論 ……206
 節季候 ……179
 石版画資料 ……127
 セキュリティ ……202
 セツカ ……177
 浙江工商大学 ……33、39、42
 浙江工商大学日本語学文化学院 ……43
 浙江工商大学日本文化研究所 ……53、143
 浙江省 ……192
 浙江大学 ……34、39、42、62、73、122
 浙江大学人文学院 ……42
 浙江大学日本文化研究所 ……35、42、52
 摂津名所凶会 ……266
 設備・備品 ……265
 瀬戸内 ……209
 占卦 ……182
 善光寺 ……129
 戦後開拓 ……188
 全国大学博物館学講座協議会全国大会 ……135
 全国大学博物館学講座協議会大会 ……129
 全国大学博物館学講座協議会東日本部会大会 ……135
 戦後生活 ……168
 先住民 ……160
 善書 ……165
 全体会議 ……90
 全体研究会 ……30、159
 仙台市歴史民俗資料館 ……124
 洗濯 ……179、182
 洗濯物 ……181
 船頭 ……178
 仙洞 ……200
 千畑町郷土資料館 ……125
 1872年浜田地震 ……130
 煎餅 ……203

煎餅職人	189
専門学芸員	25
全羅南道	191
「千里ニュータウン展」	132
戦略的資産	100、103
挿図	187
僧侶	179、180
ソウル	166、168、204、210
ソウル市立大学博物館	129
ソウル世界博物館大会（I C O M）	127
租界	20、23、24、133、159、160、184、207
「租界とアジアデータベース」	47
組織研究	93
蘇州	156、162、181、198、207
蘇州大学	125
染め飯	177
村落共同体	209
村落景観	189

た

第1回国際シンポジウム	53、149
第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～」	196
第1回国際シンポジウムプレシンポジウム	155
第1回国際シンポジウムプレシンポジウム「版画と写真」	196
第1回C O E国際シンポジウムプレシンポジウム	206
大英博物館	203
『大海嘯極惨状之図』	266
大学院	28、168、169、185、186
大学院委員会	51、272、274、275
大学院博物館学芸員課程	27
大学院博物館学研究科	28
大学院歴史民俗資料学研究科	41、55、95、105
大学支援金	259
大学図書館	205
大学博物館	27、114、204
体系化	187

体験	208
体験学習	208
太鼓橋	180
第3回国際シンポジウム	54、153、210
大地震津波の奇談	266
『大地震津浪 未代嘯迺種』	266
大衆文化	205
秦順県木偶劇団	131
秦順県文博館	133
大成町郷土館	126
台南道教	191
第2回国際シンポジウム	53、151、208
「第2回国際シンポジウム図像・民具・景観・非文字資料から人類文化を読み解く」	199
代表者（学長）交替	140
台北中央研究院	131
大名行列	176
内裏	200
大理	203
大連神社誌要	266
大連神社創立誌	266
台湾大学	133
田植え	195
田植踊り	131
田起こし	181
鷹	190
高森町歴史民俗資料館	129
托鉢	180
太上感應篇図説	165
只見地区	168
只見町	81、143、168、170、185、208
「只見町インターネット・エコミュージアム」	47、168
只見町教育委員会	127、128、130、132～135
脱穀	182
豎白	177
建物	203
多島海	167、208
たなばた	195
種子播き	181

- 駄馬179
 煙草182
 旅177、192
 WWW202
 多文化展示206
 玉川大学135
 多民族159、165
 多民族社会202
 多民族性116
 檀園風俗画帖182
 地域154
 地域研究154、185
 地域史206
 地域社会154、167、189
 地域住民113
 地域情報154
 地域情報学154
 『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』185
 地域統合情報発信 …5、77、78、80、81、87～89、
 102、105、107、111、113、154
 地域文化資産154
 地域防災教育201
 濟州島150、197
 知覚151、199
 竹王節127
 畜舎191
 地形改変192
 地形環境156、200
 地図157、160、184、201
 チセ177
 知的財産権159
 知的財産権担当108
 到道博物館124
 「地表に刻まれた人間活動及び災害情報」81
 地方自治体71
 地方文献191
 地山師178
 茶店176、177
 中央研究院133
 中央博物館40
 中間評価52、101、139、141、142、206
 中間評価結果76、87～90
 中間評価現地調査142、145
 中間評価ヒアリング52、139
 中国12、16、167、189、192、199、204、208
 中国内モンゴ16、191
 中国雲南省麗江25、203
 中国絵葉書266
 中国科学院100
 中国科学院遺伝与发育生物学研究所124、126
 中国言語文化専攻36、64、95
 中国江西省南豊県石郵村16
 中国江南編12、13
 中国湖南省新寧県瑶族190
 中国図像学203
 中国政府教育部人文社会科学重点研究基地40
 中国石郵村189
 中国調査202
 中国伝統人形劇126
 中国東北部208
 中国農具研究208
 中国非物質文化遺産研究センター39
 中国文化生態村154
 「中国民間版画」164
 中国民間文化保護197
 中国民俗界205
 中国民俗学150、197
 中国民俗研究192
 中国民俗保護開発研究センター39
 中国瑶族149、197
 中山間地域190
 中山大学33、34、39
 中山大学中国非物質文化遺産研究センター
 35、36、42、43、52
 中世鎌倉209
 中世史163
 中世都市鎌倉192
 長期反復調査4
 調査研究協力者 …121、141、144、237、239、240、

- 調査研究資料……………45、90
 調査写真……………157
 調査ノート……………202
 長春丸……………178、191
 長床犁……………18
 朝鮮……………151、159
 朝鮮系犁……………18
 朝鮮時代……………156、162、183、190、198、204
 朝鮮神宮寫眞帖……………266
 朝鮮相撲……………182
 朝鮮通信使随行画員……………125
 朝鮮版生活絵引……………162
 朝鮮半島……………12、166
 朝鮮半島多島海……………190
 朝鮮風俗画……………183
 「朝鮮風俗画絵引データベース」……………8、47
 朝鮮風俗画編……………12～14
 町人……………179
 著作権……………106、108、113、167、207
 著者五十音順目録……………194
 貯木場……………178
 地理学……………166、187
 池鯉鮒……………176
 鈔鰲……………179
 追灘……………128
 追儺行事……………189
 築地魚市場……………126
 月迎え……………182
 津島祭……………177
 槌音……………180
 鶴見大学……………134
 DVD……………184
 庭園……………181
 提携機関交換覚書……………279
 デジタル映像アーカイブ……………187
 デジタル画像処理……………189
 デジタルフィルムアーカイブ……………189
 蹄鉄打ち……………182
 定点調査……………81
 定量比較……………15、16
 定量比較研究……………183、184
 データ化……………197
 データベース……………5、14、20、23、25、46、61、
 69～71、77、81、90、94、95、97、98、100、
 102、103、112、144、157、160、184、185、
 197
 データベース共通表記事項……………145
 データベース構築……………93、201
 デジタル……………154
 デジタル・アーカイブ……………101、103、113
 デジタル化……………159、188、194、205、206
 デジタル技術……………203
 デジタル・コンテンツ……………100、102、131
 デジタル・コンテンツ化……………89、108、132
 デジタル資料……………151
 デジタル人類学……………151、199
 デジタルデータ……………133
 デジタル入力……………159
 デジタルファクトリー事業……………122
 手代……………178
 哲学……………151、199
 テレビドラマ……………43、210
 展示……………4、27、28、155、157、158、204、208
 展示構想……………186
 展示設計図……………186
 電子図書館……………189
 展示評価……………27、28、169
 「展示をつくるⅠ－研究成果発信装置としての可能性－」……………155
 「展示をつくるⅡ－研究成果発信装置としての可能性－」……………155
 展示を作る－展示実施報告書……………91
 『点石斎画報』……………163、164、208
 伝統芸能……………15、16、203
 伝統娯楽……………156、162、198
 伝統犁……………152、199
 伝統的職能者……………123
 伝統文化センター……………123
 天然記念物……………201

- 天王祭177
 天王寺127
 天皇肖像159、166
 デンマーク207
 天明浅間噴火131
 「天籟」187
 東海道編10、11
 『東海道名所図会』10、177、266
 「『東海道名所図会』絵引データベース」8、12、47
 道観181
 東京156、208
 道教130、205
 東京下落合190
 東京大学135
 東京大学COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」135
 東京大学大学院8
 東京大学東洋文化研究所131
 東京都慰霊堂201
 東京都公文書館135
 東京都写真美術館123
 道具4、5、110、159、165、203、207
 動作77、183
 同済大学122
 動作情報159
 銅像190
 東津水利民俗博物館133
 踏土179
 道南177
 東方明珠205
 東北工科大学135
 東北地方189、190
 東北歴史博物館124、128
 童話43
 遠野市立博物館132
 十勝毎日新聞社128
 常磐大学129
 特任教授36、52、95
 特別研究員64
 独立記念館133
 独立研究科68
 土下座182
 都市156、196
 都市化192
 都市景観208、210
 都市混合言語190
 都市図151、156、162、198、199、207
 都市文化151、199
 都市民俗学42
 土摺臼18
 渡船176
 土蔵178
 特許274
 鳥取県210
 砺波郷土資料館130
 土場178
 土俵178
 富田177
 葬195
 留め縄178
 富山市民俗民芸村130
 豊科町郷土博物館129
 渡来人18
 トラフィック204
 トランス・アトランティック物語204
 鳥追179
 東巴124、128
 東巴教187、191、205
 東巴経典25、187、203
 東巴儀礼25
 東巴求寿儀礼159
 東巴研究院132
 東巴文化167、203
 東巴文化研究院124
 東巴文化研究所25
 東巴文化博物館25
 東巴舞187
 東巴踊132
 問屋178
 問屋街178、180

な

- 中歌町 ……………178
 長崎土産 ……………266
 長崎歴史文化博物館……………132、134
 長門市くじら資料館 ……………131
 長野県上水内郡信濃町赤沢……………22
 長野県立歴史館……………128、132
 中之島図書館 ……………125
 長野市立博物館 ……………128
 仲間言葉 ……………190
 儺戯舞 ……………125
 名古屋市博物館……………127、129
 名古屋市立鶴舞図書館 ……………126
 名古屋大学図書館 ……………126、127、129
 納西族……………25、124、128、191、205
 『納西東巴古籍訳注全集』……………190
 名瀬市立奄美博物館 ……………126
 那智大社 ……………130
 名張市教育委員会収蔵庫 ……………131
 儺舞 ……………16
 儺文化国際検討会 ……………129
 ナマコ ……………166
 滑川市立博物館 ……………130
 『奈良県下十津川地方変災実況之図』……………266
 奈良国立博物館 ……………132
 奈良大学 ……………132
 生業 ……………164、176、178
 鳴子 ……………178
 南開大学 ……………135
 南京江蘇省曲芸家協会 ……………126
 南山 ……………166
 ナンバ歩き ……………111
 南洋群島 ……………204
 新潟県立歴史博物館 ……………129
 新潟大学 ……………131
 匂い ……………189
 荷鞍 ……………125
 虹 ……………209
 西アフリカ ……………16、189
 錦絵 ……………149、196、204
 西米良村 ……………188
 「21世紀COEプログラム」(中間評価後修正変更版) についてのコメント……………85
 「21世紀COEプログラム」ヒアリング ……………51
 21世紀COEプログラム補助金 ……………259
 鯨 ……………178
 鯨刺網漁 ……………178
 鯨貯蔵 ……………178
 鯨潰し ……………178
 鯨外し ……………178
 鯨干場 ……………178
 鯨漁 ……………164、178、202
 日常生活……………157、201
 日系カナダ人 ……………192
 日中交流史……………42
 日中戦争 ……………191
 二宮報徳館 ……………127
 荷舟 ……………178
 日本 ……………16、151、196、199
 日本学術振興会特別研究員…33、51、53、73、140、141
 日本学術振興会特別研究員(21COE)……………120、256、258
 日本学術振興会特別研究員候補者 ……………142
 日本カラー図絵 ……………266
 日本玩具博物館 ……………128
 日本近世・近代生活絵引……………4、10、61、62、77、79～81
 日本近世生活絵引……………8、10、11、91、209
 『日本近世生活絵引』東海道篇……………176
 『日本近世生活絵引』北陸編……………179
 『日本近世生活絵引』北海道編……………177
 『日本近代生活絵引』……………164
 日本語 ……………203
 「日本国図」……………211
 『日本歳時記』……………266
 『日本山海名物図会』……………266
 『日本写真帖』……………266

- 『日本縮図絵集』……………266
- 日本常民文化研究所……………3、4、7、20、40、46、
55～58、60、62、64、67、70、73、76、80、
83、93～95、97、100、101、105、106、108、
110、111、202
- 日本常民文化研究所参考室（展示室）……………58
- 日本常民文化研究所特別研究員……………73
- 日本犁……………152
- 日本赤十字社……………131
- 日本赤十字豊田看護大学……………129、131
- 日本認識……………43、211
- 『日本農書全集』……………10
- 日本の都市計画……………42
- 日本はきもの博物館……………134
- 日本橋魚市場……………176
- 『日本風景論』……………187
- 日本文化……………42
- 日本文化研究所……………39、40
- 日本本土編……………10
- 日本マンガ……………43
- 日本民俗資料館……………129
- 日本列島……………80、159、165、183、189、202
- 『日本—国土と人々』……………266
- ニューズレター……………45、70、71、81、90、95、146
- 庭仕事……………182
- 人形……………149、159、197
- 人形劇団……………129
- 人形芝居……………123、124、126、130
- 人形博物館……………128
- 人間工学……………111
- 認識論史的観点……………30
- 人相見……………180
- ネイティブスピーカー……………36、73、82
- 根尾谷地震断層観察館……………125
- 「猫じゃ猫じゃ」……………188
- ネットワーク……………61、69、77、106、116
- ネマリ臼……………177
- 年報……………70、189
- 年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化
……………45、90
- 能楽……………16
- 能楽師……………128
- 農業考古学……………208
- 『農業図絵』……………10、134、151、164、199、209
- 農業博物館……………133
- 農具……………4、122、124
- 農耕……………159
- 農耕鞍……………125
- 農作業……………195
- 農書……………185
- 濃尾地震……………126、129
- 野飼いの馬……………178
- 野良仕事……………180
- 海苔採取……………176
- 海苔作り……………176
- は
- バーチャル自然史博物館……………71
- バーチャル地球史博物館……………56、58、60、167
- バーチャルミュージアム……………87、199
- ハーバード大学……………62
- 排泄……………150、197
- ハイデルベルグ大学……………62
- 牌楼……………180
- 萩博物館……………131
- 羽咋市歴史民俗資料館……………130
- 博士後期課程……………88
- 博士論文……………88
- 博物館……………64、83、113、114、154、157、167、170、
188、189、205、206、208
- 博物館学……………28、169、185、186
- 博物館学教育……………168、169
- 博物館学芸員……………6
- 博物館学専攻プログラム……………185、186
- 博物館学大学院……………28
- 博物館実習……………36、82
- 博物館情報学……………73
- 博物館情報資料学特論……………36
- 博物館資料……………204

博物館資料学	36、68、73、82、83	「バリアフリー研修会」	134
博物館資料学特論	36	パリ第五大学	62
博物館図像資料学特論	36	春駒	179
博物館専門職員	3	「盤王節」	190
博物館展示	5、205	版画	155
博物館展示学	73	繁華街	181
博物館展示資料学特論	36	「版画と写真－19世紀後半出来事とイメージの創出－」	53、90
博覧会	188	バンクーバー	192
派遣研究員	73、82、142、143、211	ハンブル	13、14
派遣研究員制度	88	藩士	179
馬耕犁	125	漢城	166
箱根塔沢	177	伴大納言絵詞	266
箱根湯本	177	半塘橋	181
馬士	178	ヒアリング	142
「はしか絵」	210	PDFファイル	111
走井	177	比較研究	160
機織り	182	比較調査	183
旅籠	176、182	比較文化研究	14
八戸市博物館	122	東アジア	12、80、151、156、167、191、199、207、208
発行年次順目録	194	東アジア史	116
初誕生	183	東アジア生活絵引	4、8、12、13、61、62、77、79～81、91、110、161、162
発明	149	『東アジア生活絵引』韓国編	81
発明家	197	『東アジア生活絵引』中国江南編	180
花祭り	16	『東アジア生活絵引』中国編	81
花見	177、179	『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編	181
花輪図書館民俗資料室	124	東アジア民俗学	107
漢陽大学校博物館	127、133	東三条	176
パネル	186	光市歴史民俗資料館	128
ハノイ	154	挽物細工店	177
場の記憶	153	『非言語』	206
「場の記憶・からだの記憶 非文字資料研究の新地平」	44、54、153	非言語コミュニケーション	105
浜田市教育委員会	130	美術館	167、205
浜田市立浜田図書館	127	ヒジュラ	188
早切干し	178	非常勤講師	52、53、95
祓い	159	非常識	158
祓い儀礼	206	非西洋	159
原田神社	123	卑賤	179
原村教育委員会	133、134		
バリアフリー	87		

- ヒト189
 非物質文化遺産42、206、207
 氷見市立博物館130
 姫路市立城郭研究室129
 費目別収支決算表（直接経費）260～264
 非文字資料4、6、204
 『非文字資料から人類文化へー研究参画者論文集ー』187
 非文字資料研究45、90
 非文字資料研究センター …3、6、33、34、46、61、
 69、77、82、108、114、116
 『非文字資料研究の可能性ー若手研究者成果論文集ー』188
 非文字資料研究の理論的諸問題187
 非文字資料としての渋沢写真91
 「非文字資料とはなにかー人類文化の記憶と記録ー」44、53、90
 非文字資料の体系化ーその理論91
 非文字文化遺産197
 百姓179
 日用178
 日用人178
 檜山番所178
 評価186
 屏風絵24、207
 平壤監司182
 「平壤監司饗宴図」151、182、199
 平生町民具館129
 昼飯182
 ヒロシマ／広島188、190
 広島県立歴史博物館134
 広島平和記念資料館189
 広場180
 琵琶湖博物館131、134
 和順郡191
 フィールドワーク208
 風景166、194
 風景印203
 風俗162
 風俗画12、151、183、190、191、204
 風俗帳185
 風俗表現191、198、207
 フォローアップ140、145
 フォローアップ（書面調査）54、86、87
 フォローアップ（書面調査）回答書87
 フォローアップ（書面調査）回答書に対するコメント92
 武漢市档案馆130
 福井県立博物館131
 福井県立若狭歴史民俗資料館133
 伏偶舎郷土玩具資料館128
 復原202、203
 福島県只見町…5、25、26、81、87、89、107、108、
 154、159、167、189
 福島県南会津郡只見町185
 福島県立図書館126
 福島県立博物館126
 『福富翁草紙』266
 武家屋敷179
 釜山近代歴史館124
 釜山大学124
 巫師197
 武士179
 藤枝市郷土博物館128
 藤枝瀬戸177
 富士川176
 『不思議な日本』266
 武士道210
 武士道精神43
 伏見189
 符呪205
 普請180
 豚195
 仏画207
 仏画（甘露幀）156、162、198
 復興156、200
 復刻版158
 物質文化197
 復旦大学122、125、128
 符篆191

船着場	180、181	文理連携	115
船乗り	197	平安京	156、200
船	180	平安時代	206
舞踊	16	「平生図」	182
ブラジル	16、43、208	北京	188、191、205
フランス	16、189	北京師範大学	33～35、39、43、62、73、122
フランス語	10	北京師範大学民俗学与文化人類学研究所	42、43、52
フランス博物館	203	北京大学生	157
ブランリ美術館	170	北京日本学研究センター	64
ブリティッシュコロンビア	160	ベルダーシュ	160、211
ブリティッシュコロンビア大学	33、34、40、43、62、133	編集・出版委員会	138
ブリティッシュコロンビア大学アジア学科	35、36、52	反問	16
震岩	177	ホアム美術館	124
ブルキナファソ	16	奉安殿	203
ブルックリン美術館	123	宝巖寺	131
フルテキスト化	107	法鼓	182
フルテキスト・データベース	97	防災	156、157、201
プレシンポウジウム	211	放赦科儀	191
プログラム概要	95	紡織業	191
プロジェクト	202	方相	187
文化遺産	150、156、188、209	方法論	151、199
文化遺産救出シンポジウム	131	訪問研究員	42、73、82、128、142、143、211
文化遺産シンポジウム	130	ホームページ	45、71、95、105、115、141、146
文化財	157、201	ホームページ委員会	138、146
文化財化	101	ホームページ管理運用内規	139
文化財科学	60	ホームページリニューアル	145
文化史	206	捕獲技術	190
文化情報	56、189、191、202	『北越雪譜』	266
文化情報発信の新しい技術の開発	4	『北斎漫画』	42
文化人類学	60	「北平私立輔仁大学檔案」	191
文化政策	191	北陸農村	209
文化表現	206	北陸編	10～12
文献書誌データベース	189	補助金取扱規程	202
文献史料	205	細丸太棒	178
文人	179	蚩狩り	177
分析作業室	267、268	北海道	206
分析内容別目録	194	北海道・蝦夷地編	10
糞尿肥貰い	179	北海道開拓記念館	122、128
		北海道大学図書館	130

- 北海道大学附属図書館 ……132
 北海道大学附属図書館北方資料室 ……128
 北海道編 ……10、11
 北海道立文書館 ……132
 北方史 ……162
 北方文化博物館新潟分館 ……129
 ボロ織り ……203
 本川神楽 ……122
 本郷村歴史民俗資料館 ……128
 香港 ……210
 香港大学 ……33、40、43、62、129
 香港大学日本文化研究学系 ……42、52
 香港大学博物館 ……128
 本陣 ……176
 本文編 ……9、171、173
 本屋 ……176
 翻訳 ……97
- ま**
- 前浜 ……167
 馬鞞 ……124、125
 マスメディア ……166
 町場 ……183
 町屋 ……179
 松ヶ岡開墾記念館 ……124
 松阪市立歴史民俗資料館 ……131
 松前 ……178、191
 松前地 ……209
 松前町郷土資料館 ……129
 松前町々大略絵図 ……178
 鞠 ……208
 丸小屋 ……187
 マルチ言語版 ……61、62、69、70、77、79～81、
 110、160～163、205、209
 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』
 ……4、5、8、91、98、171、173
 マルチ言語版『生活絵引』 ……153
 マルチメディア環境 ……151
 丸屋形 ……178
- 満洲国 ……167、187、209
 満鉄附属地神社 ……192
 万年橋 ……180
 身欠鯨 ……178
 三河地震 ……157、201
 巫女 ……182
 三島市郷土資料館 ……128
 三島宿 ……176
 三島大社 ……177
 南方熊楠記念館 ……129
 南アルプス市教育委員会 ……133、134
 南サハリン ……189
 南町 ……179
 宮城学院女子大学 ……128
 宮城県美術館 ……128
 『都名所図会』 ……266
 宮島町立歴史民俗資料館 ……127
 宮本馨太郎映像作品 ……266
 ミュージアム ……207
 『苗蛮図冊』 ……101
 民間芸能 ……207
 民間信仰 ……42
 民具 ……4、5、18、25、62、106、110、116、124、
 150、151、167、183、185、197、202、
 205～208、210
 民具カード ……127、133、135
 民具学 ……116、197
 民具研究 ……150
 民具調査 ……17
 民具データ ……154
 民具保存活用運動 ……189
 民衆版画博物館 ……127
 明清期 ……165
 明清小説 ……181
 民族 ……156、183、196、209
 民俗 ……156、183、198
 民族移動 ……152、199、208
 民俗演戯 ……207
 民俗学 ……42、60、113～117、183、185、191、211
 民俗学研究者 ……117

『民俗学誌 (Folklore Studies)』	207	メディア史	190
民俗学与文化人類学研究所	35、39	メディア変遷史	24
民俗技術	197、206	蒙古族	126
民俗芸能	15、16、154、206	モーションキャプチャ	5、16、25、70、73、79、 80、89、94、108、110、116、125、129、154、 160、166、170、183、184、191
民俗図絵	177	モーションキャプチャデータ	16
民族性	43	木製犁	150
民俗生活	207	沐浴	182
民俗知	101	文字占い	181
民族的多様性	189	文字資料	6、24、111、185、204
民俗博物館	133、191	『模地数里』	178、191
民族表象	159	モノ	189
民族分布	15、17、18	物見櫓	180
民俗民具調査実習	36、82	モバイルエージェント	204
明代中国人	43	糶摺白	123、124
麦わら細工店	176	モンゴル	16
ムクンリ	178	門前	181
無形遺産	105	モニタージュ	159
武蔵辻	179	文部科学省	114
無床犁	18	紋別市	191
菴編み	182		
ムツクリ	178	や	
村芝居	181	野外博物館	207
迷宮	203	野外民族博物館	209
名産	177	屋形船	181
明治5年浜田地震資料	127	ヤギ	195
明治18年大阪洪水資料	127	焼き肉	183
明治期ルポルタージュ絵画	126	焼畑村	22
明治農具絵図	124	焼き蛤	177
名所絵	159、202	焼物問屋	180
『名所江戸百景』	53、123、158、159、189、202、 266	役者	179
名人字画	181	矢島町郷土資料館	125
名水	177	八千代市立郷土博物館	127
名物	177	宿入り	176
目川	177	柳井市民具収蔵庫	131
メキシコ	16、190	屋根葺き	195
メソドロジー	112	山形県立博物館	124
メタ情報	111	山田村歴史民俗資料館	130
メディア	23、24、159、196		
メディア産業	167		

- 山梨県立博物館 ……132
山梨県立美術館 ……126
弥生人 ……18
両班 ……182
遊郭 ……176
有職故実学 ……162
由宇歴史民俗資料館 ……129
雪だるま ……179
「ユニバーサル・ミュージアムを考える」 ……134
ユニバーサルデザイン ……87
ユニバーシティ・ミュージアム ……192
ユネスコ ……105
用具 ……110、183
用具と人間の動作の関係の分析 ……17
用語辞書作成 ……94
養成プログラム ……186
ヨーロッパ ……204、208
ヨーロッパ文化博物館 ……126
横白 ……177
「横浜写真」 ……203
横浜市歴史博物館 ……125
予算 ……259
予算編成 ……90
吉田 ……177
吉田神社 ……134
『興地誌略』 ……156、196
四日市市立博物館 ……131
淀川資料館 ……130
瀬川流域水害図 ……131
夜番人 ……178
夜道 ……182
嫁迎え ……181、182
延世大学校 ……33、34、40、62、73、123
延世大学校中央博物館 ……35、52、133
延世大学校中央博物館学芸員 ……42
- ら
- ライフ・ヒストリー ……132
『洛中洛外図屏風』 ……163
ラジオ録音盤 ……167
ラテンアメリカ ……208
鸞輿巡幸図 ……131
リアリズム ……198
リーダーシップ ……90
陸小屋 ……178
リコーソフトウェア研究所 ……100
律僧 ……188
立命館大学 ……23、130、132、207
立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム
ジョイントワークショップ ……53、145、156
立命館大学21世紀COEプログラム ……90、156、
207
立命館大学21世紀COEプログラム・神奈川大学
21世紀COEプログラムジョイント・ワークショ
ップ「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」
……200
リトルワールド ……209
琉球 ……161
琉球編 ……10
龍動 ……211
龍母伝説 ……43
了仙寺宝物館 ……127
遼寧省博物館 ……127、130、135、162
『良友』 ……204
料理屋 ……181
『旅行雑誌 (China Traveler)』 ……210
旅行用心集 ……266
リヨン大学 ……133
理論総括 ……5、78、80、81、88
理論総括研究 ……30、89、102、106、107
類似本 ……161
ルーブル美術館 ……126
麗江 ……203
麗江納西族 ……167
歴史学 ……60、115、203
歴史研究 ……159、188、205
歴史災害 ……156、200
『歴史災害と都市』 ……90
「歴史災害と都市—京都・東京を中心に—」 ……53、

207	
歴史都市	156
歴史・民俗系大学院	186
歴史民俗資料科学研究科	3、33、36、56～58、60、 64、68、73、76、77、82、83、93、100、186、 202
歴史民俗資料科学研究科委員会	51
歴史民俗資料学専攻	67
「歴史民俗資料学叢書」	36
列島	205
煉瓦造り	180
れんじゃく	178
練兵場	181
楼台	181
ロシア	205
ロシア中央海軍博物館	128
露台	181
露店	180
驢馬	180
論文博士	82

わ

ワークショップ	23、45、155、201
和歌	9、206
若手研究員	102
若手研究者	56、81、111、115、211
若手研究者育成	96
若手研究者育成成果論文集	91
若手研究者海外派遣事業	33
若手研究者招聘事業	40
若手研究者の育成	6、8
若手研究者派遣	142
若手研究者ワークショップ	54、141、144、145、 157、211
若党	179
ワカメ	166
ワカメ漁場	166
和歌山県立博物館	130
倭館	124、131、166、205

わざ	154
倭城	23、24、124、130、131、153、166、184、 205
渡し	176
渡し船	182
わらび座	122、124、134
わらび座デジタルアートファクトリー	125、128、 129

A

Adze	173
Ainu and Their Folk-Lore, The	266
<i>Amaginu</i>	174
<i>Amiginu</i>	174
Amulet	173
An English Girl in Japan	266
Apron	171
<i>Argha Shelf</i>	172
<i>Ashinaka</i>	174
<i>Azekura</i>	172

B

<i>Ban Dainagon ekotoba</i>	172
Bath	174
Beards	173
<i>Binzasara</i>	172
Bird Cage	171、173
Bird Trap	171
<i>Biwa</i>	172、173
Boar Fence	174
Boat	173
Boat Bridge	174
Bow-plucking	173
Box Seats	174
Brazier	173
Buddhist Rosary	172
Burial	173

- C
- Cart172
- Cart Shafts173
- Cattle174
- Cemetery173
- Chestnut171
- Child Servant172
- Childbirth172、173
- Children's Play171
- Chisel173
- Chōja*172
- Chōju giga*172
- Chopping Board172
- Chopsticks172
- Clothing172
- Cock Fighting172
- Conch Shell173
- Cormorant174
- D
- Defecation172
- Dengaku*172
- Die Architektue der Kultbauten Japans266
- Ditch174
- Dog172、173
- Dōsojin*172
- E
- English Edition171、174
- Ethnologue206
- F
- Feast172
- Fence174
- Fireplace172
- Fish Trap174
- Flint Sack172
- Funeral173
- G
- Gaki*173
- Gaki zōshi*172
- Gakimeshi*173
- Gate172、174
- Gate Talisman174
- Geta*174
- Gitchō*172
- Go*172
- Go Board*173
- God of the Crossroad172
- H
- Habaki*172
- Handbook of Folklore, The211
- Hand Spindle172
- Headband174
- Headwear172
- 「Historical Society」114
- Hitai-eboshi*172
- Horse172
- House174
- Hunter174
- I
- ICOM168、204
- Illustrations of Japanese Life266
- INP133
- Institut d'Asie Orientale133
- Invalid173
- IPPEN HIJIRIE*174
- Irrigation Conduit174

J

Japanese Customs

- From Ancient till Modern, vol1266
- Japanese Exhibition Catalogue266
- Japanese Homes and Their Surroundings266

K

- Kamisogi*171
- Kazuki*172
- Kinuta*174
- Kitano Tenjin engi*172
- Kitchen172

L

- Ladder174
- Laundry171
- Le Costume Historique266
- Le Havre 市立美術館133
- Lodgings172
- Loincloth172
- Long Chest172
- Long-handled Umbrella172

M

- Mansion172
- Meals174
- Musashi*172
- Musée du quai133

N

- Noisemaker171、174
- Nusa*172

O

- Original Edition171、174
- Ox173
- Oxcart171
- Oxherd172

P

- Palanquin173
- Partition Screen172
- Pasture174
- Pictopedia9
- Pigeons173
- Plank Bridge174
- Porch174
- Portable Urinal172
- Prayer172
- Priest172、174

R

- Rain-hat174
- Residence174
- Rice Paddies174
- Riverbank174
- Riverbed174
- Round Fan172
- Rumor172

S

- Sai no Kami*172
- Sake* Holder172
- Sake* Pot172
- Scarecrow174
- Scenes from open air life in Japan266
- Seats173
- Sedge Hat172
- Senmen koshakyō*171
- Servants172
- Shields174

<i>Shigisan engi</i>	172
Shop	171
Shrine Functionary	172
Sitting	172
Skin Disease	172
Sleeping Quarters	172
Soshi Bushi, The	266
<i>Sotoba</i>	173
Spear Plane	173
Stove	172
Straw Mat	172
Straw Sandals	172
<i>Sugoroku</i>	172

T

<i>Tai</i>	172
<i>Taka-ashida</i>	172
<i>Tamaya</i>	173
<i>Tatami</i>	172、174
Temple Precincts	174
Temple Town	174
Thatched Roof	172
Thunder	171
Tokugawa Travel Workshop	133
Tomb	172
Toothblack	172
Topknot	173
Torch	172
Tug-of-War	172
Turrets	174

U

Umbrella	172、174
----------------	---------

V

Vegetable Garden	172
Veils	174

W

Wall	174
Warrior	174
Watchtower	174
Well	171 ~ 174
Well Sweep	174
Winnow	173
Wood Fan	173
Wooden Gate	174

Z

<i>Zukin</i>	174
--------------------	-----

人名索引

本文中に記載された人名を五十音順に配列した。なお、中国人の名は日本語の音読み、韓国・朝鮮人の名は韓国語読み、その他の外国人名はカタカナ表記にアルファベットを併記した。

あ

青木俊也……………26、29、120、127、129、130、132、
134、155、157、168～170、186、192、204、
208、248
赤嶺淳……………166
アコハ・アルベール・ビアンヴェニュ
(AKOHA Albert Bienvenu)……………155
芦澤玖美……………19、119、124、126、191、204、232
網野暁……………42、120、122～125、127、128、189、
190、202、250
網野善彦……………202
池上和夫……………137、211
池田貴夫……………209
衣曉龍……………43、210
泉雅博……………14、121、179、180
李善愛……………24、121、166
井谷善恵……………14、121、171
犬塚康博……………169
井上敏……………169
井上順孝……………54、110
任章赫……………154
林淑姫……………14、121、174
岩倉市郎……………195
尹紹亭……………150、152、154、197、199
尹笑非……………42、208
上田純広……………24、121、160、184
宇佐見義之……………26、119、122、167、232
内田九一……………156
梅野光興……………19、119、122、123、189、203、233
江崎玲於奈……………67
榎美香……………29、120、134、168、208、246
王京……………14、35、36、42、43、120、130、134、
135、157、160、171、180、184、191、192、

204、207、210、211、255

王曉葵……………206
王欣……………42、208
王志垣……………43、210
王正華……………151、199
王勇……………206
大里浩秋……………24、26、119、122、124、125、130、
131、133、135、137、138、153、159、184、
199、202、205、207、208、210、231
大坪潤子……………72、120、126、188、190、204、253
大西万知子……………35、120、157、188～190、203、208、
252
大野泰……………203
大谷津早苗……………149、197
岡本浩一……………19、121、183、185、191
小川陽一……………165
奥野志偉……………152、200
織田順子……………206
落合一泰……………19、119、125、159、204、233
小沼昇……………280、281
小野桂子……………270
小野地健……………26、43、120、135、160、188、209、
257
小野博……………154、168
尾本恵市……………66、203

か

カーン・トリン・ポンピリ
(KHANH Trinh Pompili)……………171
海賀孝明……………19、26、121、183、191
夏宇継……………19、120、128、132、159、187、191、
205、243
カウパテス・ジオゴ (KAUPATEZ Diogo)

-42、209
 岳永逸42、207
 笠松宏至203
 檜村賢二35、120、157、188、192、204、207、
 210、253
 片平博文156、200
 香月洋一郎24、30、43、51、59、72、119、122、
 124、126、127、133～135、137、138、157、
 160、166、170、184、185、189、193～195、
 201、202、207、209、216
 桂雄三157、201
 加藤友子203
 金子淳169
 金子隆一24、26、119、125、126、149、156、
 196、197、203、234
 唐沢ダニエラ (KARASAWA Daniela)43、211
 刈田均29、120、132、134、207、246
 ガロ・ジュヌヴィエーブ (GALLOT Genevieve)
150、197
 川島純枝42
 河角龍典156、200
 川田順造19、51、52、59、66、72、119、
 122～127、129、130、137、149、154、159、
 165、166、183、189～191、196、202、203、
 214
 河野真知郎24、120、121、167、192、209、246
 川村武史191
 韓同春42、206
 神原朋之270
 木川絃治137
 菊池勇夫14、119、122、123、125、126、
 128～130、133、135、161～164、177、187、
 189～192、205、209、234
 菊池洋153
 菊池渡207
 貴志俊彦24、121
 北原糸子24、59、72、119、123、125～133、
 135、138、149、150、152、157、159、184、
 189、192～194、196、200～202、207、208、
 227
 北村彰169
 橘川俊忠26、30、42、43、51、52、59、119、
 123、126～130、133、134、137、138、150、
 151、155、167、187、197、199、202、206、
 210、217
 木下慶子26、121、159、168
 木下直之155、196
 木下宏揚26、119、122、123、126、133、138、
 154、159、185、189、191、197、202、235
 君康道14、119、124、125、127～132、153、
 160、161、171、173、205、209、235
 金光彦152、199
 金貞我14、119、123～125、127～135、138、
 151、152、156、161、162、163、168、171、
 173、180、181、183、190、191、198～200、
 204、207、208、236
 金泰順14、121、174
 金花子42、191、204、206
 木村玲欧157、201
 許海華43、211
 斬飛73
 金鋒19、121
 グーバー・コンスタンチン (GUBER Konstantine)
149、197
 楠本彩乃19、120、126、240
 朽木量154
 國弘暁子19、35、36、43、120、160、188、208、
 209、211、257
 窪田涼子161、203
 グラウジョール・カルロス (GLAUJOR Carlos)
43、211
 クリスティ・アラン (CHRISTY Alan)
14、121
 黒田日出男52、53、97、100、101、102、103
 巖明14、121、181
 呉毓華43、210
 高坂嘉孝24、121、184
 江静42、205
 康正梅43
 河野通明19、29、43、59、66、72、119、

122～134、138、150、152、159、165、183、
187、189、190、199、200、202、205、207、
208、220
康保成……………149、197
コールマン・ティモシー (COLEMAN Timothy)
……………14、121、171、173、174
古閑安明……………270
顧希佳……………206
高光敏……………150、197
小島一成……………155
児島恭子……………209
小島ちえみ……………270
後藤淑……………73
小林光一郎……………120、188、256
小松大介……………26、121、168、185
近藤雅樹……………150、197
小馬徹……………14、26、30、59、72、119、123、128、
130、190、203、206、221

さ

蔡錦堂……………153
齊藤隆弘……………26、30、59、72、74、119、122、123、
138、159、187、189、202、228
蔡文高……………14、121、171、173
坂井美香……………36、210
坂野純子……………270
桜井邦朋……………205
佐々木長生 ……26、120、132、134、168、185、205、
208、246
佐々木弘美 ……14、43、120、157、188、210、258
佐々木睦 ……14、119、123、125～129、161、162、
180、181、198、203、208、236
笹原亮二……………155、186
佐多芳彦……………162
佐藤健二……………157、201
佐藤留実子……………270
佐野賢治 ……26、42、43、51、59、66、72、74、
119、122～135、137、138、150、154、155、
159、160、167、168、170、185、189、191、

202、203、206、208、210、216
志賀重昂……………187
繁田信一……………206
柴山守……………154
澁澤敬三……………55、60、115、166
シャマス・フェルナンド・カルロス
(CHAMAS Fernando Carlos) ……42、206
周星……………150、197、208
宗臺秀明……………167
徐揚……………161
尚峰……………14、121、192
蔣明智……………43、211
ジョン・サイモン (JOHN Simon) ……14、72、121、
173、174、190、206
申潤福……………190
末松安晴……………86、92
菅江真澄……………10、164、189、192、209
鈴木彰……………14、121、171、173
鈴木栄樹……………156、200
鈴木弘太……………167
鈴木淳……………157、201
鈴木廣之……………24、120、155、196、245
鈴木正崇……………53、101、105
鈴木陽一 ……14、30、42、43、59、72、119、122、
128、134、135、137、156、162、163、180、
181、189、198、202、207、217
スチュアート・ヘンリ (STEWART Henry) ……208
須永明美……………270
須山聡……………24、119、122、123、129、166、189、
191、203、237
関根祥人……………19、73、121
関ひかる……………270
関屋彩子……………270
千秋順子……………270
曹栄……………43、209
宋俊華……………42、207
孫安石……………24、26、43、59、66、72、119、122、
125、128、130、131、138、153、159、160、
204、205、207、226

た

戴嵐 ……43、208
 戴立強 ……156、162、198、207
 高野宏康 ……51、120、258
 鷹野光行 ……169
 高橋郁夫 ……159
 高橋規則 ……137
 田上繁 ……26、29、42、43、51、59、119、
 122～125、127、130、133、134、137、138、
 154、170、185、186、202、203、205、206、
 223
 瀧端真理子 ……169
 田口洋美 ……24、120、121、125、126、159、205、
 240
 竹内啓一 ……166
 竹内誠 ……204
 竹内有理 ……169
 武田雅哉 ……164
 武吉彩華 ……43
 田島佳也 ……14、26、42、43、59、72、119、122、
 123、125～128、130、131、134、135、138、
 151、161～164、170、177、179、180、199、
 202、207、209、210、225
 張劭松 ……149、197
 張長植 ……156、162、198、207
 田耕旭 ……149、197
 鄭淳英 ……14、121、171
 田鳳熙 ……167、208
 鄭美愛 ……24、120、152、187、200、248
 陳穎恩 ……42、208
 陳勤建 ……206
 津田良樹 ……24、120、121、133、153、159、184、
 187、191、192、209、247
 土田拓 ……24、42、43、120、157、188、191、206、
 210、256
 土屋又三郎 ……164
 常光徹 ……51、52、94、95、98
 寺島剛眞 ……270
 ドブソン・セバスチャン (DOBSON Sebastian)

……………149、196

富井正憲 ……24、72、119、122、126、130、133、
 135、138、153、159、166、184、189、190、
 202、210、237
 富澤達三 ……14、120、121、123、125、126～128、
 159、161、176、177、188、190、202、204、
 205、210、250
 トレーデ・メラニー (TREDE Melanie) ……151、199

な

中井真木 ……14、121、171、173、174
 永井美穂 ……42
 永尾龍造 ……192
 長島淳子 ……209
 中島三千男 ……24、42、51、52、59、66、72、119、
 122、126、129、133、137、138、153、155、
 159、184、189、190～193、205、211、222
 長瀬一男 ……19、26、119、121、123、191、203、
 237
 永田一清 ……204
 長田豊臣 ……200
 中野泰 ……14、121、181、183
 中町泰子 ……120、121、123、125、189、190、203、
 252
 中村ひろ子 ……14、29、43、120、125～128、
 130～135、138、155、161、168～170、176、
 177、186、204、210、249
 中村政則 ……26、42、59、72、119、122～128、131、
 132、137、167、185、202～205、208、215
 中村美奈子 ……155
 中谷友樹 ……156、200
 七澤裕美子 ……270
 西和夫 ……14、59、66、72、74、119、129、137、
 138、151～153、161、187、190、192、203、
 205、210、218
 西田幸夫 ……24、121、160、184
 西村真志葉 ……43、210
 新国勇 ……26、121
 能登正人 ……26、30、120、125、126、138、150、

167、185、197、204、243
 野間晴雄 ……………168
 野村優夫 ……………167

は

白庚勝……………150、197
 長谷川千穂 ……………270
 八久保厚志 ……24、26、119、122～126、129、131、
 138、152、159、166、170、187、189、192～
 194、200、202、203、208、238
 濱田國義 ……………195
 浜田弘明 ……24、29、120、126、129～132、134、
 152、166、168～170、185、190、191、193、
 200、204、208、249
 林海涛……………14、121、174
 林能成……………157、201
 原信田實……………24、72、119、121、123、149、155、
 159、189、196、202、209、239
 韓東洙……………14、121、153
 久田肇 ……………167
 平井誠……………26、120、187、209、248
 平山康典 ……………24、121
 ヒル・ラクエル (HILL Raquel) ……………14、121
 廣田律子 ……19、26、42、59、72、119、122～125、
 127～129、134、149、150、154、160、166、
 170、183、189～191、202、206、210、224
 福田アジオ ……14、29、30、42、51、52、59、66、
 67、69、72、74、85、86、92、119、122、
 123、125、127、128、130、133～135、137、
 138、149、151、153、156、161～163、169、
 170、176、177、179～181、183、185、186、
 189、190、193、194、196、198、199、202、
 204、207、213、280、281
 藤田庄市 ……………72、122、189、203
 藤永豪……………24、35、42、120、121、125、129、152、
 184、187、189～191、194、200、203、205、
 207、210、251
 藤本真由海 ……………270
 藤原重雄……………163、208

舟山直治 ……………209
 ペトルッチ・マリア・グラッチア
 (PETRUCCI Maria Grazia) ……………43
 ベネシュ・オレグ (BENESCH Oleg) ……43、210
 彭偉文 ……14、35、42、43、120、127、130、134、
 157、171、174、180、188、191、204、209、
 254
 彭国躍 ……………19、120、125、128、205、244
 許南麟 ……………206
 保立道久……………53、54、106、113
 北斎 ……………42、209
 ボチャラリ・ジョン (BOCCELLARI John)
 ……14、59、72、119、122、124、132、161、
 162、171、173、174、189、206、227
 堀内寛晃 ……………24、121、160、184、192、208
 本田佳奈 ……24、35、43、120、188、192、207、257

ま

前田禎彦 ……14、120、128、132、135、138、153、
 160、163、171、173、206、210、245
 馬漢民……………156、162、198、207
 マクレリー・ルシ・サウス
 (McCREERY Ruth South) ……14、121、171、173
 増野恵子 ……24、120、121、125～127、155、159、
 166、187、190、196、204、244
 松園万亀雄……………66
 的場昭弘 ……26、30、43、119、124～126、133、
 138、150～152、160、167、170、187、199、
 200、203、208、210、239
 丸山宏 ……26、120、124、130、190、191、205、240
 丸山泰明 ……29、42、43、120、134、157、188、
 191、206、207、254
 三鬼清一郎 ……24、42、59、66、74、119、124、
 126、127、129～131、135、153、166、184、
 205、218
 水嶋英治 ……………53、54、106、112、168
 宮家準 ……………206
 宮地正人 ……………204
 三山陵 ……………164

宮本大輔 …35、42、43、53、120、157、188、192、
206、256
宮本常一 ……………115
ムカイダイス (穆愷黛絲) ……………42、205
ムテサ I 世 (MUTESA I) ……………203
村井良子 ……………155、169、186
村上史展 ……………206
ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ
(MUNSI Roger Vanzila) ……………14、43、121、206
毛巧暉 ……………42、205
モジャイスキー・アレクサンダー
(MOZHAYSKY Alexander) ……………128、149
モスター・ジョシュア (MOSTOW Joshua) …151、
199
森まゆみ ……………205
諸井孝文 ……………24、121、157、201

や

八重樫純樹 …51～53、66、93、94、95、97、100、
102、103
安室知 ……………150、197
柳田國男 ……………7
山口建治 …19、42、43、59、72、119、122～124、
126、128～131、133～135、138、149、157、
159、187、190、197、203、210、226
山口徹 ……………204
山田由香里 ……………72
山火正則 ……………51、55、68、149、151、196、199、
200、202
山本志乃 ……………14、121、176、177
山本芳翠 ……………125
尹賢鎮 ……………14、42、121、205
楊貴妃 ……………164、208
横田冬彦 ……………163
吉池美奈 ……………72
吉越昭久 ……………200、201、207
吉野進 ……………270

ら

ラフィン・クリスティーナ (LAFFIN Christina)
……………153
リクール・ポール (RICOEUR Paul) ……………160
李百浩 ……………153
リュ・アラン＝マルク (RIEU Alain-Marc) ……150、
151、197、199
劉湯水 ……………24、43、120、208、257
劉曉春 ……………43、209
リンゼイ・ウィリアム (LINDSEY William) ……26、
121
ルシーニュ・フレデリック (LESIGNE Frederic)
……………14、26、30、120、121、124、132、135、
167、168、203、209、253
冷泉為人 ……………156、200

わ

渡辺俊夫 ……………149、197
渡部信一 ……………154
渡部武 ……………152、199

表紙の図版については、以下の機関の協力を得た。

独立行政法人国立公文書館（『模地数里』）、北海道大学附属図書館（『蝦夷之地略図』）、有限会社北海道出版企画センター（高倉新一郎編『北海道古地図集成』）、社団法人農山漁村文化協会（日本農書全集第二十六巻『農業図絵』）

ISBN 978-4-904124-11-6

神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書

非文字資料研究の展開と成果

—— 研究事業総括報告書 ——

発行日

2008年5月31日

編集・発行

神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 TEL 045-481-5661 FAX 045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>

印刷 共立速記印刷株式会社

Printed in Japan ©神奈川大学21世紀COEプログラム2008 非売品

著作権者の文書による許諾がないかぎり、法律が認める場合を除き、本書の全部もしくは一部を複製すること、あるいは送信公開することを禁じます。

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム
人類文化研究のための非文字資料の体系化

2002 年度から文部科学省が開始した「21 世紀 COE プログラム」は、世界的な研究拠点を構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ大学がその対象に採択されることを目指して競うこととなった。私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003 年度に学際・複合・新領域の分野で採択された。この計画は、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科と日本常民文化研究所、それに大学院外国語学研究科中国言語文化専攻が加わり、学際的に研究事業を展開する構想であった。実施に当たっては、事業推進担当者に加えて、COE 教員及び COE 共同研究員を制度化し、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に従事してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記録された事象に専ら関心が集中してきた。しかし、文字に表現されない人間の観念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから①図像、②身体技法、③環境・景観の三つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。それぞれに幾つかの具体的課題を設定した。その組織は以下の通りである。

第 1 班 図像資料の体系化と情報発信

課題 1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行

課題 2 日本近世・近代生活絵引の編纂

課題 3 東アジア生活絵引の編纂

第 2 班 身体技法および感性の資料化と体系化

課題 1 身体技法の比較研究

課題 2 用具と人間の動作の関係の分析

第 3 班 環境と景観の資料化と体系化

課題 1 景観の時系列的な研究

課題 2 環境認識とその変遷の研究

課題 3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

そして、これら三つの非文字資料を統合し、世界に向かって発信する方法を開発することを課題に、以下の三つの研究班を編成した。

第 4 班 地域統合情報発信

第 5 班 実験展示

第 6 班 理論総括研究

研究事業参加者は班・課題に属し、目的達成に向かって共同研究を展開した。その研究成果は、すでに各種の刊行物やホームページで順次公開してきたが、その最終成果をデータベースや各種情報のウェブ上での発信や展示という方法で世に問い、また多くの研究成果報告書として刊行することとした。本書はその研究成果報告書の 1 冊である。

なお、本プログラムのもうひとつの目的として、世界的に活躍することができる若手研究者の育成がある。COE 研究員 (PD・RA) 制度を設け、優れた若手研究者を採用し、研究活動に従事してもらった。海外での調査研究を行なうための派遣や、研究成果を発表する機会を設けた。若手研究者の育成は、研究員を支援するだけでなく、拠点となる歴史民俗資料学研究科や中国言語文化専攻の研究教育条件を整え、カリキュラムを充実させ、前期課程 (修士) から足腰の強い学生を養成することも構想し、具体化した。

5 年間の研究を経て、私たちの拠点が世界の研究者とのネットワークを形成し、様々な形態の非文字資料を集積し、それを世界の人類文化研究に提供する非文字資料研究センターとしての役割を果たすことを構想している。本プログラムへの批判や提言を積極的に寄せいただければ幸いである。

Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

The 21st Century COE Program which the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology launched in fiscal 2002 is a measure to support universities in building a global center of excellence. Universities offering graduate doctoral courses compete for their eligibility for the program. Our project “Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies” was chosen in fiscal year 2003 in the program’s interdisciplinary, combined and new discipline fields. The research was to be developed in an interdisciplinary manner by Kanagawa University’s Graduate School of History and Folklore Studies and the Institute for the Study of Japanese Folk Culture as well as the researchers for the Course of Chinese Language and Culture at the Graduate School of Foreign Languages. To conduct the research, we (1) established a system comprising the COE Faculty and COE Joint Senior Researcher in addition to the Program Representatives, (2) requested the participation of a number of researchers from both inside and outside the university who were involved in the research topic, and (3) had them engage in joint research to achieve the goal.

Existing studies of culture have mainly focused on phenomena that have been recorded in writing. Yet nonwritten human ideology, knowledge and behavior are far more wide-ranging and significant in both quantity and quality. They are incomparable to phenomena expressed in writing. From among such phenomena, we chose (1) illustrations, (2) techniques of the body, and (3) environment and scenery, and tried to develop a methodology to arrange them into materials. The resulting data was to be accumulated, analyzed and disseminated. Specific topics were established for each material and organized as follows:

Group 1: Systematization of Pictorial Materials and Their Dissemination

Task 1: Compilation and publication of Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan

Task 2: Compilation of Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan

Task 3: Compilation of Pictopedia of Every day Life in East Asia

Group 2: Systematic Documentation of Techniques of Body, Senses and Folk Implements

Task 1: Comparative Study of Techniques of body and senses

Task 2: Analysis of the Relationship between folk implements and Human Movement

Group 3: Arrangement and Systematization of Environment and Scenery

Task 1: Research for Scenery in History

Task 2: Research of Environmental Recognition and Its Changes

Task 3: Interpretation of the Traces of Human Activity and Natural Disasters Inscribed into the Environment

To develop ways to integrate these three nonwritten materials and disseminate them globally, the following study groups were formed:

Group 4: Dissemination of Regional Information

Group 5: Experimental Exhibition on Fruits of COE Program Activities

Group 6: Summarization of COE Program Activities and Research Results

Each participant in the research project was attached to a group and task, and conducted joint research to achieve the goal. The study results have been successively released in various publications and on websites. This time, the final results will be presented to the public through databases, the dissemination and exhibition of a variety of information online, and through the publication of a number of working papers.

Another objective of this project is to nurture young researchers who are able to succeed internationally. To this end we have established a system comprising COE Researchers (PD, RA) and have recruited fine young researchers to conduct studies. Researchers have been dispatched overseas to conduct studies, and opportunities to present the study results have been created. Fostering young researchers did not just mean supporting them. We planned to train sound-thinking students already from the first-stage course (master’s degree) by improving research and education conditions and expanding the curriculum for the Graduate School of History and Folklore Studies and Course of Chinese Language and Culture. We have been able to put the ideas into shape.

After five years of study, we envisage that our study base will serve as a research center for nonwritten materials that will build a global network of researchers, collect various forms of nonwritten materials and offer them to the study of human societies throughout the world. We would be grateful if you would send us your critique of or proposals for this project.



神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1
TEL:045-481-5661(代) FAX:045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp>